

3、それに對して自然を愛したソローが如何に自然に細心であつたかの例話。(九三頁五行—九四頁二行)
第二節 九四頁三行—九五頁七行 「よく見れば」の俳句の意義を解明して、靈妙にして無限の興趣ある自然を「よく見る」との貴さを説く。

第三節 九五頁八行—終 雑草の中に美を見いだすと同様に自分の手近に自分自ら偉いと實感する人を見いだすべきこと。

3 文意

花と言へば觀賞用の花を取擧げる如き、又人といへば定評ある人のみ偉とする如き、何れも極めて皮相で概念的なものの見方である。我々は心に貴い養の糧を興へる雑草の中に美を見いだし、唯の人の中に自分自ら偉いと實感する人間の限らない貴さを發見するやうな、要するに自然についても人間に對しても自分自身のものを持つやう、「よく見る」眼を見開かなければならない。

4 鑑賞批評

坦々とした筆致の中に強い迫力を持つて心を衝くものがある。恐らくそれは自然の中に悠々自適し、自然の恩恵に浸り心から雑草の美しさを見つめてゐる作者の深い内省から滲みでたものだからではなからうか。その體驗と實感の背景からこそ、此の文の迫力は生みだされたのである。文の眞實性は要するに形式ではない。技巧ではない。その人の眞實性であり、内在的素材の深さを第一要件とすることが泌々と感じられる。新進思想家として嘖々たる名聲を放棄して故郷に引退した作者の心境も窺はれるではないか。

三 備 考

1 指導研究

(一) 偉大な史上の人物や典型的な美を示して年少者の心の養の糧にする事は教育上必須の事であり有効な手段である爲に、それのみ終始し勝である。これは純眞單純な鑑識眼を蔽うて、徒に事大思想にのみ走らせる結果を招く事になる。本課はその缺陷を補ふ爲の教材である。勿論典型的な美も、聲名の高い人物も貴ばねばならない。けれどその他に我々自身のものを持つと言ふ事の貴さを強調したのである。唯此の際あまりこれを強調し、かうした觀念に捉はれて、徒に反抗的に、虚無的に、獨善的にならないやうに注意する必要はあらう。

(二) 比較的調子の坦々たる文であり、而も抽象的説明に貫かれてゐる結果、生徒の受入れるものもその抽象的觀念に終る恐れがあらう。ここでは自然と人との二つの場合に限つてゐるが、この事は文學繪畫等生徒に近い對象については勿論、他人の思想その他身邊の萬般を見る場合共通に適用され得ることである。熟讀玩味すると共に具體的事例と結合することによつて抽象的なものに終らしめないやう注意したい。

(三) かゝる思想は自覺に基くものである爲に、未だ個性が確立せず、自覺度の浅い少年によりも、寧ろ教授者側に適切である。従つてともすれば教授者自身の共鳴陶醉に終始して生徒側の感銘が上すべりしてしまふ危険がある。あくまで生徒自身の生活に必須な眞理である事に重點を置いてその感銘を深めねばならない。

2 参考

(一) 繪挿 雑草

美術寫真大成所載の岡本東洋氏撮影の寫真。ほゞけ立つたたんばゝを中心にして、雑草の野趣豊かな味をだしたものである。

(二) 原文には尙本課について次の數節が省略されてをる。これを左に掲載する。

つひ此間のこと、私は友達の一人と青葉に蔽はれた丘の上の小徑を散歩しながら、お互ひに自分の感じた自然の美しさをつきつゝに語り合つた。その會話の中で友はこんな事を云つた。

「かうして自然の美しさを味つてゐるだけで充分だ」と云ふ氣もしますね」

私のその友人は畫家である。そしてさうした言葉が彼の口から洩らされる前に、私達はお互にさまざまな點で自然の美しさを再現したり、またその感味を表現したりすることの至難事であること、又それをしようと試みる苦しさの如何なるものであるかについて、しみじみ語り合つてゐたのであつた。随つて友人の其の言葉は、話の途中喉が乾いて聲の出なくなつた瞬間、グツと一口冷たい水を飲みでもしたやうな快いすがくしさを私の心に與へたのであつた。

「まつたくさうです。味つてゐるだけでも私達は充分幸福であるべき筈ですね」私は直ちに友の言葉に應じた。

但しその場合の友人の言葉の奥に聊かたりとも絶望的な氣持のあつたとは私は思つてゐないのであつた。即ち、彼がその言葉を發したのは現すことに對する絶望からだとは私には斷じて思へなかつたのである。むしろ其の反對にそれは兎角現すと云ふことに偏執し臍ちな私達の心に對する貴い經驗であると私は有難くそれを受け取つたのであつた。

私達の生活に於ては、何と云つても現すことより味ふことが先でなければならぬ。必ずしも現さなくてもよい。しかし、味はずに生きて行くことは出来ない。現に私達は現すことの出来ない、又は現さうとしない、若くは現さない、無量の味を味ひつゝ生きてゐるのである。そして「味ふこと」によつて私達は生を感じ、生の幸福を感じてゐるのである。

しかも、往々にして私達は、あまり多く「現す」と云ふことにこだはり過ぎることがある。そしてその爲に却つて「味ふこと」をおろそかにするやうな間違つた心の傾きをへ持つことがある。

「味ふこと」と「現すこと」とは、云ふまでもなく人間生活の二つの根本的な働きである。しかし、どちらかと云ふと「現すこと」よ

りも「味ふこと」の方が一層根本的ではなからうか。

しかも、心こゝにあらざれば食へども其の味を知らずと云つたやうに、味ふ心がなければ味が出て來ない。いかに優れた藝術をいかに多く示されても、味ふ心のないものには何の意味をもたさない。こんな事を考へる毎に私のおもひ出すエスマンの言葉に、こんながある。

「ミラーは此の畑を所有し、ロツクはかの畑を所有し、またマニングは向ふの森林地を所有してゐる。然し彼等の中誰一人も、この風景を所有するものはない。蓋し地平線の内には、あらゆる部分を全きものに統べて觀ることの眼あるもの（かくの如き人は即ち詩人である）の外には、何人も所有せぬ一つの財産がある。この財産こそ、此等三人の農園に於て最も優れたものであるが、彼等の所有證明書は、この財産に對しては、何等の權利を與へぬのである」

味ふ心の出來てゐない者には、自然すらも何の味をも與へない。

嘗て私の詠んだ歌にこんながある。

山にのぼりわが食む飯のうまさこそまことの飯のうまさなるらめ

これはいつぞや山に登つて堅くなつた握飯を食ひながら、そのうまさに驚いて詠んだのである。私達が毎日三度づつ食つてゐる平凡な米の飯すらも、味ふ心如何によつて無上の味を私達に與へる。

「兒童をして自然を直觀せしめよ」と云ふやうなことをよく小學校の先生方の口から聞くことがある。自然の直觀はいかにも結構なことである。しかし、いかに美しい自然と相對しても、味ふ心のないものには何ものをも得ることが出來ない。味ふ心を養つてやらないで置いて、ただいたづらに自然にぶつからせても何にもなるものでない。

味ふ心はほうつて置いて、育つて行くものではない。培つてやらなくてはだめだ。養つてやらなくてはだめだ。東京のえらい人達

には農村や漁村へやつて来て、よくこんなことを云ふ人がある。

「お前達はかうした美しい自然の中に生活してゐることに結構である。都會の生活の不健康なものと比べて、よく自分達の生活の如何に幸福であるかを考へて見るがよい」

けれども自然の美などを味ふ心を聊かも養はれてゐない田舎の青年達にとりて、そんなおだてが何の意味をもなさない。そんな事を云つておだてる前に、私達は彼等をして眞によく自然の美を味はす心を養つてやる必要があるのである。

○ 小學校の綴方や圖畫などの教授も、それが徒らに「現すこと」を主にしてゐる間はだめだと思ふ。現すことよりも先づ味ふ心を養つてやつてもらひたい。時には藝術家ですらも「味ふことが出来るだけで充分だ！」と痛感することがあるほどに、味ふことは貴いことだ味ふ心さへ養はれてあれば、美しい花の代りに一握の砂を與へられても、それに限りない味を味ふことが出来る。「生命の表現」について考へる前に、「生の味」について考へる必要がある。

(三) ソローの「森の生活」の「春」の條から一節を摘記する。

池畔雪とけ水ぬるむ頃は如何？ 曰く春の最初の雀！ 愈々若き希望を以て始まる年よ！ 微かに銀鈴を鳴らす様な歌聲は、所々雪が解けて水氣を含んだ野を越えて、駒鳥、四十雀、鴨よりやつて來、さながら冬の最後の薄片が落ちて鏗々の音をなすかと怪まれる。かゝる時、歴史といひ、年代學といひ、乃至あらゆる聖書といひ、將何するものぞ、小川は頌歌と歡びの宴歌を捧げてゐる。沼澤は既に低く草原の上を翔りつゝ、長き冬の眠より眼醒めた泥中の動物を捜してゐる。雪の融け行く打沈んだ物音は、到る處の谿間に聞え、水は忙しく池に解けてゐる。草は春の野火の如く山腹に萌立ち……」

一五 蟹

薄田 泣菫

一 解 題

1 作者

薄田泣菫 ススキダキフキン 名は淳介。明治十年五月岡山縣淺口郡連島町に生れた。縣立岡山中學校を二年で退學、以來學校生活を志さず、上京して數年間上野圖書館で群書を涉獵した。氏の詩人としての活動は明治三十年の頃に始まり、三十一年處女詩集「暮笛集」をだすに及んで、その独自の詩境は漸く詩壇の注目を集め、三十三年初から大阪で雑誌「小天地」を編輯した。ついで三十四年「行く春」を刊行するに至つて遂に詩壇に重きをなし、島崎藤村・土井晩翠の後をうけて、蒲原有明と共に三十年代詩壇に君臨した。初藤村の影響をうけて抒情的であつたその詩風は、三十九年詩集「白羊宮」をだす頃には全く象徴詩風になり、その靜かな情熱を堪へた高踏的古典的な独自の詩境には愈々彫琢が加へられた。併し四十年代には既に詩壇を遠ざかり、大正期に入つては全く詩筆を絶ち、童話・隨筆に轉換し、殊にその英國風のユーモアとウィットに溢れた小品は當代隨筆の最高峯と目されてゐる。現在大阪朝日新聞社の客員として屢々隨筆の筆を執つてゐる。

詩集には前記の他「二十五絃」「白玉姫」等があり、今すべて「泣菫詩集」一卷に收められてゐる。隨筆集には「泣菫小品」「茶話」「新茶話」「猫の微笑」「艸木蟲魚」「大地讃頌」「樹下石上」等があり、何れも愛讀するに足る佳品である。

2 出典

「艸木蟲魚」から採つた。「艸木蟲魚」は泣菫氏の昭和二・三年頃の小話感想を集めたもので、昭和四年六月に刊行された。書名の示す如く作品の大部分は艸木蟲魚に取材したものである。本課は「蟹」と題する三章に分れた一篇の中、最初の一章を採つた。採擇に當つて本課初より五行目「私はさう思つて微笑した」の下の「それが春になつて初めて見る蟹だつたことは、私はよく知つてゐた」の季節を示した一文を、教科材料配列と季節の關係を考へて削除した。教授者は一應心得て置かれない。

3 主眼及び採擇の趣旨

雨上りにふと見つけた蟹の姿態を、自らの魂の内省に結びつけた作者の諷刺的な感想である。長い詩人生活の間に練磨された犀利精緻な觀察と詩的靈筆とは、滑稽な蟹の姿態を美しく如實に描きだし、而も作者の中に湛へられた深い自然親愛の心は、徒然草に見るが如き高雅なユーモアを全文に溢れさせ、従つてその蟹の姿態からひきだされた諷刺をも極めて温いものにしてゐる。詩人の眼と心とはかくも自然を微細に美しく豊かに味ひ得るものかを知らしめると共に、その高い藝術的價値の鑑賞にひたらしむべきである。

自然と人生とを結びつけた點に於ては直接前課と連絡するが爲に此處にならべて採擇し、かねて自然觀察の態度をも培ひ、自然親愛の心をも育まん目的を附與したものであるが、併し前課の啓蒙的積極的であるに反して、これは内省的沈潜的で、同じ文藝的教材としてもこれは遙に高い水準を示してゐるものやうに思はれる。蓋し「美的情操ヲ陶冶シ」心情を高雅ナラシムル（改正要目）文藝的教材として本課の如き最適なるものの一であらう。

二 解 釋

1 語 釋

【蟹】カニ 甲殻類の短尾類に屬する。腹・背に堅い殻を

持ち體扁平で一對の蟹はさきと四對の足をもち横走ることが速であり、眼には柄があつて、甲殻の小窩の中に横に伏すことが出来る。種類は非常に多く形状色彩も甚だ變化多く、水中又は水邊に棲息する。この蟹は本邦各地の河川に分布する「辨慶蟹」と稱せられる一種である。

【づぶ濡れ】 づぶぬれ びつしより濡れること。「づぶ」は「づぶ」の濁つた語で「づぶら」の略であるといはれる。全くすべて・まるでなどの意。

【づぶ濡れになつた石のかけ】 石に「づぶ濡れ」とはあまり用ひない言ひ方である。「びつしより濡れた」などでは作者の感受性が満足しなかつたのであらう。事實「づぶ濡れの石」にはほんの雨の晴間で、まだ濁水がそこら一面に溜つてゐるやうな野路の感が現れてゐる。さすがに詩人たる作者の鋭い感覺である。

【しよう。蟹か。暫くぶりだつたな】 「好意ある自分の友達とも知らないで（九八頁七行）と言ひ、その氣持はよくわかる（九九頁六行）と言つてゐる作者である。「私はさう思つて」と言つてゐるが、寧ろこの呼びかけにはなつかしい友に呼びかけてゐるやうな激しい愛著の響がありはしないだらうか。嬉しげに微笑してたゞすむ作者の表情が眼に見えるやうである。

【芝土】 シバツチ 芝生の間の土。

【爪立するやうな脚どりで水溜を涉り、髪を洗ふ女のやうに頭を水に突伏してゐる雑草の背を踏んで、少し高めになつてゐる芝土の上にあがつて来た】 水溜を涉るに「爪立するやうな脚どりで」と言ひ、雑草の上は「踏んで」と言ふ。あの横這ひの蟹の姿を如何にも如實に表現した敘述である。犀利精密な觀察がこれを裏づけてゐるからであらう。そして雨にぐつしより濡れて打なびく水邊の雑草の形容には詩人の筆らしい美しさがあつて、それが雨の晴間の一情景に淡彩畫的な精彩をあつてゐる。

【そつくりかへる】 そりくりかへるの音便。後へひどくそりまがる。後へそりかへる。

【蟹は芝土に力足を踏みしめ、黒みがかつた緑色の甲羅がそつくりかへるばかりに、二つの眞赤な大鉄を頭の上に振りかざしてゐる】

「力足を踏みしめ」頭の上に振りかざしてゐる」の擬人法は如何にも警拔であり、「そつくりかへるばかりに」といふ副詞句にもまたかなりの誇張がある。併しその誇張にも擬人化にも何等わざとらしさが目だたないのみならず、寧ろそれが滑稽そのものの蟹の面目を躍如たらしめて、何とも言へぬ微笑ましいユーモラスな味をだしてゐる。氏の作品が機知と諧謔に富むとは此の邊のことをい

ふのであらう。

「眞赤な」とは單なるその本來の色の形容だけでなく、この色象徴によつて、次の「怒りっぽい蟹」と心理的聯關を持たしてゐる周到さなども注意すべきである。

【怒りっぽい蟹】 オコリっぽいカニ 「怒りっぽい」は「忘れっぽい」「飽っぽい」などと同趣の語で、「怒ること多し」の轉である。怒りやすいこと。

「怒りっぽい」は蟹の姿態から作者の想定した性質であるが、何の不自然さも感ぜしめないのは、矢張それが力足を踏みしめ、そつくりかへり、眞赤な大鋏をふりかざす蟹の様子から必然的に導かれたものだからであらう。

【好意】 カワイ 親切な心。

【焦燥】 セウサウ いらだつこと。いらいらすること。

【持前】 モチマヘ うまれつき。本來の性質。固有の性。

【性分】 シヤウブン 生れつき。性質。

【赫となる】 カツとなる 俄かに怒り又は逆上する様。赫怒など熱す。

【脅迫】 ケフハク おどしつける。おびやかせる。後漢書申屠蟠傳「爲董卓所脅迫、僅以身免」

【傍に立つてゐる私を、好意ある自分の友達とも知らないで、その姿に早くも不安と焦燥とを感じ出し、持前の喧嘩好きな性分から急に赫となつて私に脅迫を試みてゐるのだ】

「ふと何か見つけた蟹は(九八二行)と言つてゐる。併し注意してあたりを見ても蟹を怒らす何物もない。結局蟹は作者の姿に威赫の體勢を示してゐたのだつた。而もそれは「暫くぶりだつたな(九七四行)」と呼びかけた程の好意と愛著をもつた作者に對してである。怒りっぽい蟹といふ言葉が此處に至つて具象性を持つて來た。

「早くも不安と焦燥を感じ出し、急に赫となつて」は蟹の心理を擬人化した描寫である。折角の相手の好意を理解しようともせず、また享け容れようもしないで、唯いらいらと人に敵意を示す、そんな怒りっぽい人間があるものだ。作者はその怒りっぽい人間の心を、そのまま蟹にあてはめたのである。而も自ら「好意ある友達」と言つてゐる作者の深い愛の心を基調にして、「大鋏を頭の上に振りかざして(同頁四行)」から「一歩巢から外へ踏み出したかと思ふとちきにもう敵をみつめて」(同頁五行)と、その「怒りっぽさ」を漸層的に強めて行く敘述によつて、その擬人法が擬人法として少しも目につかない。誠に絶妙な筆である。

【萬力】 マンリキ (一)重いものを牽き又は擧げるのに用ひる大きな轆轤。(二)機械工場で鑪などをを用ひて金物の仕上をする時、その金物を緊と挿んで保持する具。ここは(一)の意。

【その氣持は私にもよく分る】

「その氣持」は絶えず自分の周圍に敵を作り、絶えずそれがために焦立つてゐる氣持を指す。

好意ある友として蟹に深い愛着を持つ作者が蟹の心理に深い理解と同情とを示してゐる言葉である。その理解と同情とがやがて自己内省への契機をなしてゐる。

【すべて人間の魂の物蔭には、蟹が一匹づつかくられてゐて、それが皆赤い爪を持つてゐるのだ】

「魂の物蔭」とは魂を具象的存在と假定して、その「物蔭」といつたのである。それが「かくれてゐて」と言ふ言葉の内容によく適つて如何にもひそかな味をだしてゐる。

その「物蔭にかくれた蟹」とは勿論人間の怒りっぽい

2 文の構成

第一節 初―九七頁五行 雨の晴間の野路で暫くぶりに蟹をみつけたこと。

第二節 九七頁六行―九九頁八行 立ちどまつて見てゐる蟹の怒りっぽい様子からその心理解剖に及び、それを自己内省に結びつけて人間性の一面を諷刺してゐる。

- 1、水溜りを涉り芝土の上上つて行く蟹の様子。(九七頁六行―九八頁一行)
- 2、怒りっぽい蟹が好意ある作者に對して急に怒りだした様子。(九八頁二行―九九頁一行)
- 3、怒りっぽい蟹の心理解剖からすべて人間の魂の物蔭に蟹の存在するといふ諷刺を導いてゐる。(九九頁二行―九九

氣短かな一つの氣質を譬へた隱喩である。初對面の人や未知の人などに對しては、誰でも妙に疑念を持つたり、警戒したり、或は排他的になつたり、時に又尊大に構へて徒らに威を示したりする。それは魂の物蔭にかくれた蟹がひよつこり頭をだして赤い爪を振りかざすのである。如何にも意味深い而も興味ある諷刺である。而も此の諷刺に少しのとげとげしさもなく温い潤ひをもつて讀者の内省に訴へてゐる所など、作者の高い心境を示すものと言へよう。

「赤い爪」の「赤い」といふ色象徴のよく効いてゐることにも注意すべきである。

【横柄】 ワウヘイ 驕りたかぶること。尊大なこと。

頁八行)

第三節 九九頁九行—終 蟹が横柄な足どりで姿を隠したことを。

3 文意

雨上りの野路で暫くぶりにみつけた蟹を懐しい氣持で眺めてみると、その蟹は作者の好意とは反對に脅迫威嚇の體勢を示す。併し作者の深い愛情はそれを同情的な氣持で理解し、且それを契機とする内省はすべて人間の魂の蔭に蟹の存在を見いだすのである。その基調は作者の深い自然親愛の情と犀利精緻な觀察とであり、表すに淡々として輕妙、機知と諧謔とにとんだ詩趣豊かな行文をもつてしたものである。

4 鑑賞批評

散文體の無韻の詩といふものがあるならば、それは泣菫の隨筆であらう。此の小品にしてもその全篇をつらぬくものは限らない詩趣である。その水墨畫に見るやうな淡々とした東洋的な筆觸は、詩作時代における鏤骨彫身の苦行によつて洗練濾過せられ醇化されたものではなからうか。一見平凡單調でありながら、水の流れるやうな澁滯のない行文に一點の非はない。而もその愈々冴えた自然を觀る眼の確かさと、一匹の蟹によせられた深い親愛の情は全文に溢れ、それが表現の美しさと相俟つて、乾いた心をしみじみと潤してくれるやうな深い味を持つてゐる。又全篇を通じて感ぜられる輕妙酒脫なユーモアもその底に愛を湛へた高雅なものであり、その諷刺もさながら霧のやうに淡くばかされて温かく柔かに讀者の内省に訴へるといふ風である。樂にすらすらと讀ませて、しかも香り高い果實を食べた時のやうに、何時までもかぐはしい風味を後に残すといふ感じである。蓋し隨筆として上乘のものとして評してよからう。

三 備 考

1 指導研究

(一) 既に度々繰返したやうに自然に對する深い愛と冴えた觀察と底に湛へられた滋味溢るる詩趣が此の文の生命である。そこに何ともいへない魅力がある。此の無韻の詩とも言ふべき本文の取扱は語句の解釋よりも文法の検討より、先づ第一に味讀に重點が置かれねばならない。その觀察の正確、表現のうまみなどを熟讀玩味し、全體として心に寫しとり感じ收めるといふ態度でありたい。然し本々隨筆として輕い氣持で書かれた文であるから、その味讀に當つてはがつちりと四つに組んでかゝる底の堅くるしさでなく、自由な伸び伸びとした態度であるべきことはいふまでもない。

(二) 本課の材料は蟹であるが、然しそれは唯自然の一景物として蟹をとらへただけに過ぎない。一木一草一禽一獸あらゆる自然物に對してかうした心と眼とを以て接したならば、我々の周圍の自然は如何に豊かな意義と味とをもつて生きて來るであらう。それを生徒に痛感させる事によつて自然を觀る眼を培ひ、更に自然愛好にまで導くことを忘れてはならない。

2 参考

(一) 本課につゞく第二第三章を左に採録する。作者の作風を窺ふ便ともなり、或は補材として取扱つてもよい。

蟹

2

海に棲むものに擁劍蟹がある。物もあらうに太陽を敵とし、その光明を怖れてゐるこの蟹は、晝間は海底の砂にもぐつて、夜はなら

なければその姿を現はさうとしない。

擁劍蟹は、脚の附け際の肉がうまいので知られてゐるが、獲られた目によつてひどく肉の肥瘦が異ふことがある。それに気づいた私は、いつだつたか出入の魚屋にその理由を訊いたことがあつた。魚屋はその荷籠から刺のある甲羅を被たこの蟹をつまみ出しながら言つた。

「奴さん。こんな姿はしてゐますが、大の明るみ嫌ひでしてね。夜分しか外を歩かない上に、満月の夜のあとさきは、海が明るいので甚だと思つて、ちつと砂にもぐつてゐて、餌一つとらうとしないさうですから、多分その故かも知れませんよ。」
魚屋の言葉を眞實だとすると、擁劍蟹は白熱した太陽の正視を怖れてゐるのみならず、また青白い満月の流眼をすらも嫌がつてゐるのだ。

こんな性分の擁劍蟹にとつては、一月でもいい、月のない夜が、せめて満月の出ない夜が、どんなにか望ましいことだらう。一月でもいい。満月の出ない夜が。そんなことが果して有り得るだらうか。——いや、それはあるにはあつた。天文學者の言ふところによると、紀元八百六十九年の二月には、月は一度も顔を見せなかつた。

月が顔を見せないことはなかつたが、満月の夜は一度もなかつた。こんな事は世界の開闢以來初めてで、その後も二百五十萬年の間に、まづ二度とはあるまいといはれてゐるが、そんなことになつたのは、前の一月中に満月の夜が二度もあり、續いて三月になつてからもまた二度あつたので、二月には一度も見られないことになつたのだといふことだ。

してみると、擁劍蟹がどんなに嫌がつた所で、青白い顔をした満月は、月に一度はきつと海の上を見舞ふにきまつてゐるので、明るみを好まないこの蟹は、そんな夜になると、靜かな波の響にも、青ざめた光の不氣味さに怯えつつ、海底の土にでもこつそり潜つてゐる外はなかつた。

やがて闇の夜が來ると、擁劍蟹は急に元氣づいて活躍を始める。そして波底の暗がりにまぎれて、大勢の仲間を誘ひ合せ、海から海へとあつてもない大袈裟な旅を續けることがよくある。夜の海に網を下す漁師たちが、思ひがけないあたりでこの蟹を引き揚げて、そ

の遠出に驚くのも、こんな時のことだ。

3

潮の退いた干潟を歩いてゐると、底土の巢から這ひ出したままの潮招蟹が、甲羅に泥をこびりつけて、忙しきうに食物をあまつてゐるのがよくある。蟹は時々立ち停つて、片つ方のずばぬけて大きな大鉞を、しかつめらしく上げ下しをしてゐる。自分の身體の全體よりもすつと重さうな大きな脚だ。

それを見ると、蟹は自分の周圍に、何かしら自分に好意をもたないもののあるのを感じて、それに對つて威赫と侮蔑とを試みてゐるやうだ。その相手が海賊のやうに毛むくぢやらな泥蟹であらうと、狡猾な水禽であらうと、または無干渉な大空そのものであらうと、そんな事は蟹にとつてはどちらでもいいのだ。

蟹は唯反抗し、威赫さへすればそれで充分なのだ。

(二) 本課の典故「艸木蟲魚」についての生田春月氏の批評を左に掲げる。本文鑑賞の上には大いに役立つと思ふ。

今日泣菫氏の近著「艸木蟲魚」を讀んで、私の愛著は新にされた。新にされたばかりではない。氏の並々ならぬ東洋的教養と、西歐的教養とが、茲に渾然と融合せられて、この豊富な心の背景のもとに、自然と人生とを觀る眼。ますく「呀えて、一木一草一禽一魚に及ぶその愛顧が、乾いた心をもしみんと濕ほすのを見て、氏の心境がその愛好せられたる青磁色の秋空の透徹を偲ばせる程に深まつて來たのを知り、曾て茶話に於てあまりに輝いてゐた才氣が、むしろ底に潜められて來たのを見て、驚嘆に近い感情を覺えたのである。詩人は死なない。詩筆を絶つ事によつて、抒情詩の天馬が天死すると思ふのは俗人の淺見である。私がこの一卷に於て、まづ感受するのは、限り無き詩味である。より深い詩の世界である。茲に私は泣菫氏の詩人としての完成を見るのである。曾て形によつて詩を書いた詩人が、茲では實に自由に、のびくと心を動かしてゐる。より廣くよりこまやかな詩の境地が、いみじくも打出せられてゐるのだ。

(三) 同じく生田春月氏が隨筆家としての薄田泣菫を批評した一文を左に掲げる。

薄田泣菫氏は鳥崎藤村氏と相並んで、多年私の尊敬する詩界の大先輩である。そして藤村氏が専ら小説作家として、生の深みを探つて詩人が詩を潜める事によつていかに深く生きうるかを示されたやうに、泣菫氏は隨筆家として詩人の眼と心とが、いかに自然と人生とを微細に味はひうるかを示されてゐる。泣菫氏の散文は、その詩にもまして、長い前から私を惹き付けたものである。朽葉色の表紙をした氏の最初の散文集「落葉」を愛讀したのはもう十何年もの以前である。最初の「茶話」が、現はれた時に食るやうに讀んだ記憶も未だ新である。そしてこれらの散文によつて私を魅惑したものは何であつたらうか。永い文化を背景にした近畿の自然に對する傾倒と人間に對する犀利な皮肉、諧謔諷刺であつた。それは私の日本の情感に訴へると共に又あたかもハイネの散文を讀むが如き、すつと胸のすくやうな爽快味を覺えさせた。特にその警拔な比喻の才は覺えず人をあつと言はせるところがある。云々。

一六 富士登山

荻原井泉水

一 解題

1 作者

荻原井泉水 ヲギハラセイセンスイ 幼名幾太郎。後藤吉と改めた。明治十七年六月東京市芝區神明町に生れた。中學時代既に國字問題研究に志し、初め第一高等學校法科に入學したが、國字改革の事は先づ學術的研究に俟つとの信念から文科に轉じ、四十一年東京帝國大學言語學科を卒業。引續いて大學院に在ること三年。俳句は小學校時代から夙にこれを學び高等學校の頃には日本派に傾倒し、大學時代に至つて愈々これに熱中した。當時俳壇に新傾向運動の勃興するに及んでこれに接近し、四十四年河東碧梧桐を奉じて雜誌「層雲」を創刊し新傾向俳句の鼓吹に盡し、爾來數次にわたる同志の分裂に遭遇しながらも敢然として持論を改めず、新傾向俳句壇を率ゐてゐる。かつて大震災の慘禍に遇ひ、續いて母と妻を失ふに及んで、身を雲水に托し、漂然として全國を行脚したことは氏の一面を知るに足る事實である。

著書には句集に「層雲集」「自然の扉」「生命の木」「光明三昧」「風景心經」「井泉水句集」等、俳論に「新俳句提唱」「井泉水俳話」「俳壇十年」等、紀行に「山水巡禮」「觀音巡禮」「京洛小品」等があり、その他「奥の細道新釋」「ゲーテ言行錄」「句作捷徑」「旅人芭蕉」「友人を説く」等註解・評論・隨想等の著も多い。

2 出典

「山水巡禮」の中「頂上まで」の一項から抄出した。山水巡禮は「山の温泉にて」「高原の秋」「椿咲く島へ」「奥の細道の

跡「裾野めぐり」等十二篇の著者の紀行を輯録したもので、大正十四年七月に出版された。「頂上まで」は「裾野めぐり」に続く一文で、本課はその第三節以下より抄出したものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

月明を辿つて靈山富士への登山紀行である。「山水巡禮」の名の示す如く、山水に對する作者の態度は常に「神います」といふ信仰的なものであつた。その作者の敬虔な心境と靈山の尊嚴崇高な情趣とが、こゝに相觸れ相合し、加ふるに作者の精緻な觀察、清澄な感情、練達した表現技巧等を基にして、薄暮・月明・曉の情景など、人界を超絶した「お山」の神聖な美しさが餘す所なくにじみ出てゐる。この氣品高い靈筆の持つ快調を味ひ、更にそこに表現された崇高尊嚴清澄な氣分にまで味到せしむべきである。かくてこの文藝的教材は、小にして登山趣味を養ひ自然愛好の心情をも涵養すべく、大にしては心情を高雅ならしめ美的情操を陶冶するに足るのである。

二 解釋

1 語釋

【富士登山】 フジトザン 富士山は高さ三七七六米。甲・駿國境に聳立する。登山道は五つある。(一)大宮口。東海道富士驛から富士身延鐵道で大宮に至り、そこから登る。(二)須山口。東海道裾野驛から須山を経て登る。(三)御殿場口。東海道線御殿場驛下車、中畑を経て登る。(四)須走口。同じく御殿場下車で須走に出て登る。以上四は南側静岡縣方面よりの登山路で、北西山梨縣側に吉田より登る吉田口がある。

作者は御殿場より富士山麓をめぐり、本栖・精進・西湖・河口等の湖を觀賞して吉田にいで、(此の間の紀行が「裾野めぐり」である)月夜登山を企てた。

【お山】 山の敬稱で、山に神靈を認めて人格化したのである。こゝは富士山のこと、富士山麓の人々はかう呼んでゐる。

【隆々】 リユウリユウ 勢の盛な様。こゝは富士の高く聳

え立つ様の形容。

【尊嚴】 ソンゲン たふとく嚴かなこと。

【夕陽の色どりを失つて、ただ黒く隆々と盛りあがつた偉大な土の塊が却つて彫刻的な尊嚴を以て仰がれた】

夕映に燃えてゐた富士が何時かすつかり暮れ果てると、黄昏の薄闇の中に黒々と盛り上る富士は偉大な土塊の如くである。その土塊が夕陽に輝いてゐた時より却つて彫刻といふ感じで、その偉大さは自ら頭の下るやうな尊嚴さをもつて人に迫る。力の籠つた巧妙な表現である。

【透明】 トウメイ すきとほること。

【空は硝子のやうに透明で】 富士の裾野の空の透明さは「硝子のやうに」といふ形容がびつたりと當はまる。高原の清澄な空氣の爲であらう。

【ちぎれた雲】 斷雲。

【晝の光が消えうせたにもかかはらず、空氣そのものが光を持つてゐるやうに淡青く暮れずにゐた】

前に「硝子のやうに透明で」と言つた。その透明な空氣の中に尙微かな餘光が輝いてゐて、空氣自身が光を持つて淡青い微光をにほはせてゐる、そんな感じである。空氣そのものが光を持つてゐるやうに「は何といふ素晴らしい形容であらう。清澄な裾野のたそがれに身を置く思ひがする。」

【心得顔】 ココロエガホ よく承知してゐるといふ風。得意な顔付。

【馬は馴れた道を心得顔に、自分の好きな調子で私たちを運んでゐた】

「心得顔に」「自分の好きな調子で」と重ねた副詞が實によく効いて、馴れ切つた登山路を登つて行く馬の氣安さと「私たち」の心の長閑さが感じられる。そして語勢の中には馬の蹄のリズミカルな音をきくやうだ。

【明星】 ミヤウジヨウ 金星。諸惑星中最も地球に近く、その大きさも略地球に等しく、地球によく似た天體である。太陽の周圍を公轉するに當り、月と同じく盈虧がある爲、その光輝は時によつて甚しく變化する。黄昏は諸星に先だつて、先づ西空に輝き、曉は諸星に後れて東天に残る。故に「宵の明星」「曉の明星」と呼ばれる。又支那で「太白星」我國で「ゆふづつ」の異名がある。

【それはこの限りもない野の廣さを支配する神の灯とも見えな】

蒼茫として暮れ沈む裾野の廣野を支配する神は、天上にあつて下界を見守つてゐる。その神殿の灯の様に明星は尊く輝くたつた一つの光である。靜寂・尊嚴・神秘と言語を絶した情景である。何といふことなしに「涙ぐましいほど美しい寂しい感激」が作者の心にこみあげて來た

ことも理である。

【昔ながら】 昔そのまゝ。太古以來そのまゝの姿。ながらは接尾語。「神ながら」の「ながら」と同一である。

【暗示】 アンジ (一)それとなく示すこと。ある刺戟により人の心にそれとなく或る觀念を與へること。(二)心理學上 (Suggestion) の譯語。意志の媒介を経ず直接に精神的・身體的の動作を起させる觀念作用を言ふ。こゝは(一)の意。

【表象】 ヘウシヤウ 哲學上 (Presentation) の譯語。感覺を要素とする心的複合體で、比較的獨立した全體として現はれる意識の客觀的内容 (ヴァントの説) で、要約すれば外界の事物又はその道程において意識に思ひ浮べられた心像即ち再生された心像をいふ。こゝでは「表示するもの」「しるし」位に解するがよす。

【露】 モヤ

【感激】 カンゲキ 深く感じ入る。深く感じて心の奮ひたつこと。

【何といふことなしに涙ぐましいほど美しく寂しい感激】 蒼茫として暮れゆく靜寂な廣野、神秘の光に輝く明星、實に尊嚴崇高の美である。生きてゐることの喜もあらう。感謝もあらう。又生命の小ささはかなさに對する寂しさもあらう。さうした複雑な美しい感情がこみ上げて來て、

何といふことなしにちつと涙でも滲んで來さうな感激である。この感激の内容を生徒自らをして熟讀翫味させるやうに扱ひたい。

【研ぎすます】 トぎすます。非常によく研ぎあげる。

【玲瓏】 レイロウ 美しく澄徹して光りかゞやく様。

【搖ぎ出た】 ユルぎデた

眞圓い大きな高原の月、それが裾野の彼方に悠々と上つて來る。「搖ぎ出た」は力學的な印象の鮮やかな敘述である。

【調子】 テウシ (一)音樂上音聲の高低、しらべ。轉じて

(二)ほどあひ。ぐあひ。(三)心もち、きもち。こゝは(二)の意味。

【朗々】 ラウラウ ほがらかに明い様。

【鏤める】 チリバめる 彫りこむ。刻み込む。

【石室】 イシムロ 石をたゝんで作つた室。登山者の休憩宿泊のために、山腹の所々に構へられてゐる。

【寶石のやうな灯が點々として鏤められてゐた。それは石室の灯であつた】

美しい表現である。黒い山腹に點々とまたたく灯は、その清澄な空氣と冴えた月光の中では、寶石のやうに輝く。それが寶石を刻みこんだやうに見えるのだ。「それは石室の灯であつた」と説明を後まはしにした手法は、そ

の美しさを浮び上らせる上に一層効果的であつた。

【馬返】 ウマガヘシ 富士登山路の中途の名所で、吉田から二里十二町ある。此處から急に險しくなり、往時こゝで馬を返したと言ふので此の稱がある。今は本文の示す如く五合目まで騎乗することが出来る。馬返から五合目までは一里十七町ある。

【夜氣を感じるほどだつた】

漸く夜が更けて冷々とした夜の氣が身に感ぜられるほどである。山の高くなつた事と、時間の経過とがその裏に語られてゐる。「夜氣(ヤキ)は夜の氣。夜の氣配。夜の沈まつた氣。

【一合目】 イチガフメ 「合」は山の高さを十分したその

一。下から數へて一合目・二合目……九合目・頂上に至る。

【勾配】 コウバイ 傾斜の度合。

【蹄】 ヒヅメ 牛・馬等の圓い爪。こゝは馬の鐵蹄。

【躓いた】 ツマヅいた

【月の光が雪のやうに葉の上に輝いて、そこらを明るくした】

清澄な空氣の中に研ぎすました満月の光である。木の葉はきらびやかに月光に輝き、あたりの曉のやうに冴え冴えと明るい様が眼にみえるやうだ。「雪のやうに輝いて」は巧な形容である。

【なだれ落ちる】 崩れおちる。「なだる」は傾き崩れるの意。

【月の光が瀧のやうになだれ落ちて路上に溢れてゐた】

「瀧のやうになだれ落ちては」思ひ切つて奇抜な形容である。それだけに力強い印象を感ぜしめる力がある。くつきり暗い樹影からは急に燦々と降りそゞぐ月光の中に出て來た時、確かにそれは音をたて、なだれ落ちるといふ感である。樹下の影に對して其の路の明るさは確に月光が一杯に溢れてゐるといふ感である。

【ひつそりと乗りながら過ぎた】

「ひつそり」といふ副詞が實によく効いてゐる。三合目四合目と山もかなり高くなつた。夜も更けてゐる。物すべて深沈として音のない月光の中を、作者の一行も唯々々と登つて行く。それがすべてその中に語られてゐる。如何にも俳人らしい手法である。

【馬は心得たやうにびたりととまつた】

「馴れた道を心得顔に、自分の好きな調子で」歩を運んだ馬が、此處に來るとびたりと止まる。何千回何百回同じ行程を往來してゐる馬の様子が如實に現はされてゐる。

【樹帯】 ジュタイ 山岳にあつて樹木の生ひ繁つてゐる所の地帯を言ふ。俗には馬返しまでを「草山三里」五合目までを「木山三里」頂上までを「石山三里」と言つてゐるが、植物學者は富士山の植物帯を五つに分けてゐる。

(一)は山麓帯。主として裾野の草原地帯で俗の草山三里である。(二)喬木帯。下部は主として落葉闊葉樹で、これに常緑闊葉樹が混じり、上部は概ね針葉樹密林で、所謂木山三里の樹帯である。(三)灌木帯。主として矮少な灌木から成り多小の草木を混する。(四)は草木帯。高山固有の草木が岩上に著生する。(五)は地衣帯。岩石の表面に唯地衣類の成長するだけの最上部である。本課の樹帯は所謂「木山三里」で植物學上の分割による喬木帯に當る。

【さらす】 晒す・暴すなど書く。日月風雨のあたるまゝにしておく。

【強力】 ガウリキ 剛力とも書く。古くは修験者の伴ふ下僕を言つたが、今は登山者の案内人を言ふ。

【金剛杖】 コンガウツエ 修験者の持つ白木の杖。今は登山者が携帯する。八角又は四角の白木の杖で、この名は佛語の「金剛不壞」極めて堅固で破れないこと）に因んだものであらう。

【天地の境】 テンチのサカヒ 五合目は丁度一合目と頂上との中間に當るので、その下は地上、その上は天上界といふ考へ方で 五合目に天地の境の名がある。

【鳥もゐず、蟲もゐず、死のやうな静寂の中に、七人の金剛杖の音のみが、かちりかちりと岩にあたつて鳴つた】

木。高山の頂に生じ、樹枝は黒褐色で岩石の間に這ひ延び長さ數尺に達する。葉は五葉叢生、果實は毬果で、唐松に似て小さく、種子は食用となる。

【濱梨】 ハマナシ 石南科、岩梨屬の常緑灌木。樹高は二三寸乃至五六寸。葉は卵狀披針形。毛を疏生して粗造である。夏季帯紅色小形の筒狀花を梢頭にひらく。果實は小球狀肉質で、甘い酸味をもち、食用に供せられる。

【薊】 アザミ 菊科薊屬の多年生草本で山野に自生する。莖の高さは二三尺。葉は無柄で粗い羽狀に深裂し、葉縁に剛刺を具へてゐる。初夏紫紅色の花をひらく。花は頭狀花序。花序はすべて筒狀花よりなる。ひめあざみ・べにふで等種類が多い。

【下界】 ゲカイ 佛語。天上に對してこの世をいふ。人間界。娑婆世界。こゝは單に山の下の方の世界の意。

【疏らな星が大きな露の雫のやうにきらきらしてゐた。さうした星がふつと流れて下界の方へ落ちたりした。こゝから見ると白い雲が海のやうに浪立つ下界へ――】

明るい月光の中で星は疏らである。その疏らな星が、露の雫のやうに潤んでまたたいてゐる。「疏らな星」が月光の明るさを現し、そして「露の雫のやうに」は、服も木も草も露に濡れたといふ描寫と微妙な心理的連關を以て描かれてゐる。用意周到な美しい表現といはねばならぬ。

夜は更にふけ、山は更に高い。燦々たる月光の中、鳥も蟲もゐない。居るものは黙々として靜かに登つて行く自分達だけである。氣味の悪い程の靜寂である。この場合岩に當つてかちりかちりとなる金剛杖の音は靜中の動で、更に靜を深める音である。「死のやうな」とは譬へて妙である。一〇「蜘蛛の糸」六一頁には「墓の中のやうにしんと靜まり返つて」と譬へてゐる。

【焼印】 ヤキイン 焼判・やきじるし・やいじるしともいふ。金屬製の印で、熱して物に捺す。

【その針がはつきりと月光に讀まれた】

時計の針が讀まれるその明るさである。「晝のやうに明るかつた」はこの一句で更に具象的になつた。晝のやうに明るい。思はず時計を出して見る。すると針が讀める。その心理の動きが如何にも自然に現れてゐる。「讀まれた」のこれは可能の助動詞。

【蘆】 ゴザ 蘆草で編んだ敷物。こゝは着蓆で、それに紐をつけて旅行者が羽織つて雨風寒暑を凌ぐ料とするもの。

【凌ぐ】 シノぐ (一)他を押し分けて進む。強ひて通る。

(二)越える。過ぎる。(三)さからひをかす。あなどる。

(四)たへしのぶ。支へ止める。防ぐ。こゝは(四)の意。

【偃松】 ハヒマツ 這松ともかく。松杉科、松屬の常緑喬木。

その星が雲海をなす下界へ露が落ちるやうに流れたりする情景に至つては、神秘とも崇高とも言ふべき高山の美しさである。「浪立つ下界へ」と言ふ文の結びは長い尾を引く星の行方が眼前に髣髴とするやうな巧みな筆の運びである。

【亅る】 スべる 國字

【懺悔】 サンゲ 懺は梵語懺摩(Ksama)の略で、悔過と譯す。「悔」の字を加へたのは梵漢を並舉したものである。佛敎の用語で、過去の罪惡を悟つて神佛・師長に對して顯に悔い告げること。佛敎道德上に、罪障の消滅はこれによつて得られると重要なこととされてゐる。「ざんげ」と讀むは訛。「げ」は悔の吳音。行者は山上に神靈いますといふ信仰をもつて清淨法心の修行を志し登山するのであるから、その山靈に對して懺悔の心持で唱へるのである。

【六根清淨】 ロクコンシャウジャウ 六根の妄執を絶つて融通無礙の妙用を體得すること。六根は六塵(色・聲・香・境・味・觸・境・法境)をうけて六識(眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識)の原因となるもの。即ち眼・耳・鼻・舌・身・意の總稱である。「六根清淨」はつまり心身共に清淨無垢になるの意である。無量壽經「六根清淨、無諸惱患。」

【行者】ギヤウジャ 佛教又は修驗道に於て行を修める人。修行者。修驗者。此處は修驗道の行者である。修驗道は役小角の創設した一種の教法で、眞言宗に基き、胎藏界、金剛界の兩部を旨として加持祈禱を行ひ、本地垂迹説によつて神佛何れにも仕へ、山中に入つて難行苦行を業とした。小角より義覺に傳はつて、後一時中絶したが、宇多天皇の頃、醍醐僧聖寶がこれを再興し、ついで勝覺がその流を傳へた。明治五年禁止され、十八年再興を許されて今日に及んでゐる。當山修驗(眞言宗三寶院)本山修驗(天台宗聖護院)の二派がある。行者には専念修行に身を委ねる者と、その宗旨を奉じながら夏季だけ白衣に裝ひ金剛材を持つて山詣をするものと二つある事は、佛教に出家と在家あると同じである。この文章では登山の行者が唱へる「懺悔々々、六根清淨」といふ文句を、自分等も唱へかしたといふのであつて、自分等の中に行者があるのでなく、又行者が先達をしてゐるといふでもない。唱へる文句そのものの説明として「登山の行者が唱へる」といふ形容句を用ひたのである。

【唱へかはず】トナへかはず 唱へ交す。交、唱へ合ふ。

【山に酔つた】山にヨつた 高山病にかゝつた。高山病は高山の氣壓の低下・空氣の稀薄、又は低溫などのために起る病氣で、目まひ、動悸、顔面蒼白、頭痛などの症狀

を呈する。

【天心】空の中央。

【北斗七星】ホクトンシチセイ 略して「北斗星」とも言ひ、又「七曜星」とも言ふ。之を連ねると斗狀をなす所から此の名がある。北斗星は北天にある大熊星座のことである。

【螺旋】ラセン 田螺の殻の線のやうに螺曲した線。

【幻覺】ゲンカク 英語 (Hallucination) の譯。知覺の一。感覺機關が外界から何等の刺激も受けないのに、誤つて恰も外界の刺激に接したのと同様の感覺を生ずること。幻影の知覺。

【さう思ふと眼の疲勞の甚だしいことがわかつた】

一つの陶酔境からふつと何かの機會でひどい疲に氣のつくことがある。その心理過程がこの一行の前後に極めて巧妙自然に描きだされてゐる。睡眠不足で頭がふらふらする。然しまだ月の美しさに打たれてゐる。ふと一つの星が螺旋を描きながら踊る。また他の星は螢のやうに舞ふ。幻覺だと思ふ。すると眼の疲勞が一度にどつと強く意識に襲ひかゝる。その氣持で見れば今まで見てゐた月が涙のじむ程まぶしいのである。如何にも自然な運び方である。

【まぶし】眩し。まばゆい。

【久須志神社】クスジジンジャ 原文に「久志須神社」とあるが恐らく作者の記憶の誤か誤記であらう。山頂薬師丘にあり、大己貴神を祀る。(参考挿繪の説明参照) 本文には「九合目には久須志神社といふお宮がある」と書いてあるが、恐らく作者の記憶の誤か、誤記で、實は社は山頂に近い所に奉祀されてゐる。

【神職】シンシヨク 神官。かんぬし。神社に奉仕して神事に従ふ人。

【御來迎】ゴライカウ 佛語「來迎」(佛語はライカウと濁つて讀む)の敬稱。彌陀を念ずる者の臨終の際、佛菩薩の影向來現してこれを極樂に導くこと。觀無量壽經「化作五百化佛、來迎此人」高山の頂より日の出を拜する感じは來迎の思想とよく似てゐる所から、轉じて高山上に日の出を拜することを言ふ。御來光と書くこともある。

【御被】オハラヒ(オハラへ) 神に祈つて身の罪・穢れを被ひ清めること。

【祝詞】ノリト 告證言が本かと言ふ。轉訛の順序は「告證言」「のりとごと」「のりと」である。約めて「のつと」「の」と言ひ、又尊んで「太のりとごと」「太のりと」と言ふ。神に告り申す詞、又は祓足の詞で、上古の語を用ひ一定文體がある。

神代記「使下天兒屋命掌其解除之太諱辭二而宣之焉」註

「太諱辭此云布斗能理斗」大祓祝詞「天津祝詞之太祝詞事乎宜禮」などは祓除の詞であり、鎮火祭祝詞「天津祝詞乃太祝詞事以氏稱辭意奉久止申」神祇令「其月次祭百官集三神祇官、中臣宣祝詞」などは祝詞である。

【上代】ジャウダイ 上古。我國開闢より奈良朝時代に至るまでの時代。

【御幣】ゴヘイ 幣束の敬稱。ぬさ・みてぐら・幣帛・にぎてなどいふ。

【これまで感じなかつた風が冷え冷えと動いてゐた】夜の「靜」が晝の「動」に移りゆく、その夜明前の一時、極まつた靜の中に生命の流動が溢れて来る。その時の風は「吹く」のではない。冷え冷えとした大氣全體が靜かに動きだしたといふ感じである。「風がひえびえと動いて」はその感をしつかりと把えたものである。

【黎明】レイメイ あげがた。夜明。「黎」は黒いの義、又は頃の義の二義があり、その爲、夜の明けると「夜の明けんとして未だ空の暗い頃」との二説がある。

【混沌】コントン 渾沌とも書く。天地未だ分れず、陰陽未だ分れない状態、即ち物事の區別の判然しない状態をいふ。騶冠子「兩儀未分、其氣混沌」神代記上「古、天地未レ部、陰陽不分、渾沌如鶏子。」

【曉紅】ゲウコウ 朝日の光が紅に東天を染めること。朝

燒。

【先觸】 サキブレ 先驅。前觸。

【かంగリ】 (一)うすあかりなるさま。ほのぼの。(二)物のすきあまる様。ここは(一)の意。

【地平線】 チヘイセン 地平面と天空の相接する線(Horizon) 水面では水平線といふ。

【純潔】 ジュンケツ まじりけなく潔いこと。けがれのな
S.M.P.

【美しいばかりでなく、地上の一切の希望を語つてゐるやうな純潔な尊さに、にじみ出てゐる】

地上でさへ暁天は美しくさわやかである。併しこの山上では美しいだけではない。純潔な尊さである。而もそれは地上の萬象が抱く「新しい活動へ」「新しい幸福へ」「新しい生命の躍進へ」の一切の希望を物語るやうな尊厳さ

2 文の構成

第一節 初—一〇一頁末行

黄昏の裾野を馬上で行く作者の心持。彫刻的な尊厳さをもつた富士、薄青く微光を残した

第二節 一〇二頁初—一〇三頁一行

月明の下の裾野の叙景。

第三節 一〇三頁二行—一〇四頁末行

一合目から次第に山にかゝり、月明の山腹を登り登つて五合目につく。一、樹帯の茂みの下を行く時の情景。

二、三、四合目を過ぎて五合目についた時の様子。

第四節 一〇五頁初—同頁末行

五合目で馬を返し静寂な月明の山腹を一步一步登る。

第五節 一〇六頁一行—一〇七頁一行

我が身も草葉も露に濡れ、時に星が下界へ流れ、夜は愈々深み、山は益々高くなる。

第六節 一〇七頁二行—同頁八行

頂近くなつて路なき路を心を引きしめ合つて登る。

第七節 一〇七頁終—一〇九頁二行

山の勾配に蘆を敷いて横たはり、月を見、星を見て、甚だしい眼の疲れを感じる。

第八節 一〇九頁三行—一一〇頁終

九合目の久須志神社で御祓をうけて出發する。黎明が近づいてゐる。

第九節 一一二頁初—同頁五行

月光が漸く衰へはじめ暁暗の中に朝日をつばかりになつた。

第十節 一一一頁六行—終

人々が緊張して御來迎を待つ時輝かしい朝日が霞を破つて昇つて来る。

3 文意

御來迎を拜する爲、月明の夜靈峯富士に登る記行文である。裾野の薄暮の情景に筆を起し、以下一合目二合目と順次登つて頂上に至り、御來迎を拜するまで、その間の薄暮、月明、曙光などの神秘なまでに美しい莊嚴な景色と、それに對する作者の感想とを織り交へて、靈山富士の崇高な姿を描き出してゐる。

4 鑑賞批評

流石は終始新傾向俳句壇を率ゐて長い眞剣な難行苦行の修練を重ねて來た作者の文である。暢達自由な文によつて寫され行く情景感想は全篇の上に詩的な美しさを溢れさせてゐる。内面のリズムを説く作者の主張が底に流れてゐるからであらう。部分的な巧妙正確な如實の表現については、既に語釋の項で觸れて置いたが、尙登るにつれて移りゆく高さ・時間・情景・氣分等の變化を如何にも巧妙に描いて行く妙趣も實にうまいものである。これらは要するに作者の親照の確かさ、神

經の鋭敏さ、洗練された感情、熟達した表現技巧等を示すものであり、これだけの長い文にいきかかれば、その弛みも見せず押しつた所に、並々ならぬ苦心の跡が窺はれると思ふ。誠に詩的靈筆とも稱すべく、高山獨特な美しさ莊嚴さを眼のあたり描きいだして愛誦熟讀するに足る名文章である。

三 備 考

1 指導研究

(一) 一貫した思想につらぬかれて構成された文ではないから取扱上分割しても差支へないであらう。唯分割に當つて情景気分によるか、山の高さによるか、或は時間的にするか、それは教授者自身の立場によつて異ると思ふが、相當の考慮は拂はねばならない。

(二) 所謂「名文句」と稱せられる巧妙な表現に満ちてゐる。然しそれは飽まで「お山」の持つ莊嚴な美しさを叙する爲の手段である。ともすれば部分的な形式の美しさに眩惑されて主眼に觸れず、それを忘れて讀過してしまふ。そして生徒の頭に形式的な技巧的なうまさだけが残りといふ結果を招くことがある。勿論形式と内容とは離るべきものではないのであるから、兩々相俟つて主眼を離れないやうな教授を進めたい。

(三) 巧妙正確な如實の表現が作者の俳人としての長い修練の賜である事は既に述べた所であるが、その觀察の精密にして正確なこと、その感情の洗練されてゐる事、そして熟達した修辭上の技巧など十分翫味させると共に、それが唯それだけで生れたものでなく、その陰に深い苦心の存する事を悟らしめたい。そしてかゝる文こそ生徒作文の模範として發表能力の鍛錬に資したい。

2 参考

(一) 挿繪 夕暮の富士

日本地理大系(山岳篇)所載の寫眞を轉載した。武田久吉氏の撮影。御坂山塊の名山十二岳頂上より望んだ日没直前(二月中旬)の雄大莊嚴な姿である。

(二) 挿繪 登山姿(寫眞) 日本地理風俗大系(東海地方)所載の寫眞を轉載した。先頭は強力で後につゞくが登山者である。

(三) 挿繪 久須志神社(寫眞) 日本地理大系別卷(富士山)所載の寫眞である。寫眞に見えてゐるのはその鳥居だけで、鳥居を潜つて右に社殿がある。嚴密に言へば頂上とも言へないが、繪にみるやうに道も平坦になつて、頂上はすぐそこなのである。(祭神は解釋欄参照)

(四) 挿繪 頂上の日の出(寫眞) 繪葉書より轉載した。その爲に稍々鮮明を缺いたが、重疊する雲海の彼方に一點眞紅に輝き出る朝日の光も想像されて、御來迎の嚴肅崇高の氣分を味はひ得るであらう。

(五) 本課は「頂上まで」より採つたが、あまりに長大な課になることを恐れて、文中の重要な部分だけを所々省略した。但しその爲に全體に不調和を感じしめることのないやうに配慮したが、場面の移動に稍飛躍を感じしめる所も生じてゐるので、次にその省略した部分を掲出する。教授者は一應通讀して参考に資せられたい。

△初二節省略。

△第一節一〇〇頁八行 — 私たちを運んでゐた。こゝらの裾野は小松が多かつた。小松の中には秋草が様々に咲いてゐるらしいが、丈の低いのは皆夕の色に埋れてしまつて、背の高い女郎花と路傍に近く咲いてゐる月見草とだけが暮残つてゐた。ふと西の空を見ると

△第二章一〇三頁一行 「夜氣を感じるほどだった。これから山も高くなるし、夜も更けるから」と強力がいふので、私たちはメリヤスの肌着を着込んだ。櫓の明りの暗い手元で飯鉢を一杯づつ食べた。そして又めいめいの馬に乗った。今夜のお山はいゝぞ」こんな日和は今年になつて初めてだ」馬子と茶屋の主人とがかう話した。一合目から上は――

△第四節の前 五合目は「天地の境」と稱せられてゐる。如何にも此のあたりまで登ると地上を離れたといふ感じがする。吉田口から裾野を來る時薄い夕霧がしつとりと襲つて來るやうに思つたが、それはもやもやした白い雲となつて、こゝから見ると低く裾野一面を蔽うてゐる。そのあなたに吉田の町の灯がちらちらと光つてゐる。それより尙遠く尙幽かに見えるのが船津の灯であつた。馬と馬子を返し――

△第五節と第六節の間の一節 一六合目の室はびつたり閉ぢてゐたが、その前に差掛けのベンチが出來てゐる。そこへ腰をかけて休んだ。私は精進の宿を立つ時新しくかへて來た草鞋を踏切つたので、強力の背から一足取出させて穿きかへた。室の戸が明いてこゝに泊つてゐた男が出來て來た。その男は崖の所へ行つてちらとあたりを見まはして、ぶるぶると身ぶるひをして、「おゝいゝ月だな」といひつゝ又室の戸をびたりと締めた。

△第六節と第七節の間の一節 一七合目を越して八合目の室に入つて少し休んだ。時計を見ると、もう一時を過ぎてゐた。非常に睡いやうでもあつたがこゝでなまじひに眠つてはいかぬと思つた。室の中の爐では木の枝を焚いてゐた。その煙が非常にけむくて、目から涙がぼろぼろと落ちた。やはり眼が疲れてゐる爲だと思つた。室の一隅に幕を引いて別室のやうに仕切つて泊つてゐた外人の一群はもう起きてゐた。頂上で御來迎を拜まうとするならば、そろそろこゝを出なければならぬ頃だ。いつの間にか爐の傍に横になつて眠つてしまつてゐた強力の青年を呼起して私たちは又登り初めた。

△第十節一一一頁五行 「待つばかりになつた。下界は一殊に甲州に寄つた方は――雲がびつしりと鎖してゐた。その雲のはつれに今までは雲と同じやうに白く見えてゐたものが、大きな勾玉の形をした湖水であるといふはじめもやつと明かに認められた。それが山中湖であつた。五湖の一として見残したこの湖を、私たちはかうして鳥瞰的に眺め得たのであつた。

頂上の室ではもう灯を消してゐたが、屋根の下はうす暗かつた。そこへ私たちは上つて、御來迎を待つことにした。じつとしてゐると、寒さはひしひしと身に迫つて來る。手は凍え吐く息は白く見えた。襦袢を借りてかぶる者もあつた。下の室を早く立つて來たと見える人が、ちらほらと登つて來て室は一杯になつてしまつた。皆草鞋のまゝで上るのだが、脚と脚とを入れちがへて餘地のないやうな所へ、牡丹餅の箱などが並べられた。名物といふ眞黒な甘酒だけはうまかつた。

△第十一節の後に一節 「朝の展望、相模駿河への展望を敘する一節(略)

補材

なびき寄る雲のすがたのやはらかきけふ富士が嶺の夕まぐれかな

【なびき寄る】 風の吹くまゝに流れ寄つて行く。

「なびく」 偃え延く意かと言ふ。(一) 風又は流水などの爲に横さまに撓み伏す。(二) 他に屈する。他の意に従ふ。

こゝは(一)の意。

【夕まぐれ】 夕ぐれ。たそがれ(一二・親子の馬・七八頁 既出)

巍然と聳え立つ崇高莊嚴な富士山にやはらかい秋の夕雲が流れよつて、けふはまたなんといふ和やかな美しさであらうと言ふ詠歎である。

なびきよる雲は白い綿毛のやうな秋の雲である。「なびきよる雲のすがたのやはらかき」と流れるやうな穏やかな歌ひ振りは、夕雲のなびきよる富士山の平和なたそがれの姿にうたれてゐる作者の心の姿である。見なれた莊嚴な山が、けふはまた不思議な程に平和な光につままれてゐるのだ。けふ富士が嶺の」と、作者はその感動をうち上げて、そしてまた

すぐに「夕まぐれかな」と敬虔な氣持に移つて行く、その心の動きがそのまま下の句の律動的な韻をなしてゐる。崇高な感情を深く底に湛へて、如何にも和やかな歌境である。

散文と韻文との相違はあるが山の神秘崇高な美を、同じく寫生によつて表現した點は本課と軌を一にした文學的作品である。その持つ味も極めて相似たものであるから、本課と結びつけて味はせるのに好箇の補材である。

【若山牧水】

ワカヤマボクスキ 名は繁。明治十八年八月宮崎縣東臼杵郡本郷村に生れた。宮崎縣立延岡中學校在學中から作歌を試み、十八歳の頃五・六の雑誌に投稿して、早くも佐々木信綱博士に認められた。二十歳の春上京、早稻田大學英文科に入り、尾上柴舟の門に入り、三十八年同門の前田夕暮・正富汪洋等と車前草社を起し、歌壇に進出し、その浪漫的聲調は當時の青年層に迎へられた。卒業後中央新聞社に入つたが、二・三ヶ月で退社し、四十四年創作社を起し、雑誌「創作」を主宰し、經營の困難と戦ひつゝ後進の誘導に努めた。四十五年關秀

歌人太田喜志子と結婚。大正四年三浦半島に移り住み、大正九年には沼津市に轉住した。その間飄然旅程に上ること多く、遍く各地に巡遊して自然に親しみ、旅中吟詠の作が多い。昭和三年九月歿、享年四十四。

著書には、歌集に「海の聲」「獨り歌へる」「路上」「秋風の歌」「白梅集」「溪谷集」「山櫻の歌」等、歌話に「牧水歌話」「和歌講話」「短歌作法」等、散文集に「旅とふるさと」「海より山より」「静かなる旅をゆきつゝ」「比叡と熊野」「樹木とその葉」等があり、すべて牧水全集十二卷に收められてゐる。

一七新 月

北 原 白 秋

一 解 題

1 作 者

北原白秋 キタハラハクシウ 本名は隆吉。明治十八年一月福岡縣山門郡沖端村（今は山門郡）に生れた。中學修學後、明治二十六年上京、早稻田大學英文科に入り、中途退學した。所謂氏の略歴なるものはこれだけである。少年時代から既に詩歌に親み、三十七年二十歳の時「林下の默想」「繪草紙店」等の詩を雑誌「文庫」に寄せて漸く詩壇の注目する所となり、ついで三十九年與謝野寛等の新詩社に入り「明星」「スバル」等に盛にその詩を發表した。四十一年頃からは好んで象徴詩を作り、四十二年詩集「邪宗門」を出すに及んで氏の詩壇的位置は確立し、殊に四十四年刊行の詩集「思ひ出」は全詩壇の推賞を受けて、詩壇の寵を獨占するに至つた。當時又和歌を盛んに發表し、大正二年には歌集「桐の花」を刊行してゐる。大正七年頃から童謡の創作をはじめ「蜻蛉の目玉」を第一として多くの童謡集を刊行し、又「白秋小唄集」を刊行して野口雨情・西條八十と並んで昭和期に於ける童謡及び民謡勃興の機運を促進してその功績大なるものがあつた。まことに大正期から昭和の初に至る氏の活躍は素晴らしいものであつて、或は「朱槿」「地上巡禮」「A R S」等詩歌雜誌から、短歌雜誌「日光」或は「詩と音楽」「近代風景」「曼陀羅」或は童謡民謡等の諸雜誌に至るまで氏の詩的才幹は遺憾なき光彩をはなつた。現在は武藏野砧村に閑居し自然を友として昭和良寛の生活を楽しみながら尙詩作をつゞけ、詩壇の元老として重きをなしてゐる。

著書は八十餘種の多きに上り、その重なるものは前記の他に、詩集に「東京景物詩」「白金の獨樂」「白秋詩集」「水墨集」「海豹と雲」等、歌集に「雲母集」「雀の卵」等、童謡に「兎の電報」「祭の笛」「白秋童謡集」等、民謡に「日本の笛」あしの葉」等があり、文集に「白秋小品」「雀の生活」「季節の窓」「洗心雜話」等の好著がある。尙詩論、歌話等にも聴くべきものが多い。

2 出典

「畑の祭」の中で發表せられた一篇である。「畑の祭」は大正十一年六月出版の白秋第二童謡集である。本課の詩は「白秋詩歌選」「現代日本文學全集現代日本詩集」にも採録されてゐる。

3 主眼及び採擇の趣旨

暗黒寂寞の夜の海を背景に、斷崖の上にかゝる金無垢の新月の氣分をうたひだし、それを通して自然の嚴肅崇高な美に對する作者の敬虔な感動を表現した象徴詩である。その洗練された獨得の韻律と、清新な官能的な美しい表現とは、この詩に極めて氣韻の高い藝術的香氣をほほせてゐる。この藝術的香氣を味はせたい爲の文藝教材である。自然の嚴肅崇高な美に對する敬虔な感動の表現である點においては、直接前課と關係をもつて來る。唯此處ではそれを韻文に變へ、一つには氣分の轉換をはかると共に、一は新しい詩に對する理解と鑑賞との習練に資せんとしたのである。

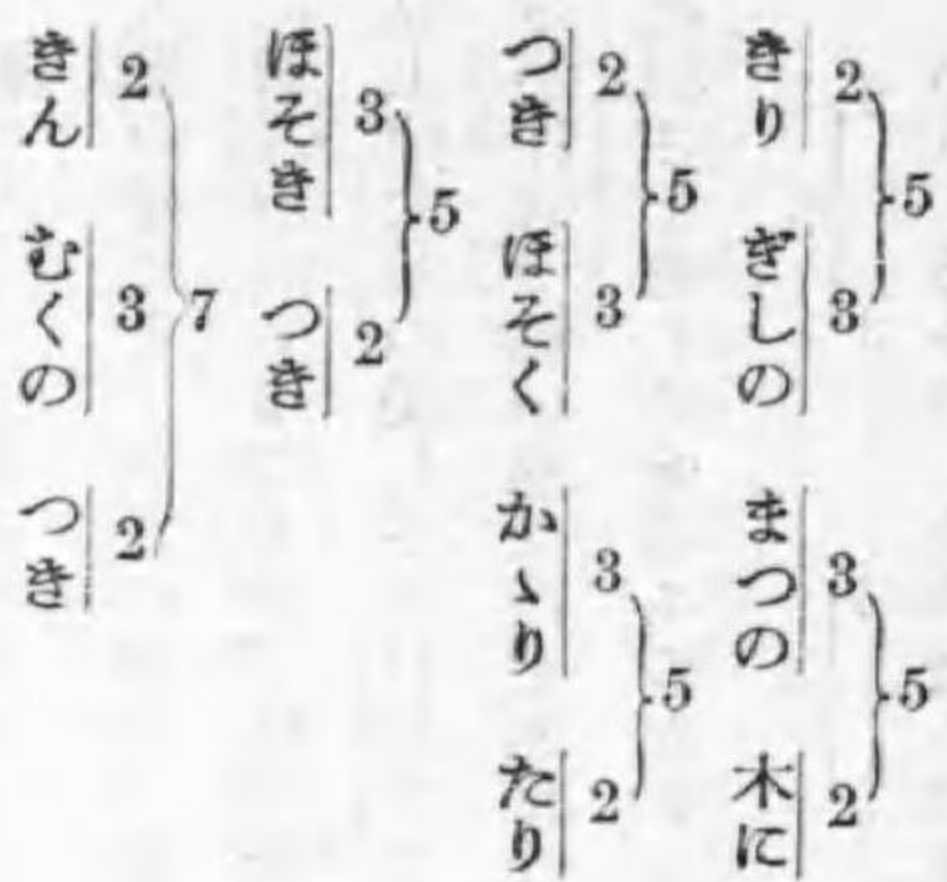
二 解釋

詩は元來韻律の文學であつて韻律を離れた詩歌の解釋は成立し得ないといふも過言ではない。故にその意味内容を究めると共に、その韻律の姿を明瞭にすることこそ、眞に詩の理解に到達する道であると言はねばならない。韻律には從來音性律（平仄）音位律（押韻）音數律の三つが數へられ、日本詩の韻律的特色は音數律にあるとせられてをり、その韻律に

規定されるか否かによつて定型詩・自由詩の區別がなされてゐる。併しこの區別は外形的なものであつて、定型詩と自由詩とを問はず、詩歌の本質的な律的要素は内在律であることは論を待つまでもない。

「新月」は從來の區別に従へば自由詩であるが、詳細に検討する時は自由詩とも定型詩とも見られる極めて特異な韻律的な層を持つてゐるのである。即ち全篇殆んど三・二又は二・三律の五音脚の繰返しを以つて構成されてゐる。元來二・三律は圓滑沈靜の響であり、三・二律は輕快促急緊張した強い格調であると言はれてゐる。本課の五音脚は多くその三・二律に屬し、それが強い表現とよく相通ひ、而も五音の層をたゞみかけてそこに強い格調を示してゐる。尙時に七音になり、又六音になつたりしてゐるがそれはその部分に於て説明を加へる事にする。

本課は特に次のやうな形式によつて検討を進めたいと思ふ。



韻律

三句まで五音脚の繰返しで第四句を七音で止めてゐる。「きりぎしの」「つきほそく」は何れも二・三律で一種沈靜な響

【新月】 シンゲツ (一)朔月。即ち月が地球太陽との中間に來て三者一直線をなし、その輝を望み得ない時の月。
 (二)陰曆で月の初の月、一・二・三日月などの總稱。(三)新に昇つたばかりの月。こゝは(二)の意。
 【斷崖】 絶壁 かけ。
 【金無垢の月】 混合物のない純金の如く光り輝く月。陰喩法である。

で詠ひだされ、それを「まつの木に」かゝりたり」と二・三律でうけて一句一句言ひすてゆくやうな格調は嚴肅な強さをもつてゐる。最後の七音脚の滯滞性をもつた調は説明的な落ちつきを與へてゐるやうに思はれる。

評釋

入海の岸にそゝり立つ斷崖、斷崖の上に一本の松が生えてゐる。夕闇が靜かに這ひよる頃である。ふと見上げれば松の梢に新月がかゝつてゐる。細い新月である。而もそれは純金のやうに冴え輝く月である。人氣のない夜の海邊、作者はふと見上げた月の美しさに打たれて靜かな嚴かな氣持で月をみつめてゐる。ほそき月の假名書は勿論「細き」の漢字の持つ堅さが作者の鋭い感受性を満足させなかつたのであらうが、實に「ほそき月」のほそきは假名書のために「金の鉤」のやうな細さを感じさせるものがある。

いり うみの なみま にも
 2 2 3 3 5 2
 3 3 3 3 5 2
 また つきは しづき ゆく
 2 2 3 3 5 2
 3 3 3 3 5 2
 ちん ちんと
 2 2 3 3 5 2
 きんの はり
 3 3 3 3 5 2

韻律

すべて五音脚を重ねてゐる。その格調は殆んど第一聯と同様であるが、唯第三句が二・三律となり、それが「沈沈と」

【しづく】 水の中に沈んでゐるものが透きとほつて映る。萬葉一九「藤波の蔭なる海の底清みしづく石をも玉とぞ我が見る」。古今集一六「水の面にしづく花の色さやかにも君の御影のおもはゆるかな」

【沈沈】 (一)夜ふけてゆく貌。李白詩「月寒清夜沈沈」。

(二)ひつそりと靜まりかへつたさま。ここは(二)の意。

【金の鉤】 黄金の釣ばり。三月月を譬へた隱喩。

といふ語の内容とびつたり結びつき、全體にかなりの沈靜感を與へてゐる。

評釋

眼を斷崖の下の海に轉ずる。入海の波は靜かだ。その波間にも月は鮮やかな影を沈めてゐる。恰も黄金の鉤を沈めたやうに、ひつそりと靜まりかへつて。靜けさといふも及ばぬ。寂しさといふも足らない。人界を絶した靜謐な天地の中に作者の心は波間に動かぬ月に吸はれてゐる。「沈沈」といふ漢語は「ほそき月」の假名書に對してこの場合實に効果的であり「金無垢の月」「金の鉤」などの隱喩と共に作者の官能の鋭どさを示してゐるものである。

きん むくの する どさよ
 2 2 3 3 5 2
 3 3 3 3 5 2
 きぬ こしの あめの のち
 2 2 3 3 5 2
 3 3 3 3 5 2
 しん じつに
 2 2 3 3 5 2
 3 3 3 3 5 2
 はしり いづる その あをば
 3 3 3 3 5 2
 3 3 3 3 5 2

韻律

「あめののち」を除いてみな二・三律の五音脚である。前二聯を斷崖の上の月、波底の月の美しさに驚く作者の昂い感じがその強い格調となつたものと見れば、この一聯はやがてその高まりが内容的説明的に移つて來たものと考へられるやうな沈靜した格調になつてゐる。「はしりいづる」の六音は五音の字餘りとも考へられないことはないが、やはり韻律性に富

む三音の繰り返しと見る方が此の場合意味に妥當ではないかと思ふ。

評釋

金無垢の月の光は冴え冴えと鋭い。げにそれは絹漉の細雨が洗ひ去つて清澄な空氣。その雨霽の空に光る月である。眞實に「走り出づる」の副詞である。細い月から、蒼き輝が走り出づる、それは決して幻想でも幻覺でもない。ほんとうに走り出るのであるといふ氣持である。非常に強い言葉である。その細い鋭い蒼い光は神祕なまでに美しい光である。「するとさよ」「走り出づる」「その蒼さ」など實に新鮮、鋭敏な感覺を思はせる。

「蒼き」について説明したい。月の色は金無垢である。従つて「蒼く」はない。然らば「蒼さ」とは何か。生徒の質問の起るところである。「走り出づる蒼さ」は月の輝きの美しさの表現である。満月の美しい輝は銀光とも、又水の如く澄んだ輝ともいはれる。新月の細い光はそれ等とは異つた感觸を持つ。幽かに深い感じである。その「幽かにして深きもの」を「蒼さ」といふ語で示したるもの。他の語に置きかへて見る時この語の持つ力がはつきりと認識されるであらう。「蒼色をした月」ではない。

【島黒く・海黒き】音數律と意味とが反覆された表現で、それが眞の闇と結びついて文字通りの闇を描きだしてゐる。

しまくろくうみくろき
しんのやみ
ふねひとつすすみゆく
そのうへにほそきつき

韻律

第一句が意味の反覆と共に同じ音數律を重ねてゐる爲に二・三律であるが、他の五音脚はすべて三・二律である。そこに第一聯と同じ緊迫した鋭い高い格調を示してゐる。第三聯で弱まつた調子が、此處で再び昂まる所は全篇を通じて音楽的律動を感じさせるものがある。

評釋

沈沈と更けゆく夜の闇は、島を海を黒い色に塗りつぶす。何物も蔽ひつくした眞の闇である。その闇の中を漕ぎゆく船が一つ。海にあつて存在を思はせるものはその櫓聲、天にあつて存在を示すものは細い金無垢の月、寂寞の海、寂寥の天、靜中動あつて更に深められた靜である。物凄いまでの靜寂境ではないか。

なにかわかぬ
うろくづは目をさまし
すすむしはいつしんになきしきる
つつしみのきはまり

【なにかわかぬ】何かわからない。「ね」は「ず」の已然形である。普通であれば、上に係詞「こそ」があるべきであるが、詩の場合であるから許される。語感をさぐると、「何かわからないが」といふやうな句意に聞える。

【魚族】「いろくづ」の轉で、魚の異稱。

【鈴蟲】直翅類コホロギ科に屬する昆虫。平安朝の頃から歌に詠まれて愛玩せられ、徳川時代には籠中に飼つて卵を取り飼育する方法も知られた。體は多少扁平で、形は長卵形で長い觸角と長脚を持ち全體が暗褐色又は黒褐色である。秋涼しい聲で鳴く。本州の中部から臺灣まで分布する。

【鳴きしきる】しきりに鳴く。「しきる」は頻る。たび重なる。

韻律

表示したやうに、この聯は他の聯と異つて特に複雑な律形を示してゐる。即ち第一句は三音の繰返しからなる六音脚であり、次の二句が二・三律の五音脚で最後はまた四音脚に變つてゐる。その五音脚も二・三律の沈靜なものであるが、それが第一句の韻律性に富む三・三律につながつて、一種圓滑な調で流れてゆく、それを四音脚で止めてゐるのであるが、その四音律の思惟的な性質は、流れ來つた詩想を描寫的態度に還元した風な落ちついた趣をあたへてゐる。

評釋

何か解らない。併し靜寂な天地の間に何かしら靈妙神祕な力が動いてゐる。見よ魚は眼をさまして波間に躍り鈴蟲は聲を盡して一心に鳴きしきるではないか。その靈妙な自然の力の前には一切を洗ひ去つて唯頭の下る思である。敬虔の極である。作者の感じたこの敬虔嚴肅な氣分こそ本篇をつらぬく詩想の中心なのである。

やみの	夜は	きり	ぎしも	まつ	の木も
3	2	2	3	3	2
5		5		5	
か	げ	わ	か	ず	
2	2	3	3	3	
5		5			
た	ゞ	ひ	か	る	
2	3	3	3	2	
5		5			
ほ	そ	き	つ	き	
3	3	3	2		
5		5			

【見えわかす】 見わけられない。見えない。わくし動詞(力行四段)「す(助動詞・打消)わくは(一)わかつ區別する。(二)辨別する。判斷する。(三)分配する。こゝは(二)の意。

韻律

きん	むく	の	ほそ	き	つき
2	3		3	3	2
5		5			

やはり五音脚の繰返しである。第二句「見えわかす」だけが二・三律で咏嘆的な調をなす他はみな三・二律の強い格調であり、それが殊に最後の二句に至つて一は「たゞひかる」といふ強い表現と、一は「金無垢の」といふ隱喩と結びついて、一層強い格調をもつて全篇を詠ひをさめてゐる。

評釋

闇は更に深まる。斷崖の松も去り行く船も今は唯黒一色の中に塗りこめられて無の暗黒である。「ほそき月」は闇の底に益々さえてゆく。唯光りに光る、神祕な崇高な金無垢の色に光りに光るのである。最後の二聯の強い表現はその格調と結びついて嚴肅なまでに緊張した氣分をだしてゐる。

2 詩の構成

- 第一聯 ふと斷崖に見上げた細い新月の金無垢の光に歎美の眼を見張る。
- 第二聯 眼を轉じて入海の波間に映る月の美に見入る。
- 第三聯 その月は細雨の後にしんじつ光り出た金無垢の蒼い光に輝く月である。
- 第四聯 やがて暮れ沈んだ暗い海に行く船があり、空には唯細き月が冴える靜寂美。
- 第五聯 何か知らぬ力に眼さめる魚・なきしきる鈴蟲、その中に立つて作者は極度の敬虔を感じる。
- 第六聯 夜更と共に闇の色は濃く暗黒の空に細き月は嚴肅なまでに細く光り光る。

詩想

斷崖の上に唯光るほそい金無垢の月に「虔のきはまり」を感ずるその姿こそ本篇詩想の中心である。官能的な臭味を拭ひ去つた日本的な風雅な氣韻、嚴肅崇高な美、作者はそれを金無垢の「細き月」に見いだし、そしてそれにふさはしい高い格調をもつてうたひ上げたのである。而も作者の至純な詩情と鋭い感覺と練達した表現力によつて、象徴詩としてもかなり深みのある詩趣を醸成してゐる。

3 鑑賞批評

詩歌が韻律の文學である限、如何なる詩人の場合でも格調の美が要求される筈であるが、白秋の詩歌に於いては特にその韻律の美しさが他を抜いて感じられる。それは永い修業の結果だとも言ひ得ないことはないが、然し白秋の場合決してそれは鍛錬にのみよつて得られる底のものではない。白秋こそは現代日本詩壇の持つ天才的詩人である。此の詩は白秋の代表的作品ではない。而もこの作品においてすら高い格調が強い表現の意味内容と常に一分の隙もなく合致して「虔のきはまり」といふ作者の感動、即ち全篇をつらぬく嚴肅・崇高な詩趣を極度にまで盛り上げてゐる。併し白秋の特異性はそれだけではない。氏は異狀に鋭敏な天性の感覺を持ち、その底に至純な詩情が溢れてゐる。それが多年の詩人的修練に結びついて、全篇に溢れる洗練された美しい官能的な表現を生んだことを思ふべきである。蓋し生徒に取つては初めて接する高い境地の詩である。反覆讀誦して鑑賞せしむべきであらう。

三 備 考

1 指導研究

(一) 本來象徴詩の解釋鑑賞には、心を澄して靜かに反覆讀誦し、その情景を通してその詩趣詩想到に想到することの必

要が説かれ、そして事實それは象徴詩のみならず、凡そ詩歌の解釋鑑賞には必須の要件である。そして生徒は又時に教授者を驚かせる程に鋭敏な感受性感激性を示すものである。然し若し教授者がその生徒の感情の鋭敏さを過信し、又詩歌鑑賞の第一義的方法にのみ固執して、單に生徒の感受直觀にのみ訴へるとするならば、その韻文教授で成功ををさめ得る場合は少い。殊に本課は此の時代の生徒にはかなり高い詩境で、その象徴も韻律も彼等には容易に理解し難いものであらう。従つて本課では一義的方法は第二段の仕事として、それに先だつて適宜分析し、かなり多くの説明を加へてその詩趣詩想の中心へ導くことが大切である。勿論究極に於てはこの洗練された詩の高い藝術的香氣を味はせることを心掛けるべきは言ふまでもない。

(二) 韻文について生徒の過去に讀み來つたものを省みると自由詩型のものも尋常五年に多く(卷九、第十五、時間、第二十一、母馬子馬等)尋常六年の時はずべて定型律の新體詩(卷十一、第十九課、我は海の子、卷十二、第七課、鎌倉)等であつた。それ等を反省して詩の型式を教へ、自由詩と定型詩との比較考察をもさせたい。

2 参 考

(一) 白秋の作風を窺ふたよりに左にその詩二・三を掲げる。補材に用ひられるもよからう。

雨 中 小 景

雨はふる、ふる雨の霞がくれに
ひとすぢの煙立つ、誰が生活ぞ、
銀鼠にからみゆく古代紫、
その空に城ヶ島近く横たふ。
なべてみな空なりや、海の面に

輪をかくは水脈のすぢ、あるは離れて
しみじみと泣きわかれゆく、
その上にあるかなきふる雨の脚。

遙なる岬には波もしぶけど、

網漣の雨の中、蟹小舟ゆたにたゆたふ。

棹あげてかぢめ採りある

北齋の蓑と笠、中にかすみて

一心に綱うつは安からぬけふ日の惑ひ。

さるにてもうれしきは浮世なりけり。

雨の中、をりをりに雲を透かして

さ縁に投げかくる金の光は

また雨に忍び入る。音には刻めど

絶えて影せぬ鶴鶴のこゑをたよりに。

薔薇の木に

薔薇の木に

薔薇の花さく。

なにごとの不思議なけれど。

渚

蒨たさよ、しろき月

炎しろく

雲の翼はるばるに

行きながれぬ。

釣舟の漕ぎいづる

入江ちかく、

さざなみの彩織りに、

魚籠ひたせば。

光るなし、かげるなし、

夕満ち汐、

うらもなし、うつつなし、

膝、くるぶし。

夕暮よ、黄金蟲

うなり過ぎて、

さんごじゆの花の香のみ

蒸しにほひぬ。

(二) 白秋の詩についての批評二・三を掲げる。

〔中西悟堂氏評〕

北原白秋氏は明治詩壇の末から大正詩壇の初頭へかけて、從來の我が國の詩に見られなかつた新しい感覺の火を放つた詩人です。その言葉の豊かなこと、その才藻の傑れてゐること、その言葉に對する感性即ち語感の敏感鮮明なことは、詩壇獨歩の趣があります。この詩人位日本語を自由に使ひこなし、又日本語を各方面に生かした詩人は少いでせう。種々な地方の俗語や、言葉の合の手に入れる拍手などをこの詩人位巧妙に應用した人はありません。だから北原氏は詩人としても、歌人として小唄や民謡や童謡の作者としても、凡そ韻文で表現されるすべてのものに卓越した成功を見せました。従つてその詩論は全國に喧傳され、詩や民謡を好む人で北原氏の名を知らぬ人はいない位です。多くの人の間に歌はれて素晴らしい流行を見せた「さすらひの歌」や「城ヶ島の歌」や「にくいあん畜生」や「今度生れたら」などは作曲もよかつたからでせうが何といつても詩が立派であつたために斯くも有名になつたのです。(評論大正詩壇本)

〔柳澤健氏評〕

白秋氏の詩句を讀んで感ずることは、文字が綺麗に用ひられてゐる事實である。白秋氏の感じた事が表面に一切現れてゐる。この文字以外に何等保留されてゐるものはない。言ひたしことが綺麗にすつかり言はれてゐる。白秋氏はこれ以外に何も言ひたい事もなく言はなければならぬ事もない。従つて用ひた文字は表面に輝いてゐる意味があるだけで、その裏に陰影を引いてゐる事はない。白秋氏の詩が大衆に愛好される直接動機は以上に言つた詩意と詩句との完全なる抱擁にある。詩がよく親切な説明をしてゐる點にある。自分は此に於いて、質實な問題に觸れなければならない。白秋氏の詩が高貴の理論から肯定さるべきか否かの問題である。

海雀、海雀

銀の點々海雀

波ゆれくればゆりあげて

波ひきゆけばかげ失する

海雀、海雀

銀の點々、海雀

快い庶民的諧調、裏面的音楽は此等の詩にある。併し此等の詩にある文字の美しさ以外に果して何があるであらうか。修練された感覺思想は、何時までも表面の輝にのみ牽かれて止まるものではない。自分達が深く窺めんとするは、盡きる遠き陰影であり、滾々として涌きいつる内面の音楽である。この陰影、この音楽こそ貴い藝術には當然その屬であり木質である。白秋氏の詩にこれを誰が窺め得るか。(現代の詩及詩人)

一八片 島

坪田 讓 治

一 解 題

1 作者

坪田讓治 ツボタジヤウヂ 明治廿三年六月三日、岡山縣岡山市島田一二五番地に生れた。同四十年三月に私立金川中學校を卒業して東上し、早稻田大學に進み、大正四年三月に同大學英文科を卒業した。その後は創作に従事し、小説としては、「お化けの世界」、「晚春懷京」(以上昭和十年出版)、「兒の上を思ふ」、「風の中の子供」(以上昭和十一年出版)、「青山一枝」(昭和十二年出版)等がある。氏はまた童話方面にも活躍し、童話集としては「魔法」、「狐狩」(以上昭和十年出版)、「をどる魚」、「正木の鳥」(以上昭和十一年出版)等も出してゐる。その他に隨筆集「班馬鳴く」があることは、出典の條で述べる通りである。新進作家として氏の最近の活動は注目されてゐる。

2 出典

隨筆集「班馬鳴く」より採つた。「班馬鳴く」は昭和十一年刊行された坪田讓治氏の處女隨筆集で、全篇は「深夜の感慨」、「何を待ちつつ」、「壁に書く」、「故園の情」、「兒童文學の早春」の五章に分れ、本課は「故園の情」の中、「少年薄暮(片島)」とある一篇の全文を採つた。尙本書の輪廓を窺ふためにその序文の一部を次に掲げる。

「題名は李白の詩から取つて來た。註に、放れ馬、即ち別離の意とある。この書によりて、今、私は何に別離の意を述べんとするのであるか。つきざる幼年の夢を追ふはその一である。切々望郷の感慨にふけるはその二である。青春苦悶の跡をたどるはその三である。

思へば文學作品にして過去に告ぐる別離の言葉でないものはない。これが班馬鳴くの題意の存するところである。――

3 主眼及び採擇の趣旨

少年期の追憶として描かれた片島紀行である。一六「富士登山」で俳味溢るる紀行文を読み、前課「新月」では高い詩境を通して自然の崇高尊嚴な姿にうたれた少年達に、夢多い多感な少年時代の情緒を豊かに湛へたこの文は、歡び迎へられるであらう。夢物語の中のやうな片島も、好奇的で冒險好きな少年の驚異歡喜も、さてはまた遠く遙かな空想も、すべてこれ生徒にとつて 懐しい自分自身の境涯であり、共通の心理描寫である。彼等の直接の理解に訴へて共鳴共感を促すべき文藝的教材として採擇した。

二 解 釋

1 語 釋

【瀬戸内海】 セトナイカイ 陥没沈水によつて生じた内海で、中國・四國・九州の三地方に圍まれ、關門・豊豫・由良・鳴門四海峽によつて外海に通ずる。海岸は出入多く、岬角灣入、嶮岸平岸相錯綜し、のみならずその數三千に上るといふ島嶼が所せまく基布し、海平らかに松蒼く風光絶佳である。殊に源平決戦をはじめ此處にまつはる幾多の歴史傳説は、その風景を一層情趣深くゆかしいものにしてゐる。(小學國語讀本卷十一・第八課・瀬戸内海参照)

【笠岡】 カサヲカ 岡山縣小田郡笠岡町。本縣の西邊に位し、山陽本線に沿ひ、井笠鐵道の起點をなし、南は海に臨み、水陸の便をあつめ、近郡の物貨の集産地であり、又商工業の中心として本郡第一の都會である。

【神島】 カウノシマ 岡山縣小田郡に屬する。神島内村・神島外村とに分れ、近時三井製煉所がある。附近は内海中の一美觀とし古來その景勝を讃へられて、ふるく續後拾遺集にも「神島の波の白ゆうかけまくもかしこき御代のためしにも見る」とある。本課片島は此の神島内村に

屬する一小島である。

【製煉所】セイレンジョ 鑛石等から金屬を抽出し冶金する工場をいふ。煤煙・鑛毒等の害を少なからしめる爲に比較的に人家稠密でない所によく設けられる。原文には「三井製煉所」とある。

【隈なく】クマなく (一)曇なく。陰なく。(二)へだて心がない。かくす心がない。(三)残る所がない。一面に。こゝは(三)の意。

【黍】キビ 禾本科の一年生草本。莖の高さは一米内外。葉は細長く先端が尖り、平行脈がある。秋、稈頂に花穂を散生し、複總狀花序をなして淡黄色の穎果を結ぶ。その種子の粘るのを「もちきび(稷)」と言ふ、粘らないのを「うるちきび(稷)」と言ふ。

【玉蜀黍】タウモロコシ 禾本科の一年生草本。莖は強固で高さ二米に達し、葉は長大で葉鞘で莖をつむむ。七八月頃雌花群は各節の葉鞘間に生じ、雄花群は莖頂に長い穂状をなす。果實は苞に包まれ、種實は扁圓形で澱粉に富み食用に供せられる。

【そよぐ】「戦ぐ」と書く。そよそよと動く。そよそよと音をたてる。

【周圍一里に充たず、山もなく、川もなく、小高い丘のやうな上はよく耕されてゐて、そこには残る隈なく薩摩芋がつか

くられ、處々に黍や玉蜀黍の葉が風にそよいでをりました。

残る隈なく耕されてゐる所など小島らしい景趣である。薩摩芋や黍や玉蜀黍などばかり常食してゐさうな乏しくつましい島人の生活も推測されて、如何にも人里遠い僻陬な、都市生れの少年の好奇心をそそる趣である。と同時に作者のその島に渡つた季節がそれとなく語られてゐる。植物から推して夏の休暇の事などではなかつたらうかと思はれる。

【從姉】イトコ 父母の兄弟姉妹の子供達の中、自分より年長の者を從兄(姉)と書き、年下の者を從弟(妹)と書く。從兄・從姉・從弟・從妹何れも「イトコ」と訓ずる。

【一艇】イツチャウ 墨・銃・蠟燭・櫓・駕籠・人力車などを數へる單位。

【櫓】ロ 櫓とも書く。

【舷】フナベリ(フナバタ) フナベリ(フナバタ) 略述する。「歌ふ」は聲を長くし節をつけてうたふ。「詠ふ」はふしなどにかゝはらずわけなくうたふ。「謳ふ」は同音にうたふ。唄ふ」は俗曲又は佛の讃歌をうたふ。此處ではこの意味の區別を意識しての用法ではない。

【歡聲】クワンセイ 歡びの聲。

【笠岡から小さな船に乗り、ギツチラギツチラと船頭の漕ぐ一挺の船に揺られ、舷から海の水に手を浸したり、姉達の謡ふ歌に聲を合せたり、水上に跳ねる魚に歡聲を上げたりして行つたのです】

「その頃まで殆んど海を知らなかつた」(一一〇頁二行)と言つてゐる海の珍しい少年が、始めて海に乗り出したはちきれさうな歡びが躍如として描かれてゐる。水に手を浸すのも、姉達の聲に合せて謡ふのも、跳ねる魚に歡聲を上げるのも、すべてこれ全く少年らしい振舞であり、生徒等は自らの經驗を顧みて共鳴する所であらう。「ギツチラギツチラ」といふ音象徴も、「一挺の船に揺られて」といふ叙述も、楽しみに満ち溢れた仲やかなこの場の情景には誠にふさはしい表現であつた。

【決して地圖で見るやうな小さいものではありません】 作者が讀者にいつてきかせてゐる言葉である。地圖で見ればお池のやうに思はれるほど小さいが、實際は中々さうではありませんよといふ心である。一見平凡ではあるが、よく地圖ばかりで學んでゐる少年の生活に即した巧妙な形容である。

【中學生であつた私】 原文には「中學四年生だつた私」とあるが、生徒の年齢を考慮して「四年」を削除した。

【前途洋々】ゼントヤウヤウ 行末が廣く涯ないこと。

「前途」は(一)行く先。前程。(二)ゆく末。將來。こゝは(二)の意。

「洋々」は(一)水の満ち溢れて盛んな様。(二)廣大にして涯ない様。(三)美しく盛んな様。こゝは(二)の意。

【雲か山かの思でした】 茫々として際涯のない大海のやうに思はれました。「雲か山か」は頼山陽の有名な詩「泊天草洋」の冒頭の一句を引用したものである。詩は「雲耶山耶吳耶越水天髣髴青一髮 萬里泊舟天草洋 煙橫蓬窓日漸沒 瞥見大魚波間跳 大白船當明似月」である。一篇を略解すれば「茫々として果なき海を眺めれば雲か山か吳か越か、空とも水とも見分かぬあたり遠く微かに一髮の青き水平線が見えるばかりである。この渺々たる天草洋に舟を泊すると、晚烟は篷窓(船の窓)にたなびき日は漸く没せんとしてゐる。この雄大な光景の中に立つて海面を眺めてゐると、時に大魚の波間に跳上るのがちらりと見え、仰げば宵の明星は月のやうに明るく船を輝してゐる」といふのである。本課はこの「雲耶山耶」を引用して、詩全篇に歌はれた大海の茫々はてしない意味を含ませたのである。

【その頃中學生だつた私の、人生に對する思が前途洋々としてゐた如く、その時前方に展けてゐた海の景色も、實際雲

か山かの思でした」

現在中學生として大臣・大將を想望する前途洋々たる生徒たちである。作者のこの時の感興には容易に共鳴し得るのであるから、それに基いて雲か山かの際涯なき風景を腦裡に描かしめると共に、これに對する驚歎の情を作者に同じうせしめたい。

【望見】 バウケン 遠くから望み見ること。

【白石島】 シライシジマ 岡山縣小田郡神島外村に屬する。遠望すると岩石嶮々として、皓々と白く見えるので此の名があると言ふ。また北から神島・高島・白石島・北木島・粟島と連なり、瀬戸内海を東西に兩分する地點に位置し、潮の満干の際、相迫・相引の様が見られる所として古來有名である。

【南洋パラオ】 パラオ群島のこと。我が委任統治下にある南洋諸島(カロリン・マリヤナ・マーシャル・パラオ群島)中主群島で、本諸島の西南端に位し、面積は委任統治領の三分の二を占めてゐる。すべて火山岩と隆起珊瑚礁で、最大の島をバベルタオブ島と云ひ、その南コロール島には南洋廳があつて、全諸島の統治に當つてをり、群島中南端のアンガウル島は太平洋上屈指の燐礦産地である。上欄「バベルタオブ島と呼ぶ」の頭註は、編纂匆忙の際の誤記であるから宜しく訂正せられたい。

【南洋】 太平洋中赤道に沿ふ海洋。地理學上その範圍については各國共に一定しないが、我が國では通常我が委任統治に屬する前記諸群島を裏南洋、フィリッピン・スマトラ・ボルネオ等のマライ群島を表南洋といひ、併せて南洋と總稱する。

【その時望見した白石島は、今頃考へると南洋パラオのやうに遠く遙かなものでありました】

「南洋パラオのやうに」は實に警拔な、効果的な譬喩であつた。獵奇的な夢幻的な感で思ひ浮べられるパラオの島は、空想的な少年の心を誘つて、海上の風景を一層遠く遙かなものに思はしめるのである。

【船大工】 フナダイク 船をつくる大工。船匠。船工。

【探検】 タンケン 探りしらべる。

探險(危險を冒して探ること)との相違に注意し、併せて儉・檢・險・嶮・檢等の類字に注意する。

【何時頃に著いたのでせうか、私は著くと直ぐその島の探検に出發しました】

新奇な場所に着く否や、珍しがりやの少年にはもうちつとしてはゐられないのである。時間など一切おかまひなしに、何がな見つけに飛び出し行く。生徒達も一緒についてゆきたいやうな興味をそゝられるであらう。殊に「探検に」といふ言葉は子供らしい大袈裟なおもしろい言葉

である。大人なら「散歩に」など言ふ所であらう。

【章魚壺】 タコツボ たこを捕へるのに用ひる素焼の壺。高さ四〇釐口徑五釐、胴まはり二〇釐位。桐の木の浮木をつけて海に沈め、たこがその中に潜入した頃引上げて捕へる。芭蕉「たこつぼやはかなき夢を夏の月」

「章魚」は蛸・蛸・鯨なども書く。頭足類に屬する軟體動物。體は頭・胴・脚の三部よりなる。胴は楕圓形囊狀で紫褐色又は灰色を呈する。八本の脚が口邊より放出し、各脚には二列の吸盤があり、脚の基部中央に口があり、幾丁質の上下顎がある。近海の岩礁の間に住み、體色を變じ、或は擬體して身を護り、且敵に遇へば内臓中の黒汁囊から墨汁を出して所在を眩ます。海底の小動物蟹・蝦等を捕食する。種類が多く、我が國沿岸に産するものは「いひだこ」「みづだこ」等である。

【牡蠣殻】 カキガラ 牡蠣の貝殻。

「牡蠣」は辨鰓類に屬する貝。介殼は不整で長卵圓形をなし、左殼を以て海中の岩石等に附着する。内面は眞珠質又は陶器質。六月頃産卵し、その生長は一・二年間が最も旺盛である。肉は白色で滋養に富み美味で、廣島地方の産が特に有名である。

【生ひ立つ】 オヒタツ 成長する。次第に育つ。

【それではその壺の中を幾つか覗き込んで見たりしました】

「章魚が海から上つて来て、その中へ入りこむやうに考へた」のも海を知らない少年らしい想像であるが、これはまた如何にも少年らしい行動である。好奇的な心で一つ一つ壺を覗いて歩く少年の姿が眼に見えるやうである。

【中には雨水でせうか、水が溜つてゐて晴れた空を映してゐました】

覗きこむ壺の中の溜水の底に、青空がひつそりと澄んでゐる。これはまた變つた海の景物であつた。章魚を求めて覗きこむ少年を失望させはしたかも知れないが、併し此の一種俳味を帯びた閑寂な風景は、少年の心にも忘れ難い印象を残したのであらう。今から二十幾年前「一一八頁(二行)」の記憶が今尙はつきりと思ひ浮べられたのもその爲である。

【戸も障子も開けつ放しで、家の中は風呂場から押入の中まで見えるやうな有様でした】

遠い別世界のやうな海濱の村の様子である。門を構へたり、屏をめぐらしたり、何かと人目を防がうとする我々の周圍に較べて、これは餘りにも開けつ放しではないか。「有様でした」は唯單なる過去の叙述ではなく、その中に少年の驚きが籠つてゐはしないかと思はれる。

【夕顔】 ユフガホ 胡蘆科の一年生蔓草。全株に粗毛を有し、葉は掌狀淺裂、卷鬚を有する。夏の夜五淺裂した白

色の花を開き、花後細長い果實を生ずる。四・五種類あつて、或は干瓢に製し、また果肉を除いて容器を作つたりする。夕に花を開いて朝に萎むので此の名がある。

【朝顔】 アサガホ 一四・雜草九〇頁既出。

【漁】 レフ すなどり。いさり。漁撈のこと。「漁」の音はもと「ギョ」で「レフ」の音はない。これを「レフ」と読むのは、禽獸をおひ捕へるを獵「レフ」と言ふにより、この音を借りて漁に當てたものである。

【私がじろじろ家の方を見て歩いて行つても——】

「探検」と言ふ言葉が具象的に生かされた少年の仕草である。「じろじろ」と言ふ副詞がこの場合如何にもよく効してゐる。

【薦】 コモ 粗く織つたむしろ。もとは藁を材料としたが今は藁を用ひる。

【朽ちる】 クちる。(一)腐る。腐り損ずる。(二)おとろへる。すたれる。(三)世に知られず終る。ここは(一)の意。

【季節になれば】 「漁業の季節になれば」の意。例へば初夏の鯉漁、冬季の鮎漁等の如きである。

【漁業】 ギョゲフ 營利の目的で水産動物を採取し、又はこれを養殖する營業。故に興味娛樂のための釣や投網は漁業に入らない。

【突端】 トツタン 出張つた端。でつばな。

【洞窟】 ドウクツ ぼらあな。

【荒涼】 クワウリヤウ 荒れはてても凄いこと。荒れはてても寂しいこと。蘇軾詩「荒涼廢圃秋、寂歷幽花晚」

【展開】 テンカイ (一)のびひろくこと。(二)のべひろくこと。ここは(二)の意。

【ところで、その村を過ぎて間もなく道は……今までは全く異つた荒涼たる景色を前に展開しました】

「道の處々に(一九頁一〇行)」「そんな道を(二二〇頁一一行)」「道の左右に(二二二頁一一行)」のやうに作者は常に道を主として移動して行く景色の變化を印象的に展開して來たのであるが、ここに至つて「道は……荒涼たる景色を展開しました」と擬人化して、眼前に展開した景色に對する感動の高まりを示してゐる。文の山に近づいたと言ふ豫感を讀者にいだかしめるであらう。

【外洋】 グワイヤウ 廣々と展開した大洋。内海に對する語。

【季節々々】 キセツ々々 波浪の高い季節毎に。例へば夏の「土用波」の季節、初秋の暴風雨の季節などをさす。

【峭立】 セウリツ 險しくそびえ立つこと。

【入竇】 ジンクワン 人の住んでゐるところ。世の中。「竇」は界・天地などの意。

【そこで浪はその間をさしたり引いたり、ぶつつかつたり、跳ね上つたり、岩を越して瀧のやうに流れ落ちたりしてゐて入竇を離れ、自然が全く自由に遊び戯れてゐる姿でした】
寄せ返す浪の自由奔放な姿態が細かく生々描きだされてゐる。全く入竇を離れたといふ感であり、自然が自由に遊び戯れてゐる姿」とはいみじくも言ひ得た譬喩であるが、ここまで景色を生動せしめた作者の苦心に注意の拂はるべき所であり、よく讀みくだいてその實象を再現せしめて味はせなければならぬ。

【鷗】 カモメ 遊禽類に屬する。形は鳩に似て稍大きく、頭と背とは青灰色、腹は白く、脚は黄綠色。飛翔力が強く又よく水中に突入して、その鉤状をなす嘴端を以て魚類を捕食する。湖・海・河川に棲み、簡單な巢を地上に營んで産卵する。

【水際】 ミギハ

【新體詩】 シンタイシ 明治初期に西洋詩歌の形式をとり入れて新に創造された新詩形。

新體詩の名稱は、明治十五年外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎氏共著の「新體詩抄」にはじまり、以來長く繼承されて、時に「韻文」とも稱されたが、とにかく明治三・四十年頃まで此の名は通用した。その形式も初は我が國古來の長歌體に新形式を加へたも

ので、七五調四句一節といつたやうな、唯表面だけの西詩模倣に過ぎない幼稚なものであつたが、山田美妙齋・國木田獨歩・武島羽衣・中西梅花等多くの新聞詩人の手によつて改良彫琢が加へられ、その全盛期の三十年代に入り、土井晩翠・島崎藤村等が現れて、新しい若々しい情感をうたひ、形式・内容ともに完成に近づき、ついで蒲原有明・薄田泣菫が出て詩の獨立を確めた。かくて新體詩の名稱も不當なものとなり、その名はいつか廢れて今は單に詩といふやうになつた。

【民友社】 ミンイウシヤ 明治二十年徳富蘇峰が創立した出版書肆の名。はじめ雜誌「國民の友」を刊行し、ついで二十三年「國民新聞」を發行した。當時これに據つてゐた蘇峰はじめ弟蘆花・内田魯庵・山路愛山等を「民友社派」と稱し、文壇に一勢力を占めてゐた。

【バイロン】 (George Gordon Byron) イギリスの詩人。一七八八年ロンドンに生れた。幼にして父を失ひ母カザリン・ゴードンに養はれ、その有情多感にして大膽奔放な性格をそのまゝうけつぎ、而も眉目秀麗でありながら、生來の跛から來る辛辣な反抗心は性格の一部を成し、後の作品にまで影響したといはれてゐる。十一歳大伯父の歿後、その爵位と財産を繼承してバイロン卿となつた。一八〇五年ケムブリッジのトリニティ大學に入り、放縱

な生活を送りながら文學研究、特に詩作に没頭した。一八〇九年大學卒業後、大陸漫遊の途に上り、ポルトガル・スペイン・ギリシャ等を遍歴する事三年、有名な「チャイルド・ハロルド」の第一・二巻を携へて歸國し、一躍して文壇・社交界の寵兒となつた。併し彼の激情的な不羈奔放な性格は保守的な英國人の擯斥をかひ、彼は遂に一八一五年永久にイギリスを去り、以後ドイツ・スイス・イタリー等に過した。その間「チャイルド・ハロルド」の第三・四篇を完成し、また「マゼツパ」「ドン・ジュアン」「ケイン」等の名作を発表し、母國イギリスで容れられなかつた彼も、大陸では賞讃をもつて迎へられ、ドイツのゲーテの如きは英國の生んだシエクスピヤに次ぐ大詩人なりと激賞した。而るに三十歳を過ぎて詩作と名聲とに飽きた彼は、持前の反抗的浪漫的な自由奔放の性格に驅られ、自由の名のもとになされるあらゆる運動に同情し、時恰もギリシャの獨立運動の起るや、ミソロンギに赴いてこれに参加し、司令官としてレバント攻撃に出發せんとするに先立ち、一八二四年四月永逝した。

【ギリシャの獨立戰爭】 十九世紀の初頭ギリシャがトルコの統治から脱して獨立せんために起した戰爭。
「ギリシャ」は前十二世紀頃南下したヘラス民族（インドヨーロッパ人種中の一）の建設した國で、はじめ小國

家的に發達した各都市が分裂抗争を事としてゐた。前五世紀頃に至り、アテネがこれを統一し、且後世ヨーロッパ文化の源泉をなした燦然たるギリシャ文化黄金時代を建設したが、ついでスパルタの爲に壓倒され、スパルタもやがて衰微して、以來内紛を事として疲弊し、或はアレクサンダー大王の爲に蹂躪され、或はローマに併合される等、その國はゲルマン・スラブ等の異民族の争闘場裡に委せられ、統治者も次々に代つたが、十五世紀に至つてトルコ領に移つた。

而るに十八世紀頃から統治國トルコも漸衰の運命をたどるに至り、時恰もフランスに勃發した彼の大革命はギリシャ民族をも刺戟し、終に十九世紀初頭ギリシャはトルコの統治を脱せんとして獨立戰爭を起した。初め難戦を續けた獨立軍も、バイロンを初め天下諸名士の來援する者などがあり、而もロシア・フランス・イギリス三國の援助によつて一八二九年終に獨立を宣言し、パウアリヤ王ルイ一世の王子オットーを迎へて帝位につかせた。而るにオットーは間もなく民心を失ひ、デンマークのジョージ公を以てこれに代へ、英國からイオニヤ諸島を譲り受けて、名實共に獨立國家たるの形態を備へた。

【英國を立つてミソロンギに向ふ途中ドウヴァ海峽で歌つたと言ふのです】

民友社版のバイロン傳には、右のやうに書かれてあるので、年少時代にこれを讀んだ筆者はその記憶のまゝに書いた由である。但し、事實と相違してゐることは、坪田氏も承知してゐる由の親書を得た。即ち事實は次の通りである。

當時スイスのゼノアに住んでゐたバイロンは、獨立軍參加を決意すると直にイタリーのレダホーン港に急行した。此處で彼はゲーテに激勸讚美の詩を送られて非常に喜び勇躍して出發したが、途中暴風雨のためにミソロンギの沖合セロフアニア島のアゴストリ港に避難するの止むなきに至つた。併し此處では亡命中のギリシャ獨立軍の將士には救世主の如く仰がれ、且折しも寄港してゐた母國イギリス軍艦の海員からは篤い歓迎をうけたりして、彼は嘗てなかつた幸福を味つた。ここに止まること數日にして彼はミソロンギに渡り、ミソロンギでは革命軍の大歓迎をうけ、或は軍資金の調達に骨折し、また時に互に軋轢してゐた革命軍將領の間を斡旋するなど、八方活躍奔走し、レバント攻撃の司令官に任ぜられ、その出發に先だつて歿したことは既述の通である。

以上事實に照すと、彼はミソロンギ出發前英國に立奇つてをらす、従つてドウヴァ海峽をも渡つては居らなからし、事實この詩も亦チャイルド・ハロルド第一卷（詩の

解釋欄参照）の中のものなのである。併し此の事實を教へることは指導を混亂に陥れる虞もあるし、殊に本課の場合はこのまゝの方が少年の感情には適切であらうと思はれるから、敢て詮索するにも及ぶまいと思ふ。

【故郷の岸よささらば 消ゆ青藍の水の上
夜風はむせび浪ほえて 叫ぶは荒き海かもめ】

チャイルド・ハロルド第一卷の中にある詩。
チャイルド・ハロルドが懐しい母や妹と別れ、また家・館を捨てて故國を去つて行く時に歌つた詩で、一聯八行、十聯よりなり、本課にはその第一聯前半が翻譯採録されたものである。その一節の原文を次に掲げる。

Adieu, adieu I my native shore
Fades o'er the waters blue
The night-winds sigh the breakers roar,
And shrieks the wild sea-mew. (以上本課に譯出)
You sun that set upon the sea
We follow in his blight;
Farewell awhile to him and thee,
My native land Good-Night.
[Sachichiraba] さあ。それなら。ここは adieu の譯で、
Sachichiraba は別れん、即ちさやうならの意。

【青藍】 セイラン 藍色。

【むせぶ】 (一) 喉につかへふさがる。むせる。(二) むせび泣くこと。(三) 動物の聲・風水の音などのむせびなきするやうに聞えること。ここは(三)の意。

【ほえる】 「吼える」と書く。(一) 犬や猛獣などがなく。(二) 聲高になく。(三) 聲高にいふ。怒鳴ること。ここは(一)の意で波の音の形容。

【荒き海かもめ】 野生の鷗。「荒き」は wild の譯で、鳥獸に冠して「野生の」「人馴れない」の意となる形容詞。

一篇の意は「故郷の岸邊よさやうなら。お前の懐しい姿はかう呼びかけてゐる間にも青い海の彼方にうすれて行く。海にはいつか夜風がむせび泣く如く吹きだし、浪は猛獸の吼えるが如く鳴りどよめいて、荒々しい海鷗が高く叫んで我が心を悲しませる」といふのである。別離の悲しみを風の音に、浪のひびきに、あるひは海鷗の叫に托して歌ひ上げ、切々として胸に迫るものが感じられる。

【感慨】 カンガイ (一) 物事に感じなげくこと。(二) 深く身にしみて感ずること。ここは(二)の意。

【私自身がバイロンのやうな氣さ、しました。いや大きくなつたら必ずミソロンギへ行きたいと考へたりしたのです】

「バイロンのやうな氣さへした」空想も「大きくなつたらミソロンギへ行きたいと考へた」希望も「人生に對す

る思が前途洋々としてゐた」多感な少年らしい自由奔放なものである。生徒もこの少年にまけない空想家であるのだから、この少年の空想への共鳴をさそふ事は困難な事ではない。然し少年の空想もつまり「自然が全く自由遊び戯れてゐる姿」に恍然と眺め入る心境にひろげられたものである。故に生徒の共鳴を促す爲には、こゝでもう一度海の景色への味到がなされねばならないであらう。

【満々】 マンマン 満ち溢れる様。

【狼狽へた】 ウロタへた あわてまどつた。「狼狽」は音、ラ

ウバイで、西陽雜誌に「或言、狼狽是兩物、狼前足絶短、每行常駕於狼腿上。狼失、狼則不能動。故世言事乖者稱、狼狽」とあり、「うろたへあわてる」の意。

【必死】 ヒツシ (一) 必ず死ぬこと。(二) しにものぐるひ。決死。(三) 全力をつくしてなすこと。ここは(二)の意。

【智慧】 チエ 智慧とも書く。(一) 物事の理をさとり、物事の是非善惡を辨別する心の作用。(二) 物事を思慮し、計畫し處理すること。ここは(二)の意。

【必死の智慧をしほり】 子供らしい稍々誇張的なこの言ひ方は「どんなに狼狽へたこととせう」と言ふ少年の狼狽の大きさを前提にして、

その驚から狼狽へ、そして決心へと移つて行く少年の心理と顔色とを髣髴せしめるものがある。

【迎る】 タドル 音テン。(一) 本來ゆるゆる歩むこと。

(二) 國語では道を探りながら行くこと。(三) 轉じてそれからそれへと思索する意。ここは言ふまでもなく(二)の意。

【併し私に見れば、姉や従姉に心配させるといふことも、何か勇ましい働のやうで、さも平氣らしく岩の上の話をせずにはゐられませんでした】

少年はみな多少英雄主義的で強がりである。大人に氣を揉ませて痛快がつたり、恐怖や狼狽をかくして小さな英雄を氣取つたり、こんな經驗の一度二度は生徒の誰もが

2 文の構成

第一節 初—一八頁一行 片島の位置と作者訪遊當時の島の様子。

第二節 一—一八頁二行—一九頁五行 笠岡から片島に渡る途中の海上における歡喜と、雲か山かの思がした海上の景色。

第三節 一一九頁六行—一二五頁八行 島へ着くと直ぐ探検に出發した作者の觀察した景色・空想・事件。

1 海沿ひの小道を家のある方へと行く途中澤山の章魚壺を覗いて行くこと。(一一九頁六行—一二〇頁一〇行)

2 作者の觀察した村の様子。(一二〇頁一〇行—一二三頁四行)

3 村を過ぎて荒涼たる外洋の方に出て、人寰を離れた海の景色を眺めたこと。(一二三頁五行—一二三頁四行)

- 4 水際の岩壁に立つてバイロンの詩を思ひ浮べて無限の感慨に耽ること。(一二三頁五行—一二四頁六行)
 - 5 感慨に耽つてゐる間に潮が満ちて来て、傳つて来た岸がかくれてしまつた時の作者の狼狽と、作者が智慧を絞つて難を逃れ、家に歸つて心配する姉達にさも平氣らしく話した事。(一二四頁七行—一二五頁八行)
- 第四節 一二五頁九行—終 泌々とした回想的な氣持で文を結ぶ。

3 文意

中學生の頭片島に遊んだ當時を追想的に描いた文である。原文に「中學四年生」とあるが海を知らなかつたといふ事實の爲にであらうが、丁度初學年生徒の生活にふさはしいものとなり、而もそれがすべて遠い記憶として臚に霞んで、夢物語のやうな淡々しい情感を湛へてゐるところは矢張この年齢の生徒に最も近い心理である。従つてその生活も感情も空想も生徒にはそのまゝ自分自身のものとして共感共鳴し得るやうな懐しい文章である。

4 鑑賞批評

二十幾年前の記憶をたどりながら筆を進めてゐる作者は、不思議なほど身も心も遠い少年の目に立ちかへり、全く少年になりきつてゐる。回顧してゐる成人の作者の姿は隠れて、そこにはたゞ舟中嬉々として喜び、或は海沿ひの小道に章魚壺を覗いて歩き、また岩壁の上に想像の翼を擴げてゐる少年の姿だけがありありと浮び出てゐる。少年時代の切實な追慕が作者をして自らこの境地に至らしめたものであらうが、これは讀者に限りなく懐しい思をさせるのである。而も豊かな情趣を湛へたその淡々たる文章は、遠い記憶の中に臚に薄れたこの回顧を、更に夢幻的な光でぼかし、夢物語を聞くやうな幻想的な感を與へてゐる。夢を追ひ、幻に憧れて、果しなくその空想を天翔けらせる少年達の心には、これはまた堪らなく懐しい世界であらう。全篇に溢れる此の少年的な情緒は、必ずや少年達の共鳴をよび、歡び迎へられる所のものであり、また同時に高雅な氣品もそなへてをるし、少年讀物としては好適な文章である。

三 備考

1 指導研究

(一) 全く少年の境地に没入して、作者がその少年時代の生活と心理とを描いた文章であるから、生徒達にとつてはそれがそのまゝ自分の生活として、また感情・空想として直接的に理解し得るであらう。従つて本課は比較的取扱上の苦心を要せずして効果を擧げ得る教材であると思ふ。唯安易に流れることを警戒して、表現の妙趣等にまで思を及ぼさしめるやうにし、表面的な讀過に終らず、深い共鳴共感を起さしめるやう注意が拂はねばならない。

(二) バイロンの詩を思ひ浮べて少年らしい空想希望を馳せてゐる部分は、原文にある「中學四年生」らしい所を示してゐるので、稍直接約理解に訴へただけでは不充分であらう。殊に此處は本課の山とも言ふべき部分であるから、その前提ともなる人寰を離れた自然の風景の趣味も徹底を期すべきであり、バイロンの詩の解説などにも相當の苦心が拂はねばならない。

2 参考

(一) 挿繪 片島を中心に瀬戸内海の一部を掲げた。作者は笠岡を南にたどつて片島の北東岸に上陸したので、その途中神島・高島を越えて、澄々たる白石島を遠くのぞんだのである。島に着いた作者は東に島を廻つて東端の鼻を過ぎ、神島に面する海岸に出た。本課に外洋とあるのはそこから眺めた海を指したのである。

(二) 挿繪 章魚壺

日本寫眞年鑑(朝日新聞社發行)から轉載した。金森遵氏撮影にかゝるもので、砂山を背景にして、滑稽な恰好をした章魚壺のおかれた有様は、俳味を帯びた靜閑な海の一風景である。

一九 金華山

長塚節

一 解題

1. 作者

長塚節 ナガツカカカシ 明治十二年四月、茨城縣結城郡岡田村國生こくしょうに生れた。生來虛弱のため水戸中學校を中途退學し、爾來家に在つて病氣靜養の傍、和歌に親しみ、殊に正岡子規の「歌よみに興ふる書」に刺戟され、三十三年二十二の時、終に子規の門に入り、俳句・和歌・寫生文を學んだ。子規歿後、伊藤左千夫・岡麓等と雜誌「馬醉木」を創刊し、和歌・歌論・寫生文等を發表、更に雜誌「アララギ」發行の後はこれに據り、又寫生文の手法をもつて小説を作つた。彼は家に在つては農事に勤み、竹林を栽培し、郷邑の青年の啓發に盡した。傑作「土」はここから生れたものである。また旅行を好み、農事の餘暇には各地を巡遊し、その足跡は東北から遠く西海にまで及んだ。彼の和歌はその旅行から生れたものが多い。四十四年十一月喉頭結核と診斷され、東京・京都・福岡と専門醫を訪ねて治療につとめたが、大正四年二月九州帝國大學附屬病院に歿した。享年三十七。

節の歌は蒼古な萬葉調の手堅い寫生に一貫され、歌調森嚴にしていやしくもせず、清澄繊細なものであつた。殊に晩年は東洋古美術に感鳴する所があり、それは自ら作歌にも影響して、歌の上に「氣品」「冴」といふやうな境地を唱導した。晩年の歌集「鍼の如く」はこれを具體化したものである。又小説・寫生文に於ても繊細な描寫に終始し、正直に丹念に飽まで現實に即して、對象の核心に徹する態度であつた。

著作には歌集に「長塚節歌集」歌論に「萬葉集卷十四」「東歌餘談」「萬葉口舌」「寫生の歌に就いて」「枯桑漫筆」短篇小説に「開業醫」「おふさ」「教師」「隣室の客」等、長篇小説に「土」寫生文に「佐渡が島」「鉛筆日鈔」「彌彦山」「才丸行き」「須磨明石」等があり、今すべて長塚節全集全六卷に收められてゐる。

2. 出典

長塚節全集第二卷所收「鉛筆日鈔」から採つた。「鉛筆日鈔」は作者が明治三十九年八月から九月にかけて松島・金華山をはじめ、奥羽・北陸地方に四十日の旅をした時の記行文で、四十年三月雜誌「馬酔木」に發表された。本課の文はその中八月三十一日及び九月一日の記事から抄録したものである。

3. 主眼及び採擇の趣旨

謹嚴なる歌人として彫身縷骨の眞剣な苦行によつて到達した觀照の深さと、その繊細的確な靈筆は、人寰を遠く離れた神域金華山の神秘的風光を生動せしめて、至上の藝術境を現出せしめてゐる。

前課「片島」が多感純情の少年時代の回顧録として多分に浪漫的であるに反して、これは寫生派歌人の純粹なる寫生文として、丹念なる寫實に一貫されてゐる。併し共に紀行文であり、殊に同じく島紀行である事も酷似してをり、その自然の風光を描いて藝術化してゐる點、本課も亦前課と共に美的情操を陶冶し、心情を高雅ならしめむべき文藝的教材であるが、本課に於ては更に金華山の神秘的風光に接せしめる事によつて、國土愛を深からしむべき國民的教材として採擇した。

二 解釋

1. 語釋

【金華山】 キンクワサン 宮城縣牡鹿郡に屬し、半島の東

南端を隔たる一籽弱の太平洋上に横たはる島山で、全島圓錐形をなし、周圍十二籽餘、海拔四四五米。全山殆ん

ど黒雲母花崗岩から成り、その方狀節理に沿つて發達した懸崖には、太平洋の怒濤が狂亂して壯觀を極め、また全島神域として銃聲を聞かぬ此の山には、猿・鹿等が群がり遊んで別天地の觀を呈してゐる。山頂には大海祇神社、島の西部には縣社黄金山神社がある。(挿圖及び挿繪参照)

金華山なる名は天平二十一年始めて陸奥國から買した金の産地であるといふ傳説と、大伴家持の「すめろぎの御代さかえむとあづまなるみちのく山にくがね花さく」の歌と附合して、後に名づけられたもので、延喜年間の記録には黄金山の名があり、更に遡つては陸奥山と呼ばれてゐた。

【道者】ダウシヤ (一)信仰のために聖地・靈場を巡拜する者。巡禮。(二)佛門に入つて得道した人。出家。(三)道教を奉ずる人。(四)世すてびと。ここは(一)の意。

原文の本課の文に入る少し前に、作者が「山雉の渡」で道者達と同船したことが記してある(参考欄参照)

【鹽梅】アンバイ (一)食品に加へて調味する鹽と梅酢。(二)轉じて料理の味かげん。(三)物事を程よく處理すること。(四)物事のぐあひ。ほどあひ。かげん。(五)身體のぐあひ。ここは(四)の意。

【船ちや我折つたやあ】船では閉口したわい。

【我折る】ガヲる。「我を折る」の意。閉口する。弱る。仙毫・山形地方では今も此の語を用ひてゐる。

【やあ】感動を表はす助詞。

原文に道者達が船で暈ですつかり青くなつたことが記してある(参考欄参照)

【駢けあがつた】「駢」は「ハセル」である。「駢」は「カケル」である。文字の異同に注意していただきたい。

【絲薄】イトスキ「すゝき」の一種で、葉・莖共細く、穂は赤紫色をなすもの。

【薄】禾本科・薄屬の多年生草本。我が國到る處の山野に叢生し、高さ一・二—二七米。葉は剛硬で線形をなし、縁邊は極めて粗糲。莖頭に穂を抽出し數日花を開く。花は房狀圓錐花序で、小穂は披針形。尾花と言ひ、秋の七草の一到に數へられてゐる。

【鹿】シカ 廣義には偶蹄目、鹿科に屬する反芻哺乳類であるが、狹義には鹿科鹿屬の本邦内地産のもので、「にほんじか」「えぞじか」の二種がある。金華山に在るものは「えぞじか」がある。「にほんじか」は奈良・宮島等に見えるもので西日本に分布し、「えぞじか」は體軀も角も、「にほんじか」より大きく、本州中部以北に棲息する。

【絲薄の中から大きな角が動いて、鹿が五六匹あらはれた】

「大きな角が動いて」は凡庸ならぬ表現である。此の一語で鹿の出現の描寫が躍動的な感じを持つてゐる。尙原文には上の「青い芝は地にひつついたやうになつてゐて」につゞく「絲薄が連なつてゐる。道者が口々に、鹿、鹿と呼んだら、思はぬ絲薄の中から」の部分省略した。教授者は一應心得ておかれたい。

【土産】ミヤゲ (一)旅先で買ひ求めなどして持歸るその地の名産。(二)人の家を訪問する時持參する贈物。ここは(二)の意で、作者が「鮎川の港」で買つて來た煎餅のこと(参考欄参照)

【ついと】(一)不意に動作する様。つと。づつと。(二)速く通り過ぎる様。ここは(一)の意。

【ついと逃げる】は「軽く飛び退いて」(次頁一行)「目の前をひらりと飛ぶ」(二八頁四行)などと共に輕快優美な鹿の動作を巧に把えた寫生である。

【一行】イツカウ (一)一度行くこと。(二)一諸にゆくこと。連立つた人々。(三)一ならび。(四)書面一通。ここは(二)の意。

【旅装】リヨサウ 旅のよそほひ。旅の身仕度。

【桐油】トウユ (一)油桐の實から搾り取つた油。ペンキ・ニス・桐油紙等の製造に用ひられる。(二)桐油紙の略。桐油をひいた紙(今は専ら荏の油を用ゐる)(三)桐油合

羽の略。桐油紙でつくつた合羽。ここは(三)の意。

合羽はポルトガル語 Capa の轉で、雨天の外出に用ひる外套の一權。

【煎餅】センベイ

【けるつと】物に感ぜず何氣ない體であるさま。けるり。

【鹿は軽く飛び退いてけるつと立つてゐる】

【鹿は絲薄の中に、そこにもここにもけるつととして立つてゐる】

銃音を知らぬ鹿の心憎いまでに無心な姿が「けるつと」といふ言葉に如何にもよく生かされて、ここに既に別天地の平和境を窺はせるものがある。

【道者はこんなことをして騒いで、船の中に居た時とは別人のやうである】

旅は大人をも子供心にするものである。「船ちや我折つたやあ」と勢よく駢けあがると、もうすつかり船の中の事は忘れて、稚氣満々として無邪氣に興じ騒いでゐる。解放された氣安い旅心が、道者達の姿にありありと現はれてゐる。

【斑點】ハンテン 散らばつてゐる點。まだら。ぶち。ここは鹿の茶褐色の背にある白い斑點、即ち「鹿子斑」のこと。

【奈良の鹿】奈良春日神社の神鹿として、奈良公園一帶に

牧飼してゐる鹿。既述の如くこれは「にほんじか」である。

前をひらりと飛ぶものがあつた。驚いて見ると鹿である。手を出したら、鹿は指のさきへ鼻づらをこすりつけた。

【追風】 オヒカゼ (一)後から吹いて来る風。(二)船を吹きおくる風。おひて。順風。(三)着物の動くのによつて起る風。ここは(二)の意。

面の音を深更まで聞いてゐるのも、慣れぬ床に寝つかれぬ旅情である。無駄のない寫生でこれを盡したものと云へる。深夜則に立つて鹿をみるに至つては、全く人實を絶した別天地であると共に、鹿と知つて手を差出す作者の心の冴えには驚くべきものが感じられよう。

【木立】 コダチ たちき。林。

【社務所】 シヤムシヨ 神社の事務を取扱ふ所。これは黄金山神社の社務所であらう。この社務所では参拜者に宿泊の便を圖つてゐる。

【庭木】 ニハキ 庭園に植えてある樹木。原木に「木立が青い芝の間に鹽梅されて庭園の如く見える」(参考欄参照)とあるに基づいて「庭木のやうに見えた」とある。

【社務所から出た一行十人ばかり】 勿論作者は「十人ばかり」の中に加つてゐるのである。従つて前夜泊つたのは此の社務所だつたこともここに至つて明になつた。その靈境の氣分を夜中にひらりと飛ぶ鹿で現してゐる所など、顧みて感銘を新にするものがある。

【深更】 シンカウ 夜ふけ。深夜。更は古く支那で一夜を五つに區分した稱。「初更」は戌の刻で五つ(午後八時)。「二更」は亥の刻で四つ(午後十時)。「三更」は子の刻で九つ(夜半十二時)。「四更」は丑の刻で八つ(午前二時)。「五更」は寅の刻で七つ(午前四時)。

【白衣】 ビヤクエ (一)白色の衣服。(二)白小袖に指貫・袴などを穿ただけで、直衣・素襖・直垂・肩衣等の表衣を着ないこと。後世にはただ白小袖だけを用ひるにもいふ。(三)武士が刀をささないこと。丸腰。(四)法師が墨染の衣を脱いで下着の白衣だけであること。轉じて禮にそむくこと。(五)僧侶に對して俗人のこと。ここは

【廁】 カハヤ 厠とも書く。便所。雪隠。もと河上に突出して設けたもので、河屋の意といひ、又は家の外側に作るべきもので、側屋の意ともいふ。

【白衣】 ビヤクエ (一)白色の衣服。(二)白小袖に指貫・袴などを穿ただけで、直衣・素襖・直垂・肩衣等の表衣を着ないこと。後世にはただ白小袖だけを用ひるにもいふ。(三)武士が刀をささないこと。丸腰。(四)法師が墨染の衣を脱いで下着の白衣だけであること。轉じて禮にそむくこと。(五)僧侶に對して俗人のこと。ここは

【ひらり】 (一)軽くひるがへるさま。(二)敏捷に身をかはすさま。ここは(一)の意。

【怒鳴る】 ドナる (一)大聲を發する。荒々しく呼ばはる。(二)聲高く叱る。ここは(一)の意。

【鼻づら】 鼻面の意。鼻先・鼻端。

【縦】 モミ 松科に屬する常緑喬木。樹皮は暗灰色で不規則に剥げ、葉は線形で密に互生する。初夏の頃、雌雄花を同株に開き、圓柱形緑褐色の毬果を結ぶ。材は建築材、船材・經木材・製紙原料となる。本州・四國・九州の山地に自生する。

(一)の意。

【先達】 センダツ (一)自分より先に道に達したものの先輩。(二)佛教で、勤行に年を重ねて呪法に通じ、峯入の時などに同行の先導となる修験者をいふ。(三)修験者。行者。(四)案内者。ここは(二)より轉じた(四)の意。

下顎部には食物を納める袋がある。性狡猾で巧みに模倣し、よく木に上る。本州・四國・九州に分布し、南は屋久島に及び、北は津輕海峽を限界とし、深山密林に群居する。

【峻し】 ケンシ 普通「険し」と書く。「峻」は「險」に通ずる。

【喬木】 ケウボク 灌木に對して高く直立する樹木を言ふ。枝は灌木と異つて根際から出ることがない。葉は闊葉又は針葉で、落葉するものと常緑のものがある。松・杉・樅などこの類に屬する。

【ひやひや】 (一)ひえびえするさま。(二)不安に思ひあやぶむこと。ここは(一)の意。

【枝移り】 エダウツリ 枝から枝へうつる動作。

【はらはら】 (一)雫・涙などの滴るさま。(二)氣づかひあやぶむさま。ここは(一)の意。

【ほのか】 (一)はつきりと見えわかぬさま。かすか。(二)ほんのり。うつすり。(三)わづか。ここは(一)の意。

【曉の霧がひやひやと梢を渡つて、雨がはらはらとかゝる】

【猿はゆさゆさと枝を揺るがしながら、こちらを見おろしてゐる。赤い顔がほのかに見える】

【老樹】 ラウジュ 年を経た樹木。老木。

【前の鹿の無心さに比べて、猿はまた如何にも人間くさい姿である。ゆさゆと枝をゆるがす】は猿が人間に對し

【鬱然】 ウツゼン (一)草木のこんもりと茂つたさま。(二)物事のさかんな様。ここは(一)の意。

【猿】 サル 本邦内地産の猿は、猴類の一種で、「にほんざる」ましら」とも言ふ。體長一米位、全身軟い長毛に蔽はれ、全體暗褐色で黄斑がある。尾は短く、顔面と臀部とは赤く、手足は黒くて自在に把握し得る五指趾を有し、

【猿】 サル 本邦内地産の猿は、猴類の一種で、「にほんざる」ましら」とも言ふ。體長一米位、全身軟い長毛に蔽はれ、全體暗褐色で黄斑がある。尾は短く、顔面と臀部とは赤く、手足は黒くて自在に把握し得る五指趾を有し、

【前の鹿の無心さに比べて、猿はまた如何にも人間くさい姿である。ゆさゆと枝をゆるがす】は猿が人間に對し

【猿】 サル 本邦内地産の猿は、猴類の一種で、「にほんざる」ましら」とも言ふ。體長一米位、全身軟い長毛に蔽はれ、全體暗褐色で黄斑がある。尾は短く、顔面と臀部とは赤く、手足は黒くて自在に把握し得る五指趾を有し、

【前の鹿の無心さに比べて、猿はまた如何にも人間くさい姿である。ゆさゆと枝をゆるがす】は猿が人間に對し

ての一種の示威運動である。「赤い顔がほのかに見える」はその猿の全貌を「赤い顔」に集中したやうな巧な寫生で、「からかつて見たいやうな氣もした」といひ、「何處で見ても馴輕なものである」といふ言葉と、心理的な繋がりを持つてゐる。

【オンツアマ】 オンツアマと發音する。東北地方の方言で、「おちさん」の意。同地方では、朝は特に「去る」の音を忌んで、猿を「山のオンツアマ」と呼ぶ風習がある。

【一向】 イツカウ (一)ひたすらに。ひとむきに。(二)全く。すべて。少しも。(三)いつそのこと。むしろ。ここは(二)の意。

【一行のもの】は皆樹の下へ集つて、口々にオンツアマ、オンツアマと怒鳴つて、手を叩いたり、樹をゆすぶる眞似をしたりして騒いだけれど、彼等是一向平氣で枝をゆさゆさと揺がしてゐる】

作者も自ら「余は猿の樹にゐるのを見たのはこれが初めてである」と言つてゐるが、誰もみな喬木に枝移りする猿が珍しかつたのであらう。解放された旅人だちが珍しいものを見つけて興じ騒ぐ様子が眼に見えるやうである。しかも銃聲を聞かぬ此處の猿は一向平氣である。全く別世界といふ感ではないか。

【馴輕】 ヘウキン 氣輕・明朗で滑稽なこと。おどけ。

【此の前に来た時は、猿が丁度栗を揺り落した所へ通り掛つたので、みんな拾つてしまつたら、枝から葉をかけられたといふのであつた】

如何にも旅の道中に語りだされさうな話である。つまりない此の挿話が、實は旅人同志すぐに馴染みあふ和やかな氣分を醸しだしてゐる事に注意したい。

【山嶺の小さな社】 大海祇神社であらう。

【山嶺】 サンテン 山の頂。

【芝生】 シバフ 芝の生えた地。芝原。

【鳥】 カラス 鴉とも書く。燕雀目・鴉科・からす屬の鳥類。燕雀類中最も大形な種類を含む。我が國內地にゐるものは「はしぶとがらす」及び「はしほそがらす」で一般にはこの兩者、特に「はしぶとがらす」を「からす」と呼んでゐる。その全身は青緑光澤を有する黒色で、嘴は強大、その根基に剛い羽毛があつて鼻孔を蔽ふ。脚は強大で歩行に適する。鳴管がなく、唯叫聲を發する。「はしほそがらす」は前者に較べて體も稍小形で、その嘴の著しく細いのが特色である。

【とある】 「或」に同じ。

【引返す】 ヒキカへす。(一)くりかへす。反復する。(二)反對にする。ひつくりかへす。(三)とりもどす。ここは(二)の意。

ろす】

外洋を見はらす山嶺の情景が生動してゐる。吹きあげて「吹きおろす」は開けた山嶺を吹き行く霧を印象的に描いたものであり、「蓬々」といふ漢語もこの光景に實によく効いてゐる。

【あれあれ】 「あれ／＼」は感投詞とも見得るが、こゝは指示代名詞「あれ」を重ねたものと見たい。——と一人が指して」とある故に。

【あれあれと一人か指してゐる方を見ると、其の時はピオウと鳴いた聲ばかりで鹿は見えなかつた。ピオウと又啼いた時は聲が遙かに遠くなつて、三聲啼いた時はやつと聞きとれる程であつた】

「ピオウ」といふ啼聲で、非常な快速で遠ざかり行く眼に見えない鹿の動作を、讀者の眼前に髣髴としてあらはし、而もよく人寰を離れた山の悠遠な感をだしてゐる。

【赤松】 アカマツ 松柏科・松屬の常綠喬木。樹皮や芽は赤褐色。雌雄一家で、雄穂は長楕圓形・黄色、雌穂は卵形・紫色、花候は五月頃で翌秋卵狀長楕圓形の毬果を結ぶ。材は建築用・炭薪用・西洋紙の材料となる。「雌松」ともいふ。

【断面】 ダンメン きりくちの面。截面。

【問屋】 トンヤ(トヒヤ) (一)卸賣をする商賣、即ち製造

【おりた鳥は嘴をあげたり首を曲げたりして握飯を欲しうにしてゐる。……握飯を包んだ紙を投げてやつたら、嘴で引返し引返しして其の紙の中の飯粒を食ふのである】

鳥の振舞が實によく描かれてゐる。細かく簡明にして而も盡きない味がある。そして此の馴れきつた鳥の如實の表現は、「別天地のやうに思はれた」(次頁三行)といふ作者の感想をそのまま自然に讀者の心に滲みこませる。作者の觀察の鋭さと筆の確かさに注意したい。

【人寰】 ジンクワン 人の住んでゐる所。世の中。「寰」は場所・天地・天下などの意(前課・一二四頁四行既出)【雲霧にぬれて】 ウンムにぬれて 「人寰を離れた感じ」には動かし難い表現である。歌人らしい用語の確かさに注意させたい。

【別天地】 ベツテンチ 此の世以外の世の中。別世界。【さらふ】 攫ふと書く。(一)かきのける。はらひすてる。(二)横から奪ふ。奪ひ去る。ここは(二)の意。

【外洋】 グワイヤウ 内海・入海等に對して大洋に向つた海の稱。(前課・一二二頁・八行既出)

【蓬々】 ホウホウ (一)風の吹き起る様。(二)さかんな様。(三)落ちつかぬ様。(四)そそけみだれるさま。ここは(一)の意。

【外洋の霧は山陰の梢を吹きあげて、蓬々として更に吹きお

元から買ひ集めて小賣商人に賣る店。(二)旅客又は荷送人と運送人との間に立つて、運送の事を取次ぐ店。こ

【小徑】 コミチ 小路・小道とも書く。徑は「小路」の意。
【斷崖】 ダンガイ きりたつてゐるがけ。きりぎし(一七・新月・一四頁既出)

【北へ走る】 勿論道の遙かにつゞいてゐる意であるが、「走る」は次の「ばらばらになつて」共に、道の細さ・峻しさを暗示してゐる。

【鬱蒼】 ウツサウ 鬱蒼とも書く。よく重ねて鬱々蒼々(鬱々蒼々)と用ひる。(二)樹木の青々としげる様。(二)氣の盛んなる様。こは(一)の意。

【急峻】 キフシユン けはしい様。
【山の脚】 ヤマのアシ 山のすそ。山麓。
【恰も】 アタカも そつくり。ちようど。まるで。
【奔馬】 ホンバ 走る馬。

【ばつたり】 (一)物の落ち、倒れ又は突當る様。又その音。(二)門戸又はもの蓋を閉ぢる様。又その音。(三)事の俄に止つたさま。こは(三)の意。

【くひ止める】 せきとめる。抑へとめる。
【中斷】 チユウダン (一)中途から切れること。まんなか

から切れること。(二)とだえること。(三)中途から斷絶して、これまで経過した効力を失はしめること。こは(二)の意。

【左に仰いで見ると、鬱蒼たる山の巔は頭に掩ひかぶさつたやうで、其の急峻な山の脚は、恰も物陰から大手を開いて現れた人が、奔馬をばつたりくひ止めたやうに、此の小徑で中斷されてゐる】

急峻な地形の描寫のため拂はれた作者の苦心の窺はれる所である。「奔馬をばつたりくひ止めたやうに」と言ふ形容は、小徑に迫る懸崖のすさまじさを髣髴させる。「ばつたり」といふ副詞が實によく効いてゐる所など、一語をも忽にしなかつたといふ作者の態度を窺はしめるものがある。よく讀みくだいて、實象を把握させると共に、作者の苦心の存する所に思ひ及ぼさせるべきである。

【狼狽】 ラウバイ あわてること。うろたへること。前課(二二四頁一〇行)には「狼狽へた」と讀ましてゐる。

【絲のやうな脚で跳ねるのが、ふはふはとした綿の上でも跳ねるかのやうに、如何にも輕げである。驚いて逃げる時にピオウと細い聲で鳴き捨てるのである】

輕快機敏な而も優美極まる鹿の姿態である。作者の鹿に對する深い興味は、その靈妙な筆によつて、鹿の動作から鳴聲まで、すつかり藝術品化してしまつてゐる。鹿の

脚は細いものだが、「絲のやうな」といふ譬喩は實にこれをうまくあらはしてゐる。鳴き捨てる」の一語は、聲がまだ耳底に餘韻をとどめてゐる中に、もうその姿が遠く彼方に跳び去つてゐる趣を生々と示してゐる。

【大箱の岬】 オホハコノミサキ 大箱崎・大函崎とも書く。斷崖三面に削立して、高さ一〇米、廣さ約三〇方米。全島到る處の斷崖絶壁の壯觀の中にも、特にその著しい勝地として知られてゐる。位置その他は挿圖を参照されたい。

【截斷】 セツタン 断ちきること。
【急な山の脚が海へ踏みこむ前に、青芝の小山を拵へて、其の小山の頂近くから截斷して海へ捨ててしまつた時に、恐しい懸崖が出来た。これが大箱の岬である】

これも大箱の岬の懸崖を描寫しようとした作者の苦心である。「山の脚」と言ふ擬人法を踏まへて、以下「踏みこむ」拵へて「截斷して」捨ててしまつた」といふ風に、一貫して擬人的描法で押しきつてゐる。これが情景を生動せしめてゐる。これが大箱の岬である」と最後に指定した手法も印象を鮮やかなものにした。

【四つに這つて】 ヨつにハつて 腹を地につけ、兩手兩足で身を支へて這つて。

【さらさらと】 (一)物の軽く觸れあふ音。(二)物事のはか

【さらさらと】 (一)物の軽く觸れあふ音。(二)物事のはか

どりすゝむさま。(三)しめりけや油氣のないこと。(四)いやみのないさま。こは(一)の意。

【纒かに】 ワツかに (一)すこしばかり。(二)かつがつ。やつと。こは(二)の意。

【際涯】 サイガイ (一)きし。きは。(二)はて。かぎり。こは(二)の意。

【一朝】 イツテウ (一)ひと朝。ある朝。(二)一旦。一度。(三)豫期しない時。(四)朝廷全體の人。こは(二)の意。

【水平線】 スキヘイセン (一)水平面が天空と交る線。(二)水平に平行する直線。(三)普通以上と以下との限界。こは(一)の意。

【煽り立てて】 盛んにあふつて。
【煽る】 アふる (一)吹き動かす。ひるがへす。(二)風をおくつて火勢を盛んにする。(三)鐙をんで馬を急がせる。(四)おだてる。けしかける。(五)酒を勢こんで飲む。こは(一)の意。

【立てる】 タてる この「立てる」は他の動詞と熟語となつて、事を盛んにする意をなす。末行「振りたてて」の「たてて」も同意。

【激浪】 ゲキラウ 荒波。大波。
【吼えたけび】 ホえたけび 猛獸の吼えるやうな凄じい音

をたてる。
「吼える」は(一)犬や猛獸などがなく。(前課一二四頁二行既出)
「たけぶ」は「哮ぶ」「詰ぶ」など書く。猛くさけぶ。恐
しいさまに吼える。

【しぶき】(一)しぶくこと(風が頻に強く吹くこと)。(二)し
ぶかれて飛び散る水気。飛沫。ここは(二)の意。
【とばしり】「迷」と書く。(一)とばしる水。しぶき。飛
沫。(二)傍にゐて禍にかゝること。そばづる。まきぞへ。
ここは(一)の意。

【氷雨】ヒサメ 氷雨とも書く。あられ・雹をいふ。
【牡鹿】ヲジカ 「牡」は動物の「をす」(一二・親子の馬・七
七頁既出)

【余は、一朝暴風が此の平靜な海を吹き亂して、雲と相接し

2 文の構成

第一節 初一二八頁二行 金華山に着くや、まづ絲薄の中に無心な鹿がつて、道者達が大喜びであつたこと。

第二節 一二八頁三行―同頁六行 雨の降りやまぬ深更厠に立つて、ひらりと飛ぶ鹿を見たこと。

第三節 一二八頁七行―一三〇頁九行 翌朝金華山に登る途中番木に枝移りする猿を見たこと。

第四節 一三〇頁一〇行―一三二頁九行 山嶺ですつかり人馴れた鳥を見て、一層別天地の感を深くしたこと。

第五節 一三二頁一〇行―一三三頁七行 山陰を外洋に向つて下る途中鹿の啼聲を聞くこと。

第六節 一三三頁八行―一三五頁六行 外洋に面する海岸の急峻な風景と、そこにゐる鹿の輕快優美な動作。

第七節 一三五頁七行―終 大箱の岬の懸涯の物凄さと、その絶壁上に暴風の光景を想像すること。

3 文意

黄金山神社を経て山頂をきはめ、外洋に面する大箱崎までの金華山遊記の一節である(挿圖参照)

作者は骨惜しみせず一步一步自分の足で歩いたのであるが、その態度は自ら文の上に表れて、丹念な手堅い寫生となり、別世界金華山の全貌を餘すところなく描き盡してゐる。

4 鑑賞批評

作者自ら「別世界」と呼ぶ、原始そのまゝとも言ふべき自然の姿がなつかしく生々と描き出されてゐる。そこに生きそこに動くあらゆるものが、そのありのままの相において美化され、藝術品化されて、時に神秘的な感じをさへ起させるものがある。また謹嚴なこの作者の丹念さと手確さとは、文の質を緊密にし、その表現を無上の確さに引き上げて、時に彫刻的完成さをもつて懸涯絶壁を描きだしてゐる。併しそれは意識的に美化され理想化された自然の姿ではなく、全く透徹した觀照と洗練された表現によつて到達せられた境地であつて、寫生道の極致を暗示するものがある。誠にその觀照の透徹と洗練された筆致とは感歎するの他はない。

三 備 考

1 指導研究

(一) 寫生文は四「比叡の鳥」一六「富士登山」等に既に取扱つたものであり、殊に「富士登山」とは極めて類似した

てゐる水平線の先の先から煽り立つて来る激浪が、此の大箱の懸崖に吼えたけび、しぶきのとばしりが此の青芝へ米雨の如く打ちかゝる時に、牡鹿が角を振りたてて此の岬に突立つ所を想像して見た」
大箱の岬の嶮険な地形に對して、海洋のあまりに平靜な風景は、かへつて作者の脳裡に此の光景を想像させたのであらう。それ程この岬は嶮険突兀する男性的な地形であつた事が思はれる。併しそれにしても何といふ確かな想像的描寫であらう。狂瀾怒濤の風景の點景として、角を振りたてる牡鹿を突立たせた周到な用意や、煽り立てて「吼えたけび」「氷雨の如く打ちかゝる」「角を振りたてて」「突立つ」など、用語に對する細かな注意の拂はれてゐる點などに氣附かせたい。

教材である。前者が靈山富士であれば、これは靈地金華山であり、而も作者に歌人と俳人との相違はあるが、要するに子規を始祖とする寫生文の流を繼承した人である。従つて指導の方針もそれ等に準じて決定せらるべきであらうと思ふから、一應指導に先だつてそれ等の場合を反省せられたい。こゝではなるべく重復をさけたいと思ふ。

(一) 作者の旅行好であつた事は略歴に述べた所であるが、その旅を作者は骨惜しみせず一步一步自分の足で歩いた人である。それは歌人としての謹嚴さに現れてゐると共に、本課の文においてもよく窺ふ事が出来る。それが丹念な筆となり、一語を忽にしない手堅い表現となつて現れたのである。かうした點に注意しつゝ、作者が如何によく觀、如何に注意深く描いて、自然の眞の相を寫しだしたかを検討吟味してゆくやうにしたい。

(二) 既に述べたやうに作者の讚歎すべき觀照の透徹と洗練された筆致とは、自然をそのままに藝術品化して、寫生道の極致を暗示してゐるのであるが、併しその表現に、文字通り骨をけづる苦心の拂はれてゐる箇所に出遇ふことは、生徒によい教訓であらうと思ふ。さうした箇所を把へて、文をつくる事の苦しさ、その苦心の貴さなどをしつかり感得させて、ひいては作文指導とも聯絡をつけたい。

2 参考

(一) 挿圖

語釋の項と参照されれば解るやうに島全體を金華山と呼び、島としての特別の名稱はない。

作者は山雉渡を渡つてその對岸に上陸し、そこから黃金山神社に至つて一泊。翌日山頂大海祇神社を拜して大箱崎に下つたのである。

尙島はアメリカの航路を往來する船舶の目標として知られ、津經海峡から此の島の沖にかけて海霧が多く、東南端にある鮑荒崎の燈臺は霧信號の一種として蒸氣霧笛の設備で名高く、近海は捕鯨を以て有名である。

(二) 挿繪 金華山

鐵道省編纂「鹽山名水」から轉載した。海を背景に、鹿が三三五五心のまゝに草を食みつゝ遊びまはる、別天地金華山の情景を窺ひ得るものである。

(三) 本文の直ぐ前の部分を「鉛筆日鈔」八月三十一日の條から載録する。

鮎川の港からだらと上つて勾配の急な坂をおりる。杉の木の間を出ると茶店がある。茶店の前を歩き過ぎようとすると、女房があとから呼びかけて、お山へ渡るなら草鞋を買つて鹿の土産を持つて行けといつた。此れはお山の砂を草鞋へつけて來ることは昔から禁じてあるので鳥へ渡るものは皆新しい草鞋を穿いて、もどりの船に乗る時にはぬぎ捨てて管だ相である。鹿の土産といふのは小さな煎餅の括つたのである。落へおると船頭小屋には四五人で櫓火を焚いて居る。客が集らねば船は出さないといつて一向に取り合はぬ。小船が一艘動揺しつゝある。雨が降つて來た。突兀たる岸の巖には波がだんだん強く打ちつけて小船が更に動揺する。雨が米粒になつた。幻の如く見えた金華山は復た雲深く隠れて楳だけ短く表はれた。山の楳はなつかしい程近い。桐油を著た道者がぞろぞろと余の後からおりて來た。各自に背中を高くして小荷物を背負つてゐる。一行の饒舌るのを聞いて船頭のうちの老人が一行のものを米澤ぢやないかといつた。米澤の山の中だといつたので言葉でどこのものでも分ると老人は頗る得意である。道者が來ても船はまだ出さうともせぬ。海がだんだん悪くなりさうなので、何故出さないのでといふと、此日の渡しは此れ限りなので金華山から鮎川へ酒買に渡つたものが戻るまで待つてゐるのだといふのである。鮎川に二人で酒を飲んでるのがあつたが、あれなら逆でも今日のうちには歸りさうはないと道者の一人がいつた。遂には船頭も待ちあぐんで一人が南京米の袋をかぶつて出て行つた。所がそれも沙汰がない。屹度あいつも引つ掛つたに違ひない。呑氣なにも程があるといつて道者等が頗りに咳いて居る。幾ら待つてき島の酒買は來ないのでやつとこのことで船が漕ぎ出された。三人が櫓を押して舳の一人が櫓をとる。嶋巖に添うて船が進む。鹿渡しの岬に近づくと波は澎湃として船が思ひ切つて揺れる。岬に打ちつける波は花崗石の如き白い柱を立てる。北方に開けた海上には江の島列島が大小相並んで狭い瀬戸の間から見

える。列島は波の穂に隠れては復あらはれる。桐油を頭からかぶつて余と向き合ひになつた男は目がどろつとしてきつきから下唇が垂れた儘であつたが遂に桐油でぐるつと顔をつくるんで轉がつてしまつた。他の道者も顔が蒼蒼になつて小聲へしがみついた儘反吐を吐いてゐる。老人の押してゐた櫓は櫓ベそが外れた。老人は狼狽して嵌めようとしたが船の動搖が激しいので幾らあせつても嵌らぬ。止める止めるいゝやいゝやと兩肩からうんと力を入れた男が聲にも力が籠つて叱りつけるやうにいつた。老人は極りわるげに船の底に蹲つた。雲が一方からだんだん垂げると三角に握つた握飯のやうな金華山が頭から押へつけるやうに繁えてゐる。中腹の神社から下には鉄で梢を刈り込んだやうな木立が青い芝の間に鹽梅されて庭園の如く見える。常盤木の繁茂した山上には縮打ち弓から飛ぶ綿のやうな雲がちぎれてゐる。

110 ふるさと

石川 啄木

一 解 題

1 作者

石川啄木 イシカハタクボク 本名ははじめ。明治十九年二月(實は前年十月であつて、上記は戸籍面に依つたものである)岩手縣岩手郡玉山村の常光寺に生れた。父は同寺の住職で姉二人の後の長男として一と名づけられた。父が同郡澁民村の寶徳寺の住職となるに伴はれて生後間もなく同村に轉住し、以來彼の少年時代はそこに過された。本課の「ふるさと」は此の澁民村である。夙に神童を以て目され、三十一年岩手縣立盛岡中學校に入學、初め海軍志望であつたが、友人の感化により詩人を志し、三年生の時金田一京助氏を介して與謝野鐵幹主宰の新詩社に加はり、文學・藝術・哲學の書を耽讀涉獵した。三十五年中途退學し上京して詩歌に身を立てんとしたが、翌年病を得て歸郷、病を養ひつゝ詩作に専念し、ふたたび上京し、漸く新進詩人として認められるに至つたが、極度の窮乏と家事上の都合のために、處女詩集「あこがれ」を土産に三十八年再び歸郷、相思の堀越節子と結婚した。盛岡市にあつて雑誌「小天地」を創刊したが失敗して澁民村に歸り、同村小學校代用教員となつた。此の頃一家の窮乏はその極に達し、同窓の役場書記から米を貰つたりして生計をたてる始末であつた。八方生活打開の道を講じて、生活の資を得んとして小説を書きだしたのも此の頃からである。四十年事を起して代用教員も免職となり、村人の指彈をうけて、つひに彼は追はるゝ如く郷里を去つて北海道に渡つた。初め函館において雑誌「紅苜蓿」を主宰したが、四十年函館の火災に遇ひ、後新聞記者として札幌・釧路に轉々した。時恰も中央

文壇に自然主義の勃興するを望見し、小説家たらんと野望抑へ難く、四十一年釧路から上京。友人金田一氏の下宿に身を寄せて創作に没頭した。依然認められない創作上の苦悶と、生活の窮乏のため焦燥失意の日を送りながら、彼の感情は自然詩歌にその疎通口を求め、殊に短歌が急に激増して、歌人として認められるに至つた。四十二年雑誌「スバル」の編輯に参じ、ついで朝日新聞社に就職して一家を東京にまとめ、漸く生活の安定らしきものを得た。併しそれも東の間、母と夫人との不和、夫人の病、愛兒の死、母の病氣と相つぐ不幸に加へて、作者自らも病床に倒れ、この間幸徳事件に刺戟され思想的轉換を來して社會主義の研究にふけつたり、また土岐哀果と雑誌「樹木と果實」の發刊を企てたりしたが、つりのりゆく病氣のために一切は中絶され、四十五年慘憺たる生活苦の中に歿した。享年二十七。生存中出版の著作は詩集「あこがれ」歌集「一握の砂」だけで、第二歌集「悲しき玩具」すらその死後出版された。併し後その作品は集められて啄木全集五卷、啄木大全集五卷等として出版され、又その短歌のみを抄録した石川啄木歌集もある。

2 出典

歌集「一握の砂」から採つた。「一握の砂」は啄木の處女歌集で、四十三年十月上梓された。四十一年六月から四十三年秋までの歌五百五十一首が、我を愛する歌「煙」秋風のころよさに「忘れがたき人々」手套を脱ぐ時」の五章に分ち載せられてゐる。本課は「はたはたと黍の葉鳴れる」秋風のころよさに。解釋の部参照」の歌を除いてはすべて「煙」中の歌である。「煙」の一章は少年時代の懐古の中に湧き上る病の如き思郷を詠じた歌を集めたものである。

〔啄木の歌について〕 啄木の歌は中學二年彼が歌作をはじめてより後十三・四年間に亘つて大約二千首を數へる事が出来るが、啄木調なる名を以て呼ばれる眞に彼の面目を發揮した歌は、彼が是を三行書きにした「一握の砂」以後の極めて少數の歌である。短歌を三行書きにした様式は、彼以前既に土岐哀果のローマ字書きの歌集「NAKIWARAI」に試みられてをり、啄木の三行書きもこれに暗示を得たものらしく、彼がこの様式を始めたのは四十三年以後の事で、處女歌集「一

握の砂」をだすに當つて、彼はそれ以前の作品をもみな三行書に改めてゐるのである。これは既に過去の形式を打破して新なるものを打建てようとする啄木の革新的な態度の現れと見る事が出来、明治歌壇に一種新鮮な香氣を添へるものあつた。併し啄木の歌が明治短歌史上に劃期的の特異な存在として不滅の光輝を放つ所以のものは、單なるその形式のみの問題ではなくて、生活を遊離して風流韻事を事とする高踏的な當時の短歌に慍らず、詩は所謂詩であつてはいけない。人間の感情生活の變化の嚴密なる報告、正直なる日記でなければならぬ。(土岐哀果)とし、これをその短歌の上に具現した所に存するのである。彼は「外からなる苛酷な運命の試練と、内なる自責の念との絶えざる苦悶に、敢てその若い身を曝した修道士」(中西悟堂)としての血の滲む如き生活感情を、そのまゝ赤裸々に歌ひだした。彼にあつては歌を作る爲の生活ではなく、生活が自ら歌に流れ出でたものであつた。かくみ來れば三行書きの新しい形式も、つまり生活の藝術への凝結が自然に要求した様式であつたであらう。彼の歌は詩の價值の上から見て高度のものとは評し難く、その歌境も深く高いものではないかも知れないが、併し従來の所謂「短歌的なる」ものを破壊して、これが新なる分野を開拓した歴史的役割に於いては、永遠に生命を保つべきものであらう。

3 主眼及び採擇の趣旨

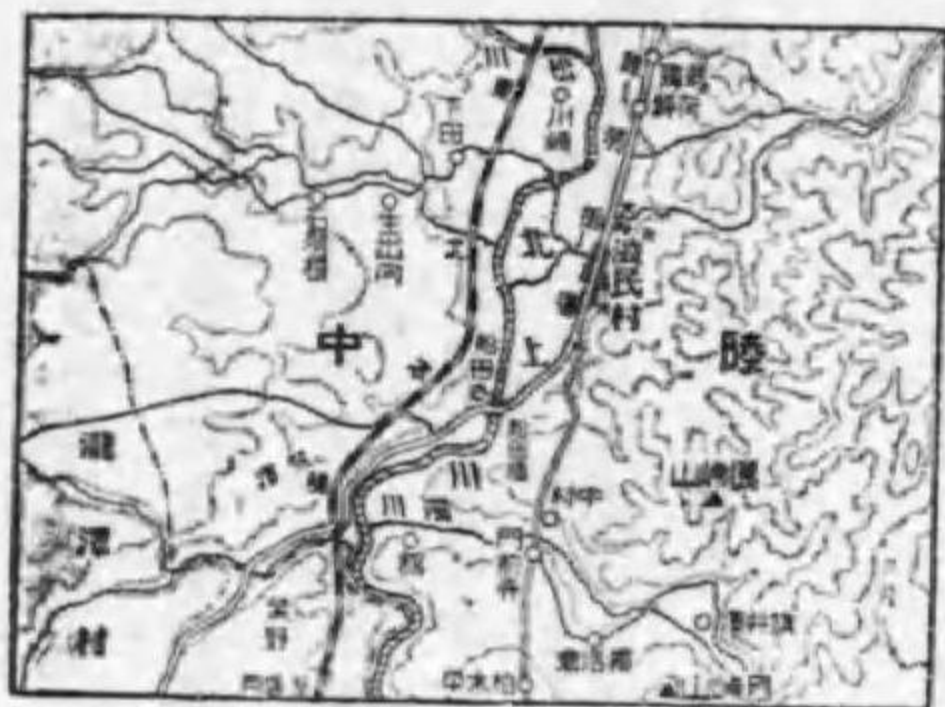
創作上の苦悶と生活上の脅威のため、一度は自殺まで思ひつめた啄木の心に、絶えず一縷の光を投げかけ、寂しい慰を與へたものは幼き頃に憬れる追想のあまさであり、切ない郷愁であつた。本課にはその追想・郷愁を歌つたもののみを採つた。ここには彼の心の矛盾や苦悶が描かれて居るといふよりも、寧ろ過去を懐しむ淡々たる哀感が歌はれてゐるのであるが、これ等の歌はすべて彼の全生活から湧き上つて來る、避け難く抗し難い生命の燃焼であり、三行書きの形式と共に啄木の歌の面目を遺憾なく示してゐるものである。従つてこの逆境失意の底に沈む天才歌人の胸に、茫然として溢れてゐる故郷追慕の情と、切實なる郷愁の情とを味はせ、短歌鑑賞力を養ひ、更に愛郷の情をもそゝるべきは本よりであるが、

本課は特に「歌とは」「詩とは」といふ命題に對する無言の、而も決定的な解答としても十分効果的に取上げられねばならないものである。文藝的教材として特に啓蒙的な意味をも附與してこゝに採擇した。

二 解 釋

【ふるさと】 岩手縣岩手郡澁民村であることは作者の略歴

の條に述べた所であるが、此處に金田一京助氏の説明を左に掲げて啄木の郷愁をそゝつた故郷の山川を偲ぶこととする。参考地圖と併せ讀まれたならばその概略を知り得る事と思ふ。



澁民村附近の圖

病のごとと思郷のこころ湧く日なり目にあをぞらの煙かなしも

【病のごと】 ヤマヒのごと 病の如く。ごとは助動詞「如し」の語幹より轉化した副詞。やうに。如く。應仁紀十

三年「雷の語等聞えしか」源氏・明石「思ひのごと榮えたまはば。」

「前に屹つ巨人の様な殿しい岩手山、後に仰ぐ女神の様な美しい姫ヶ嶽、その間を帯をなげたやうに北上川が流れる青森街道に沿うて、盛岡市から北四里の其の地點に四百戸ばかりの民家の聚落がある。それが君の戀しがる澁民村の北の端、水田の向うに一むら生ひしげる杉木立が、君の嬰兒の春から二十歳までの古巢であつた寶徳寺の森である。森の中の一字は君の書齋から池を隔ててすぐ丘陵つゞき、丘陵の麓にはよく閑古鳥の來て鳴いた古い椎の木が今でもあるのであらう。寺を出でて數歩、山蒼く水白く、寒煙斷霞、舊態依稀としてみちのくの國が展開する。思ひ出の山、思ひ出の川、最後まで君の夢路に通ひ來て、不斷のノスタルヂヤをかけた美しい自然の懷である(啄木研究)」

【思郷】 シキヤウ ふるさとを慕ひ思ふこと。李商隱詩「懷古思郷共白頭」
「煙」の章首に載せられてゐる歌で、以下一章はすべて彼の「病の如き思郷の心」を歌つたものであるから全章の歌の詞書とも見ることが出来る。

ある日ふと切ない思郷の心が油然と胸に溢れて來る。病の如く胸をうづかせる烈しい郷愁である。啄木は懐しい故郷の山川を心に描きながらうつろな眼を青空に向けた。その眼をかすめて寂しく消え行く煙がある。故郷を去つて轉々と流浪した自分の過去を、そしてまた今世に顧みられずはかなく消えゆかんとする自分の現在を暗示するかの如く寂しく消えゆく煙である。彼は泌々とした悲哀に沈んで煙の行方をみつめてゐる。この歌はその哀感を歌つたものである。

「病のごと」と字餘りの一句に打出された唐突さと強さは、全く此の歌に不動の表現であり「思郷」といふ音讀も當時の歌壇では新しい技巧であつた事と思はれるが、その音感は一切ない一すぢの思郷の心を表すには代へ難いものであつた。勃然として湧き上る切ない思郷の心が「湧く日なり」の斷定的な一句に極まり、やがて作者を壓倒し、下句の弱々しい調にくづをれてゆくところ、波頭の崩れる如き自らなる韻律である。煙かなしも」の感傷的な主觀が、單なる浅い概念としてでなく、作者の全生活を通しての眞實なる悲しみとして胸を打つものは、全體をつらぬく哀切な韻律の波に沿うて誦者の心に滲みこむからであらう。

尙これと同じ時の作と思はれる歌に次の一首があるが併せ詠むと啄木の悲しみが一層切實に感受し得られるであらう。
青空に消えゆく煙さびしくも消えゆく煙われにし似るか

晴れし空仰げばいつも口笛を吹きたくなりて吹きて遊び

早熟多感な啄木が、殊に文學志望に傾いてからは學業をば殆んど放擲して、文學・藝術・哲學の書を読み、思索

冥想到耽溺した。或は教室を逃げて城址に寝に行つた彼であり、彼また「不來方のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心」と歌つてゐる。此の歌もやはりその時代への懐しい回顧である。

冥想的な少年啄木はよく空を仰いだ。すると心は空に吸はれ、彼の空想は思ひきり翼をひろげ、無限に遠く天翔るのであつた。啄木はうつとりと空を仰ぎながら口笛を吹きたくなるのである。そして吹きたくなるまゝに好きな口笛を吹いて心行くまで楽しんだのであつた。他の少年達が或は校庭を駆けめぐり、或は野に山に思ひ思ひに馳せまはる時、口笛を吹くことが啄木の少年の日の唯一の楽しい遊びであつた。吹きたくなりて吹きて」と滞りなく流れて行く調には、悩みも煩ひも拘りもなく、心も身もたゞ自然に任せ伸び伸びとした自由さが示されてをる。『遊びき』の過去の形は勿論單なる過去の記述ではなく、口笛を吹いて遊んだ少年の日の自分の姿を心に描いて、それに無限の懷慕をよせてゐる泌々とした詠歎なのである。口笛を唯一の遊びとして楽しむ啄木の姿は、彼が如何に冥想的思索的な多感な少年時代を過したかをよく物語つてゐるものであるが、それにしても啄木は殊に口笛が好きであつたらしく、歌集にはこの歌にならんで次の一首も載せられてゐる。

夜寝ても口笛吹きぬ口笛は十五の我の歌にしありし

ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく

【訛】 ナマリ 標準語に對してこれに合致しない地方的な言語、又はその發音。

【停車場】 テイシヤバ 作者が岩手縣であり、その方面の汽車の着驛は上野驛である。恐らくこの停車場は上野驛

であらう。例へば「カルサンと米」の中の一主人公がカルサンをはいて上野驛に下り立つたやうに、事實上野驛には東北からの旅客が雜沓して、その人込の中にはその地方の訛の交響樂とも言ふべき一種の雰圍氣を醸しだし

てゐるのである。

併し取扱ひに當つては強ひてそれを詮索する必要はなからう。

【人ごみ】 (一) 人のこみあふこと。(二) その場所。ここ

は(一)の意。

【そを】 それを。「そ」は事物代名詞中稱。「ふるさとの訛」を指してゐる。

一首の意は「堪へがたい故郷戀しさである。せめて故郷の訛だけでも聞いてせつない心の慰にしようと、故郷人のこみ合ふ停車場の人込の中にそれを聞きに行く」といふのである。

何といふやるせなさであらう。居ても起つてもをられない切ない望郷の心が實によく滲み出てゐる。殊に故山を離れ、異郷にあつて深い失意の底に沈んでゐた啄木の心境を思ふ時、その切なさやるせなさは特に切々胸をうつものがある。書く小説は一として顧みられない。前途は眞暗である。而も窮迫は容赦なく迫つて来る。その絶望と焦慮との中に浮んで来るものは懐しい少年時代の思ひ出である。故郷の山川である。撮き捲られるやうな思郷の心、それが「ふるさとの訛なつかし」である。「訛なつかし」は唯訛が懐しいと言ふではない。せめて「訛なりともきいて」と言ふせつなさが、その「訛」の中に籠められてゐる事に注意しなければならぬ。それを停車場の人ごみの中に聞きに行くといふのである。停車場の雜沓の片隅にひっそりと立つてゐる衰愁そのものやうな作者の暗い姿が見えるではないか。此の場合「停車場の人ごみの中に」といふ句は動かすことの出来ぬものである。外の人ごみではいけない。故郷から來、故郷にかへる人々でこみ合ふ「停車場の人ごみ」でこそ、國訛がなつかしまれるのである。

わかれをれば妹いとしも赤き緒の下駄など欲しとわめく子なりし

【妹】 イモト 令妹光子のこと。啄木は二姉の後の長男として、光子はまた末子の女兒として、幼い時代には両親の愛を分つて、二人睦しく育つたであらうし、成人後も

光子は常に啄木に荷の重い係累の一人ではあつたが、それだけにかへつて啄木もこの一人の妹に深い愛情を傾けてゐたやうである。

自らの少年の日の回想の中に蘇つて来る幼かりし日の妹の姿に堪へ難いとしさを感じての啄木の詠歎である。「わかれをれば」と歌ひだした字餘りの一句は、やるせない妹戀しさにもつれる心のひゞきであり、これを「妹いとしも」と二句切に歌ひ止めたその強い調は、切ない程の愛著をもつて幼い日の妹のいとしい姿を抱きしめてゐる啄木の姿である。それは「赤き緒の下駄など欲しと」わめく妹の姿であつた。「赤き緒の下駄など」に象徴された幼い愛らしさ、殊に「など」によつて柔げられたいとけなさ、更に「わめく」頑是なさでいぢらしいまでのいとほしい姿となつて眼に映つて来る。「わめく子なりし」の詠歎は、末子として矢張我儘一杯に駄々をこねてゐたらしい妹の姿をありありと浮び上らせ、それが切々たる啄木の愛情を盛り上げて、誠に拔差しならぬ結句である。

このごろは母も時々ふるさとのことを言ひ出づ秋に入れるなり

【母】 女ばかりの子供の中で唯一人の男の子として、その愛を獨占した爲でもあつたであらうが、啄木はこの母に殊に深い思慕を寄せてゐたらしく、歌集中に母を歌つた歌はかなり多く、特に「たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三步あゆまず」の歌はあまねく人の愛誦するところである。併しその子の啄木が終生悶々として恵まれずに終つたのにもまして、此の母の生涯は不幸

悲惨なものであつた。啄木が澁民村の代用教員時代の窮乏のどん底生活にあつて、氣の弱い父が家出したりした慘憺たる生活にも、我が子と共に堪へて来た母である。後北海道に迎へられて、ほつと安堵する間もなく函館の火災にあつて啄木が轉々とする間、次女の婚家に肩身せまい寄食生活を忍ばねばならなかつた。ついで啄木が上京後、朝日新聞の校正係の職にありついで本郷六丁目の

理髪店「喜之床」の二階二間に間借生活を始めるに迎へられた。母も今度こそはと思つたであらうが、間もなく嫁の節子と不和を生じて節子は家出したりするやうな不愉快を嘗めねばならなかつた。而も間もなくといふ孫には死なれ、柱とも杖とも頼む吾が子に病みつかれ、かてて加へて嫁の節子にまで寝つかれて、母は老の身を炊事萬端の事に當つて依然窮迫する生活苦と戦はねばなら

なかつた。間もなく小石川久堅町に居を移したが、その窮乏は加はるばかり、遂に母は疲れた身を病床に横たへてしまつた。そこへまた幼い孫の京子が肺炎になつたり父は再度の家出をしたりする慘憺たる中で、啄木の死に先だつこと一ヶ月、誰も知らない夜の間に息を引きとつてゐた。

此の歌はその「喜之床」二階時代の佗しい生活の中から生れたもののやうである。一首の意は「母までが、もうすつかり故郷の事は諦め切つてゐる氣丈なその母までが、此の頃は時々故郷の事を言ひだされる。自分だけの胸に湧く思郷ではないのだ。何と言ふやるせない寂しさであらう。思へば天地は何時か既に秋になつてゐたのである」と言ふのである。

「このごろは」は作者の驚である。嘗てそんな事のなかつた母が、此の頃はまたどうしたことであらうといふ驚きの表白である。その驚は「母も時々ふるさとのことをいひ出づ」である。前記の略歴から見ると父の弱氣の反對に、母はかなり氣丈な婦人であつたらしく、故郷の事などすつかり諦め切つてゐたのであらう。それが「母も」である。その母までが故郷の事を口にして懐しげに語りだす。常日頃病の如き望郷の念に驅られてゐた啄木は、それに油を注がれて泣きたいやうな悲しさで母の心を、そしてまた故郷の山を思ひ、天地の秋の寂しさを身に感じたのであつた。「秋に入れるなり」の字餘りの結句は、その悲哀にしどろもどろの感情のもつれをそのまま韻に現してゐる。

かにかくに澁民村は戀しかりおもひ出の山おもひ出の川

【かにかくに】(一)とやかくと。あれこれにつけて。(二)ともかく。何はともあれ。理窟はどうあらうと。ここは「戀しかり」「戀しくあり」の約まつた形容動詞・終止形。「理窟はどうでもよい。とにかくただもうひたすらに故郷の澁民村が戀しい。数々のなつかしい少年の思ひ出が眼の前に浮び上つて来るのだ。『おもひ出の山よ』『おもひ出の川よ』と呼びかけたい程澁民村が戀しい」といふのが一首の意である。

故郷とは言ふものの澁民村は啄木にとつては多くの人々のそのやうに甘い楽しい思ひ出のみではなかつた。村人からは指弾される。窮乏のどん底に喘いだ末に一家は四散する。而も追はれる様に逃げだした故郷であつた。寧ろ悲しい・にがい・慘憺たる記憶が彼の脳裡にはまだ眞新しい筈である。併しそれでも啄木には澁民村が戀しいのである。思ひ出の山川が「口笛を吹きたくなくて吹きて遊んだ」少年の日の懐しい思ひ出と共に、まさまじと眼の前に蘇つて来るのだ。理窟もない、過去もない、ただもうひたすらなる望郷の心、それが第一句の「かにかくに」である。「かにかくに」は誠に千鈞の重みを持つた表現と言はざるを得ない。「おもひ出の山」「おもひ出の川」と名詞止の句を並べた強い格調には、せつない望郷の情がはげ口をみつつけて一氣に迸り出たといふ風な趣があつて、思ひ出の山川に手を指しのべ呼びかけてゐる啄木の姿である。

はたはたと黍の葉鳴れるふるさとの軒端なつかし秋風吹けば

【黍】キビ 禾本科の一年生草本(一八・片島・一一七頁末 行既出)

此の一首だけ「秋風のころよさに」の章から採つた。著者自ら『秋風のころよさに』は明治四十一年秋の記念なり

と序の後に記してゐるやうに、友人金田一氏と共に蓋平館別荘に起居してゐた秋の作品を集めたものであるが、矢張秋の自然にゆり揺がされた啄木の清澄な詩心に蘇るやるせない思ひ出の歌が多い。

秋風の音をきいてゐると、はたはたと黍の葉の風になるふるさと家の軒端がたまらなくなつかしいといふ、これも啄木の望郷の歌である。

「はたはた」とは黍の葉の風に鳴る音感を巧みに把へてよく秋風の快よさを歌ひ出してゐる。矢張黍のあの長い厚葉のゆれは「はたはた」でなければならぬ。「軒端なつかし」はまた野趣の溢れてなつかしい表現である。藁屋か何かの古めかしい農家、それは「軒端」でこそ現し得るうらぶれた農家の様である。軒端によつて象徴されるその野趣豊かなふるさとの田園情調が、啄木にはたまらなくなつつかしかつたのちがひない。

同じ三行書きにはしてゐるが、此の歌は啄木の歌としては神經的なまでに細い感情の激しさがなく、寧ろ寫實の正確さを示してゐるやうな比較的素直な歌である。

汽車の窓はるかに北にふるさとの山見え来れば襟を正すも

【ふるさとの山】「ふるさとの」の條で説明した岩手山・姫ヶ嶽などの山を指してゐる。

【北に】汽車で故郷に歸つて来る車窓の「北に」見えて来るのであるから、これは南東京からの歸省の折の感情を歌つたものであらう。啄木が東京からの歸省は、最初が彼の十八歳病の爲に父に伴はれての歸省であり、二回目

汽車は次第に故郷に近づいて行く。抑へ難いなつかしさが除に胸に溢れて来る。昂ぶる心をちつとこらへて眺めゐる。

が二十歳生活の窮迫と家事の都合による心ならぬ歸省である。結局彼の歸郷はいつも彼の生涯のそのやうに病み疲れ、傷ついた心を抱いての歸省であつた。この事はこの歌の鑑賞に多少役立つと思ふので此處に一言しておく。

車窓から遠く北に當つてなつかしい思ひ出の故郷の山が見えて來た。何か度ましい氣持で襟を正さずにはみられないと言ふのである。

「汽車の窓」とぼつんと途切れたやうな表現が、小さな額縁のやうな汽車の窓の前に、長い孤獨の汽車に揺られて來たはかなげな作者の姿を描いてゐる。それをうけた「はるかに北に」と「に」音を重ねて疊みかけたリズムミカルな一句は、急に視野に現れた故郷の山に對しての突如盛上つて來た心の躍動の押へがたさをそのままうちつけに現してゐる。懐しさにわくわくする心の韻である。その感情は更に「山見え來れば」の咏歎的な一句に止揚され、結句の敬虔な氣持にまで高まつて行くのである。襟を正すのは勿論外聞や人前を憚つてではない。唯故郷の山が懐しいのである。有難いのである。この時、この際何といふ純な幼い心であらう。この場合「も」はこの純真な敬虔な氣持には代るものはない。「見えくれば」が説明的に聞えて、その爲に全體の調子が稍低くなつてゐるといふ批評もあるが、寧ろこの「ば」は單なる説明ではなく、可なり強い感動の籠つた咏歎的な「ば」で、「見えくれれば」は矢張動かし難い表現のやうに思はれる。

永く異郷にあつて久方ぶりに見るふるさとの山に對しては、恐らく誰でもが襟を正す敬虔な感情を抱かすには居られないだらう。この歌はその普遍的な感情を把へた着想の點に於て、とかくの批評はあらうとも、とにかく人々の愛着をつなぐ魅力を持つてゐる。

ふるさとに入りて先づ心傷むかな道廣くなり橋もあたらし

【心傷む】 ココロイタむ 悲しく感ずる。熟して「傷心」となる。傷むは(一)苦しむ。悩む。(二)こなふ。や ぶる。(三)うれふ。悲しむ。なげく。ここは(三)の意。

思郷の心は所詮幼い日の記憶の中に描かれる故郷の山川に向つて注がれる。少年の日の思ひ出を止めた山であり、川で

あるからこそ限りなく懐しく、限りなく有難いのである。誰しもがさうではなからうか。啄木も亦その少年の日の懐しい記憶を抱いて歸つて來たのである。汽車の窓に見え來た山に襟を正した程の至純な敬虔な彼であつた。わくわくと躍る心で驛に下り立つて彼の見いだしたものは、然しそのかみの悌の片影をもとめない廣い道であり、架けかへられた新しい橋であつた。彼の幻影は突き崩され、現實のふるさとの前に彼は思郷の心も忘れて呆然と立ちつくしたのではなからうか。やがてうづくやうな悲傷の情が勃然として彼の心に溢れて來た。それが「まづ心傷むかな」である。その激しい悲しみがやがて寂しい悲哀にくづれて行く。「道廣くなり橋も新し」のしみじみとした深い感慨をこめた下の句には、その廣くなつた道を見、橋にみ入啄る木の目に光る涙が感ぜられる思ひがする。此のやうでは古の面影がふるさとの何處に残つてゐるだらう。山も川も人の心までが總べて自分を失望させてしまひはしないだらうか。さうした不安と悲しみを避け得なかつた。それが「まづ」である。實によく効いた一語であつた。

果して彼はまた次の一首のやうな思ひがけぬふるさとの姿にぶつつかつてゐる。

みもしらぬ女教師がそのかみのわが學舎の窓に立てるかな

ふるさとの山に向ひて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな

故郷の山に向つてゐる時、焦慮も、不満も、絶望もすべて溶け去つて、安らかな満足さでその自然に抱かれてゐる思である。何の言ふこともない。たゞ感謝の心に満たされるばかりだ。と言ふのが一首の意である。

穢を知らぬ少年の日の甘い懐しい思ひ出に満ちた故郷の自然は、誰にとつても嬉しい心の安息所である。殊にひどい物質上の窮乏と、世に省みられない精神上の不満のために暗澹たる絶望に傾いて居た啄木にとつては、それは全く言ひのや

うない有難いものであつたに違ひない。その激しい不満を故郷の山に反射させて「言ふことなし」と言ひ、更に「ありがたきかな」といふ和やかな敬虔な感情をしづかに燃してゐる。全身全靈を故郷の自然の中に溶かしこんで、恍惚として靜かに故郷の山に向ふ啄木の姿が髣髴として浮び上つて来る。徒らな感傷ではなく、全生活が集中的に「山」に對する感情の中に盛り上つて來てゐる。この歌が單なる概念や淺薄な主觀から救はれてゐる所以はそこにある。一首をつらぬく靜かな和やかな調は作者の満足感がそのまゝそこに現れた爲であらう。これは「煙」の章の末尾に載せられた歌で、不平・不満・悲しみ・怒を歌ひ來つて、それを今ここに「言ふことなし」「あり難きかな」と言ひ、「病の如き思郷の心」の底に流れるものがつまりは深い感謝と愛着であることを告白して、この一章を結んだものとも言ひ得るのである。

三 備 考

1 指導研究

(一) 啄木の歌が避け難く抗し難い生命の燃焼であり、生活の眞實赤裸々なる叫である事は既述の通りである。従つて彼の歌の鑑賞には常にその背景として彼の生活が考へられなければならない。本課の歌の背景をなすと思はれる彼の生活及びその環境について、それぞれの個所において稍詳しい説明を試みた所以である。教授に當つても適當にこれが説明を案配して、啄木の歌が斷じて遊びでなかつた事に思を潜め、飽まで啄木の歌として生徒の共鳴共感に訴へるやうにしたい。

(二) 此處に當然湧き起る疑問は生徒が從來誦し來つた短歌と啄木の歌との相違することである。「歌とは」と言ふ命題が自然此處で取り擧げられなければならない。掛け詞や、縁語や、或は王朝時代の語彙がないから歌にならないとは言へない。また優美や雅趣がなければ歌にならないとも言へない。偏してはをり、狭くはあらうとも、啄木の歌の如き生活の眞剣なるありのまゝなる叫が歌として許される事は一向差支へないことである。此の點を力説して、短歌に對する從來の

困苦しい觀念から生徒を解放し、彼等をして短歌に對して新しい親しみを持たせるやうに導きたい。

(三) 併し此の場合最も注意さるべき事は、生徒がこれを誤解して、唯單にこれらの歌の表現形式のみ模倣しようとする事である。中學生の歌に「啄木ばり」の歌が如何に多いかは誰もが知る所であらう。空疎な主觀の表白、淺慮な感傷、これらは詩の本質を理解せず、生活と藝術との不即不離の統一を會得しえない所から來るのである。啄木の「人」と「その歌」との不離のつながりについて知らしめ、生活と藝術、又藝術の内容と形式との關係について正しく理解せしめることによつて、この危険を除く事につとめたい。

(四) これ等の歌の鑑賞から自ら導かれることではあるが、生徒自身自らの故郷を顧みる絶好の機會として、新しく各各の故郷を見なほさせたいものである。場合により彼等に課して、各自の故郷に取材して作歌練習を試みさせることなども面白いことと思ふ。

2 參考

(一) 挿繪 石川啄木肖像

明治卅七年五月の撮影であるから、彼の十九歳、漸く詩人として認められ始めた頃の寫眞である。眉目秀麗如何にも天才らしい風格を現してゐる。

(二) 挿繪 故郷の自然と啄木の歌碑

故郷岩手縣岩手郡澁民村の北上川のほとりに嘗ての教へ子であつた村の青年達により、大正十一年(啄木の十週忌)に建てられた。

背景の山は岩手山(二〇四一米)

碑は花崗岩の自然石で碑面には次の歌が刻んである。

二〇 ぶ る さ と

やはらかに柳あをめり北上の岸邊目に見ゆ泣けとごとくに

(三) 中西悟堂氏の「一握の砂」に對する批評を左に掲げる。

「この歌集こそ彼の惨苦のどん底から生れたものであつた。彼を不遇から不遇へ、貧苦から貧苦へと、絶ゆる間もなく彷徨させ、進めば倒し起上れば頭かせ、恰も影の形に添ふ如く彼に附纏うて、一つ一つ彼から青春の美しい夢を引剥いて行つた悪い運命は、又同時に彼から虚榮、回避、誇負、妥協、偷安、粉飾等の一切の砂上樓閣を奪つて彼をして現實を正視する勇敢な、しかし痛ましい人生の闘士たらしめた博大な運命でもあつたのであつた。そして本當に自己に忠實な彼は、それでもまだ足りずに、鋭利な自己解剖を容赦なく自身に加へて行つた。その魂の記録が此の歌集であつた。つまり「一握の砂」け單に一個の文藝的歌作を集めた本に止まらずして、外からの運命の試練と、内なる自責との絶えざる苦闘に、敢て若い身を曝した人生の修道士の、生きた血の報告であつた。この歌集が多くの讀者の胸を抉り涙を誘つたのも故あるかなである。

歌の啄木！ 詩の啄木！ これには最早、何の言葉をも徒費する必要がない。多くの人々が啄木の歌に打たれるやうに、私も亦打たれ、涙ぐみ、そして多くの愛好者の如く私も亦愛好者の一人であると言へば足りる。

萬人の苦しみを苦しんだ啄木、萬人の愛憎した啄木、文學の美衣を放擲して凡そ我が國近代の詩人中最も深く且つ卒直な心を示した啄木は、必然萬人の胸に生きる啄木である。そして彼は最も多くの場合、歌と詩によつて多數の胸にその叫びを書きつけたのであつた。(中略) 彼はたゞ死によつて苦闘確難の一生を償はれたのみであつた。悲しい彼ではあつたが、さりながら多數の胸に、消えぬ言葉を刻みつけた彼の事業は既にそのことによつて、酬ひられてゐるものだとも言へよう。(啄木の詩歌と其の一生)

(四) 湯地孝氏の啄木批評の一節を抄出する。

啄木は詩人であつた。が又別の意味で詩人ではなかつた。彼は詩を生活の全部とする詩人ではなかつた。後年彼は専門的文學者(單に文學を作る人といふだけでなく、文學を作る爲に生活する——生活を生活するといふ意味で——人)を排してゐる。文學は文學者に與へられたものでなく、人間に與へられたものである、と彼は考へてゐる。これは文學の職業化(又は玄人臭)を拒んだもので、此の

意味で彼は詩人ではなかつた。其處に彼の本來の特性が潜んでゐる。短歌を日記と見たのも同様で、彼にとつての短歌は歌人意識なしの短歌であつた。他に爲すべき仕事を持つまでの仕方なしの歌であり(即ち「悲しき玩具」である)又爲すべき仕事を持つても尙棄て去つて了らない歌でもあつた。言はば餘技でない餘技であり、本職でない本職であつた。それは文學全般に互つて適用出来るので、紅葉が「多情多恨」を米の飯と言つた、あれとは反對の意味で米の飯であつた。必要ではなくても缺くべからざるものであつた。此の意味で彼は詩人(即ち生活から自然と生れ落ちて来る詩をもつ人)であつた。

三 我が幼き頃

新井白石

一 解題

1 作者

新井白石 アラキハクセキ 江戸中期の儒者。政治家。本名は君美^{きみ}。初名瑛。字は在中・濟美。通稱傳五郎・傳藏・勘解由など言つた。號は白石、別に紫陽・錦屏山人・天爵堂などの號もある。明暦三年(三二、二七)二月江戸柳原に生れた。父は正濟、上總國久留里(現千葉縣君津郡久留里町)の城主土屋侯の臣であつた。幼時から俊敏頓悟、神童を以て稱せられ、且刻苦勉勵した。(本課はその「幼き頃」の自傳である。)延寶三年(一九歳)父に従つて土屋家を辭して浪居し、貧窮の中に和漢の學を修め、天和二年大老堀田正俊に仕へ、貞享元年木下順庵の門に入つた。博覽強記で、その學和漢洋に亘り、理財・制度・歴史・地理・典故等、學として至らぬ所なく、且詩文に長じ、經世濟民の器を備へて、木門十啓の隨一と稱せられた。元祿四年堀田家を辭し、淺草に書を講じて口を糊すること二年餘。同六年(三十七歳)師順庵の推舉によつて、甲府侯徳川家宣の儒官となり寵遇せられた。寶永六年(五十三歳)家宣が六代將軍となるに及んで、政務に參與し、獻替する所多く、正徳元年從五位下筑後守に叙任せられ、その權勢は一時朝野を壓した。翌二年家宣の薨じた後も、遺命により幼將軍家繼を輔けて畫策改新する所が多かつた。朝鮮使節接待の改正・長崎貿易の制限・貨幣の改鑄等がその主なものである。享保元年吉宗の將軍となるに及んで、意を失して致仕し、以來深川・小石川・千駄ヶ谷を轉々しながら、門扉を閉ちて専ら讀書著述に晩年を送り、享保十年五月、千駄ヶ谷に歿した。享年六十九。

著述の多いことは我が國の學者中稀に見る所で、「東雅」「東音譜」「同文通考」「藩翰譜」「讀史餘論」「古史通」「采覽異言」「西洋紀聞」「折たく柴の記」等百七十餘種に及び、今總べて白石全集六卷に收められてゐる。

2 出典

「折たく柴の記」上卷から採つた。「折たく柴の記」は上・中・下三卷よりなる國文體の自叙傳で、白石致仕の後、深川一色町に僑居中書かれたものである。父母のことから始めて、家宣に眷遇されて幕政に參畫した一代の事歴を述べ、吉宗の將軍となるに及んで致仕する正徳六年五月に筆を止めてゐる。題號は後鳥羽院の御製「思ひいづる折りたく柴の夕煙むせぶもうれしわすれがたみに」因んだものである。新井白石全集第三卷所收。

3 主眼及び採擇の趣旨

天才白石の十三歳の頃に至るまでの自傳である。彼は異常なる天資に恵まれ、且その天稟を刻苦奮勵の努力によつて琢磨助長した人であつた。後日その威朝野を壓した幾多の華々しい行績も、大學者として浩瀚なる著述を後世に残した彼の豊富な學識も、共に此の天才に加ふるに努力を以てした少年期の經歷に、その基礎が打建てられたものと言はねばならぬ。本課の文は彼の少年時代の刻苦勵精の姿と、その努力を裏づける不撓の意思力とを明瞭に物語つて、後日の大成を致した彼の風貌を暗示してゐるものと言へる。直接生徒の反省に訴へて彼等の發奮努力の所縁たらしめんがための國民的教材として採擇したのであるが、併せて、平明暢達な和文體ながら、雄健にして迫力を持つ彼の文章の妙趣をも味はせたい。

二 解釋

1 語釋

【我が幼き頃は】

「幼き頃に」でないことに注意すべきである。「頃に」とすれば時期の指定で上野物語が主となる。ここは少年時

代の物語が主で、上野物語のことを主として語らうといふのでないから「は」にしたのであらう。助詞一つもおろそかにならないことを生徒に知らしめたい。

【上野物語】 ウヘノモノガタリ 當時行はれた假名草紙であらうが今は傳らない。

【草子】 サウシ 草紙又は雙紙とも書く。(一)冊子の音便で、古い巻物に對して綴本のこと。(二)何くれとなく書きつけた草稿・草案などのこと。(三)轉じて假名書の隨筆・日記・物語の類。(四)中古の物語から出て繪を主とした小説。(五)手習草紙の略。こゝは(三)の意。

【寛永寺】 クワンエイジ 東叡山圓頓院寛永寺。東京市下谷區上野公園内にある天台宗關東の總本山。寛永二年二月の建立で、開山は天台僧正である、天台が京都に比叡山延曆寺のあるに擬し、江戸城の鬼門忍岡(上野)に一寺を建立して國家安穩天下泰平と、併せて徳川氏の長久を祈らんことを將軍家光に諮つて創建したものである。山號を東叡山と言ひ、寺號を寛永寺といふは共に比叡山延曆寺に因んだ稱號である。元祿十五年後水尾天皇の第三皇子守澄親王を天台の法嗣に迎へ奉り、徳川氏菩提寺として寺門愈榮え、迦藍整備し、山内三十六坊を數へて壯嚴を極めたが、戊辰の役兵火に罹つて退轉し、今は僅かの堂舎と徳川氏の廟墓竝に諸大名の墳墓を残すのみで

ある。

【事ども】 「ども」は名詞に添つて同類あるを統べて言ふ。接尾語。等の意。

【頃】 やあるべき。頃であらうか。「や」は疑問の助詞。「べし」は助動詞推量連體形、「や」の係に對する連體形終止。

【炬燵】 コタツ 火燵とも書く。床を切つて小さい爐を設け、その上に檜を置き、蒲團をかけて足などを温めるもの。檜に底を張り爐を入れ隨所に移し得るやうにしたものを「置炬燵」といふ。

【足をさして】 足をさし入れて。足をつゝこんで。「さし」はこゝでは突込む・さし通す意。

【求む】 モトむ 欲しいと請ふ。家人にもらひうける。

【透き寫す】 スキウツス 書畫等の上に紙を載せて、上から透かして寫しとること。

【母におはせし人】 母であられた人。お母様。「おはす」は「あり・をり」の敬語。白石の母は餘り素性のよい出ではなかつたらしく、白石自身「折たく柴の記」の中に次のやうに書いてゐる。
「我母におはせし人は、いかなる人の子にておはしけるにやさだかならず。あねいもと二人おはしたりき。我がものごころをわきまへしより折にふれて外祖の御事をとひまゐらせしかど、人の親のわが子につゝむこ

とあるべしやは。しらせ参らすべき事ならねばこそ、

あらはし聞え侍らねし。

【まことの文字】 正しい文字。

【我が父】 新井與次右衛門正濟。慶長六年上野國新居の地に生れた。幼にして父母を失ひ、十三歳の時單身江戸に出で、三十一歳久留里侯土屋利直に仕へて重用せられ、利直が駿府城・大阪城の加番を命ぜられた時には、これに従つてよくその大任を果さしめた。延寶三年利直歿し翌年致仕したが、尙その祿を給せられ、剃髪して淺草報恩寺に庵を結んで住んだ。後主家後嗣の問題に關係して祿をやめられ、且父子共に禁錮せられる厄に遇つた。天保二年白石が堀田侯に仕へることとなつて間もなく歿した。享年八十二。終生身を持つること厳格で、その一端は本課の中にも窺へる所であるが、白石の大成にはこの父の感化が與つて力があつた。

【見せ参らす】 ミセマキラス お見せする。まゐらすは(一)奉る。進上する。(二)轉じて動詞に添へて敬意を表はす。こゝは(二)の意。離れ参らせず(一四四頁二行)戸部に見せ参らす(一四六頁五行)も同じ用法。

【我が父に見せ参らせしに】
作者の得意はともかくとして、我が子の賢さに母は我が事のやうに喜んで父に見せたのであらう。母心が窺はれ

る所である。

【取り傳ふる】 トリツタふる 次から次へうけ傳へる。

【其の寫ししものどもを取り傳ふる事になりたり】
三歳といへば未だ片言の子供である。その幼時すでに「まことの文字」を書き、それを人々が取り傳へて讚歎したのであるから、白石の神童振りたる驚くべきものであつた。その天才にして而も努力したのが偉いのである。そこを生徒に悟らしめるやうに扱つて行きたい。

【上總國に往きしに】 カヅサのクニにユキしに「上總」は今の千葉縣南部。此處は土屋侯の城地久留里を指す。

【屏風】 ビヤウブ 風を屏ぐの義で、室内に立てて物を遮り隔て、或は裝飾とする。

【題す】 タイす (一)表題を記す。(二)題字を書く。(三)題辭を書く。(四)轉じて書く・記すなどの意となる。こゝは(四)の意。

【其の體をなしたるもの】 ソのタイをなしたるもの 文字の恰好・體裁の整つたもの。「體」は字體の「體」。

【其の節】 ソのセツ 幼少の時代。節は(一)季節。(二)轉じて頃・時の意となる。こゝは(二)の意。

【常の戲】 ツネのタハムレ 平常のなぐさみ。

【物書く】モノカク 文字を書く。

天才白石の幼年時代の生活が既に凡庸の兒のそれと異つて、はやくも學者的素質の閃を示してゐたことが窺ひ知られる。

【物讀む師】モノヨむシ ついて學問する先生。物讀むは(一)書物を読むこと。(二)轉じて學問すること。ここは(二)の意。

【友とすべき人】友とするに足る人。「べき」は當然の助動詞、連體形。

【往來物】ワウライモノ 書狀往復の文案を集めた書。往來物は中世に於ては主として、兒女に必要な文字、知識を教へる爲の書として用ひられたが、近世に至つて漢學の流行と共に、これが寺子屋・塾等の教科書として多く行はれた。尺素往來・明衡往來・庭訓往來・十二月往來など名高いものである。「往來」は(一)ゆきき。ゆきかへり。(二)道路。往還。(三)轉じて音信。贈答。ここは(三)の意。

【戸部】コブ 民部省の唐名。ここでは民部少輔土屋利直をさす。

〔土屋利直〕ツチヤトシナホ 通稱平八郎。上總の久留里城主忠直の子。慶長十二年に生れ、十七年父の遺領を継ぎ、元和元年大阪の陣には、命を受けて小田原及び箱根の警衛に當つた。七年には近習となり、從五位下民

部少輔に叙せられた。延寶三年閏四月歿。享年六十九。民部省は太政官八省(中務・式部・治部・民部)の一で、人口の調査・租庸調の受理・課役の免除等民事に關する一切の事を掌つた。官廳は大内裏太政官の南方美福門大路の西にあつた。職員は郷・大輔・權大輔・少輔・權少輔・大丞・小丞・大録・少録・史生・省掌・使部・直丁から成つてゐた。

【家人】ケニン 從者。家來。家の子。

【富田】トミタ 富田小右衛門。出家して覺信といつた。傳は詳でない。

【生國】シヤウゴク 生れた國。郷國。

【聞えしが】キコえしが 言ふことであつたが、この「聞ゆ」は自動詞下二段。偏く人に知られる・廣く傳はるの意。

【太平記の評判】タイヘイヤのヒヤウバン 詳しくは「太平記評判私要理盡極鈔」といふ。五十卷。和田下野守助則入道榮閑の著で、太平記中の兵事を詳論したものである。評論の一例として北條高時が後醍醐天皇を隱岐に遷し奉つたことを論じた一節を掲げる。

かの時は(義時が後鳥羽院を隱岐に遷し奉つた時)天下盡く關東の威武に服して判亂を企てむ恐れなければ何の仔細なし。高時の時代は既に人心關東を離れて、叛者日本國中に踵をつぎて起れる時なれば、隱岐に遷し奉るは、虎を野に放つが如く、敵に糧をかすに等し。

何故に關東、殊にわが根據の地たる鎌倉に行幸をなし奉らざりしか。さらば、敵に擁せらるゝ恐れもなかりしならむ。

【書を傳へて】シヨをツタへて 「傳へて」は、書を他より傳へられてそれを所持すること。

【其のことを講ずるあり】 太平記評判を講釋する人があつた。「その事は」その書物即ち太平記評判を指す。「講ずるあり」は講ずる(人)ありの體言省略。「あり」は過去の物語であるから「ありき」の意に解釋すべきである。以下本文中過去にすべき所を現在形で叙してゐる部分がかかり多いが適當に處理していただきたい。

【講せしめらる】 講釋をおさせになられた。「しめ」は使役の助動詞未然形。「らる」は尊敬の助動詞終止形。

【侍り】 ハベリ (一)貴人の傍にゐる。侍する。さぶらふ。(二)轉じて「在り」「居り」の謙語。ここは(一)の意。

【いたく】 形容詞「甚し」の連用形より轉化した副詞。甚しく。ひどく。

【遂に】 ツヒに 終に・竟にとも書く。(一)とうとう。つまるとうとう。(二)いまだ。今まで絶えて、ここは(二)の意。従つて次の「座を去る」は「中座する」意となる。

【其の義】 ソのギ その意義。「その」は太平記評判を指す。

【奇特】 キトク(キドク) (一)尋常に優れたこと。たぐひなくめづらしいこと。(二)行爲が尋常より勝れて賞すべきこと。殊勝。神妙。(三)ふしぎなしるし。ききめ。ここは(一)の意。

【我が四五歳の時、常に其の座に侍りて聞くに、夜いたく更けぬれど、遂に座を去りし事もなく、講畢りぬれば、其の義を請ひ問ふことなどもありしを、人々「奇特のことなり」と言ひき】

卒直な修飾のない自叙の中に、その座の光景の髣髴たるものがある。大の男の並居る座の片隅に小さな白石がちよこんと座つてゐる。まぢろぎもしない熱心さだ。やがて講義が終るともう歸りかける男などがあつたらう。その時その幼兒が質問をはじめ。なかなか鋭い質問である。「奇特な」とは、一座の人の讚歎である。それにしても四五歳と言へばまだ幼稚園にも行かない幼兒である。これは全く文字通りの神童といふ他はない。奇特のことなり」と人々が感歎したのは理、白石の得意も亦思ふべしである。

【上松】 ウヘマツかアゲマツか不詳。何れにも讀むやうである。上松忠兵衛。駿河今川氏の家人、連歌書道に通じた人である。

【少しは文字などありしが】 少し學問のある人であつた

が。「文字」は學問又は文章の意。學問は書を読むことであり、その書は文字をもつて記されてゐる所から轉化した意味で、繪畫を「丹青」といふ例と同じく、一種の修辭法である。

【七語絶句の詩】 シチゴンゼツクのシ 漢詩の一形式で唐代以後に行はれた近體詩の一。七字を一句として起承轉結の四句よりなり、起承結の三句に韻をふむ。二三、乃木大將一六四頁「皇師百萬征強虜」の詩はこの一例である。五字を一句とするものを「五言絶句」といふ。

【一首】 イツシュ 漢詩・和歌を數へる單位。自由詩などの詩は「一篇」といふ。

【やがて】 頓て・馳てなど書く。(一)すぐさま。直ちに。

(二)とりもなほさず。即ち。(三)おほかた。かれこれ丁度。(四)さうして。それによつて。ここは(一)の意。

【誦をなしければ】 ショウ(又はジュ)をなしければ 暗誦したので。誦は(一)唱へ讀む。ふしをつけて讀む。(二)そらんじよむ。ここは(二)の意。

【三首まで】 原文白石の自註に「三傳市虎人皆従といふ詩と、朝鮮國七歳の兒の大闇の前にて作りしといふ詩と、自休藏主とかいふ僧の江の島にて作りし詩なりき」とある。

【教へられて】 「られ」は受身の助動詞・連用形。前の「教

へて「説き聞かせしに」何れも敬語が無い。それでこの「られ」も受身と解すべきであらう。

【文才】 ブンサイ 今普通に文學的才能、即ち文筆の上の才能を言ふ。ここでは後段の文意より學問的才能、即ち「學者となる素質」位の意と解すべきである。

【如何にも】 イカにも (一)いかにもして。どうしても。是非とも。(二)なるほど。げに。ここは(一)の意。

【學ばしめらるべし】 勉學させなざるがよろしからう。しめ」は使役の助動詞未然形。「らる」は尊敬の助動詞終止形。「べし」はここでは慫慂する意味の助動詞。

【かの人】 「上松といふ人」を指す。

【頑なる昔人たち】 カタクナなるムカシビトたち 頑固な老人達。恐らく白石周囲の近親者たちであらう。「頑」は考へ方が偏し舊式で融通のきかぬこと。頑固。「昔人」は(一)古人。(二)老人。ここは(二)の意。

【利根・氣根・黄金の三こん】 リコン・キコン・ワウゴンの三こん。天賦の才能と、根氣と、資力との三要素。

【利根】 佛語で鈍根に對し、利發な天性・天賦の才能。

【氣根】 (一)佛語、「機根」とも言ひ、衆生の心中にあつて佛の教化によつて發動する能力。(二)轉じて物事を行ふに久しく耐へ得る力。忍耐力。根氣。

【根】 本來植物の根に基いた語で、佛教である作用を生

ずる根本的性質即ち天賦の性質の意。

【黄金】 とは言ふまでもなく金錢・財貨・資力のことである。

「根」と「金」とは全く意味を異にしてゐるが、同音の縁により「コン」の韻脚を踏んで秀句の味を添へたものである

【學匠】 ガクシヤウ (一)學者。ものしり。(二)佛道を修めて師匠たる資格のあるもの。こゝは(一)の意。「匠」はもと工人・職工の意。轉じて一道に秀でたものをいふ。

【利根こそ生れつきたらめ】 利根こそ生れながら持つてゐるであらう。「生れつきたらめ」は「生れつきてあらめの約まつたもの」。

【稚くして】 イトケナくして(又はヲサナクシテ)

【氣根の程も測り難し】 どの程度の根氣があるか豫測し難し。「ほど」は程度の意。

【家富めりとも見えす】 白石の父正濟はすでに微祿であつたし、その致仕後一層困窮したことは前述の通りである。

【黄金の事も心得られず】 資力(學資)が續くかどうかもわからない。「心得」は(一)會得す。さとる。(二)承知する。わかる。(三)用意する。覺悟する。(四)ひきうける。こゝは(二)の意。「られ」は可能の助動詞未然形。「心得られず」はわからない、心もとないなど解す。

【つくしきみ】 慈しみ。寵愛すること。

【戸部の御いづくしきみによりて、常に側を離れ参らせず】

當時白石は土屋侯の小姓を勤めてゐた。何時もお側をお離しにならなかつた程であるから御いづくしきみの深さが知られる。「戸部も人々に語り誇らせ給ひし事なれば」と言ふ父の言葉から推して、白石の利發さが土屋侯の自慢でもあり御氣に召した理由でもあらうが、後に將軍家宣にも寵眷を蒙つてゐる所などから考へて、白石にはかうした徳があつたやうに思はれる。恐らく才氣縱横の彼が、才に誇らぬ極めて謙虚な一面をも持つてゐたのではなからうか。「なぜ御いづくしきみを受けたか」一應生徒に考へさせたい所である。

【學に入れ】 ガクに入れ 學校に入れる。

【叶ふべからず】 カナふべからず 爲し得ない。不可能である。「叶ふ」は(一)善く合ふ。あてはまる。相當する。

(二)匹敵する。相及ぶ。(三)望みに合ふ。思ふやうになる。(四)爲し得る。力が及ぶ。ここは(四)の意。「べから」は可能の助動詞(出来る)。「叶はず」でも爲し得ない、不可能であるの意になるが、「べからず」を添へて不可能の氣持を強く表したものと見るべきである。

【いとけなきより】 幼い時から。頑是ない時から。「いとけなき」の下に時・折の體言省略。

【せめて】 しかたなければ。止むを得ねば。ならうことな

【書き習はしめたくこそ侍れ】書き習はせたくございませす。「しめ」は使役の助動詞・連用形。「たく」は希望の助動詞連用形。「侍り」はこゝでは「在り」「居り」の謙語で「ございませす」位に譯す。王朝時代に多く用ひられたが、鎌倉時代以後は「候ふ」がこれに代つた。「座に侍りて」(一四二頁二行)と比較對照させ、前者が獨立した動詞とし用ひられるに對して、これは動詞助動詞に添うて助動詞的に用ひられることを知らしめたい。

【戸部の上總國に往きたまひしあとにて】土屋侯が領地久留里に往かれた後。參勤交代の期が果てて藩地に歸つたのである。

【教へしめらる】お教へになつた。「しめ」「らる」は共に敬語の助動詞。

【候ふ】サブララふ。「侍ふ」とも書き、さもらふ、さむらふ、さふらふとも言ふ。「侍る」と意味の同じいことは既述の通りで、(一)侍する。伺候する。(二)「あり」をり」の謙語。ここは(一)の意。現在書簡文に用ひられるのは謙語としての用法である。

【明けの年】アケの年。翌年。明年。「明け」は動詞下二段「明く」の連用形から轉化した名詞。夜明けの「明け」と同じである。

の薄明りを頼りに、わけて冷い冬の暮、肌を刺す寒風に曝されて、凍える手で、而も竹縁に坐つて九歳の兒が手習をする様を思ひみるべきである。幼にしてよく此の苦行に堪へた不退轉の意志力を持つてゐた白石の人となりが窺はれると共に、後日の大成の故なきにあらざることが知られるであらう。

【我につけられし者】自分に附添ひの召使。傳又は守り役などのこと。

【密かに謀りて】ヒソかにハカリて。こつそり相談して。兩親に知らせて心配をかける事を恐れた孝心からいであ「密かに」である。併し同時に、その爲に課を中止され或は減されることを快しとしなかつた勝氣な氣象の現れでもあつたやうである。

【衣打著て】ヨロモウチキテ。衣を着て。「打」は接頭語。【程經ぬれば】ホドへぬれば。時がたつと。程は多様の意味を持つ語で注意しなければならぬ。名詞として(一)程度。(二)分際。身のほど。(三)時。頃。(四)きまり。限。(五)様子。恰好。接尾語として(一)程度。位。ばかり。(二)いよいよ。につれてますます。(三)頃に。をりに。こゝは名詞(三)の意。「水をかぶりぬる程」の「程」も同じ。

【おほやう】大様。(一)寛大で細事に拘はらないこと。お

【課を立てられて】日課をお定めになつて。課は割當・負擔の意で、こゝは日夜の勉強の割當で即ち日課である。「られ」は次行「命ぜられ」と共に敬語の助動詞連用形。【行草】ギヤウサウ。行書・草書のこと。今日普通に行はれる書體は眞(又は楷)行・草で、楷書は字畫を正しく崩さない書體。行書は楷書を少しくづしたもので、草書は行書を更に大崩しにしたものである。此の他尙今餘り用ひられないものに篆書・隸書の二體がある。

【限りて】限定して。決めて。【日の中には行草の字三千、夜に入りて一千字を限りて書き出すべし】

明けの年とあるから白石九歳の時である。一日四千字の手習は九歳の少年には實際重い負擔であつた。白石が不撓の意志力をもつてよくこの過重の負擔に堪へた事は偉とすべきであるが、此の父の嚴格さも白石の大成に與つて力のあつた事を見落してはならない。

【課未だ満たず】クワイマダミタズ。日課がまだ終らない。まだ日の中の三千字が書き終らないのである。

【竹縁】チクエン。竹の簧を張つた縁側。【西向なる竹縁のある上に机を持ち出して書き終りぬる事もありき】

日が暮れかけ。も入日を受けた西向の縁側は明るい。そほどか。おほまか。(二)ぼんやりして氣のきかないこと。(三)おほ方。あまし。大低。ここは(三)の意。

【一度水をかぶりぬる程には、おほやう課をも満てたりき】冬の夕暮に寒風にさらされて手習をするのでさへ、既に容易ならぬ忍苦である。而もその寒夜水をかぶる、それも一度ならず二度に及ぶに至つては、到底人間業ではない。唯驚くべき刻苦勉強である。とかく安易に墮し僥倖を希ふ時代の風に染まらんとする生徒の反省に訴へ、大成の難きに思ひをいたさしめて、發奮興起の機縁たらしめねばならぬ。

【かゝりし程に】「かゝりし程に」。かやうにしてゐる(刻苦勉強してゐる)間に。

【文】フミ。(一)文書。書物。(二)書狀。手紙。(三)詩歌文章。(四)學問。文學。文事。ここは(二)の意。【かたの如くには書きたり】創意を加へたりして立派にはいかなかつたが、形式通りには書いた。「には」の「は」に「立派とまで書けなかつたが」といふ白石の謙遜の意が含まれてゐる事に注意したい。

【庭訓往來】テイキンワウライ。一卷。室町時代玄慧法師の著と傳へられてゐる。上流武家階級を標準とする社會生活上の雜事を、書簡の文例を以て示したもので、進狀

返狀一對を一箇年の各月に配し、それに閏八月の進狀を加へて凡そ二十五通から成つてゐる。一・二月の書狀は射御・詩歌・遊藝の教養について述べ、三・四月のは農工商に關する知識を集め、五・七月とに於て家財・諸器具・諸料理・衣服調度等の名を掲げて衣食住の上の一通りの文字を集め、六月の書狀では出陣の手配りから武器名等を擧げて戰陣について説き、九・十月は佛事僧官のことを叙し、十一月は病氣、十二月は地方行政の狀態について述べてゐる。當事指導的位置に立つてゐた武士の一通りの知識が網羅されてゐる。文體は普通行はれた擬漢文體で維新前寺子屋での手紙及び習字の手本として専ら行はれた。庭訓の語は論語、季氏篇「孔子嘗獨立、鯉（孔子の息）趨過庭、曰學詩乎。對曰未也。不學詩、無以言。鯉退而學詩。他日又獨立、鯉趨而過庭。曰學禮乎。對曰未也。不學禮無以立。鯉退而學禮。」とあるによつたものである。

【習はしめられ】 お習はせになる。「しめ」は使役の助動詞未然形。「られ」は助動詞受身連用形（中止形）。

【淨書】 ジャウシヨ 清書。

【參らすべし】 献上せよ。進上せよ。次行「見せ參らす」の「參らす」と比較對照。

【冊になす】 サツになす 一冊の書物に綴ぢる。

「わ」は親んで言ふ語。

【是等の業學ばんこと遅からず】「劍術を學ぶことはまだ早い」を婉曲に言つたのである。即ち「是等の業學ばんこと（尙數歳を経るも）遅からず」の意である。「是等」の複數形は劍術の中に幾つかの技があることを示し次頁三行の「一つの業を傳へて」は「是等」の中の一つを傳授したことを意味する。

【さこそ侍るべけれど】 さやうではございませうが。「さ」は「然」の約まつたもの。上の語意をうけて下に移す語。その如く、さやうにの意。「こそ」は強意の助詞。

【刀・脇差】 カタナ・ワキザシ 大小とも言ふ。

「刀」は「片刃」の轉とも言ひ、「片薙」の略とも言ふ。脇差に對し大刀と稱し、長さ二尺二・三寸より長きは二尺八・九寸に及ぶ。

「脇差」は刀の脇に差添へる小刀。長さ一尺二・三寸乃至一尺八・九寸、その大小により大脇差・中脇差・小脇差・長脇差などいふ。

大小二刀を佩びるやうになつたのは織豊時代以後の事である。

【不要の事にや】 無益なことではございませうか。不用は不必用。無用。「や」は軽い疑問の助詞。

【さこそ侍るべけれど、太刀つかふこと少しも心得ざらんに

【大方ならず】 オホカタならず 一通りではない。並々でない。大方は（一）大抵。多分。ほとんど。（二）一通り。なみなみ。おしなべて。ここは（二）の意。次行「大方は我に命ぜられたり」の「大方」は（一）の意。

【人と贈答したまふほどの文】 人とやりとする程度の手紙。普通簡單な用件・季節の見舞などの月並の手紙。

【戸部の人と贈答したまふほどの文ども、大方は我に命ぜられき】

父の代書なら多少の拙筆は許される。然し一城の主に於いては達筆な側近も多い事である。その中に特に選ばれて代筆したのであるから、白石の達筆であつた事は想像に難くない。「褒めたまふこと大方ならず」はこの間の消息をよく物語つてゐる。

【關といひし人】 傳未詳。

【父の友に關といひし人の子どもは】

古文の省略形式の一で「父の友に關といひし人あり。その子どもは」となるべき所である。

【太刀打の業】 タチウチのワザ 太刀で打合ふ技。劍術。

太刀打は（一）太刀で打合ひ闘ふこと。（二）立ち向つて勝負すること。（三）槍の口金から血溜ままでの間。ここは（一）の意。

【わぬし】 和主。人代名詞對稱。お前。そなた。おぬし。

は、刀・脇差腰にせんこと誠に不用の事にや】

少年白石の面目躍如として、興味ふかい一言である。武士と生れた以上武士らしく、文武相伴ふべきことを自覺し、その言ふところが一々理にかなつて「誠にしかなり」と大の男に納得させてゐるのである。豊かな文才をもつて堂々たる文章を書いた白石には、また論理的に鋭い一面もあつたのである。

【宜ふ】 ノタマふ 言ふの敬語。

【しかなり】 その通りである。尤もである。「然」は「さこそ」の「さ」と同じ。その如く、さやうに。

【あふ】 敵する。立合ふ。

【興に入る】 キョウにイ入る おもしろがる。

【手習ふこと】 テナラふこと 字を習ふ。習字。

【心にも染めず】 一向心につかない。一向熱心にならない。「も」は強めの助詞。「一向」位の副詞に解したらよい。

【其の後は、常にかかる武藝の事も好みて、手習ふ事など心にも染めずありしかど】

白石だとて少年時代には矢張少年らしい一面は持つてゐた。太刀打のわざを習つて見ると五つも年上の者を三度三度ながら打負すし、人々はしきりに褒めたてる。白石も得意であつた。活動的な少年白石がこれに専心したのも無理はない事である。併しこれもつまりは白石にと

つて「文武兩道の心得」といふ自覺に立つてのことであり、而もそれに耽溺しなかつた所に氣附かせねばならぬ。習字は怠つたけれど物讀むことは止めなかつた所は、これを卑近に考へれば、とかく運動競技に耽溺して學業を放擲し勝ちな少年の反省にも資せられる。

【物語】 モノガタリ (一)ものがたること。はなし。(二)作者の見聞・想像を基礎として叙述した散文による文學作品。従つて廣義には小説を指すが、狹義には平安時代から室町時代までの小説類をいふ。傳奇物語・寫實物語。

説話物語・軍記物語等がある。ここは(一)の意。【見ずといふものなかりき】 見たことがないといふ書物はなかつた。萬般に亘る書物を涉讀した。【常に我が國の物語草子等の類をば、見ずといふものなかりき】 「常に我が國の物語草子等をば(讀みて)、見ずといふものなかりき」の省略と見るべく、かくて「常に」の副詞の修飾が明瞭になつて来る。

2 文の構成

第一節 初—一四四頁七行

三歳から六歳に至る間の自叙で、白石が異常な天才であつたことが語られてゐる。

1、三歳の時透き寫しながら、既にまことの文字を書いて、人々を驚歎させたこと。(初—一四一頁八行)

2、當時既に往來物を讀み習ふことを常の戯としてゐたこと、及び四五歳の時、太平記評判の講釋の席に列して奇特のことなりと人々に讃歎されたこと。(一四一頁九行—一四三頁二行)

3、六歳の頃上松といふ人に「此兒文才あり」と學に入るをすゝめられ、且當時その天才は戸部にも愛せられてゐたので父が手習を教へたこと。(一四三頁三行—一四四頁七行)

第二節 一四四頁八行—一四五頁末行

九歳の秋冬にかけて刻苦精勵、よく日に四千字の日課を果したること。

第三節 一四六頁一行—同頁七行

此の頃から父の書翰を代書し、十三歳頃には殿様の代書までしたること。

第四節 一四六頁八行—一四七頁六行

十一歳の頃太刀打の業を習つて、これにも優れた腕前をあらはしたること。

第五節 一四七頁七行—終

武藝にはげんで手習は怠つたが、依然として讀書は廢さなかつたこと。

3 文意

白石の物讀み手習ひするに至る少年時代の自傳で、大體年齢の順に従つて卒直に叙述したものである。人を瞠目讃歎せしめた神童ぶりと、驚くべき刻苦精勵の姿が、偽らず飾らずありのままの叙述の中に躍如として現れ、學者政治家として後日その大を成したことの故なきにあらざるを知り得ると共に、讀者の反省に訴へて感奮興起を促すに足る大文章である。

4 鑑賞批評

事實を事實として謙遜も誇張も修飾もなく、唯ありのままにまつしぐらに書き進んで寸毫の亂もない。健かにひた押しに押して行く處に雄勁な力が満ちて、何物も犯し難い氣魄が全文に溢れてゐる。「文は人なり」といふ。誠に此の明晰な無駄のない強い迫力を持った文章は、困苦缺乏に屈せず、不退轉の意志に依つてよくその大成の基を築き、「大丈夫生きて封侯を得ずんば死して閻羅王となるべし」と傲語した白石の風貌を想見せしむるものがある。また美しいとか巧妙だとか言ふ技巧の跡は全然見られないが、而もその言葉と、内容とが全く渾然として融合し、平明暢達、特異の文體をもつて、その幼年時代の驚歎すべき超人ぶりや、燃えるやうな好學心や、不屈不撓の意志力を叙し、一種の親しみを感ぜさせて少年奮起の所縁たらしめてゐる。近世文の模範として稱へられてゐるのも宜なるかなである。

三 備考

1 指導研究

(一) 天才であつた、人に讃歎された、刻苦勵精したと言ふことが、その人自身の自叙であると言ふ點に於て、一面自

慢話だと言ひ得ないこともない。併し若しさうした感情の片影でも心に翳したならば、本課の意義は全く喪失されるのみならず、生徒の感ずるものは嫌味と反感とだけに終つてしまふ。此處においてか、本課の重要な背景をなすものは大學者大政治家としての白石である。幸にして生徒は白石については正史に、逸話に、讀み聞きしたかなり豊かな知識を持つてゐる筈である。此の生徒の既習の知識を整理統一して、文の背景たる白石の人となりについての認識を新にすることが本課に入るに先だつてなされるべき第一の仕事でなくてはならない。

(二) 驚歎すべき刻苦勩勵によつてその天才を琢磨助長した白石の偉さに對する感歎の心を呼び覺し、反省に訴へて奮起を促す所縁たらしむべき目的に立脚した説明・解釋・鑑賞がなされるべき事は論を俟つまでもないが、唯これを強調する餘り感動を強ひ、反省を強制することは、反つて生徒の反感を誘發するおそれがあり、そこまでは到らなくとも、その強制は概念的な皮相な教訓に終る危険は十分にある。飽まで文に即し、その徹底的理解に立つての感歎であり、自發的な反省こそが望まれねばならない。

(三) 本教科書に初めて讀む古文である。殊にまだ助動詞を學んでゐない生徒には相當難解な文章であらうと思はれる。従つて文法の説明に相當の注意を拂ひ一應輪廓的な理解は與へて置くべきであらう。併し活用・接續等詳細にわたる點は後日の文法の教授に譲り、教授者側で語感を傷はない適譯を工夫して授けるやうにして、この爲に理解を複雑ならしめないやうにしなければならぬ。

(四) 自叙的文學として、近世文の模範とされた大文章であるが、時代の相違と、従つて文體の相違とにより、生徒にはその妙味は容易に理解し得ない所である。適當な説明を施して、その明晰にして無駄のない言葉と内容とに寸分の隙のない點、平明暢達で而も雄勁な點、率直にして迫力のある點など十分味到させるやう扱つて行きたい。

2 参考

「折りたく柴の記」より左の一部を抄出する。白石出生當時の様子と戸部のいつくしみの程のよく窺はれる所である。

我生れしは、明曆三年丁酉正月の火事にて戸部の第宅もやけたれば、外孫にておはせし内藤右近大夫政親のいとけなくて(後に丹後金一郎、戸部の長女光院殿と)柳原におはせし所にのがれ給ひ、にはかに假屋をうたせて、家人等をもかしこにあつめ置かれたる。之申せしのみ給ひし所なり。二月十日の辰時にぞかの假屋のうちにて生まれしなり。されば我いとけなき程は、火の兒とぞ戸部のよび給ひたりき。戸部の母公のおはせしが、我父のはじめてまうけし男子なりとのたまひて、むつきのうちよりつねにめされしを、三歳の時に戸部の参り給ひて見せめられしより、日々にめしよせて、かたはらにのみ置かれたりしかば、みづからの子息たちをだにかくの如くし給ふ事なかりしに、かくおはしますは庶子にてもおはするにやと、一門の人々もうたがひ思ひ給ひたりしとぞ聞ゆる。六歳ばかりの時に、奥の南部信濃守利直の來り給ひし時に、我戸部のかたはらに侍りしを見給ひて、我は子もたぬものに候。此の兒給りて養ひ候ばや、と望れしに、戸部、これは召つかふものの子に候しを、我母の不便のものにし侍れば、我もともに常にめし候なり。まるらすべきものには候はず、と答へ給ひしを、さらばたゞ我に得させ給ふべし、我もとにてひととなし、成人の後には所領千石をばわかちあたふべきにぞ、と申されしかど、かれが身にはよき幸にこそ候べけれど、まるらせて候はむには、我母にて候ものも、我もまたつれづれならむをなぐさむべきやうも有べからず候、とのたまひしとぞ。

三 西郷南洲

勝 安 芳

一 解 題

1 作者

勝安芳 カツヤスヨシ 字は義邦、通稱は麟太郎。海舟又は安芳と號した。安芳は維新以後の名である。文政六年正月江戸本所龜澤町に生れた。父は男谷左衛門太郎といひ、七歳の時勝氏の養嗣子となつた。剣道を島田虎之助に習ひ、又禪學を修め、後に蘭學を學んだ。安政二年二十三歳で長崎表海軍傳習所御用を命ぜられ、翌年講武所砲術師範役に任ぜられ、同六年海軍操練所方頭取となつた。その年の秋米國渡航を命ぜられ、翌七年正月咸臨丸に乗じて品川を出帆し五月歸朝した。元治元年安房守に任じ、軍艦奉行となり、兵庫に塾舎を開いて海軍を教授した。同年十一月急御用あつて江戸に歸つたが、慶應二年再び大阪に召されて軍艦奉行となり、後海軍奉行總裁に累進した。幕府倒壊に際しては陸軍總裁の重職にあつてよく麾下の士の鎮撫につとめ、西郷と商議して江戸を兵火の難より救つた事は本課の通りである。かく維新前における翁の半生は全く我が海軍創設の爲費されたと言ふことが出来る。明治五年海軍大輔に任ぜられ、翌年參議兼海軍卿に進み、八年元老院議官に任ぜられたが直ちに辭し、爾來氷川の邸に逍遙自適し、劇務に鞅掌しなかつた。二十年伯爵を授けられ、二十一年樞密院顧問官となつた。明治三十一年一月歿。享年七十七。著書には陸軍歴史・海軍歴史・開港起源等がある。

2 出典

氷川清話より採つた。氷川清話は吉本讓の編纂にかゝり、委しくは「海舟先生氷川清話」といひ、海舟の歿した前年、即ち明治三十年に發行された。初に海舟の略傳を叙し、次は海舟に親近した編者の耳底に止つてゐた翁の語を録し、附するに逸事詩歌を以てしたもので、正・續・續々の三篇に分れてゐる。

氷川 ヒカハ 東京市赤坂區氷川町。海舟翁の邸宅の地で、翁の悠々自適の晩年は此處で過されたものである。故にとつてその書名に冠して氷川清話と言つた。左に掲げる編者巻頭の言はよく氷川の清境を寫し、且翁の風采とその生活振りを偲ぶに足るものである。

皇城の西、氷川河畔、幽邃絶塵のところの一邸あり。邸は蒼然として古色を帯び、門前老松枝を垂れて地を掩ふ。門を入ること數十歩玄關を上り、進みて突き當りの西洋室より左折し、廊下傳ひに一室に入れば、之を隔てて其の奥にまた一室あり。廣き六疊蒼蔚たる庭樹に對し、清麗淨潔、一點の塵氣分を留めず、中に瀟洒たる鶴髮童顏の翁、淡然几に凭りて白眼一世を睥睨し、來るものは大臣と書生とを問はず、華族と平民とを論ぜず、みなこの室に引きて、高談清話、時の移るを覺えざらしむるもの、これを海舟勝翁とす。

3 主眼及び採擇の趣旨

英雄よく英雄を知ると言ふ。語られる西郷の偉材たるは言を俟つまでなく、語る勝も亦稀世の俊傑である。坂本龍馬の批評を俟たずとも、亦人見寧との接見に聞かずとも、江戸城受渡しの交渉に際して、直接その衝に當り西郷と事を共にした海舟の率直な直話によつて、廣懷大度、所謂大至誠・大膽識の西郷の風采は遺憾なく發揮されてゐる。のみならず、話中また、沈着豪膽、事に處して機略縱横、死中よく活をもとめる勝の面目も躍如たるものがある。元より西郷の膽量至誠に瞻仰せしむべく、また勝の俊敏にも傾倒せしむべきであるが、更に進んで所謂肝膽相照らした兩雄の氣組氣合の機微を考察せしめて、その重大性をも實感せしむる様導いて行くべきである。

かくて此偉人の言行より受ける直接的感化により、膽量を養ひ人物を練磨し、眞に大國民たるの素地を築くべき國民的

二 解 釋

1 語 釋

【西郷南洲】 サイガウナンシウ 明治維新の功臣。名は隆盛。幼名は小吉、長じて善兵衛といひ、又吉兵衛と改め、後吉之助と言つた。隆盛は維新以後の名で、南洲はその號である。文政十年十二月鹿兒島城下加治屋町に、島津藩の勘定小頭西郷吉兵衛の長子として生れた。夙に藩主島津齊彬に愛せられ、安政元年中小姓となり、齊彬に従つて江戸にいで、水戸の藤田東湖・越前の橋本左内等と交り、勤王思想家として漸く重きをなした。幕末命を奉じて京師の公卿及び諸藩の間に勤王の大義を唱導した。井伊大老が志士の掃蕩を謀るに及んで、難を避けて清水寺の僧月照と共に本國に歸つた。その前年齊彬が歿して藩論が公武合體に傾き、藩廳が月照を日向に避けしめんとしたので、安政五年十一月、月照と相擁して海に投じた。幸に隆盛だけは救はれて大島に流され、ついで沖良部島に遷され、元治元年召還された。爾後藩政に參劄し、大久保利通・木戸孝九・小松帶刀・坂本龍馬等と勤王黨の團結を圖り、又薩長の聯合を策し、討幕及び王政復古

の運動を興し、遂に慶應三年十二月の大改革により明治の新政府を樹立するに至つた。戊辰の役には有栖川總督の宮の參謀として東征し、幕臣勝安房と接衝して江戸城受取の大任を果し、進んで北越を鎮撫した。役後一旦歸藩したが、明治四年再び出でて政府に入り、參議となり、五年陸軍元帥・近衛都督となり、六年正三位に敘せられ陸軍大將となつた。偶、征韓の論起るや、岩倉具美・木戸大久保等と議が合はず、職を辭して故山に歸り、私學を起して子弟の教育に當つた。十年二月その子弟に擁せられ、君側を清むるの名のもとに兵を起し、同年九月戰敗れて城山で自刃した。享年五十一。二十二年朝廷は特赦して賊名を除き正三位を復し、更にその遺勳に追賞せられ嗣子寅太郎に侯爵を賜つた。

【兵庫開港延期】 ヘウゴカイカウエンキ 安政五年正月五日、幕府と米國總領事ハリスとの間に協定の成立した假條約をさし、下田・箱崎・長崎の外、新潟・江戸・大阪・兵庫の港を開き、米國と自由なる貿易を開始し、其の公使を府下に駐在せしめることに決したもので、調印は同

年三月五日と定められたのに、朝幕間に紛擾を生じ、延びて六月二十日になつた。これを神奈川條約といふ。この開港の實行期は文久三年十二月と定められてあつたが、國內の狀勢によつて、兵庫開港の延期を各國公使に求めた。この條約はまだ勅許を得るに至らぬため、外國海軍はこれを直接に朝廷に訴へんとし、攝津の海に迫つたこともあり、幕府はこの間に立つて苦慮した。

海舟が談判委員として各國公使の間に斡旋接衝したのは此の折のことである。

後慶喜の朝廷との折衝によつて慶應元年勅許を得たが兵庫開港だけは許されず、この開港されたのは明治天皇御即位の後、慶應三年のことである。

【御留守居役格】 オルスキヤクカク 御留守居役に二あり、(一)は江戸幕府の職名で、奥年寄又は留守居役取寄といふ。江戸城大奥の總務を統べ、兼ねて士庶婦女の關所手形を出し、武庫の出納を監し、大奥女中及びその詰吏諸門衛を管し、また將軍出行の時は留つて城を守るなどのことを掌る。(二)は諸藩が江戸の藩邸に置いた職名で、江戸の藩邸に住み、幕府と自藩との間に於ける公務にたづさはり、かねて同列諸藩との交際の任に當り、恰も今の駐劄公使の如くであつた。こは(二)の意。格は格式・身分・位などの意。留守居役ではないが、その

格式(資格)であることを示す。

【轡の紋】 クツワのモン 馬の轡を模様化した紋章。

【黒縮緬】 クロチリメン 黒い縮緬。縮緬は縊つた生糸で織り、後に練つてちぢませた絹織物。紋縮緬・柳條縮緬・御召縮緬・かざり縮緬など種類が多い。

【風采】 フウサイ 風裁とも書く。様子。姿。風手。

【坂本龍馬】 サカモトリウマ 勤王家。土佐藩士。天保六年十一月高知城下に生れた。嘉永六年若くして東上し、劍法を千葉周作の門に學んだ。安政五年業成つて歸郷し、専心讀書につとめ、同志と國事を談じ、遂に脱藩して上京した。嘗て英國軍艦を見て心を動かし、後勝海舟についで航海・海戰の術を修め、その主宰する兵庫海軍練習所の塾頭となつた。練習所廢止の後、慶應元年討長の命が下るに及んで九州に赴き、西郷・大久保等と心を合せ薩長の間を奔走斡旋してその聯合を成立させ、討幕の策を樹て、王政復古の運動に盡瘁した。後年藩主山内容堂が大政奉還を將軍慶喜に慫慂したのは、龍馬の進言がその基をなしたものである。慶應二年京の寺田屋に勤王の同志と集合中、新撰組に襲撃されて負傷した。三年高杉晋作と海援隊を組織して自らその參謀となり、討長の幕軍を逐へて之と戰つた。龍馬は幕府の軍艦を破らんとして三艦を率ゐてこれを襲ひ、榎本武揚と力戰して勝敗が

決せず、數日にして將軍薨じて戦は止んだ。益、薩長の連衡に盡力し、後大阪より京都に入り河原町に寓居した。偶、中岡慎太郎と共に會飲してゐた時、新撰組近藤勇・土方歳三等の暗殺に遭つた。享年三十三。明治二十四年四月正四位を追贈された。

【添書】 テンシヨ 添へしよ。添へ状。今の紹介状。

【叩く】 タタク。ここは意見をきく。質問するの意。

【鑑識】 カンシキ 物の善悪眞實を見分ける眼力。鑑定の見識。めきき。晋書「王戎有三人倫鑑識常目三山濤、如三璞玉淨金」

【成程西郷といふ男はわからぬ男だ。小さく叩けば小さく響き、大きく叩けば大きく響く。もし馬鹿なら大きな馬鹿で、利口なら大きな利口だらう」といつたが、坂本もなかなか鑑識のある男である】

「わからぬ男」は「所謂解らない。理解出来ない」のではなく、底の知れない偉大さを感じての言葉である。叩きやうによつて、どんなに小さくても響くし、またどんなに大きくも響く。幅も廣いし底も深い、融通無礙で何とも把へやうのない大きさ、それが龍馬の「わからぬ男だ」と評した西郷の人物である。それにしても大人物に對してこれは何と大膽不敵な批評であらう。龍馬の鑑識もあれだけの仕事をしただけであつて鋭いものであつた。

海舟をして「坂本もなかなか鑑識のある男だ」と認めしめた所以であるが、海舟は又更にその上に坐つて、確固たる眼識で批判してゐるのである。所謂「人物は人物を知る」のであらうが、ここに大膽識の西郷と、鋭い鑑識眼を持つた龍馬、そして慧眼俊敏な安芳と、その三人の傑物の一端が窺はれて興味深い所である。

【大膽識】 ダイタンシキ 瞻力・識見の大きいこと。

【江戸城】 エドジャウ 今の皇城、東京市麹町區の中央に位する。長祿元年太田道灌の築城にかゝる。道灌これにすむと三十年、その歿後上杉氏(扇谷)の領有となり、戰國の時代に入つて北條氏綱の略する所となり、ついで豊臣秀吉の小田原征伐により、江戸城はその手に歸し、家康は前約によつて關八州を領し江戸城を居城とした。道灌築城後一三五年、天正十八年であつた。家康江戸入城の後、大いに城池を修覆して、將軍十五代引つゞいてこれにをり、明治元年四月朝廷がこれを收められ、明治二年御遷都以來皇城として今日に及んでゐる。

次に勝の「江戸城受渡し」の談話に入るに先立ち、その前後の緊迫した情勢を「水川清話」の序文を借りて窺ふことにする。

成辰の役官軍東征の途に上るや、幕臣或は遣へ戦はんと欲するものあり、江戸の人心恟々たり。然れども將軍固より戰

意なきを以て、翁に命じて之に處するの策を講ぜしむ。翁命を奉じ危難の際に處して動かす。總督宮、駿府に至らせ給ふに及び、上野の輪王寺宮駿府に至り、將軍恭順の狀を陳じて、寛典の所置を請ふ。總督宮、謝罪の實なきを以て、未だ之を許し給はず。翁また山岡鐵舟等を遣はして之を請ふ。既にし官軍の先鋒品川に至り、將に江戸城に入らんとす。是に於て、翁自ら赴きて、參謀西郷隆盛に面し、將軍の旨を陳陳して、百方其の調停に盡力す。隆盛之を容れて、直ちに進撃中止の令を下し、狀を總督の宮に啓す。之によりて官軍一刃を動かさずして、江戸城に入ることを得、王政復古の大業、平和の間に成就す。翁が絶倫の大手腕は、實にこの時を以て天下に顯はれたり。

【權謀】 ケンボウ 時機に應じてめぐらすはかりごと。權略。正義・至誠等に比して、やゝ悪い意味に用ひる習慣がある。説苑に「道逆時反、而後權謀生焉」とあるのも既にこの氣持があらはれてゐる。

【相欺く】 アヒアザムク 相手を欺くこと。「相」は(一)もと互いの意。(二)轉じて相手を云々する場合に用ひる。ここは(二)の意。

【自分だつて事を處するには、多少の權謀を用ひないでもないが、たゞこの西郷の至誠は、自分をして相欺くに忍びざらしめた】

西郷が靜ならば海舟は動である。彼は機略縱横の大策士

であつた。「海舟座談」にも、彼の策をたてるや極めて綿密周到であり、之を行ふや果斷であつたと語つてゐる。「多少の權謀を用ひないではないが」といふ言葉にはさうした勝安芳の人爲の一面が現れたものである。併しその勝の大知はよく西郷の大膽識・大誠意を見抜いて、一切の策を捨てて至誠をもつて西郷と相對したのであつた。もとより西郷は大人物であるが、勝のこの大智慧眼も弟たり難き人物たるを思はしめる。

【小籌淺略】 セウチウセンリヤク 卑小淺薄なはかりごと。

【事とす】 仕事とする。専らその事を行ふ。こゝでは「やる」行ふ」位の意。

【陽を見すかされるばかりだと思つた】

「わからぬ男」であつた西郷の大ききには流石の勝も壓倒されたのである。心の底の底まで見透されてしまひさうな薄氣味悪さを感じたのである。西郷の大ききが想像される。併しそれを早くも感じ取つたのは勝の慧眼であり、大智であつた事も見逃してはならない。

【立談】 リツダン (一)立ちながらの間の談話。(二)轉じて長時間に涉らない簡單な談話。ここは(二)の意。

【漠然】 バクゼン ぼんやりとして明かでない貌。淮南子

「聖人内修其本、而不外飾其末、漠然而無不爲也。」

【幕府】 バクフ (一)もと將軍は軍旅の到る處に幕を張り、その居所とした所から將軍の居所、又は陣營をいふ。(二)近衛府の唐名。(三)近衛大將の異稱。(四)日本歴史上、源頼朝以來に於ける將軍の異稱。(轉じてその將軍の異稱にも用ひた。)いふまでもなくこれは(四)の意。

【官軍】 クワングン 賊軍の對。朝廷方の軍。政府方の軍。

【大量】 タイリヤウ (一)量の大きいこと。(二)大度。大きな度量。ここは(二)の意。

【難局】 ナンキョク 困難な時局。さばきの難しい場合。「局」はもと双六・圍碁。將棋などの盤で、その盤上の勝敗の變化を人事上に喩へ「事件の有様」「事件の成行」の意とする。

【肩に投げ掛ける】 任せる。委任する。

【處置】 ショチ 取はからふこと。とりさばくこと。

【江戸を去つてしまつた】 奥羽征伐に向つたことを指す。

【意外にも、實に意外にも、この難局を自分の肩に投げ掛けて、後の處置は勝さんがどうかなさるだらう。】といつて、江戸を去つてしまつた。

「至誠を推し、一事も詐謀を用ふべからず」と「南州遺訓」に西郷自身述べてゐる。幕府は倒れたといふもの無政府状態にある江戸の混亂は、尙その極點にあつた。併し西郷は勝の能く委すに足る大人物たる事を觀破し

て、一旦これに任せた以上何等指圖がましい事もせず、一點の疑念も持たなかつた。「どうかなさるだらう」と江戸を去つてゆく所、實に偉大な風貌である。さすがの勝もこれには驚いたやうである。「意外にも實に意外にも」はよくその間の氣持を現してゐる。大膽識大誠意と勝の評した所以である。

【この漠然たる「だらう」には自分も閉口した】

「自分も閉口した」は所謂閉口迷惑したのではなくて、その裏に、自分に任せて平然と去つた西郷の大量に打たれて、所謂二の句がつけなかつた氣持がありありと出でゐる。本當に閉口する位なら西郷も「だらう」と澄してはゐなかつた筈である。そこを讀取つて行かねばならぬ。

【さりとは】 「さありとは」の約。それにしては。それでは。

【天分】 テンブン 天から受けた性質。職分。運命。ここは性質・天稟・天性などの意。

【大量・洪量】 タイリヤウ・コウリヤウ 洪大な度量。洪も亦大の意。

【維新】 キシン 王政の革新を云ふ。詩經・大雅「文王在上、於昭于天、周雖舊邦、其命維新」書經・胤征篇「舊染汙俗、咸與惟新」。我が國政の革新は數次に及んでゐるが、その中、明治元年の改革は最も著しいものであ

つた。故に普通に「維新」と言へばこの明治維新のことを指し、他の場合は「昭和維新」などのやうにいつて、唯「維新」とは言はなす。

【模様】 モヤウ (一)様子。容。(二)國語では紋様の意。あや。かたち。ここは(一)の意。

【品川】 シナガハ 東京市品川区品川町。往昔の東海道五十三宿の第一の宿驛で、東京の南方門戸の要衝に當り、古來公私の行旅往來が頻繁であつた。

【薩摩屋敷】 サツマヤシキ 薩摩藩の江戸に於ける藩邸。【のそのそ】 平然悠然たる状態の形容として見るべきである。

【あの時の談判は實に骨であつた】

幕末の多難な時局に處して波瀾重疊の経験を重ねて來た勝にして、「實に骨であつた」といふ述懐は、その談判の困難さと、それに對する勝の苦衷が思はれる。その心情を察する時、「西郷が居なかつたら」といひ、「西郷一人を眼中に置いた」といふ言葉が眞剣なものとして生きて來る。これから讀んで行く事件の前提として看過してはならない一句である。

【形勢】 ケイセイ 様子。なりゆき。いきほひ。

【板橋】 東京市板橋區板橋町(二、大和言葉、五頁六行既出)

【伊地知】 イチチ 名は正治。明治元年二月、東山道先鋒總督參謀となり、ついで二年東北平定の功により永世祿二千石を賜つた。四年議官、五年大議官、七年議長に任じ、八年一等侍講となり、翌年史館總裁に任じ、十二年宮内省御用掛を仰付けられ、十七年華族に列し伯爵を授けられた。十九年宮中顧問官に任じ、正三位に叙せられ此の年歿した。

【頓着】 トンチャク(又はトンチャク) 頓著とも書く。佛語の食着より轉じた語だといふ。ものにかかはること。懸念。(一〇・蜘蛛の絲・六八頁五行既出)

【眼中に置く】 ガンチュウに置く。人の存在價値を認め、それに相當する注意と敬意とを拂ふこと。即ちここは西郷の人物を認めて尊敬注目したのである。

【自分は外の官軍には頓着せず、たゞ西郷一人を眼中に置いた】
喧々囂々たる世論・動搖・不安の時局、それを收拾する活路を西郷の人物に求めたのである。「官軍に西郷が居なかつたら」と彼は言つてゐるが、併し事前に於て、西郷の人物を知る勝には略々成功を期するものがあつたであらう。他の一切に頓着せず、唯西郷一人に眼をつけた勝の慧眼には畏るべきものがあつた。

【雙方】 サウハウ 兩方。「双」は俗字。

【旨】 ムネ 事のおもむき。趣意。意味。

【別邸】 ベツテイ 別宅。別荘。ここは薩摩屋敷のこと。

【當日自分は、羽織袴で馬に乗り、従者を一人連れたばかりで、薩摩屋敷へ出かけた】

自分の事だけに勝は事もなげに話してゐる。併し大度量といふか、豪膽といふか、勝にも亦西郷に劣らぬ氣膽の大きさがあつたのである。これもつまりは西郷に信を置いて疑はなかつたからで、此の點至誠を人に推す西郷の一面と相通する所もあつた。次に掲げる一文は小學國語讀本卷十二「勝安芳と西郷隆盛」で、生徒の既に學んだものである。記憶を呼び覺してこの點を感得させたい。

翌十四日の會見は、芝、田町の薩摩屋敷で行はれた。安芳は今日こそ最後の確答を得ようと決心して、西郷をおとづれたのである。

屋敷の附近は、官軍の兵士がすき間もなく警衛してゐる。安芳がはいつて行かうとすると、門を守つてゐた兵士等が

「それ勝が来た、勝が来た。」

とひしめきながら、一せいに銃劔を取直して行くてをさへぎつた。安芳は大音に

「西郷はどこに居る。」と叫んだ。其の勢に吞まれて兵士等は思はず道を開いた。

【引切下駄】 薩摩下駄ともいふ。臺の幅がひろく駒下駄に

似てゐる。

【熊次郎】 傳記未詳。

【忠僕】 チユウボク 忠義な下僕。

【その様子は、一大事を目前に控へたものとは少しも見えなかつた】

古洋服・引切下駄で忠僕一人つれて来た外貌の問題ではなく、その底に藏された西郷といふ大きな人間の力が勝をしてさう感ぜしめたのである。その「平氣な顔」(一五三頁末行)はつくろつた平氣の顔ではなく、如何なる大事件大問題も西郷の大膽識・大誠意の前には日常の普通事であつたのである。それが西郷の「平氣な顔」となつて表れてゐるまでの事であつた。それにしてもその大事件の交渉に従者一人を連れただけで出向いた勝も勝なら、忠僕一人を連れて出て来た西郷も西郷だといふ感があるのではないか。

【疑念】 ギネン うたがふ心。うたがひ。

【いろいろむづかしい議論もありませうが、私が一身にかけ御引受します】

誠に堂々たる立言である。議論を超脱した偉大な人間力、西郷はさうした尊い大きな力の人であつた。そしてその力ばかり「私が一身にかけて」と言ふ必死の決意から生れてゐるのである。南洲遺訓に「命もいらす名もいら

【言行不一致だ】

【澤山の兎徒があつた通り處々に屯集してゐるのに、恭順の實は何處にあるか】

右の三句は要するに殆んど同一の意味を別語で現はした反復法である。將軍慶喜は版籍を奉還して一意恭順大命に従ふことを朝廷に誓ひながら、佐幕の諸藩は依然として之に反對し、都下にはその徒黨が諸所に屯集して、これが爲に今にも兵亂の勃發するかの如き騷擾を極めた。その事實を詰責する假定の語であるが、又同時にその假定を通して當時の江戸の狀勢を勝自らが説明したものと見ていゝだらう。

【野暮】 ヤボ 野夫の音轉だといふ。世情に通じないこと。さばけてゐないこと。不粹。武骨。

【大局】 タイキョク 大體の時代の趨勢。大體の物事のなりゆき。

【達觀】 タツクワン 一部分に偏らずに全體を見渡す。滯る所のない心で見通すこと。書經・召誥「周公朝至于絡、則達觀于新邑營」

【果斷】 クワダン 思ひきつて事を行ふこと。決斷力が優れ實行力の強いこと。書經・周官「惟克果斷乃罔後艱」

【輕蔑】 ケイベツ 輕んじあなどること。見下げること。

【膽量】 タンリヤウ 膽力と度量。

す地位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは艱難を共にし國家の大業は成し得られぬなり(補材参照)と自ら語つてゐる信念がとりも直さず此の言となつて表れたと見られる。海舟は「この一言で」と言つてゐるが、併し南洲をしてこの一言をなさしめた勝は西郷の「艱難を共にする」に足るの人傑であつたことも思はねばならない。

【生靈】 セイレイ (一)人類。人民(生物の靈長の意) 晋書慕容盛傳「生靈仰其德四海歸其仁」(二)生命(生きた靈魂の意) 沈約文「生靈有限、勞役過度」

【自家撞着】 ジカダウチャク 自分の言行が前後矛盾して揃はないこと。撞着の「撞」は突く、「着」は接尾語で、相衝突する義、即ち矛盾の意である。禪林類聚、看經門「南堂靜云須彌山高不見巔。大海水深不見底。巔土揚塵、無處尋。回頭撞着自家底。」

【兎徒】 キャウト 惡人共。惡者共。「兎」は凶に通じ惡の意。「徒」はともがら・仲間の意。

【屯集】 トンシツ 多くの入々が群がり集ること。「屯」はたむろ、即ち人の多く群がる意。

【恭順】 キヤウジュン つゝしんで命令に順ふこと。白居易詩「恭順發至誠」

【いや貴様のいふ事は自家撞着だ】

【天空海潮】 テンクウカイタワツ 天の空しく海の廣きが如く度量が廣大で、胸中に何等のわだかまりもないこと。古今詩話「海潮從魚躍、天空任鳥飛。」「闊」は本字。

【見識ぶる】 ケンシキぶる 見識ある如く装ふ。主義節操あるかの如きふりをする。見識は(一)かんがへ。意見。みこみ。(二)主義又は節操。(三)は氣位。ここは(二)の意。

「ぶる」は體言に接屬して、之を動詞として、その様を装ふ意を添へる接尾語。

【人見専】 傳記未詳。

【紹介狀】 セウカイジヤウ 紹介する爲先方に宛てた手紙。「紹介」は、とりもち・ひきあはせ・なかだち。

【足下】 ソクカ 同輩に對する敬稱。

【そこで、自分は人見の望み通り紹介狀を書いてやつたが、その中に「この男は足下を刺す筈だが、ともかくも會つてやつてくれ。」と認めておいた】

「勝からの紹介なら(一五六頁一〇行)と言つて西郷が人見を引見してゐるのだから、勿論勝に西郷をどうかうしようとの下心が微塵もなかつたことは明瞭である。多分人見も人傑西郷の前に出ては殺意など消しとんでしまふといふ見透しが、勝にははつきりついてゐたのではなからうか。「足下を刺す筈だから」と書送る心底にはあ

きらかに西郷に萬々事なきを確信しての緯々たる餘感が窺はれるのである。とは言へ、勝といふ男も思ひ切つた事をする男である。坂本龍馬は西郷を「わからぬ男」と評したが、此處に至つては勝もまた底の知れない大膽不敵の男であつた。

【桐野】 キリノ 名は利秋。通稱信作、中村半次郎とも稱した。天保九年十二月鹿兒島縣鹿兒島郡吉野村に生れた。文久二年島津久光東上に従つて京都に上り天下の志士と交り、明治元年鳥羽伏見の戦に參じ、ついで有栖川總督宮御東征に先鋒となり、或は小田原に或は藤澤に慶喜恭順の意を陳ぶる使者はみな退けて、一路都下に迫つた剛者である。ついで軍監としての奥羽に出陣、若松城攻略に功があつた。明治二年鹿兒島常備大隊長となり、四年御親兵一大隊を率ゐて東上、陸軍少將となり、五年熊本鎮臺司令長官に任ぜられた。征韓論に隆盛と議論一轍にいで、官を辭してこれと行を共にし、十年九月城山に戦死した。享年四十。

【さすがに】 しかすがにの約。(一)さうは言ふものの。さうではあるが。(二)すぐれただけあつて。音に聞えただけあつて。ここは(二)の意。

【眼がある】 人を見るの明がある。鑑識にとんでゐる。「眼」は眼識の意。

【舉動】 キョドウ (一)起居ふるまひ。(二)様子。こゝは(一)の意。

【尋常】 ジンジャウ (一)尋は八尺、常は一丈六尺で僅かな長短又廣狹を言ふ。(二)普通。通常。なみ。ここは(二)の意。

【果して】 (一)思つてゐた如く。案の通り。(二)げに。まことに。こゝは(一)の意。

【始末】 シマツ (一)事の始と終。始終。首尾。(二)事情の顛末。わけがら。事由。(三)處理。しめくり。ここは(二)の意。

【不敵】 フテキ 敵を敵と思はないこと。豪膽なこと。

【委細】 キサイ つまびらかなこと。細かく詳しいこと。委曲。

【西郷は一向平氣なもので「勝からの紹介なら會つて見よう」といふことである】

假にも自分を刺しに來た男に平氣で會はうとするのである。豪膽といふか大度量といふか、「所謂天空海潮」と評した處は此處であらう。勿論「勝からの紹介なら」と言ふ言葉には、西郷は勝の紹介する人見に見透しがついたのであらう。紹介する勝も勝なら、それに平氣で會はうといふ西郷も西郷である。さすがに至誠を推し、信を人の腹中に置いて疑はない巨人同志の間の事には、凡人の

測り知り得ないものがある。所謂肝膽相照すとはかういふ境地であらう。

【大勢】 タイセイ (一)大體のなりゆき。おほよその有様。(二)天下の趨勢。世のなりゆき。こゝは(二)の意。

【玄關】 ゲンクワン (一)佛語で(イ)玄妙な道に入る端緒。(ロ)禪寺の客殿への入口。(二)書院造りの家の入口。(三)轉じてその入口にあたる部屋。こゝは(三)の意。

【横臥】 ワウグワ 横になつてゐる。

【悠々】 イウイウ (一)遙かに限らない様。遠く遙かな様。詩唐風「悠々蒼天、曷其有極」。(二)間暇のある様。詩小雅「悠々旃旌」。(三)轉じてゆつたりした様。のんきな様。ここは(三)の意。

【多寡が】 タクワが 僅か。多は緩急の「緩」多少の「多」などの如く意味のない添詞。

【多寡が十六文で腹を養ふやうな吉之助に、天下の形勢などといふものが分る筈がないではないか。】といつて、大口を開けて笑つた】

兒戲諧謔にも等しい此の言葉が、實は人としての西郷の偉大さを背景にして味はれる時、はじめて人見が「西郷さんは豪傑だ」と感服した所以が解るのである。一種禪味を帯びたこの言葉は、生徒には直接理解し難い所であ

る。その言葉の背景をしつかり踏まへて理解させること
につとめるべきである。

【血氣】 ケツキ はやり氣。激し易い意氣。論語「少之時
血氣不_レ定、戒_レ之在_レ色。及_レ其壯_一也、血氣方剛、戒_レ之
在_レ闘。及_レ其老_一也、血氣既衰、戒_レ之在_レ得。」

【出しぬけ】 突然。不意。唐突。

【氣を吞まれる】 度膽を抜かれる。仰天させられる。

【段】 ヲン (一)階段。階級。(二)区分。(三)文章中の段
落。(四)簡條。くだり。かど。(五)場合。ところ。ここ
は(四)の意。

2 文の構成

第一節 初―一四八頁四行 西郷と初對面のこと。

第二節 一四八頁五行―一四九頁二行 坂本龍馬の西郷評。

第三節 一四九頁三行―一五五頁七行 江戸城受渡しの談判の話。

1、西郷の大誠意と大膽識についての談判前後の話。(一四九頁三行―一五一頁九行)

2、談判に當つた西郷の至誠と膽量。(一五一頁一〇行―一五五頁七行)

第四節 一五五頁八行―終 刺客を接見して泰然たる西郷の膽量の大きかつたこと。

3 文意

維新の最大難事であつた江戸城受渡しの談判に際し、直接その衝に當つた海舟が、その談判の相手たる西郷の振舞を中

心に、これに翁に實際關係ある坂本龍馬の西郷評、西郷の刺客接見といふ二つの逸話を加へて、西郷が誠に大膽識・大誠
意の人傑であつたことを物語る體驗談である。大西郷の風手躍如たるものと共に、その裏に話手海舟の人物も亦躍
如たるものがある。

4 鑑賞批評

本課の持つ魅力は、それが總べて實際に關係し、實際に體驗した直話であるといふ點に存する。話體は寧ろ平明率直、
所謂高談清話で一貫した構成を持つてゐるものではない。併しそれは些かも此の文の價値を傷ふ所のものでなく、思ひい
づるまゝの修飾のない率直な話振りは、反つてその體驗から滲みでる迫力をもつて讀者を魅するものがある。誠に天空海
濶の大膽識と至誠人を動かす大誠意の人、大西郷の面目を躍如たらしめると同時に、その裏に沈勇豪膽、機略縱横の人、
勝自身の風貌をも想見せしめて餘す所がない。殊に肝膽相照らした兩雄の交渉には津々として盡きぬ興味が洋溢して、眼
に文字あるを感じない。正史には味はれない逸話の持つ興味を遺憾なく發揮したものと云ひ得よう。

三 備 考

I 指導研究

(一) 題が西郷南州であり、而も語られてゐるものは西郷の偉大な風手である。若し取扱上の危険ありとすれば唯その
讀みがこの點のみ終始して、その西郷の偉大さを示し得たものは勝の眼識であり、内に籠るものは勝の偉大さであるこ
とを讀過してしまふ事である。勿論西郷の偉大さは取扱の中心題目ではあるが、同時に小籌淺略を用ひては駄目だと感じ
た聰明さ、唯一人西郷をのみ眼中に置いて正皓を失はなかつた眼力、従者一人つれただけで薩摩屋敷へ出かけて行く豪腹、
或は刺客を紹介する高手など勝の偉大さをも考へさせねばならない。その兩々譲らぬ大人物たる事を理解して始めて、肝膽

【得せず】 エセズ なし得ず。
【豪傑】 ガウケツ (一)才徳の衆にすぐれた人。孟子「若
夫豪傑之士、雖_レ無_レ文王_一猶興。」(二)武勇の衆にすぐれ
た人。史記淮陰侯傳「俊雄豪傑、建_レ號_一呼_レ天下之士、
雲合霧集。」(三)知勇才徳すべて人にすぐれた人。ここは
(三)の意。
【感服】 カンプク 感じて心から服従すること。
【氣膽】 キタン 氣象膽力。
【絶倫】 ゼツリン 人なみはづれて偉大であること。「倫」
は類・ともがらなどの意。「論」との相違に注意。

相照してさしもの難事の談判が成立した事の理解が得られるからである。

(二) 非常重大な政局の中にあつて、二英雄の交渉談判に於て、所謂肝膽相照した氣合・氣組の考察も重要な指導の目標である。かうした事は國家の大事のみでなく、生徒の日常平凡な交渉關係について常に經驗されることである。信を人の腹中において一點の疑をさしはさまぬ態度とか、至誠を推して相手を尊敬し得る心組とか、さうした議論や理窟を超越した腹が、何時如何なる生活上の問題に當つても、否その問題が複雑であればある程、その解決の重要な鍵となるものであることを考へさせる事は、本課の場合特に望まれねばならない。

(三) 小學國語讀本卷十二第二十六「勝安芳と西郷隆盛」は本課の江戸城受渡しの條をくわいて説明したやうな文である。生徒既習のこの教材は直接本課取扱ひの上に役立つものであるから、必ず豫め讀みかへして置かせたい。寧ろ教室に持参せしめて、比較對照しながら讀ませたなら一層理解を容易ならしめ得るであらう。

2 参考

(一) 挿繪「西郷南洲肖像」

明治十六年伊太利人キヨソネ(當時印刷局雇)の描いた木炭畫から撮影したものである。キヨソネはこれが製作に當り鹿兒島國分の畫家服部英龍筆の日本繪の全身像を粉本とし、親子未亡人を始め、西郷に日々親炙してゐた知人故舊の批評を乞ひ、苦心訂正の結果描き上げたもので、西郷の偉大な風貌を最もよく傳ふるものと言はれてゐる。現在西郷從徳侯所藏。

(二) 挿繪勝海舟肖像(寫眞)

撮影年月は不明であるが、大體晩年に近いもののやうに思はれる。俊敏穎悟、機略縱横の人となりと、剛毅なるその氣魄の窺はれる立派な寫眞である。

(三) 挿繪薩摩屋敷の會見

明治神宮外苑聖徳記念繪畫館壁畫に據つた。筆は結城素明氏である。素明名は貞松、明治八年十二月東京本所に生れ、三十年東京美術學校日本畫科卒業。東京美術學校教授、帝國美術院會員。

(四) 「水川清話」から本課に入る前の部分を抄出する。當時の天下の有様と、西郷を早くからみとめてゐた勝海舟の心持が窺はれて興味深いものがある。

「戊辰の變は、おれは町飛脚の知らせによつて、幕閣よりも一日早く承知したけれども、おれは當時閑居の身だつたから、意見を進める機會を得なかつた。さて、翌日になつて、いよ／＼幕閣に知れ渡ると、城中は鼎を沸すやうだつたヨ。それは祭にさへ騒ぐ江戸つ界の事だから、江戸中の騒ぎも大低察せられるだらう。この時、幕議では、事の起りが少々の行違ひだから、大したことにもなるまいとの説だつたけれども、おれも、獨りで、西郷めがこの機に乗じて、天兵を差し向けはしないかと心配してゐた處が、果してやつて來たワイ。西郷は實にえらい奴だ。」

「江戸城受渡しの時、官軍の方からは、西郷が來るといふものだから、おれは安心して寢てゐたよ。さうすると皆の者は、この國事多難の際に、勝の氣樂には困るといつて、啖いてゐた様子だつたが、なに對手が西郷だから、無茶の事をする氣遣はないと思つて、談判の時にも、おれは愈は云はなかつた。たゞ幕臣が餓ゑるのも氣の毒だから、それだけは頼むぜといつたばかりだつた。それに西郷は、七十萬石呉れると向ふから云つたよ。」

「おれは、今迄に天下で恐ろしいものを二人見た。それは横井小楠と西郷南洲とだ。横井は、西洋の事も別に澤山は知らず、おれが教へてやつた位だが、その思想の高調子な事は、おれなどは、とても梯子を掛けても、及ばぬと思つた事が屢々あつたヨ。おれは尙に思つたのサ。横井は、自分に仕事をする人ではないけれど、もし横井の言を用ひる人が世の中にあつたら、それこそ由々しき大事だと思つたのサ。その後西郷と面會したら、その意見や議論は、寧ろおれの方が優る程だつたけれども、所謂天下の大事を負擔するものは、果して西郷ではあるまいかと、また尙に恐れたよ。」

そこでおれは幕府の閣老に向つて、天下にこの二人があるから、その行末に注意なされと進言して置いた所が、その後、閣老はおれに、その方の眼鏡も大分間違つた。横井は、何かの申分で蟄居を申付けられ、また西郷は、漸く御用人の職であつて、家老などといふ重い身分ではないから、兎ても何事も出来まいといつた。けれども、おれはなほ、横井の思想を、西郷の手で行はれたら、最早それ迄だと心配してゐたに、果して西郷は出て来たワイ。」

(五) 本課一五五頁三行「自分も全く感心した」の次に左の一節を省略した。これは小學讀本であまりにも親しいから、反復を省く意味で割愛したものである。

談判がまだ始らないうちから、桐野などといふ豪傑連は、大勢次の間へ来て竊かに様子を覗つてゐる。薩摩屋敷の近傍には官軍の兵隊がひし／＼と詰めかけてゐる。實に殺氣陰々として物凄程であつた。然るに西郷は泰然として、あたりの光景は少しも眼に入らぬものの如く、談判を終へてから、自分を門の外まで見送つた。自分が門を出ると、近傍の街々に屯集してゐた兵隊はどつと一時に押寄せて来たが、自分が西郷に送られて立つてゐるのを見て、一同恭しく捧銃の敬禮を行つた。おれは自分の胸をさして兵隊に向ひ、何れ今明日中には、何とか決着致すべし。決定次第にて、或は足下等の銃先にかかつて死ぬることもあらうから、よく／＼この胸を見覺えておかれよ、と言ひ捨て、西郷に暇乞ひをして歸つた。

補材

命もいらす、名もいらす、地位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならではの、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

「南洲遺訓」から抄出した。「南洲遺訓」は片淵琢の編纂にかゝり、明治廿九年研究社發行の木版本の全一冊である。名の示す如く南洲の遺訓を収録したもので、木版本は「命モイラズ名モイラズ」といふ風な片假名刷である。

【始末】 シマツ 處理。取扱ひ。(本課・一五六頁・既出) 【艱難】 カンナン なやみくるしむこと。なんぎ。

【大業】 タイゲフ (一) 大事業。(二) 帝王の業。洪業。丕業。(三) 儒子。専ら紀傳道(昔の大學寮の一で、史記・

漢書・後漢書等の歴史を教授したもの)に言ふ。ここは(一)の意。

一切の名聞利益を離脱して、さながらこれ大悟徹底した禪僧の風格である。幾度か死生の間を往來して西郷はいつか此の境地に到達してゐたのであつた。「文は人なり」と言ふが、此の短文は實に西郷の全風貌を語り盡くしてゐるかに思はれる。坂本龍馬をして「西郷といふ男はわからぬ男だ」と評せしめたのも、一言よく江戸百萬の生靈を救つたのも、はたまた刺客を前にかからちうち笑つたのも、本課の全部がこの一言で解釋出来るのではなからうか。所謂大膽識大至誠と勝が評したその根柢をなすものとも言ふべき西郷自身の言葉をきくことによつて、本課の感銘を強からしめんとしてここに採録した。本課の物語と聯關しつゝ意味させたい。

三 乃木大將

中村孝也

一 解題

1 作者

中村孝也 ナカムラカウヤ 歴史家、文學博士。明治十八年群馬縣師範學校卒業。東京高等師範學校地理歴史科を経て大正二年東京帝國大學史學科を卒業し、更に大學院に止つて、國史を専攻した。卒業後日本女子大學教授・第一高等學校講師等を経て、現在史料編纂官兼東京帝國大學教授の職にある。

氏の學位論文は元祿時代の經濟に關する研究であつて、殊に近世日本歴史に造詣が深く「江戸幕府鎖國史論」近世日本史「源九郎義經」武家興亡觀」等の史傳評論の著が多く、また文章に秀で、美文集「しら菊」は有名である。氏は才氣縱横の學者として定評のある人で、従つてその文章も推敲彫琢を加へたものといふより、寧ろ滾々と湧き出る才氣の閃を示した輕妙暢達な趣を持つたものである。現在個人雜誌「歴史と趣味」を月刊しこれを主宰してゐる。

2 出典

氏の講演の筆記で、教材として採擇するに當つて多少これに訂正を加へたものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

日露戰爭當時世に傳へられた乃木將軍の苦衷を示す逸事と、將軍自作の詩とを背景にして、凱旋兵士を路傍に迎へた時心を打つた將軍の「優しい眼」「寂しさうなお姿」から、作者は「乃木大將は寂しい御方だ」といふ結論を導いてゐる。本

課の精神はつまり「寂しい乃木將軍」を出發點とし、中心點とし、到達點としてゐる。生きて聖將と仰がれ逝いて軍神と祀られた將軍が、實は生前此の寂しい御方であつたのである。人としてこの寂しさに徹し、盡忠至誠の一念で此の底知れぬ寂しさを乗り越えたる將軍、そこに聖將軍神としての輝は光り出でてゐるのである。

その赫々たる武勳と名聲との蔭にかくれて、やゝもすれば見逃され勝な「人としての將軍」の苦衷に眞の同情の心を喚び起すことは、たゞに將軍への尊崇景慕の心を深めるのみならず、自らその偉大な人格に溶化され、無言のうちに日本精神の眞髓を會得せしめ得るであらう。主として國民的教材として、併せてこれを叙するに詩歌を引用し暢達な文を以てして、情感的に讀者の心裡に沁みこませて行く文趣をも味はせて行きたい。

二 解釋

1 語釋

【乃木大將】ノギタイシヤウ 名は希典。嘉永二年十一月山口藩士乃木希次の長男として、江戸麻布日ヶ窪の毛利邸に生れた。幼名を無人と言ひ、後に源三・文藏と稱した。生來虚弱な身であつたが、父の教育は嚴格を極め、自らも發憤する所があり、少年期から別人の如き強壯な身となつた。慶應三年高杉晋作の報國隊に入り幕府の征長軍と戦つたのが大將の初陣である。明治五年兵制制定と共に少佐に任ぜられ、西南戰爭には小倉第十四聯隊長として出征、不幸植木坂の激戦に敵の重圍に陥り聯隊旗を奪はれた。後年の大將の自叙の意は既に此の時に決せ

られたものであつた。十二年大佐、十八年少將に任ぜられ、翌年獨逸留學を命ぜられて滯歐二年、軍事を研究して歸朝。二十七年日清戰役には混成第一旅團長として、遼東半島に戦ひ、二十八年戰功により中將に進み、男爵を授けられ、第二師團長となり、翌年臺灣總督に補せられた。三十一年第一師團長に轉補。三十四年休職となり、栃木縣那須郡狩野村石林に退いて農事を樂しみ、石林子と號した。三十七年日露開戦に際しては、先づ近衛留守師團長、陸軍大將に任ぜられ、次いで第三軍司令官として旅順を攻圍し、力攻強襲、露國が極東の根據として不拔を誇る堅城を半歳にして陥れた。正に三十八年一月一

日であつた。疲を休む暇もなく、將軍は第三軍を率ゐて長驅滿洲奉天に進み偉功を立て、三十九年滿洲軍總司令官大山元帥と共に東京に凱旋し、功により功一級に叙せられ、伯爵を授けられた。翌年軍務を解かれて學習院長となり、専ら剛健質實なる教育を行つた。四十五年七月明治天皇御不豫の報傳はるや、毎日宮内省に參候して御病狀を奉伺し、且日々靖國神社に詣でて御平癒を祈願し奉り、天皇崩御の後は毎夜殯殿に參候したが、九月十三日御大葬の日、午後八時靈輦御發輓の號砲を聞いて、赤阪の自邸に於て殉死した。享年六十四。

現世を神さりましたし大君のみあと慕ひてわれはゆくなら

の辭世の歌は名高い。東京市赤坂區乃木坂なる當時の乃木邸は今乃木神社として、自刃當日のまゝに保存され、また永く將軍の英靈を齋くため、桃山御陵に近く乃木神社が建設されてゐる。

【日露戦争】 ニチロセンソウ 明治三十七・八年戦役とも言ふ。三十七年二月より三十八年九月に亘る日露兩國間の戦争。

露國は北清事變以來兵を滿洲に駐めて頻りに防備を堅め、屢、撤兵を約するも一向に履行せず、我が栗野駐露公使の前後數十回に亘る折衝にも拘らず、終始協定を拒

んだ。ここに於て我が國は遂に明治三十七年二月十日宣戰を布告した。我が海軍はまづ仁川沖に敵艦を破り、露國太平洋艦隊の根據地たる旅順口を攻撃し、三回に及ぶこれが閉塞作業の後、黃海海戦に敵の海軍勢力を一掃して日本海海上權を制し、一方陸軍は鴨綠江に、旅順に、また遼陽に連戦連勝し、三十八年三月遂に奉天を陥れて敵に殲滅的打撃を與へ、且五月には我が海軍はバルチック艦隊を對馬海峡に撃滅し空前の大勝を得、更に樺太をも占領した。ここに於て露國は和を請ひ、米國大統領ルーズベルトの斡旋により、九月日露講和條約が成立して爾後日本は韓國に於ける政事・軍事・經濟上の權益を有する事、ロシアは滿洲から撤兵し、旅順・大連附近の租借權及び南滿洲鐵道を日本に讓渡し、樺太南半を割讓する事となつた。

【平和が再び訪れて来た】 再び平和になつた。「訪れる」といふ語は穩和ななごやかな内容を持つてゐる。故に「平和が訪れる」「幸福が訪れる」など言ふが、「戦争が訪れる」の如くは言はない。

【追々】 オヒオヒ 次第次第に。だんだんに。

【凱旋】 ガイセン 愷旋とも書く。戦に勝つて歸ること。

【凱】は戦勝の時に奏する樂。「旋」は歸ること。
【戦友】 センイウ 同一軍隊に屬し、同じ戦線に従軍した

同僚。(七・皇軍の精神・四一頁一行既出)

【名もない花】 ナもないハナ 「名前がない花」と言ふ意でなく、名も知られぬ野草の花の氣持である。

【討死した戦友の墓に、名もない花を手向けて引揚げて來る心持は、嬉しいやら、悲しいやら、随分辛いものであつたでせう】

凱旋將士の心中の想像的描寫であるが、恐らくは事實あり得る事である。本より蒼茫たる滿洲の、而も戦禍に荒れた荒涼たる曠原では、名もない小草の花より他に手向ける術もないのである。曾ては勵まし合ひ、勞り合つた戦友を、その寂しい廣野に残して引揚げて行く心中、自分分は凱旅勇士として故山に錦を飾つて歸るのであるが、それに比べて悲しい友の運命が新なる涙を誘ふのである。悲喜交、の情は當然湧き起つて、將士は腸をちぎられるやうな辛さであつたらう。「名もない花」といふ語の持つ孤獨悲哀な感は、戦歿將士の荒涼たる墓の所在を巧に暗示したものである。

【御國】 オクニ (一)江戸時代大名の領地の敬稱。(二)故郷。(三)故國。祖國。(四)地方。田舎。(五)他人の國の敬稱。ここは(三)の意。尙「我が國」の意味ならば「ミクニ」といふ読みもあるが、然しここは矢張「オクニ」でなければならぬ。軍歌の大衆性といふだけでなく、

遠征にある將兵の「故郷の祖國」といふ感は「オクニ」でこそ出し得るのだ。

【ここは御國を何百里 離れて遠き滿洲の 赤い夕陽に照らされて 友は野末の石の下】

眞下飛泉氏の作の「戦友」と題する十四聯よりなる軍歌の第一聯である。この一聯でも推測出来るやうに全體が戦友の死を弔うた詩で、素樸無技巧の中に友の死を痛む切切たる哀愁が溢れて人の心をうつものがある。(備考参考欄参照)

本聯は全篇の序をなすもので「御國を何百里離れた遠い、ここ滿洲廣野の野末の石の下に、赤い夕陽に照らされて友は寂しく眠つてゐる」と言ふ意である。

「赤い夕陽」は戦に荒れはたてた大陸の果に落ちる太陽の血の染んだやうな荒涼さを描き、「野末の石の下」はその荒涼たる野に石塊を墓標にした痛々しいまでに寂しい墓を髣髴させて哀愁をそよめるものがある。

作者眞下飛泉は本名瀧吉。當時京都府師範學校訓導であつた。

前に「名もない花を手向けて引揚げて來る」辛い兵士の心持を敘し、且ここにこの悲しみの軍歌を出して、歡びの凱旋の中に一抹の悲しみを蔽ひ得なかつたことを現して「寂しい乃木大將」の御姿の前驅をなしてゐる事に

注意したい。

【滿洲軍總司令部】 マンシウグンソウシレイブ

〔滿洲軍〕 日露戦役に際し初から滿洲の地に陸軍轉戦した第一軍(司令官 黒木爲楨)第二軍(司令官 奥保鞏)第四軍(司令官 野津道貫)を併せて滿洲軍と言ひ、總司令官は元帥大山巖であつた。尙奉天會戦には乃木大將の率ゐる第三軍、川村大將の率ゐる鴨綠江軍もこれに加つた。

〔總司令部〕 全軍を總率指揮する命令機關、即ち總司令官が全軍を統帥する所。司令部は各種司令官又は師團長・旅團長がその事務を執行し、所管を統帥する所。軍司令部、師團司令部、旅團司令部、要塞司令部、兵站司令部等はこれである。

【第三軍】 日露戦役の際、主として旅順攻陥に當つた一軍。乃木大將を司令官とし第一・第九・第十一の三師團を以て編成された。

【日比谷】 ヒビヤ 舊櫻田門外で、日比谷門・山下門・虎門以内の一郭を稱したも。今日の日比谷公園を中心に、その西は日比谷町・霞ヶ關一・二丁目、南は内幸町東は山下町を含む。中に帝國議事堂・司法省・海軍省・拓務省・大審院・帝國ホテル・大阪ビル等の官衙、大建築が多い。

【肅々】 シュクシュク (一) つゝしみ敬ぶ様。(二) 靜かにひっそりした様。(三) ひきしまつた様。(四) 嚴正な

る様。ここは(四)の意。軍隊が隊伍を亂さず嚴かに堂堂と行進する様を形容した。

【上野公園】

ウヘノコウエン 詳しくは上野恩賜公園。東京市下谷區にある。往昔の忍ヶ岡で、江戸時代には最初此處に聖堂及び諸大名邸宅があつたのであるが、後寛永寺創建と共に全部その境内となり、徳川幕府の菩提寺として、全山三十六坊に及ぶ繁榮をなしたが、明治元年五月彰義隊の根據地となつて兵火に罹り、その大部分は灰燼に歸してしまつた。同年八月これを官に收め、六年公園に指定され、八年不忍池をもこれに併せて帝室所屬としたが、大正十三年一月今上天皇御成婚記念として東京市に下賜された。全園は一帶の丘陵をなし、樹木繁茂し逍遙散策によく、園内には東照宮並に五重塔の堂塔をはじめ、動物園・帝室博物館・東京府立美術館等がある。

【日比谷に集つた軍隊は、長い長い行列をつくつて、肅々として式場なる上野公園に向ひ行進いたしました】

「長い長い行列」と「肅々として」と言ふ語の中に何か一種沈痛な響が籠つてゐる。戦友の墓に「名もない花」を手向けて引揚げて來た將兵の心には、矢張戦勝の歡喜に酔へない重たさがあつたのであらう。それが作者の心に反映して、この語勢となつたものと思はれる。

【私はその頃まだ若い學生でした】

明治三十九年は作者の二十二歳、東京高等師範學校在學中であつた。「若い學生でした」といふ當時の回想は、特に感激的で純情な心に血を湧き立たせたことをそれとなく暗示してゐる。

【萬世橋】 マンセイバシ 東京神田區にある神田川に架した橋。もと筋替橋または筋違橋といひ、日本橋の大通から神田へ通ずる橋。明治に至り石造に架け替へ、以來萬世橋と改稱。また橋に二箇のアーチを設けたので眼鏡橋とも呼んだ。近頃は一般に「マンセイバシ」と音讀する。

【路傍】 ミチバタ(音ロバウ) 「道端」とも書く。
【硝煙彈雨に汚れた】 セウエンダンウにヨゴれた 硝煙彈雨の下を潜つて惡戦苦闘する間に汚れた。「硝煙」は銃砲の發火によつて起る火藥の煙。「彈雨」は雨の如く烈しく飛び來る彈丸。「硝煙彈雨」は火藥の煙がみなぎりわたつて彈丸が雨のやうに飛び來ること、即ちはげしく銃砲をうちあふ戰爭の光景。

簡単な語の中に戰場を馳驅して惡戦苦闘つぶさに辛苦をなめて來た兵士の様子が描かれてゐる。

尙作者は將士の苦戦奮闘を物語るに當つて、全くそれに當る一つの概念的な語も用ひず、修飾も誇張もなく、寧ろ素直すぎる位の言葉で、汚れた外套や旗地の破れや折れた旗竿など見たまゝをありのまゝに叙して、それ自

ら苦闘を物語らせてゐる事に注意したい。實は主觀語や概念的な修飾よりも、この現實の姿を描いた方がはるかに實感的に讀者の胸に印象づけ、従つて萬歳も敬意も民衆の眞剣な姿として讀者にうけ入れられるのである。

【萬歳】 バンザイ 個人又は團體のために祝福欣賀の意を表す時に唱へる語。明治二十二年二月十一日、明治天皇が憲法發布記念觀兵式に行幸あらせられた時、東京帝國大學學生が鹵簿を拜して萬歳を稱呼したのに始る。古くは「バンゼイ」(漢音)「マンザイ」(吳音)何れの發音もあつたが、此の時外山博士の議に基づいて、漢・吳兩音を混じて「天皇陛下萬歳・萬歳・萬萬歳」と唱へることに定めたのだといふ。初めは天皇を壽ぎ奉る民の聲であつたが、現今では一般國民の間にもこの祝聲を發する風が起つて、慶祝の詞となつた。

【聯隊旗】 レンタイキ 聯隊が編成された時、天皇親しく軍旗を聯隊長に授け、勅語を下し給ふのである。聯隊では聯隊精神の現化としてこれを尊重し、平時常に衛兵を立ててこれを守り、聯隊長指揮のもとに正式行動をなす時初めて聯隊旗を立て、戦時は常に聯隊長の所在にあつて、聯隊と共に行動する。

【聯隊旗が通過するたびに、群集は、我を忘れて萬歳を叫ぶのでした】

「勇ましい兵士を迎へて萬歳の聲は絶えず起りました」と言ひ、更に聯隊旗を迎へて我を忘れて萬歳を叫んだと言ふ。怒濤の寄せ返す如く、澎湃として盛り上り盛り上りする萬歳の聲によつて、巧に民衆の熱狂的な歡迎振りを描いてゐる。

【旗地】 ハタチ 旗の布。

【皆が帽子を脱いで名譽ある旗に敬意を表しました】

作者はむしろ説明的に無感動な筆で叙してゐながら、言葉の底には眞剣なものを潜ませてゐる。矢張その場にあつて、その惨憺たる苦戰奮闘を物語る名譽ある軍旗に心から帽子を脱いだ作者の體驗がこれを裏づけてゐるからであらう。

【一人の老いた白い髯の將軍】 勿論乃木將軍である。將軍は此の時六十三歳の老齡で、白い髯をたくはへられてゐた。

【髯】 ヒゲ 頬ひげのこと。鼻下のひげには鬚、頤のひげには鬚の字を用ひ、何れも「ヒゲ」と訓讀する。

【將軍】 シヤウグン。(一)一軍を統率指揮する官、又その人。大將。(二)勅命を奉じ軍隊を率ひて叛徒を征し、外夷を征する職。初めは四道將軍・陸奥鎮東將軍など臨時に派遣して、その職掌を冠稱したが、源賴朝が征夷大將軍に任ぜられてから、將軍は征夷大將軍の尊稱となり、

それを生徒に讀みとらせたい。

【旅順】 リヨジュン ここは旅順の要塞を指す。

古く滿洲・山東間の水陸の要衝として重んぜられてゐたが、清國は光緒六年(明治十三年)に至り要塞・船渠等を築造し、北洋艦隊の根據地とした。日清戰役後ロシアの租借地となるに及び、ロシアはこの地を以て東亞經路の根據地として、その天險を利用して老鐵山・黄金山・爾靈山等の堅固な要塞を構築し、日露戰爭に當つては、ここに太平洋艦隊の主力を集めて我が海軍に對抗した。我が海軍は前後三回に亘る港口閉塞作業を敢行して露國艦隊の活動を遮斷し、一方乃木大將の率ゐる第三軍は背面よりこれを攻撃し、屍山血河の難戰に挫けず、三ヶ月にわたる力攻強襲の末遂にこれを陥れ、三十八年一月一日を以て開城した。戰後我が租借地となり、初め海軍鎮守府が置かれたが、今は要港部となつてゐる。

【人柄と手柄とを慕つてをりました】

「人柄」「手柄」と「柄」の同音を重ねて柔かく優しい味をだしたのであるが、それが愛慕の心を一層感銘深いものにしてゐる。

【難攻不落】 ナンコウフラク 要害堅固なために、攻撃することが難く、容易に陥落しないこと。

【奉天の會戰】 ホウテンのクワイセン 日露戰役最後の大会戰。

幕府の主宰者の職となつた。(三) 陸海軍の將官。こゝは(一)の意。

【白い馬】 旅順開城の時、露將ステツセル將軍は二頭の愛馬を將軍に贈ることを申し出で、戰後乃木將軍はこれを受領した。即ち壽號と紫號とで、本課の白い馬はその中の壽號である。

【手綱】 タヅナ。

【その中で一人の老いた白い髯の將軍が、白い馬に跨つて、左の手には手綱を持ち、右の手を挙げ、やさしい眼つきで右に左に、兩側に竝んでゐる市民に挨拶をしながら進んで來られました。それは他ならぬ第三軍司令官乃木大將でありました】

初めにそれと名指さずに先づ「一人の老いた將軍」と書きだし次第にその風貌を明にして來て、最後に「他ならぬ乃木大將であつた」と運んで行くあたりは、如何にも行進し行く將軍を眼前に髣髴させる印象的な手法である。

文末に作者はその「優しい眼、その寂しさうな御姿」と總括してゐるが、老の身を馬上に運ばれて、優しく一群集に挨拶されて行かれる將軍の御姿には、たしかにある寂しげな髣髴がある。勿論暗い陰ではなく、崇高といふか森嚴といふか、さうした貴い寂しさが滲みでてゐる。

會戰。

これより先遼陽に破れ(三十七年九月)沙河に敗退した(同年十月)露軍は三十二萬の大兵を奉天に集め、この一舉に頽勢を挽回せんと企てた。我が滿洲軍も、亦この一戰に敵を殲滅すべく、鴨綠江軍及び第三軍の北上を待つて總勢二十五萬。三十八年二月これが包圍攻撃を開始した。敵もさすがに頑強なる反撃を試みたが、クロバトキン司令官の作戦蹉跌して、三月七日に至り遂に退却を開始した。我が軍はこれを追撃また追撃。三月十日奉天を占領し、ここに未曾有の大勝を博して會戰を終へた。我が軍の死傷七萬、敵は死傷九萬、浮虜となるもの二萬餘に及んだ。

【日本海の大戦】 東郷元帥が露國バルチック艦隊を對馬海峡に邀撃してこれを撃滅した海戰(七・皇軍の精神、三九頁既出)

【大切な二人の令息を失はれた】

二人の令息は勝典・保典と言ふ。長子勝典は歩兵中尉として出征、明治三十七年五月二十六日南山の戰に戦死し、弟保典は歩兵少尉で、同十一月三十日爾靈山の攻撃に敵彈に斃れた。

【令息】 レイソク 他人の子息の敬稱。令は「善し」の意で、他人の父母・兄弟・姉妹・夫人等に冠して敬意を

表す語。

【取分け乃木大將は、その爲に大切な二人の子息をも失はれたのですから、誰しも御心をお察ししないものはありませんでした】

次男保典の戦死した時、津田參謀がその事を報告すると、將軍は「その事ならもう知つとる。能く戦死してくれました。これで世間へ申譯が立つ」と言はれたとのことである。小學國語讀本にはまた將軍の心中を「二人の我が子それぞれに死所を得たるを喜べり、これぞ武門の面目と、大將答力あり」と歌つてゐる。巷間に傳はる將軍の言葉やこれ等の歌は、ともすれば表面的に皮相に鶉呑みにされて、唯崇拜景慕が漠然たる根據に立つてゐるものが大部分であらうと思ふ。勿論大將の軍神と仰がれる所以は、御國の爲に一切を捧げ盡して「私」といふものに一顧をも與へない盡忠報國の至誠に存する。併し大將だとして人の子の親である。愛子二人まで死なせた悲しみは言葉にも筆にも盡せるものではない。その言語を絶した悲しみをちつと堪へて、たゞ一寸ちに「お上の爲」と言ふ信念で乗り切つてをられるのが思へば「寂しいお方」であり、また軍神たる所以なのである。「その御心をお察ししないものはありませんでした」と言ふ作者の言葉は、その大將の深い悲しみに對する心からなる同情に生れた

もので、そこを生徒にも理解させたい。

【誰しもその御心をお察ししないものはありませんでした】
【皆が涙ぐみました】

【世間に傳へられて、悲しい思をそられておました】
【誰もしんみりした氣分になつたのです】

右はみな乃木將軍の哀切な苦衷に對する人々の同情を表明した言葉で、ほとんど同一な内容を説明したものである。それを變つた言葉で表現して變化を持たせると同時に感動を漸層的に高めて「寂しいお方だ」といふ結論に運んで行つたのは効果的な手法である。

【指揮】 シキ 指麾とも書く。指圖。下知。

【あゝ大將は、御自分も戦死の覺悟でいらせられるのだから】と皆が涙ぐみました】

陛下の軍人を死なせ奉つたと御詫び申上げ「私は馬車には乗れない體ぢや」と言はれてゐる將軍の心が、戰場に在つてはこの危地に身を曝しての指揮となつて現れたのである。「御自分も戦死の覺悟でいらせられるのだから」と皆涙ぐんだのは將軍のその心中が萬人の心を撃つたからである。「涙ぐみました」には作者の深い感慨が籠つて讀者を動かすものがある。

【出征】 シュツセイ (一) 征伐の軍に加つて戦地に赴くこと。(二) 軍隊に列して征伐すること。ここは(二)の意。

【夫人】 フジン 靜子夫人のこと。父は鹿兒島藩士湯地定之。安政六年鹿兒島に生れ、明治五年(十四歳)父母と共に上京、十七歳麹町元園女學校を卒業。明治十一年二十歳にして將軍に嫁した。四子を生んだが二子は夭折し、残る二子勝典・保典は既述の如く日露戦役で戦死した。大正元年夫將軍の殉死に行を共にした。

【夫人】は支那で(一)古く人の母の稱、又は己の母の稱。(二)天子の妾で、後の次位にあるもの。周禮考土記「夫人以勞諸侯」(三)諸侯の正妻。(四)漢魏以來一般に貴人の妻の敬稱。我が國では(一)古く女官の稱。(二)今は貴人の妻の敬稱。ここは(二)の意。

【お上】 おカミ (一) 主上。みかど。(二) 政府。官廳。(三) 貴族の敬稱。ここは(一)の意。

【私等親子三人は、お上のために命を捧げるのである。この中の一人が討死しただけで葬式を出すな。三つの棺が揃つた上で葬式をせよ】

「悲しい思をそられました」と作者は言つてゐる。二人の子を死なせ、自らも討死して三つの棺を並べて葬式を出せといふのである。唯「悲しい思をそられる」と言ふより言ひ方はない。その悲しい斷腸の思を「お上のため」といふ至純な忠心によつてちつと堪へてをられる所が聖將と仰がれる所以であるが、それはまた何と寂し

い心中であらう。

【そる】 (一) ゆりうごかす。(二) いさなふ。さそふ。ここは(一)の意。

【ひれふす】 平伏すと書く。平伏する、即ち身を平たくして伏しかゞむ。

【忠良】 チユウリヤウ 忠誠善良なること。

【不行届】 フキトドキ 行きとゞかないこと。不注意。

【陛下の忠良な軍人を澤山討死させましたのは、私の不行届でございまして、何とも申譯がございせん」と御詫びを申し上げた】

作者は「何といふ立派なお方だらう」と讃へ、且「誰もしんみりした氣分になつたのです」と語つてゐる。自分の手柄を手柄とし得られないで、返つて陛下のお前にひれ伏してお詫び申上げる將軍の姿は何といふ寂しさであらう。また何と言ふ謙讓な崇高な姿であらう。軍服を纏つた聖僧と傳へられたのも理である。その寂しさと貴さとが誰の心をもしんみりとさせずにはゐなかつたのである。ここでは此の陛下にお詫び申上げた言葉の中に「しんみりした氣分」を讀み取らせ、ここから再出發して人間の完成の域に達した將軍の人格の崇高さを眞に理解させたい。

【しんみりした氣分】 しめやかな氣分。しみじみとした氣分

分。

【私は馬車には乗れない體ぢや。兵卒と一緒にいかう】
危険に身を曝して指揮された將軍、「三つの棺が揃つた上で葬式せよ」と言ひ残された將軍、また忠良な軍人を澤山討死させたとお詫を申上げて陛下の御前にひれふした將軍、その將軍の心情のすべてが言ひ盡された言葉である。

【辭退】 ジタイ 辭して身をひくこと。斷り避けること。

皇師百萬征強虜 (起句)

野戰攻城屍作山 (承句)

愧我何顔看父老 (轉句)

凱歌今日幾人還 (結句)

【凱旋】と題する七言絶句である(七言絶句は二一・我が幼き頃・一四三頁既出)

【皇師】 クワウシ 皇軍。天皇陛下の軍隊。

【強虜】 キヤウリヨ 強いえびす。強國ロシアを指す。

【虜】は敵を罵つて言ふ語。

【野戰攻城】 ヤセンコウジヤウ 野に戦ひ城を攻める。

【何顔看父老】 ナンノカンバセアツテフラウヲミン どうして兵卒の父老に合はせる顔があらうか、面目なく

て合せる顔がない。顔(カンバセ)は面目・體面の意(七・皇軍の精神・四一頁既出)「父老」老翁。老人。ここは兵

卒達の老いた父親達を指す。

【凱歌】 ガイカ 凱旋の時に歌ふ歌。かちどき。

【幾人還】 イクニンカカヘル 生還したものは何人ぞ、誠に寥寥たるものである。

【通釋】 我は天皇の大軍を率ゐて強敵露國の征伐に向つた。或は野に戦ひ或は敵城を攻め難戦苦闘し、死屍山をなす戦死者をだしてしまつた。司令官として將卒を統率する身がかく多くの兵士を死なしめて、どうして彼等の老父達に顔が合せられよう。ををめめと生還する我が身が慚愧に堪へない。思へば出征の時はあの多數であつた兵士の、今凱歌をあげて故國に歸り來つたものはなんと寥寥たることであらう。惨しい極である。

【その優しい眼、その寂しさうな御姿。「あゝ乃木大將は寂しい御方だ」と私は思ひました】

將軍の悲しい心中を物語る幾多の逸事を背景にして、今眼のあたり見るその優しい眼と寂しげな御姿が、作者をして「寂しい御方だ」と言ふ結論に到達せしめた。此の場合「寂しい御方」は誠に將軍の心情を言ひ盡した一言で、本文の全精神もつまり此處に出發し、此處に歸着するのである。

【その御姿はもう見えませんでした】

交、至る哀感に潤んだ涙の眼に、遠ざかつて行つた「その

寂しさうな御姿」が、何時までも残像を留めてゐさうな感である。そして行列も去り、群集も散りいつた後に、多感な學生時代の作者は、眼底に残る將軍の残像をみつ

めながら、何時まびも感慨に沈んでゐたのではなからうか。此の結尾の一句にはその泌々と深い感慨が籠つてゐる。

2 文の構成

第一節 初—一六〇頁五行 戦友の墓に名もない花を捧げて、悲喜交、の心で次々に凱旋した將卒を慰める爲に、東京市

で祝勝大歡迎會を催したこと。

第二節 一六〇頁六行—一六一頁二行 作者が萬世橋の近傍で凱旋將士を迎へた時の光景。

第三節 一六一頁三行—同頁七行 凱旋軍行進の中に作者が拜した乃木將軍の風貌。

第四節 一六一頁八行—終 當時世に知られて世人の深い同情をそゝつた將軍の逸事と、將軍自作の凱旋の詩とを併せ

考へて、今眼前に拜する大將を「寂しい御方だと思つた」こと。

3 文意

凱旋兵士の戦勝の歡びに酔ひ切れない苦衷を敘して乃木將軍の寂しい御姿の前提となし、その氣持で迎へる苦戰奮闘の跡も痛ましい凱旋兵に交つて、白馬に騎乗の將軍の優しくも寂しげな御姿が現れて來る。將軍の姿を拜してゐる作者の心には、當時世に知られた將軍の限らない悲痛な衷情を物語る幾多の逸事が次々に浮んで來る。二人の合息を失はれた將軍、三つの棺が揃つてから葬式をだすやう言ひ残された將軍、多數の兵士を討死させた事を詫びて陛下の御前にひれ伏す將軍、その將軍は「私は馬車には乗れない身だ」と言つて兵卒と一諸に馬上で行進させられたのであり、又「皇師百萬」の詩を詠まれたのであつた。眼のあたり拜する將軍の姿は、これ等の聯想と結びついて「乃木大將は寂しい御方だ」といふ深い感慨を作者に催させた。作者はその「寂しい御方」の中に乃木將軍の軍神と仰がれる所以の崇高さを泌々と感得し

たのであつた。

4 鑑賞批評

特別技巧を凝らした跡もなく、修飾誇張もない。唯見た事、聞いた事のありのままの記述に終始してをりながら、讀者の心を動かす迫力を持つてゐるのは、まだ若い學生時代の純情多感な作者の實際の経験が背景となり、強い感動が基調をなしてゐるからであらう。まづ當時人々に悲しい思をさせた軍歌を出して、既に此處に哀調を漂はして乃木將軍の寂しい姿の前驅としてゐる。これは悪戦苦闘の跡もいたいたしい軍隊の肅々たる行進の中に拜する將軍の優しい姿を寂しく、印象的にし、かくて此處に語られる將軍の哀切な苦衷は、人をして深い同情の涙を注がしめるものがある。「皆涙ぐみました」「悲しい思をそられました」「しんみりした気分になつたのです」と、報告的な極めて簡潔な説明によつて、感動の層を高めて同情の涙にまで至らしめる所、ここにも亦その將軍の寂しい御姿に對する作者自身の深い眞實なる同情共鳴の心がこれを裏づけてゐる事が取擧げられねばならない。作者のこの體驗と感動とは全體的に沁々とした哀感を盛り上げて、これを背景にし、「寂しい御方だ」と作者の感じた將軍の御姿を髣髴として浮上らせてゐる。この眞實なる感動に一貫された所に此の文の生命があり、讀者の胸に強く訴へる迫力が存するであらう。

三 備 考

1 指導研究

(一) 乃木將軍に關する逸話逸事等の既有知識、及びこれに對して加へられた從來の批評鑑賞等の生徒の腦裡に止るのを整理し、或は更に生徒自身の將軍を景慕尊崇する所以のものをも整理して置き、本課の「寂しい乃木將軍」と比較させることは、本課の特異な立脚點を一層明確ならしめるに効果的であらう。

(二) 「乃木將軍は寂しい御方だ」と言ふ結論に歸着する本課の主眼點は、恐らく從來生徒の抱いてゐた觀念と正反對する程に遠い隔がありはしないかと思はれる。旅順を攻略し、奉天に偉勳を樹てた猛將に「寂しいお方」とは、生徒には不満をさへ感じさせるかも知れない。従つて此の徹底的理解はそれだけ困難なものであり、指導の苦心の要する點である。殊に凱旋といふ華やかな概念が先行し、勇猛果敢な奮戦を物語る軍隊の行進がある。豫め相當の注意を拂つてかゝらないと、指導は失敗に終るのではないかと思ふ。

(三) 勿論文を忠實に讀んで行く事である。靜かに沁々と默讀する位の態度で、文全體を一貫する哀調に浸らせ、そこから出發して乃木將軍の眞に寂しい御方であつた事の實感を喚び起して、寂しさに撤した將軍の崇高な人格に新たな景慕尊敬の念を抱かしめるやうにしたい。

(四) 英雄偉人に對する概念的な他律的な尊敬崇拜に終始する生徒に、本課の如き觀點に立脚しての見方の存在する事を知らしめ、從來漠然と尊崇して來た偉人に對し、或は自らの周圍の人に對して獨自の觀點に立つて批判すべき事の意義あり、且重要なることを會得せしめたい。

2 參考

(一) 挿繪 乃木將軍の旅順入城

明治三十八年一月四日撮影のもので、當日の狀況を傳へる貴重な寫眞である。

(二) 挿繪 皇師百萬の筆蹟

凱旋の時の書。侯爵佐々木行忠氏に送つたものである。佐々木侯は佐々木高行の孫、先代高美の長男で京都帝大法科の出身、現在貴族院議員である。

(三) 軍歌「戦友」全文を次に掲げる。

二三 乃木大將

一 こゝはお國を何百里

赤い夕日にてらされて

二 思へばかなし昨日まで

敵を散々こらしたる

三 あゝ戦の最中に

俄かにハタと倒れしを

四 軍律きびしい申なれど

「しつかりせよ」と抱き起し

五 折から起る突貫に

「お國の爲だ關はずに

六 あとに心は残れども

「それぢや行くよ」と別れたが

七 戦すんで日が暮れて

どうぞ生きてゐて呉れよ

八 空しく消えし魂は

離れととほき滿洲の
友は野木の石の下

眞先かけて突進し

勇士はこゝに眠れるか

隣にをつた此の友の

我は思はず駆け寄つて

是が見捨てて置かれうか

假綑帯も彈丸の中

友はやうく顔上げて

後れて呉れな」と目に涙

残しちやならぬ此の身體

長の別となつたるか

さがしにもどる心では

物なと云へと願うたに

故郷へ歸つたポケットに

時計ばかりがコチくと

九 思へば去年船出して

玄海灘に手を握り

一〇 それより後是一本の

ついた手紙も見せ合うて

一一 肩をだいては口ぐせに

死んだら骨を頼むぞと

一二 思ひも寄らぬ我一人

赤い夕日の滿洲に

一三 くまなくはれた月今宵

友の最後をこまごまと

一四 筆の運びはつたないが

讀まるゝ心思ひやり

動いてゐるのも情なや

お國が見えずなつた時

名を名乗つたが始めにて

煙草も二人でわけてのみ

身の上ばなしくり返し

どうせ命は無いものよ

言ひかはしたる二人仲

不思議に命ながらへて

友のつか穴掘らうとは

心しみじみ筆とつて

親御へ送る此の手紙

行燈のかけで親達の

思はずおとす一撃

二 清淨の國

大町 桂月

一 解題

1 作者

大町桂月 オホマチケイゲツ 本名は芳衛。桂月は桂濱月下漁郎の號を約めたもので、桂濱とは郷國土佐の海濱をいふ。明治二年一月高知縣高知市北門筋に生れた。明治十三年母と共に上京し、番町小學校に入學、卒業後二二の私塾に學び、傍ら漢學を修め、後獨逸協會學校に入り巖谷小波と相知り、二十一年杉浦重剛の稱好塾に學び、江見水蔭とも相知つた。在學一年にして第一高等學校に入學。二十六年東京帝國大學國文科に入つた。在學中既に武島羽衣・鹽井雨江・高山樗牛等と雜誌「帝國文學」を發刊し、所謂美文及び長詩・文藝評論等を誌上に發表して夙に文名を馳せた。卒業後羽衣・雨江と名をつらねて、これら美文長詩を集めて「花紅葉」を著し、ついで「黃菊白菊」を刊行するに及んで洛陽の紙價を高からしめた。三十二年島根縣箴川中學校教諭として赴任し、翌年博文館の招聘に應じて上京、「中學世界」の主筆として青年學生の薰陶につとめ、且太陽・文藝俱樂部等に評論の筆をとり、文壇の一角に君臨した。三十八年博文館を辭し、四十二年富山房に轉じて「學生」を主宰して青年層の啓發に當り、老來意氣愈盛であつたが、大正七年「學生」の廢刊と共に氏の文壇生活も漸く終を告げた。晩年は書道と好きな旅行とに親しみ、その足跡は内地はもとより朝鮮滿洲にまで及び、書家としても一家の風格をなす堂々たるものがあつた。青森縣の葛温泉を熱愛し、籍を同地に移したりしが、大正十四年七月同地で胃潰瘍のために長逝した。享年五十七。その日記に自ら書き遺した「清文院桂月鐵脚居士」の戒名には氏の面目

を物語る興味深いものがある。

氏の文章は全く獨創的なもので、その初期に於ける、かの所謂美文の名で呼ばれた絢爛華麗な文章には、當代の青年讀者を眩惑するものがあつた。それが批評家として活躍した全盛期以後に至つては、美辭麗句を離れ、巧に俗語をとり入れ、文語體を口語體同様の自由さで操り、飄逸洒脱の趣を加へた。

著作には前記の他「大絃小絃」「日本文明史」「日本文章史」「源氏と平氏」「關東の山水」「伯爵後藤象二郎」「學生訓」等極めて多種多數であるが、今すべて桂月全集に收められてゐる。

2 出典

桂月全集第十一卷「日本男兒論」の中の「大和魂の本體」なる一篇から抄出した。桂月全集は田中貢太郎の編纂にかゝり至十二卷。桂月三十年間の作品を評論・史傳・修養・紀行・書簡等に分類収載したものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

愛は對象の眞諦を知悉することに基いて顯現する精神である。國土・國體・國民の特質を知ることとは、とりもなほさず「我が國民性ノ特質ト國民文化ノ由來トヲ明ニスルコト」(改正要旨)であり、それを明にすることによつて國を愛する精神は愈々確固たる根據の上に立ち、澎湃として高まるのである。而るに所謂鼓腹擊壤の我が國民は、ともすればその國の特質をさへ忘れ勝である。本課は特に人情の自然なる情趣に訴へて、往々にして忘れられ勝な國土の清淨・國民の清淨・歴史の清淨等我が國の特質を説き、東海の君子國と呼べる、所以の當然なる事を知らしめて、我が日本に對する新なる認識を深めんとするものである。その雄勁なる文章を味ひ、その文意のある所に從ひ、愛國の眞情を誘發し、以て國民精神の涵養に資せん爲の教材として採擇した。

二 解 釋

1 語 釋

【清淨】セイジャウ 清く穢のないこと。十六「富士登山」(一〇七頁)に「ジャウジャウ」と讀むは吳音である。漢語と佛語との讀方に相違ある事に注意。

【特質】トクシツ 特殊の性質。特に他より優れた性質。【我が國の特質は少からざれども】

芳賀矢一博士はその著「國民性十論」に(一)忠君愛國(二)祖先を崇び家名を重んず(三)現世的實際的(四)草木を愛し自然を喜ぶ(五)樂天洒落(六)淡枯洒落(七)織麗織巧(八)清淨潔白(九)禮節作法(十)温和寛恕の十特質を擧げてゐるが、清淨の特質はその(八)に當る。

【日本國民は一般に清淨の美を愛す】

勿論本課はこれが解明を主眼とし、第二節以下文學作品の上について説明を試みてゐるのであるが、尙遑つて考へると往古既に稔き故ふことがしきりに行はれ、これが内面化しては神道に重んぜられる「清明心」「直臣靈」となり、降つては武士道に於ける廉恥廉潔の道となつた。更に例を卑近にとれば、我が國民が世界人種中最も入浴を好むことの如きも、その心の現と見ることが出来るで

あらう。

【一體】イツタイ (一)おしなべて。すべて。(二)元來。もと。こゝは(二)の意。本頁末行の一體は(二)の意。【その心清淨なり。その衣、その食、その家清淨なり。その國一體が清淨なり。清淨の美を解せざる者は到底日本を解するを得ざるなり】

先づその根本たる精神の清淨を言ひ、次に生活の三大要素たる衣食住の具象的事實について述べ、之を「國一體が清淨なり」との結論に導き、更に清淨の美を理解し得ないものは到底日本の眞の相を理解し得ないと強調してゐる。そのひた押しに押し進めて、一分の隙を見せぬ整然たる論理は「なり」と言ふ斷定的な表現の連続と相俟つて、一種雄勁な調子をなしてゐる。

【敷島の大和心を人間はば朝日にほふやまさくら花】

本居宣長の有名な歌である。

【敷島の】 シキシマの 大和の枕詞。懸の意については未だ定説はないが、左に掲げるものは稍信するに足るものと思はれる。「しきしま」は大和國三輪山の邊の地名で、欽明紀に「都を倭國の磯城郡磯城島に遷す」とあるのがそれである。崇仁天皇が長くこゝに都せられて、大和朝

延の基はこの都で定つたのである上に、附近は長く御歴代の都の地にえらばれた爲に有名になつた。「敷島の大和」とつゞくのは磯城島が倭郷に屬してゐる所から、やがて枕詞になつたものであるとの説である。萬葉集に於ては「敷島の大和の國にあきらけく名に負ふ伴の緒心つとめよ」(卷二十・大伴家持)と既に枕詞として用ひられてゐる。敷島は更に轉じて大和國の別稱となり、又日本の總稱にも用ひられ、更に「敷島の道」といへば「敷島の大和歌の道」の略で和歌の道といふ意になる。

【大和心】 ヤマトゴコロ (一)古くは漢學の力あるを漢才と言つたのに對して、我が才のたけ、漢學の力に頼らず獨創的な活動をなし得る心又は氣心を言ふ。今鏡・上・内宴「彼の少納言唐の文をも博く學び、やまと心もかしこかりけるにや」(二)轉じて我が國民特有の忠君・愛國・尙武・廉潔・義侠の精神、即ち大和魂である。大鏡「弓矢の本末をも知り給はねばいかがおぼしけれど大和心かしこくおはする人にて」

【にほふ】 匂ふ (一)聲・香・聲・響などすべてに通じ、映え立つ、うるはしくほのめく、照り映えるなどの意。映發・煥發。(二)専ら色のつやめくこと。つややかなること。艶。萬葉一「紫草のほへる妹をにくくあらば人嬌故に吾戀ひめやも」。(三)専ら香に立つ。香る。薫。

馨。(四)朝日・夕日・月などのほのぼのとす。ほんのりとする。(六)染色のほかし。こゝは(一)の意。

一首の意は「我國特有の大和魂は何かと尋ねられたならば自分は朝日に照り映えるかの山櫻の美しさこそ、その精神の象徴であると答へる」と言ふの意である。「問はば」と言ふ假定に「答へむ」を略した所に一種の餘韻をもたせ、而も内容形式共に極めて簡明で、本文中に説かれてゐる如く、明るく清々しい所が國民の心情に適つてゐる爲に、普く人口に膾炙される所となつた。殊に時恰も幕末の日本精神復興の氣運の勃興しつゝあつた時代に詠まれたので、餘計に一般化したのである。

【本居宣長】 モトヲリノリナガ 鈴の屋と號し、賀茂眞淵門の逸材で國學者四大人の一に數へられてゐる。享保十五年伊勢國松阪に生れた。幼名富助。夙に京に上り堀景山に儒學を學び、武川法眼について醫術を修め歸國して春庵と號して醫を業としたが、賀茂眞淵の「冠辭考」をよんで國學の研究に志した。三十二歳の時賀茂眞淵の來遊を旅宿に訪ひ、その門に入り、以來その研究に専心没頭し、三十五歳より彼の不朽の名著「古事記傳」の著作に着手した。後紀伊侯に聘せられて國學を講じ、晩年京に赴いて中山忠尹の爲に延喜式を講じた。享和元年九月歿。享年七十二。國學の復興に貢獻し國民精神復興の機運促

進に寄與した功績は大なるものがあり、明治十八年從三位を追贈された。その著書は甚だ多く、前記古事記傳をはじめ「歷朝詔詞解」詞の玉緒「萬葉集玉の小琴」古今集遠鏡「源氏物語玉の小櫛」玉勝間「鈴屋集」等は最も著名である。今すべて本居宣長全集十二卷に収録されてゐる。尙宣長については小學國語讀本・卷十一・第十七課「松阪の一夜」を参照されたい。

【愛誦せらるる】アイショウセラるる 愛誦される。「愛誦」は好んで口ずさむ。好んで讀む。「らるる」は自然的可能の助動詞。

【國民精神】コクミンセイシン その國民に共通した固有の精神。即ち國家の爲には自己を犠牲にして盡す國民の意氣風。併し此處は「國民性」を指してゐるやうに考へられる。

【清美】セイビ 清淨の美。

【清々し】スガスガシ さつぱりとして氣持のよいこと。

【空に雲なき時】

歌には空の曇ない事を詠じてはゐない。然し「朝日にほふ」といふ第四句から當然想像せらるべき情景である。生徒をして、翻つて短歌の鑑賞にはかく言葉の裏にかくれたものを、自由な想像により、その言葉を通して讀みとるべき事を知らしめたい。

【清爽】セイサウ 清くさわやかなこと。

【清暉】セイキ 清々しい光。暉は光(名詞)輝く(動詞)。

【櫻花中の粹】アウクワチユウのスキ 櫻花の中で最も優れたもの。櫻に十數餘種を數へるが、清淨優雅の山櫻に如くものはないのである。「粹」は(一)まじりけのないこと。もつばらなこと。すぐれて秀でること。(二)野暮に對して世態人情に通じ風雅でいやみのないこと。こゝは(一)の意。

【映發】エイハツ 光・色彩などのよく映り合ふこと。

【好き道具がそろはば】 條件がそろつたならば。「道具」は極軽い意味に使用したので、單にも、又は條件位の意、即ち清淨を現はすによい條件の意。

【爽快】サククワイ 心氣のさつぱりとして氣持のよいこと。

【何人か爽快を覺えざるべき】

爽快を感じないものがあらうか、誰でも爽快を感じる。「か」は反語の助詞。べきは推量の助動詞連體形。かーべきは係結である。ぞ・なん・や・かの係に對しては動詞・形容詞・助動詞の連體形で結び、そこに對しては已然形終止を用ひる。

【これ即ち】「これ」は「朝日にほふ山櫻花」の清淨美を指してをる。この「即ち」は(一)とりもなほさず。そ

つくりそのまゝ。(二)すぐに。直ちに。こゝは(一)の意。

【本體】ホンタイ (一)哲學上の術語 Notion の譯、現象の因つて生ずる實體。絶對唯一の實體。(二)轉じて物事の實相・真相・正體などの意となる。ここでは「其物の根本的性質」即ち本質・本性の語に近い意味で用ひられてゐる。他のものをもつて代へる事の出来ないそのものの固有の性質をいふ。

【田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞふじのたかねに雪は降りける】

萬葉集卷三にある山部赤人の有名な歌である。新古今集には「頗知らず」として「田子の浦に打出でて見れば白妙のふじの高嶺に雪はふりつつ」と改作載録されてゐる。百人一種にはこれがそのまゝとられたのである。

【田子の浦ゆ】 タゴのウラゆ 靜岡縣富士郡田子村の海濱。もとは庵原郡蒲原町附近の濱邊を指したものである。萬葉集古義(鹿持雅澄著)には「駿河國清見崎より東へ行けば今薩埵峠といふ。山の下の渚に昔道あり。そこより向ひの伊豆の山の麓までの海、田子の浦なり。右の岩陰の道を東へ打出づれば、その入海越に不盡見ゆといへり」とある。北に富士を仰ぎ、西に三保の松原を眺め、山海の景趣は今も尙絶佳である。

「浦ゆ」の「ゆ」は從・自で、この「ゆ」の解釋には異説が多いが、要するに(一)は「より」の意で萬葉集略解(加藤千藤著)萬葉考(眞淵著)萬葉集古義などはこの説により「田子の浦から沖の方に漕ぎ出る」と解する。

(二)は「に」通ふ「ゆ」と見る説で、萬葉考楓落葉(荒木田久老著)萬葉集繪媿手(橋守部著)はこれにより「田子の浦に出てみれば」と解してゐる。今は一般に後者の説が正當であるとされてゐる。

【うち出でて】「うち」は接頭語。單に出でての意。

【眞白にぞ】 マシロにぞ まつしるに。ぞは強めの助詞。ぞーけるの係結になつてゐる。

【雪はふりける】 雪がふつてゐる。けるは感歎の助動詞連體形。

一首の意は「田子の浦に出て眺めると毅然と高く聳えた富士には雪が眞白に降つてゐる。なんとも言へぬ崇高清淨の姿である」と言ふのである。富士の壯觀神聖な眺を詠じた歌は多いが、これ程自然に大きく歌ひ上げたものはない。初めの一二句は字餘りの悠々迫らざる重々しい調をもつて歌ひ來り、それを「眞白にぞ」と強く受けた所、そこに既に作者の富士の靈姿に對する感嘆の情が躍々としてゐる。かくて素直に歌ひ降した「ふじのたかねに雪はふりける」の詠歎にこもる餘情はよく作者の恍

惚境を現してをる。契沖が古今の絶唱と歎稱したのも理である。

〔作者山部赤人〕 ヤマベアカヒト 奈良朝前朝神龜天平の頃の歌人。傳は詳ではないが、聖武天皇に仕へた卑官らしく、その足跡は吉野・紀伊・難波・伊豫から東國下總にまで及んでゐる。萬葉集には長歌十三、短歌三十七が收められてをり、柿本人麿・山上億良と共に三歌聖とよばれてゐるが、自然觀照の獨自な點と、その纖麗澄徹した歌調に至つては彼の右にでるものはない。本課の歌はその東國旅行の途次になつたもので、次に掲げる長歌の反歌である。

山部赤人望_二富士山_一歌一首並短歌

天地の わかれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高嶺を 天の原 ふりさけみれば わたる 日の かげも隠ろひ てる月の 光も見えず 白雲も いゆきはゞかり 時じくぞ 雪は降りける 語りつぎ 言ひつぎゆかむ 富士の高嶺は。

〔綠波一面〕 リヨクハイチメン 海面おだやかに、波が一面に綠色に見えること。

〔何所〕 イヅコ 普通「何處」と書く。

〔扶桑〕 フサウ (一)東海中にあるといふ大きな神木(二)轉じてその神木のある日出づる處の國。十洲三島記に

〔綠波一面。鏡の如き田子の浦、そのあなたに何所より見ても形の變らざる扶桑一の靈山の、八朶玲瓏天を擎けて立てるは、こもまた清淨の極みにあらずや〕

靈山富士の清淨崇高雄大な美を一氣に言ひ降した勢に、雄健の氣魄が溢れてゐる。所謂名文とは蓋しかゝる文の謂であらう。「扶桑一の靈山」といひ「八朶玲瓏」と形容し、「天を擎けて立つ」と敘する。一語として富士にふさはしからぬはない。よく赤人の歌境を言ひ盡したものと云ひ得る。

〔喧傳〕 ケンデン やかましく言ひ傳へる。物珍しく言ひふらす。

〔畢竟〕 ヒツキヤウ つまり、つまるところ。

〔この美の琴線に觸れたればなり〕 清淨な美の核心眞髓に共鳴したからである。

〔琴線〕 キンセン 琴の絲。琴線は極めて細く、ものにふれる時如何にかすかでも必ず鳴るので、轉じて感じ易い心情、感動して共鳴する心を言ふ。ここではその共鳴感動を起させる「核心」「眞髓」位の意で用ひてゐる。

〔月雪の中や命のすどころ〕

其角の五元集に出てゐる。冬の句、一句の意は「眞白に降り積つた雪の上には皎々たる寒月が冴えてゐる。眞にこれ清淨の極、男子の命の捨て場としてこれに如く所が

「扶桑在_二碧海之中_一、地多_二三林木_一、葉皆如_レ桑」とあり、又張衡文の西京賦に「象_三扶桑與_三濛汜_二とあり、註に「扶桑日出處、濛汜日入處」とある。(三)古支那人が日本を指して呼んだ異稱。ここは(三)の意、日本國の異稱。

〔靈山〕 レイザン (一)神社佛閣などの祀つてある山。靈山比叡・靈山高野などいふ。(二)崇高靈妙の感を抱かせるやうな高山・深山をいふ。「山靈います」と想像して言ふのである。ここは後者で、富士には官幣大社淺間神社(木花咲耶姫を祀る)が鎮座しますが、その爲の靈山ではなく、八朶玲瓏、天を擎けて立つ富士は、それ自身崇高靈妙なのである。

〔八朶〕 ハチダ 八片の意。「朶」は枝。枝の分れてゐる所から轉じて花瓣のことを言ふ。富士はその嶺が八つに分れてゐるので蓮花に譬へて「芙蓉峰」或は「八朶の芙蓉」などの美稱がある。

〔玲瓏〕 レイロウ 美しく透徹して光り輝く様(一六・富士登山・一〇二頁二行既出)

〔天を擎けて〕 擬人法である。この天を指し擧げて立つてゐるといふ擬人法は、富士のどつしりと大地に裾野をひろげて、高く天を壓し、毅然と聳え立つ姿を如實に現してゐるではないか。

〔こもまた〕 これも亦。「こ」は事物代名詞近稱。

あらうか」といふのである。吟じられた時、その動機等は次の本文に詳しいが、實に格調の高い雄健豪快な句である。

〔作者榎本其角〕 エノモトキカク 蕉門十哲中第一に推される俳人。晋子・狂言堂などの別號がある。寛文元年江戸堀江町に生れた。本姓竹下、母方の姓を名乗つて榎本といひ、後、寶井を名乗るに至つた。少年時代既に儒を服部寛齋に、醫を草刈三越に、詩を大嶺和尚に、書を玄龍、書を英一蝶に學んだ程の早熟の天才兒であつた。芭蕉の門に入つたのは延寶の初、彼の十三歳頃だと自ら言つてゐる。天和三年蕉風開發の先頭と見られる虚栗を編纂してから俳名が頓に上つた。以來彼の俳諧は蕉風の進みと平行して發展し、彼の俳諧集は連年發表されてゐる。その間京阪近畿旅行・箱根木賀温泉行・京洛湖南旅行・最後に悲しい師芭蕉の終焉に會した京阪近畿湖南旅行など、しばしば各地を巡歴して蕉風普及に力を致した。芭蕉歿後江戸座を開いて自ら牛耳を執つたりしたが、その句は晩年に至り次第に墮落した。寛永四年二月歿。享年四十七。人となり豪宕磊落、才氣縱横の江戸つ兒であつた。随つてその句も亦活達豪壯で、着想奇警人の耳目を驚かす底のものが多し。

〔十四夜〕 元祿十五年十二月十四日。四十七士仇討の夜で

あることは普く知る所である。

【寒月】 カンゲツ 冬の月。冴えきつた寒々しい冬の月。【積雪白うして四邊に聲なく、十四夜の寒月ひとり天に冴えたり】

関として人音の絶えた沈々たる深夜、皎々たる寒月にきらめく月、月雪の夜景をうつして餘す所がない。誠に清冽の極、凜冽肌にみみるの概がある。

【氷刃】 ヒョウジン 氷の如く磨ぎすました刃。

【煌かし】 ヒラメかし。

【亡君】 バウクン 既に亡くなつた主君。ここは淺野内匠頭長矩である。淺野長矩は播州赤穂の城主、延寶八年從五位下に叙し内匠頭といふ。元祿十四年三月勅使下關の事があり、長矩は伊達宗春と共にその接待役を命ぜられた。そこで故實禮法の指導を吉良上野介義央に乞うたが、義央は愆心が深く、長矩が贈賄しなかつたことを含んで、十四日答詔の禮に先立ち長矩の禮に味いことを面罵した。これに激怒した長矩はつひに義央を殿中に刃傷した。そのため、即日芝の田村邸に送られ、命により切腹し、城池は没收された。年三十五。四十七士の義舉はその復讐のためであつた。

【四十七烈士】 赤穂四十七士 烈士は節義堅固の忠烈な士（一八・肉弾三勇士・四六頁一行既出）

【多血性】 タケツセイ 多血質のこと。人の氣質の分類の仕方は種々あるが、普通よく知られてゐるものはヴントの分類した次の四種である。(一)多血質(決活で刺戟を受け易く、感動興奮し易いが、持続する力が弱く、冷却し易く忍耐力が乏しい)。(二)神経質(情緒の興奮が強く、感應變化が速く、細心緻密であるが、憂鬱で活氣に乏しく、優柔不斷である)。(三)膽汁質(興奮感動が緩慢で、沈着冷靜忍耐力が強く、意志が強固である)。(四)粘液質(知に偏せず、情に傾かず、概して平穩であるが、感受性が遲鈍で熱心活氣に乏しい)。

【快男子】 クワイダンシ 氣象のさわやかな男らしい氣持よい男。

【義士】 ギシ (一)節義堅固の士。(二)赤穂四十七士をいふ。ここは(二)の意。

【大高子葉】 オホタカシエフ 名は忠雄、通稱源吾、子葉はその俳號である。赤穂四十七士の一人。淺野長矩に仕へて中小姓となり後に膳番元方を兼ねた。俳諧をよくし水間沾徳の門に學び、江戸に來ては其角等と交り、又茶道にも通じてゐた。藩主長矩の報復の擧に參じ、初京都にあつて大石良雄を中心し、後江戸に移つて姓名を變じ、脇屋新兵衛と稱し、吉良義央に親しい茶人羽倉齊と交つて敵の内情を探つた。元祿十五年十二月十四日

【天も清し。地も清し】

句を疊んでゐる表現で息もつがせぬ引きしまつた感じを出してゐる。

【當夜】 タウヤ (一)今夜。(二)その夜。ここは(二)の意。

【吉良邸】 キラテイ 吉良上野介義央の邸宅。江戸本所松阪町二丁目。今の東京市本所區本町の回向院の裏手邊に當る。

【隣屋敷にて催されし俳會】

吉良邸の北隣の土屋主税邸と傳へられてゐる。これは世に傳はる其角の書といふものに基くもので、その大要は十四日夜都文公(主税の俳號)の邸に嵐雪・杉風等の諸友と忘年の俳會を催した。時恰も義士討入の夜に當り、仇討の届に來た大高源吾と對談したといふのである。併し史實によれば土屋邸に來たのは片岡源五衛門・原惣右衛門・小野寺十内の三士であるから、この説は怪しいものである。尙一説には東隣本多孫太郎邸と言ひ、又は表門前の牧野長門邸とも言ふが、何れも確證はない。要するにこゝではさまで史實的考證の必要はないので寧ろ其角の説の如く取扱つた方がこの場合適切であらう(其角書は參考欄参照)

「俳會」は俳句の會。句會ともいふ。

同志と吉良邸を襲つて遂に本懐を遂げ、翌十六年二月死を命ぜられた。享年三十二。

【無量の感慨】 ムリヤウのカンガイ 量り知れない程の深い感慨。「感慨」は(一)物事に感じなげくこと。(二)心にしみみて深く感ずること。ここは(二)の意。

天も清く地も清く、人もまた清廉な義士である。天地人すべて清淨。これに對するは「元來多血性の快男子にして清淨の美を解せる」其角その人であり、而も俳友子葉が義士の中に加つてゐるのである。「無量の感慨」はそこに自ら浮び上つて來る言葉である。誠に理路整然餘す所なき運筆ではないか。尙此の無量の感慨は其角書翰と稱するものに詳細に述べられてゐる。(參考欄参照)

【十七文字】 ジフシチモジ 俳句のこと。和歌を三十一文字と言ふのと同じ言ひ方である。

【復讐】 フクシウ 仇討。

【眞況と本體】 シンキヤウとホンタイ 眞の情況と真相。

この「本體」は物事の實相・真相などの意である。一六七頁五行の「大和魂の本體」と比較考究させたい。

【清淨の美を極めたりと謂ふべし】 此の上もなく清美化して表現したものと云ふことが出来る。「美を極めたり」は美を極めてよく表現してゐるの意。「謂ふ」は「言ふ」に同じく唯「謂ふ」には「報する」「告げる」「評して謂ふ」

などの意がある。「べし」は可能の助動詞。

【歌】 歌には長歌と短歌との二様があるが、後世長歌は廢れてしまつた。こゝは俳句と並べて主として短歌を指してゐる。

【俳句】 ハイク 俳句については既に小學校に於ても取扱はれてをり、大體の概念を持つてゐる筈である。此處ではそれを簡單に整理したい。即ち「俳句」とは明治二十三年頃正岡子規の用ひ始めた語で、もと發句といひ、俳諧連歌の第一句の名稱であつた。これが後獨立して一體をなした。五七五の三句十七音を本體とし古來必ず季語を入れるならひであり、また切字の法などもある。

【名句】 メイク 「名」は接頭語で(一)名高い。(二)すぐれたなどの意を表はす。こゝは(二)の意。句は和歌俳句漢詩の五字又は七字の一切を言ひ、又別に俳句のことを言ふ。こゝは俳句をうけて「名句」と言つたのであるが、「すぐれた俳句」の意ではなく「すぐれた和歌俳句」即ち「秀逸」位の意に用ひられてゐる。

【清美を捉へたるものなるが】 生徒の知識の中からさうした和歌俳句など探し求めるのは興味深いであらう。試にその二三を挙げよう。ひむかしの野にかきろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ。(萬葉集卷一、柿本人麿)

和歌の浦に潮満ちくれば潟をなみ蘆邊をさして鶴鳴き渡る。(萬葉集卷六、山邊赤人)

水底の玉さへさやに見ゆべくも照る月夜かも夜のふけゆけば。(萬葉集卷七、作者未詳)

白露をこぼさぬ萩のうねりかな 芭蕉
白菊の目にたててみる塵もなし 同人
ぬけがけの手綱ひかゆる吹雪かな 召波

【美術】 ビジュツ 空間ならびに視覚の美を表現する藝術。繪畫・彫刻・建築・工藝等の造型美術のこと。

【文藝】 ブンゲイ (一) 文物と學藝。又は學問と技藝。(二) 詩歌・文章・小説・戯曲等のやうに美的現象を思想化して表現した藝術作品のこと。美術文藝とならべる場合は勿論(一)の意である。尙少しくこれを詳述すれば、一般に言語を媒介とする作品を廣く文學と呼ぶ。その文學は更にこれを「創造文學」と「記述文學」とに分つことが出来る。後者は歴史哲學科學等を含み、前者は詩歌小説戯曲等所謂純文學と呼ばれる藝術作品である。この創造文學を文藝と稱するのである。

【この心の結晶ならざるはなし】 この清淨の美を理解しこれを把へ得た心、更に端的に言へば清美の精神の結晶でないものはない。「結晶」は化學上の術語、數個の平面をもつて限られた規則正しい立體で、天然に生成し、その

組織の一定したもの(二)、大和言葉・一〇頁一行既出。用法もそのこと同じである)

【然り】 シカリ 「しかあり」の略。その通りである。

【外國趣味】 グワイコクシュミ 日本人本來の淡白清楚な趣味に對し、外國風の濃厚な好みを言ふ。

【妖艶】 エウエン なまめかしく艶々しいこと。なまめいて美しいこと。けばけばしく美しいこと。

【蓮】 ハス はちすともいふ。睡蓮科、睡蓮屬の多年生草本。根莖は肥厚長大、葉は長柄・圓錐形全縁である。花は大形で長梗を有し、紅・白等の諸色がある。萼片は四枚乃至五枚、瓣片は多數で倒卵形をなしてゐる。雄蕊も多數である。花絲は短く、花托は倒圓錐形で、堅果は各自花托の凹所にある。花候は夏。水田・沼池等に栽培せられ、地下莖・種子及び若い葉は食用とする。原産は溫帯アジア。

【日光】 ニツクワウ 栃木縣上都賀郡日光町。日光山(二荒山とも言ひ、最高峰は男體山である)の東麓に位し、大谷川の清流をはさんで町をなす。東照宮及び二荒山神社等の所在地として古來有名である。

【東照宮】 トウセウダウ 日光町にある、別格官幣社。祭神は徳川家康。相殿に源頼朝・豊臣秀吉を配祀する。元和三年二代將軍秀忠が遺命によつて此處に廟所を設け、

駿州久能山から靈柩を移した。寛永元年に至り、三代家光は諸侯に命じて大いに廟宇を修覆し、規模を盛にし、十三年漸く工を終へた。幕府が直接支辨した金額だけで百萬兩に上つたといひ、國內の諸藩は勿論琉球・朝鮮等の外國まで、何れも應分の寄進寄贈をしてゐるのであるからその總工費たる蓋し莫大なものであつたらう。その結構は壯大で、有名な陽明門をはじめ、唐門・拜殿・本殿等すべて絢爛華麗、目もまばゆい建築・彫刻・繪畫等の日本美術の粹を集め、現在國寶としてその壯麗無比なるは全世界の普く知る所である。後正保二年後光明院から宮號を賜はり、以後日光山・久能山を首め全國の東照大權現は、從前の呼名を改めて東照宮と呼ばれるやうになつた。別格官幣社に列せられたのは明治六年である。

【淺草の觀音堂】 アサクサのクワンオンダウ 東京市淺草區淺草公園内にある淺草寺。金龍山と號する。俗に淺草觀音堂といふ。本尊の觀音は一丈八分の金像である。本寺緣起によると、推古天皇の三十六年三月土師臣中知といふものが、その臣濱成・武成と宮戸川(隅田川下流の古稱)に魚網を投じた時、その尊像がかゝつたので、主従は驚き奉持してここに一字の堂を建てて安置したといふ。後大化九年海勝上人が東行の途次この地に寶塔を建立した。これを當寺の開山としてゐる。現在の堂宇は慶

安中將軍家綱の造營にかゝり、七間四方單層の入母屋造で四方に縁を廻らし結構壯麗を極めてゐる。公園は淺草寺の舊境内であつて、園中には尙仁王門・五重塔等が残つて古の面影をとどめてゐる。

【華麗】 クワレイ うつくしく、はなやかなこと。

【伊勢の神宮】 イセのジングウ 伊勢大神宮。伊勢國（三重縣）度合郡宇治山田市にあつて内宮と外宮とに分れてゐる。

内宮は天照大神を奉祀し、その御靈代として八咫鏡が安置されてゐる。

崇神天皇の六年に大和笠縫邑に社殿を營んで納められ後八十餘年を経て垂仁天皇の二十五年大神の御托宣があつて皇女倭姫命に命じて鎮座の地を求めしめ給ひ、倭姫命は地をここに相して神宮を奉建してこれを遷祀し奉つたのである。

外宮の祭神は豐受大神で、もと丹波國眞名井原にあつたものを、雄略天皇二十一年御夢の神誨によつて今の地に奉遷せられたもので、皇大神宮の五十鈴川上に鎮座せられてから四百八十二年の後のことである。

往時は皇女を以て齋宮として兩宮に奉仕せしめられたが、武家時代に至つてその事が絶え、明治維新後は皇族を以て祭主として祭事を司どらしめ給ふこととなつた。

た。又神宮の御造營は上古持統天皇六年に二十年毎に造營の制を定められたが、中世に於て廢絶し、明治維新に至り明治天皇がこれを復興せさせ給うた。社殿の構造は兩宮とも同じく所謂唯一の神明造り、白木の素朴な莊嚴なすべからざる形式である。凡そ神宮に入るものは兵仗を帯びることを許されず、又僧徒は神境に入ることを得ない定がある。

因に大神宮の「大」の字は古くは「太」の字を用ひたものであるが、明治五年九月太政官布告によつて「大」の字に改められたものである。祭は十月十七日の神嘗祭の他に二月の祈年祭、六月十二月の月次祭、五月十月の神衣祭がある。

【詣でんか】 マウでんか 參詣するならば。「詣づる」はまゐいづの音便。(一)來る。至るの敬語。參上する。まゐる。(二)神佛に參詣する。ここは(一)の意。「ん」は推量助動詞。「か」は疑問の助詞、「詣でた」としようか、然らば」の意。

【神路山】 カムヂヤマ 天照山ともいふ。

伊勢大廟の神苑をめぐり、更に南に連り志摩國磯郡神原に至つて居り、密樹鬱蒼として、森嚴な背景をなしてゐる。

【千木】 チギ 肱木の略。知木・鎮木とも書き、又氷木(比岐とも書く)片削などの名もある。社殿の屋上・破風の

兩端に交叉してゐる木。太古家屋を建てるに木材を左右から交叉したのを結びとめ、その先端を切り捨てなかつた遺風であるといふ。後、建築様式が變遷して、破風と千木とは切り離され、たゞ棟上に取附けた一種の裝飾となり、今は神社建築にのみ用ひられる。内宮の千木は水平に殺がれてをり、外宮のは垂直に殺がれてゐる。

【高知れる】 タカシれる 「高知る」は治め給ふ。領し給ふ。しろしめす。「高」は尊敬を示す接頭語。神武紀「峻(タカ)時博風於高天原」萬葉卷一「御あらかは高知らさむと」

「千木高知れる」は「千木を空高くそびえしめる」意であつて、祝詞に最も多く用ひられてゐる語である。

【そぞろに】 「すずろ」に同じ。何のわけもなく心の進むさま。何といふことなく。わけもなく。

【西行】 サイギヤウ 鎌倉初期の歌僧。俗名佐藤義清。藤原秀郷九世の孫、左衛門尉康清の子。兵法に通じ射をよくし、初め鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり、左兵衛尉に任ぜられ、歌才をもつて殊寵をうけた。保延六年二十三歳にして嵯峨に入つて僧となり、圓位又は西行と稱した。以來一生を行脚に暮し、その足跡は全國に及び、晚年洛東雙林寺の邊に草庵を結んで閑居し、建久元年二

月寂。享年七十三。歌人としての彼の優れた位置は、全く自然に融合し、自然より生れたその詩境にある。歌集に「山家集」がある。

【西行の歌】 なにごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる

「おはします」 御座ます。おはすの鄭重語。「おはす」はあり。をり。くる。行くの敬語。(二)我が幼き頃、一四一頁既出)

「かたじけなさ」 形容詞「かたじけなし」の語幹にさのついた名詞。(一)かじこさ。もつたいなさ。(二)ありがたさ。よろこばしさ。(三)恥しさ。面目なさ。ここは(一)の意。一首の意は「大廟の前にひさまづくも唯々勿體なさで涙がこぼれる」と言ふのである。「なにごとのおはしますかは知らねども」は「如何なる尊い神様が鎮座しますかは知らないが」といふ風に解釋される傾があるがそれは謬である。西行が祭神を知らぬ筈はない。たゞ「何といふわけかはしらぬが」とか、「どうした原因か知らないが」とかいふ漠とした疑問的表現を、敬語を以て示したのである。敬語的表現をとつたのは、大廟の森嚴さを示さんが爲である。更に端的にいへば、なにごとなどと心を動かす餘地がないのである。餘りに嚴肅な餘りに莊嚴な感に打たれて唯、わけもなく頭が下つてしまふ。その感が

「なにこのおはしますかは知らねども」である。いみじくも言ひ得た句である。これだけの中に、かたじけなさに涙をこぼして頼いてゐる西行の姿の躍如たるものがある。

【しのばるる】 偲ばるる。「偲ぶ」は思ひだす。思慕する。(一三)野火止の用水、八九頁既出。「るる」は自然的可能の助動詞の連體形。

【しのばるるを覚えすんばあらず】 思ひ出さずには居られない。覺ゆ(オボゆ)は(一)おもはれる。心にさとる。(二)記憶する。(三)教へられて知る。(四)似る。あやか(古語)ここは(一)の意。「すんばあらず」は「すばあらず」の音便。

【神宮に向かつて】 「向かつて」は「對して」の意。

【壯大を極む】 サウダイをキハむ 「壯大」は(一)さかんに大いなること。大きく立派なこと。(二)わかざかり。壯盛。ここは(一)の意。「極む」は「窮む」に同じ。(一)極度までおしつめる。(二)定める・決定する。(三)深く研究する。(四)つくす・終る。こゝは(一)の意。

【素質】 ソツツ (一)本來具有する性質。(二)將來發展の基因となる性質。ここは(一)の意。

【若し神宮に向かつて壯大を極め、華麗を求むる者あらば、これ眞の日本國民たる素質に缺けたる所ある者と言はざる

懲惡を主とした馬琴の讀本となり、又俠客風の強きを挫き弱きを助ける物語となつて現れてゐる。これこそ我國民傳統の特性の發露とも言ふべく、右の文は簡にしてよくこれを列擧し盡したものと云ふことが出来る。

【風流さへ解し】 フウリウ みやびやかな趣味をさへよく理解し。「風流」はみやびやかなたしなみを言ふ。みやびやかで俗でないこと。「さへ」は「あるが上にまた」の意を表す助詞。

【物のあはれ】 我が平安朝文學の核心をなす理念で、「もの」即ち「對象客觀」と「あはれ」即ち「感情主義」とが合一調和するところに生ずる美的理念である。平安朝文學は「ものあはれ」が發生し成立し爛熟してゆく過程であるといわれ、その最も完成されたものが源氏物語である。以來この言葉は和歌に、物語に極めて屢、用ひられた。その精神は日本文學を貫いて流れる一つの重要なものである。「あはれ」は今専ら悲しい・かあいさうだなどの意に用ひられてゐるが、本來あゝあつばれな

2 文の構成

第一節 初—一六六頁五行 日本國民は心・衣・食・住すべて清淨で、清淨の美を愛する事が我が國民の最もいちぢるしい特質たる事を總論的に述べて全文の序をなす。

第二節 一六六頁六行—一六七頁六行 本居宣長の「敷島の」の歌が國民精神の清美を歌つたものであつて、大和心は

べからず】

假説を前提として斷絃してゐる。一種の説疑法であるが「眞の日本國民たる素質を缺ける所ある者」とは實に強い思ひきつた斷定である。

【滄海】 サウカイ 青々とした海。あを海原。

【開闢】 カイビヤク 天地の開けはじめ。世界のはじめ。

【しかのみならず】 「加之」と書く。その上。かてて加へて。

【邪を排す】 ジャをハイす 邪は正の對語。不正。よこしまなこと。不正なるものをおしのけ退ける。

【直・曲】 チヨク・キヨク 對語。

【弱を扶け強を挫く】 弱強は對語。弱いものを助けて強惡なるものをとりひしぐ。この場合の「強」は強惡の意味。

【克く忠に】 ヨクチュウに 克は「能く」と註するけれども

稍重。成し難いことをしはたすの意。従つて「克く忠に」は萬難を排してよくその忠道を全うして來たの意である。克く孝に・克く義に・克く勇にはみな同様である。

【我が國民は善を好みて惡を憎み、正に就きて邪を排し、直を愛して曲を嫌ひ、弱を扶けて強を挫き、克く忠に、克く孝に、克く義に、克く勇に】

これ等我が國民の徳性に就いては一々列擧するまでもなく、我が光輝ある歴史が雄辯にこれを物語り、或はそれは義夫・烈婦・孝子を列記した大日本史となり、或は勸善

どの感動詞で、轉じて「ああ」と深く心に感ずるにいひ、名詞としては情趣といふ意となる。即ち有情の人間が感じ易い心で客觀的對象に接する時におこる感動が「あはれ」である。

本課では「何かにつけてしみじみと感ずる情趣」位に解しておけばよい。

【東海の君子國】 トウカイのクンシヨク 淮南子に「東方有君子之國」とあるによつて、我が國をかく呼ぶやうになつた。君子國は風俗醇良にして禮儀の正しい徳のたかい紳士の國の意。君子は(一)才徳高い人の稱。論語述而「聖人吾不得而見之矣。得見君子者、斯可矣」。(二)位にある者の稱。論語顔淵「君子三徳風、小人三徳草、草尙ニ之風必偃」ここは(一)の意。

【宜なるかな】 ウベ(ムベ)なるかな。まことにもつとも事である。「うべ」はげにも・なるほど・道理でなどの副詞。「かな」は感歎の助詞。

即ち清淨の粹なること。

第三節 一六七頁七行—一六八頁二行 山部赤人の「田子の浦ゆ」の歌が名歌として世に喧傳されるのは富士山の清淨の美を餘す所なく歌つてゐる爲であること。

第四節 一六八頁三行—一六九頁二行 其角の「月雪の」句が復讐の眞況とその本體とを把へ得て清淨の美を極めてゐること。

第五節 一六九頁三行—一七〇頁五行 日本國民の清美を愛する特性は美術文藝に限られず、花に對する趣味より建築上にも現れてゐる事を述べ、その代表的なるものは伊勢の神宮なること。

第六節 一七〇頁六行—終 日本が東海の君子國と呼ばれる所以は國土・歴史・國民すべて清淨なる爲であることを敘して文を結んでゐる。

2 文意

我が國の特質中の特質とも稱すべきものは清淨の國なることを論證した文である。これをまづ心・衣・食・住の清淨なることに論を起し、「敷島の」「田子の浦」の歌、及び「月雪の」の俳句の秀歌名句として世に喧傳されるのは、それが清淨の美を極めたるが爲なる事に論及し、更にその論鋒は文藝の他、花に對する感から建築に及び、その代表的なものとして伊勢の神宮の清淨の美を極めてゐる事を敘してゆく。かくて之を要するに我が日本が古來東海の君子國と呼ばれる所以のものは如上の國土の清淨・國民精神の清淨・歴史の清淨等によるものなりとの結論に到達してゐる。誠に理路整然として所論堂々たりと言ふべきである。

4 鑑賞批評

一言之を蔽へば明快雄健の文章である。殊に漢文調の系統を引く對句形式を多く用ひ、而も終始斷定的な現在形なり。

を連續して、ひた押しに論理を押し進めてゐる筆致は、全文を雄勁な氣魄滿々たるものにしてゐる。

一讀漢文調の文語體でいかにも堅苦しく感じさせもするが、その論證の根據を和歌・俳句・美術・文藝・建築等の藝術に置いて、専ら人情の優雅な情趣に訴へて行くことによつて、その堅苦しさの中に一條の柔かみを持たせて、その難を救つてゐるのである。確かにその歌を朗誦し、その俳句を微吟することに依つて、讀者は日本人的な感情の油然として湧き來るのを感じるであらう。又その和歌俳句等は人事自然を敘して、解釋のし方によつては自ら別趣の味ひを持つべきものであるが、併し氏はすべてこれ我が國の特質中の特質たる清淨の美の至極の表現なりと斷定し、而もこの斷定を導くに理路整然たる論法を以てして、何等牽強附會の感を抱かしめないのみならず、寧ろ徹底したその解釋鑑賞が、これに新しい生命をすら與へてゐると思はれるのである。

最後に氏は藝術の方面から一轉して、これを歴史の清淨と外國に比なき我が國民性の徳性に結びつけて論旨を進めてゐるのであるが、その息もつかせず疊かけて、ぐんぐんと進められる論鋒の鋭どさ、文意の全局がここに急迫してゐる概があつて味ふべきである。蓋し議論的説明文として、堂々たるものと言ふべきであらう。

三 備 考

1 指導研究

(一) 「清淨潔白」の特性は既に國民性十論の説く所であり、此に作者を俟つまでもなく各種の機會を通じて論じられて來た國民知悉の特性である。唯本課の特色はこれを文藝美術感情に即して説き示した所に存するのである。従つてその特色を離れず、飽まで情趣に即してその點から題意を滲みこませて行くといふ風な指導が要求されねばならない。その爲には例證として引かれた「敷島の」「田子の浦ゆ」などの和歌及び俳句の鑑賞などが、相當重大な意義を持つ事を思ふべきで

ある。

(一) 言々句々の間に漲る作者の熱意も亦見落すべからざるものである。それは作者が清淨の美を愛する熱意であり、更に言へばそれは國家を愛する精神の發露である。その熱意が基底にあつて、この文に迫力があり、氣魄がある事を念頭に置いて讀んで行かなければならない。

(三) 本教科書始めて讀む現代文語文であり、語句文法をはじめ、形式的に理解し難い部分が多いやうである。特に此の方面の檢討吟味もかなり徹底的に行はるべきであらう。

(四) 「清」「美」「正」「強」「直」などの語は、實はその内容に一脈相通するものがあること、及び「邪」「惡」「曲」「不正」など「汚」「穢」と同じく古く古事記・書紀等には「きたなし」と訓じて「清」の反對の内容を持つ語である事を、この機會に説明理解せしめると共に、古代から我が國民が清淨を愛する精神に厚かつた事を附記して、一層我が國の特質たる傳統的な清淨を愛する國民性への自覺を促したい。

2 參考

其角が俳友文璣と號した佐竹の藩士梅澤半右衛門に贈つたといふ手紙を次に採録する。當夜の概況と本文の「無量の感慨」を窺ふに足る興味深いものである。但しこれは其角のものかどうか今眞偽未詳とされてゐる。

然ば去十四日本所於三郡文公（土屋主税）歳忘之一興御催有之、風雪・杉風・我等も出席にて、折から雪面白く降出し、風情手に取ることく、庭中の松杉は雪をいたゞき、雲間の月は晴間を照し、風興今は難捨して夜ただ更け行くまゝ、最早丑みつ頃となり行、犬さへ吠えず、打靜まり、文臺料紙も押かた奇、四五人集りて蒲團をかつき、夢のうき世をいふ間もあらせすけはしく門を叩く兩人、玄關に案内して我等は淺野家の浪人堀部彌兵衛・大高源吾にて候。今夕御隣家吉良上野介屋敷へ押寄、亡君年來之遺恨を果さんとて、大石内藏助を初め四十七人門前に相イみ、只今吉良氏を討果し候處、近隣之御好み、武士の情、萬一御加勢も候はば、末代之御不覺と奉

レ存候。願くは門戸嚴敷御防、火之元御用心被下候はば奉奉存候と、云も果せず立出る。其勢神妙なることいふべきもあらず。今は俳友も是迄なりとて、其角幸に爰に在り、生涯の名残を見んとて、門前に走り出なば、おのゝ吉良家へ忍び入し程に、

我が雪とおもへば輕し笠のうへ、

と高々に一聲呼り、門戸を閉て内を守り、擗越に提燈を立て、始終を窺ふに、其哀さ骨身にしみ入、女の叫び、童子の泣聲、風颯々と吹きさそふ。曉天に至り候へば、本懐既に達したりとて大石主税・大高源吾釋便に謝儀を述たる事、武士の譽といふべきなり。

日の恩やたちまち碎く厚氷

と申捨てたる源吾が精神、いまだ眼前に忘れがたし、貴公年來之入魂ゆへ、具に認め進申候。早春迄彼は御差續候御出府も候はば彼落着も承届、無餘儀伏劔に及申候はば、竊に追善を相營み可申候。先は餘白も無之、書餘期貴面之時候。恐々謹言

十二月二十日

其 角

文 璣 様

月雪の中や命のおき處（一に捨處）

寒菊や古風の残る硯箱

漢文 初歩

一句例(一)

要旨

本課はまづ國文と漢文との相違點を悟らしめる事に出發し、更に最も平易なる形式の漢文によつて、句讀法・送假名法を會得せしめる。

解説

【國文と漢文】

本句例の漢文は構成文脈の點に於ては國文と全く一致して居るのであるが、形式上から見れば、既に其の文體を異にして居ることが明かである。即ち國文に於ては、假名が漢字と同一資格を以て文の構成要素をなすのであるが、漢文は假名を除いて、全く漢字のみで構成されて居るのである。

春來る。 花咲く。 鳥鳴く (國文)
春來。 花咲。 鳥鳴。 (漢文)

漢文 初歩

併し國文と漢文との相違はたゞこれだけに止るのではなく、將來句例(二)以下に於て學ぶ如く、複雑なるものに至つては、國文とは全くその構成を異にするのであつて、漢文には漢文獨特の法則が存在し、その法則に従つて漢文は、國文はもとより、英文等とも異なる特殊な一文體を構成して居る。従つて、これが法則に習熟しなければ漢文を讀解して行くことは出来ないのである。本來國文と漢文とは極めて密接な關係を持つてをるのであるが、併し漢文が一學科として、國語とは別に、其の特質に基

いて學習せらるべき理由は此處に存在するのである。

【最も平易なる漢文形式】
本句例は最も平易な形式の漢文であつて、これを大體次の三様に分つことが出来る。

- (イ) 春來。花開。 何ガ(又は何ハ)ドウスル。
 - (ロ) 花紅。柳綠。 何ガ(又は何ハ)ドウデアル。
 - (ハ) 孝百行之本也。 何ガ(又は何ハ)何デアル。
- これを文法的に見れば、主語と述語とより成る最も簡単な單文であつて、これをまた次の如く類別して見ることが出来る。

- (イ) 主語(名詞)―述語(動詞) 春來。花開。
- (ロ) 主語(名詞)―述語(形容詞・形容動詞) 花紅。山高。
- (ハ) 主語(名詞)―述語(名詞) 身體健全。孝百行之本也。

【注意】

要するに「何ハ」「何ガ」といふ「ハ」「ガ」のつく主體の動作・性質状態等を表す最も簡単な文章であるが、初學年生は未だ國文法の知識も不十分であり、殊に漢文は全く新教材なのであるから、これを文法的に説明するが如きは、却つてその理解を複雑困難ならしめ、延いては漢文に對して嫌忌の感をさへ抱かしめる結果を招

來することになる。従つて文法的説明はすべてこれを避け、「何ガドウスル」「何ガドウデアル」の如き極めて平易な形として、反復練習して、生徒の自然の理解に任せるやうに扱つて行くべきである。

【句讀法】

(イ) 句點「春來。」花開。」或は「春來、花開。」等は、みなこれだけでそれぞれ纏つた思想を表す一文章である。これを句と言ひ、句の終には「。」(シヨマル)を附ける。これを「句點」と言ふ。

(ロ) 讀點「冬去、春來、鳥啼。」「身體健全、品行方正。」等の例の如く、句を讀む時、句中讀聲をちよつと止める所がある。此の讀聲の止る所を讀(トウ)と言ひ、ここに「、」(テン)を附ける。これを讀點(トウテン)と言ふ。

「句讀」は「句逗」又は「句投」など書くこともある。「逗」は「止る」の意であり、「投」は古く逗・讀の音通として用ひられたのである。

句讀法に就いては文部省調査報告(明治四十五年三月)に一括整理されてをり、今大體一般にこれを準據としてをるので、次にこれを掲げる。

句讀法

第一 句讀ハ語句ノ關係ヲ明瞭ニシ、文義ヲ領會スルニ便利ナルヲ主トス。其ノ符號左ノ如シ。

丁 排比セル各語句ノ下。

一、天下之大、萬民之衆、王侯之威、謀臣之權、皆欲決於秦之策。

戊 提示セル語句ノ下。

- 一、子路、人告之以有過則喜。
- 二、潁陽東溪、相傳巢父洗耳處。
- 三、蟲、本或作虫。

己 獨立ノ感歎詞、呼應及ビ顛倒シタル語句ノ下。

- 一、吁、余死矣。
- 二、參乎、吾道一以貫之。
- 三、來、子與汝言。
- 四、何哉、爾所謂達者。
- 五、子邪、言代莠者。

庚 敘言ニ連續スル曰・云等ノ字ノ下。

- 一、孟子曰、仁之實、事親是也。義之實、從是是也。
- 二、徐子曰、仲尼亟稱於水曰、水哉水哉、何取於水也。
- 三、論語云、子張問於子曰、何如斯可以從政矣。
- 四、秀文子使司冠出諸境曰、今日必達。

但左ノ如キ文章モ之ニ準ズ
周人以粟、曰、使民戰栗、
吾聞、西域賈胡、得美珠、剖身以藏之。
或傳、嵩有田在毫宋間、武人奪而有之、嵩將詣州訟理、爲所殺。

イ、句點。

ロ、讀點。

ハ、並列點。

第二 語意共ニ切レタル時ハ句讀ヲ用フ。其ノ例左ノ如シ。

- 一、鳥啼。
- 二、花開鳥啼。
- 三、君子不器。
- 四、割鷄焉用牛刀。

第三 文意相連接セル語句ノ間ニ區別ヲ要スル時ハ讀點ヲ用フ。其ノ例ヲ分ツコト左ノ如シ。

甲 副詞的性質ヲ有シテ下文ニ連續スル語句ノ下。

- 一、雖有壑池鳥獸、豈能獨樂哉。
- 二、苟能充之、足以保四海。
- 三、縱江東父兄憐而王我、我何面目見之。

乙 形式ヨリ見レバ終止シタルモ、意義ヨリ考フレバ下文ニ連續セル語句ノ下。

- 一、事至而循循焉、欲去之使他人任其責、則天下之禍必集於我。
- 二、蓋有之矣、吾未之見也。
- 三、子謂韶。盡美矣、未盡善也。

丙 管到ノ文字ノ下ニアル各語句ノ下。

- 一、君子欲訥於言、而敏於行。
- 二、惟恐耳目有所不聞見、思慮有所未及、以負成王託周之意、不得於天下之心。

余案、鄭説是也。

爾雅釋天、春爲蒼天。

辛 一、稍長キ主語ノ下。

二、廟堂之議、非草茅所當也。

三、古之欲明德於天下者、先治其國。

壬 年時ヲ示ス語句ノ下。

一、興元年、大赦。

但年月日時ヲ連記セル場合ニハ適宜讀點ヲ施スベシ。

以魯襄公二十二年、庚戌之歲、十一月庚子、生孔子於魯

昌平郷郛邑。

癸 名詞ノ連續シテ區別ヲ要スル時。

一、尙父、大尉、中書令、汾陽忠武王、郭子儀卒。

第四 並列セル名詞ノ間ニ區別ヲ要スル時ハ並列點ヲ其ノ中間ニ

使用ス。其ノ例左ノ如シ。

一、冉有・仲求可謂大臣歟。

二、我欲伐宗・脩・晉・放。

三、陶器産於尾張瀬戸・肥前伊萬里。

第五 詩賦駢麗文ハ固有ノ體裁ニ從ツテ唯句點ノミヲ施ス。

【注意】

第一 敘言ヲ敘事ト區別セント欲スル時ハ左ノ符號ヲ用フ。

一、イ、單鉤

二、ロ、雙鉤

第二 單鉤ハ敘事中ノ敘言ニ用ヒ、雙鉤ハ敘言中ノ敘言ニ用フ。

第三 文ノ段落ヲ示サント欲スル時ハ左ノ符號ヲ用フ。

レ 段落符號。

【送假名法】

「春來」は「ハルキタル」と讀む。此の場合「來」の右傍下に「ル」の假名を添へる。これを送假名と言ふ。別にまた「捨假名」「振假名」とも稱し、文字の讀方を示す「讀假名」と區別する。

送假名は大體國文法に準據し、動詞・形容詞・助動詞等はその活用に從つてこれを施すのであるが、併し漢文には漢文獨特の讀法があり、必ずしも一々國文法の假名遣法と一致してをらず、且また送假名法に關しては古來定説なるものもない。左に掲げる文部省調査報告(明治四十二年三月二十九日)はこれを整理してこれが規準を示したものであるが、これとても發表以來三十年に垂んとする歲月を経過し、其の間、國語漢文學界に於ても、研究の方法・所説の風潮等幾多の變遷を來して居るのであるから、今日に於ては多少の變改あるを免れない。併しこれは當時の漢學の權威者等によつて製作されたものであり、今日もなほ一般の規準とみなすべきものであり、多少の出入はあるが、本書も大體これに準據したものであるから、以て參考とせられたい。

送假名法

第一 送假名ハ左ノ三項ノ場合ヲ除ク外ハ國語調査委員會ニテ定

メタル送假名法ノ本則ニ準據ス。

甲 受身ノ助動詞ニ該當スル漢字ニハ全部假名ヲ附ス。

一、爲二人殺。

二、以レ讒不見信。

三、國武子之所見殺於齊也。

乙 也ヲ「ヤ」者ヲ「ハ」與ヲ「ヨリ」ト訓ズル場合ニハ、各々全部假名ヲ附シ、由・自・從ヲ「ヨリ」ト訓ズル場合ニハ最後ノ一音ヲ附ス。

一、由也果。

二、韓信者淮陰人也。

三、禮與ニ其奢ニ也儉。

四、由ニ堯舜ニ至ニ於湯、五百有餘歲。

丙 送假名法第八則ニ舉ゲタル以外ノ二音ノ副詞ト雖モ、送假名ヲ附スルヲ利トスル場合ニハ最後ノ一音ヲ附スルコトアルベシ。

一、家故武人。

二、將爲ニ君子ニ焉、將爲ニ小人ニ焉。

三、唯恐レ有レ聞。

四、雖ニ小國、猶不レ危レ之也。

第二 添附シテ讀ムベキ語ハ送假名ノ形トシテ記スベシ。

一、柳線。萬死猶輕。有二姓楠者。

二、有伊尹之志。到成德。人豈信之。

三、禮義重如此。任重道遠。

四、紛紛落花。最大帝國。父父子子。

漢文 初歩

天泉聰明、能辨大體。嘗改正歷代謚號、又追贈和氣清勝、以正一位。自外國事起以來、專覃聖獻于皇基、其所

但重複ノ場合ニハ「ル」又ハ「ラル」ヲ代用スルコトアルベシ。

一、淺原爲賴入宮爲亂。天皇避ニ之春日殿。

二、皇后親爲ニ神主。

三、秋八月、皇太子加ニ元服。

三五四

爲三社稷計畫上者、至深遠。

「タテマツル」

一、正成至兵庫、迎レ駕。

二、天皇願ニ深須ニ曰、汝何不戴三天恩、以期私榮。深須心欲レ脱ニ天皇、而憚ニ松井在レ後不レ果。

第六 敬語ノ疊出スル場合ニハ便宜之ヲ省クコトアルベシ。

后篤信レ佛、建ニ檀林寺、置ニ比丘尼持律者。

第七 將・宜・猶・當・未等再讀スベキ文字ニハ初讀ノ送假名ヲ右傍ニ、再讀ノ送假名ヲ左傍ニ記スベシ。

- 一、子將ニ突先。
- 二、宜レ鑑ニ于股。
- 三、文猶レ質也、質猶レ文也。
- 四、理當ニ典謀而後命之。
- 五、吾未レ見レ之也。

釋義

【啼】 ナク「ナク」と訓する文字の異義を略述する。

「啼」音テイ もと人・鳥・獸いづれにも用ひたが、今主として鳥獸に用ひる。聲をあげてなく。悲む意がある。

「鳴」音メイ 鳥獸のなく意。悲鳴・和鳴いづれの場合にも用ひる。

「泣」音キフ 涙をながし聲をたてないでなく。専ら人間のないに用ひる。

「哭」音コク 涙をながし聲をあげてなく。

「轉」音テン・ロウ 共に鳥のさへづりなくの意。

【風光】 フウクワウ (一)景色。(二)人柄。様子。元稹詩

「細賦風光我獨知。」ここは(一)の意。

【明媚】 メイビ 山水の景色があざやかに清く美しいこと。「鮮媚」に同じ。

「明」は「あかるし」「きよらけし」「いさぎよし」などの意。「媚」は「美し」の意。他に(一)こびる。へつらふ。(二)なまめかしい。みめよい。(三)いつくしむ。(四)親しみしたがふ。(五)やはらぐ。(六)まどはす。等多様の意がある。

【身體】 シンタイ 體の筆寫文字としてよく「体」の字を書くが、「体」は本來音は「ホン」で笨と同じである。これを體の俗字「躰」に慣用して、體の俗字の如くなつたのである。

る。

【健全】 ケンゼン (一)身體のすこやかなこと。(二)思想・精神などの惡に染まらないこと。ここは(一)の意。

【品行】 ヒンカウ (一)おこなひ。行狀。操行。(二)品格。人柄。ここは(一)の意。

【方正】 ハウセイ 心又は行の正しいこと。

「方」はもと眞四角の意。轉じて「正しい」の意。

【孝百行之本也】 カウハヒヤクカウノモトナリ 孝行は多くの行の根本である。孝經・三才章「夫孝天之經也、地之義也、民之行也。」とあり、其の疏に「孝爲百行之首、人之常德者」とある。

「孝」は(一)よく父母に事へて誠を盡すこと。(二)轉じて祖先に仕へるにもいふ。論語・子罕「致孝乎鬼神。」

「百行」は多くの行。數字百・千・萬等は多い意味に用ひる。「百鍊之鐵」「億兆一心」などの類。

【之】 ノ 接讀詞。國語の接續の助詞「ノ」に當る。語句の

指導上の注意

(一) 以上平易なる漢文形式・句讀法・送假名法を授けるのであるが、既に一言した如く、漢文學習に入る出發點であることを常に念頭に置き、漢文は敢て學習困難なる學科にあらずとの觀念のもとに、自發的に、興味を以てこれが學習に向はしめるやう、従つて複雑化せず、理論に墜ちず、反復練習して自然とこれに慣れしめ、不識の間に腦裡に滲みこま

せるやうな取扱が工夫せられねばならない。

(二) 文字教授の任務は特に初學年にあること故、正俗・類擬同字異義・同意異訓・數音多義等に關しては、出来るだけ正確に授けて置きたいのであるが、併しその繁雜な穿鑿は、形式の複雑化と同様に、漢文教授の困難さを思はしめて、生徒の理解を混亂せしめてしまふ結果を招くことになる。従つて初めは生徒の既得知識を誘導活用せしめる程度に止め漸層的に補充擴大するやうにして、その實効を收めて行くやうにしたい。

練習題

- (一) 天晴。風吹。風吹。天晴。
鳥飛。魚躍。鳥飛。魚躍。
百花開。黃鳥啼。百花開。黃鳥啼。
- (二) 山高。水清。山高。水清。
庭廣。樹深。庭廣。樹深。
富嶽高。琵琶湖闊。富嶽高。琵琶湖闊。
- (三) 風靜。波平。風靜。波平。
天氣清明。海波靜穩。天氣清明。海波靜穩。
- (四) 時金也。孔子、聖人也。楠正成、忠臣也。
富士山、我國第一之名山也。忠孝、人倫根本也。
忠孝、人倫根本、臣子大節也。

二 大日本帝國

要旨

前句例の應用として最も平易な漢文形式を示し、これに習熟せしめ、併せて萬邦無比なる我が國體の精華を曉らしめる。

釋義

【帝國】 テイコク (一) 皇帝の統治せられる國家。(二) 天皇陛下の統治し給ふ我が日本國。ここは(二)の意。

【即位】 ソクキ (一) 君主が位に即かれること。(二) 天皇が即位の大禮を行ひ給ふこと。ここは(一)の意。

「即位」と混用せられる語に「踐祚」がある。上古に於いては此の兩者に區別はなかつたのであるが、桓武天皇が天應元年四月三日に踐祚せられ、十五日後即位の大禮を行はせ給うてから、踐祚後日を隔て、即位の儀を擧げさせ給ふ例となり、清和天皇の朝、貞觀儀式の制定せられるに及んで、二者は全く區別せられるに至つた。即ち、「踐祚」は先帝崩御の直後、三種の神器を承けさせ給うて皇位を繼がせられることであり、「即位」は、更に禮を大に

し儀を整へ、天皇登錄の大事を、群臣百僚以下、天下萬民及び外國使臣に宣り給ふ儀禮を指すのである。現今は、皇室典範及び登極令によつて、諒闇終了後(先帝崩御三年後)京都御所紫宸殿で執り行はせられる規定となつてゐる。

【君臣之分】 クンシンノブン 君主と臣下との區別。

【夙】 ツトニ (一) 朝早くから。(二) はやくから。(三) ふるくから。古から。ここは(三)の意。

【一系】 イツケイ 同一の血統。ひとつちすぢ。

【皇統】 タウウトウ 天皇の御系統。皇室の御血統。

【連綿】 レンメン 連綿・聯綿とも書く。長くつらなり續いて絶えない様。宋史・河渠志「秦淮之水、每遇春夏、

天兩連綿。「連」聯は共に「つらなる」意、「綿」緜は相同じく、共に長くつゞいて絶えない貌。

【相承】アヒウケタマヒ 次々に繼承あそばされて。

「タマヒ」は敬語の助動詞。「タテマツル」と共に、敘言・敘事の論なく、我が皇室に關する場合必ず添加するを慣例とし、其の場合一切これを用ひないものとする。
(前掲送假名に關する文部省調査報告参照)

【君仁】キミハジンニ 天皇は御仁慈深くあらせられ。

「仁」は(一)儒教を一貫する政治的倫理的大理想。愛を内容として一切の諸徳を統べる至至高の主徳であり、天道の發言であり、これを實踐する時は、人事萬物悉く調和發展する所の道徳。(二)愛情を他に及ぼすこと。いつくしみ。おもひやり。(三)有徳の人。論語・學而「汎愛レ衆而親レ仁。」(四)醇厚なる風俗。論語・里仁「里仁爲美。」ここは(二)の意。

【臣忠】シンハチユウニシテ 臣下は忠義をはげみ。

「忠」は「中心」の意で、(一)まごころを盡すこと。(二)君に仕へて一心なきこと。ここは(二)の意。

【上下】シヤウカ・ジヤウカ (一)かみとしも。君臣。書經堯典「光被四表、格于上下。」(二)天と地。論語・述而「禱爾于上下神祇。」ここは(一)の意。

【和親】ワシン やはらぎ親しむこと。禮記・樂記「是故

樂在闔門之内、父子兄弟同聽之、則莫不和親。」

【即】スナハチ 「スナハチ」と訓する文字の異義を略述する。

「乃」音ダイ「承上起下之辭」と註す。「そこで」と譯す。書經堯典「乃命義和。」

「迺」音ダイ「乃」に同じ。

【即】音ソク (一)上文の意と下文の意と相等しい場合に用ひる。「とりもなほさず」そつくりそのまま等と譯す。(二)轉じて時間の接近を示す。「その場で」

「すぐさま」等と譯す。本課は(一)の意で用ひた。

「便」音ベン・ピン 「即」より稍意が軽い。

「載」音サイ 「便」にほゞ同意。

【則】音ソク 理由又は條件をあげて其の結果を敘する場合に、文の上下を因果の關係に結ぶ。それは「その場合は」など譯す。

俗に「レバスナハチ」と言ひ、上に來る送假名が「……レバ、則……」となる。但し理由・條件の部分が名詞又は名詞句の場合は、「レバ則」と讀み得ないので、「……ハ、則……」と讀む。時により「レバ・ハ」の送假名を上文の末に附して「則」を訓じないこともある。

【則】即は普通の文字である所から、よく同様の意味に用ひられる。

又「則」と「乃」は同義に用ひられることがある。

漢王則引兵渡河。 則乃

且視之乃大兵法。 乃則

「輒」音テフ 輒は俗字。「毎也」と註する。「たびごとに」「いつも」「たやすく」等と譯す。

【國體】コクタイ 國家成立の状態。國柄。くにぶり。漢書成帝紀「儒林之官、四海淵源、宜皆明於古今、溫故

指導上の注意

語議の検討・類字の解明等かなり詳細に扱つたが、これは要するに教授者の參考に資せんが爲のものであつて、初歩の漢文教授に當つては、その解釋は第二義第三義的な位置に置かるべきものであり、専ら反復誦習して、漢文口調に習熟せしめることが主眼となさるべきは論を俟つまでもない。而して其の間に逐次句讀點送假名等の要領を會得せしめてゆくやうに工夫が拂はれねばならない。本課本より然りであり、以下各課を通じての主要眼目である。

練習題

(一) 忠孝者、人道之根本、臣子之大節也。

(註) 臣子(臣下と子供。忠に對しては臣、孝に對して子。)

大節(一、大きな節操。重い節義。大義。二、重大な事件。大事。論語・泰伯「臨大節、而不可奪也。」)

(二) 春氣候溫和、花木繁茂、百鳥和鳴、一年中之好季節也。

漢文 初歩

- (註) 花木(一)、花と樹木。二、花咲く木。こゝは(一)の意。
 繁茂(草木の生ひ繁ること)。「花木繁茂」は花は開き、木々は繁る意。
 和鳴(一、鳥が聲を合せて互に鳴き合ふこと。二、樂器が互に和ぎ鳴ること。こゝは(一)の意。)
 (三) 富嶽巍然聳、最神秀者也。櫻花爛漫發、最英華者也。寶劍銳利善斷、最精氣者也。是日域之三絶也。
 (註) 巍然(ギゼン 山の高くそばだつさま)
 神秀(神々しく秀でてゐること。すぐれて神々しいこと)
 爛漫(ランマン 花の咲き亂れるさま)
 發(ヒラキ 花が咲く。)
 英華(すぐれて美しいこと。)
 善斷(よくきれる)
 精氣(物の純粹な氣)
 日域(日本。わが國)
 三絶(三つのすぐれたもの。)

三句 例 (二)

要 旨

客語及び補語を含む複雑な組織の漢文を示し、これ等の漢文は顛讀すること、而して顛讀するためには返點を施すべきことを知らしめ、且顛讀法・返點法の要領を會得せしめる。

解 說

【客語・補語を含む漢文】

「客語」とは述語が他動詞の場合に、これに添へてその動作の目的を示す語であつて、「ヲ」「ニ」「ト」の送假名が添附される。「補語」とは述語が自動詞・形容詞、或は他動詞で客語を添へても尙意味の完全しない等の場合に、これに添へてその述語の意味を補足する語を言ひ、「ニ」「ト」「ヨリ」等の送假名が施される。

以上により「客語・補語を含む漢文」とは、平易にこれを言へば、述語の下に來る語に「ヲ」「ニ」「ト」「ヨリ」等の送假名の施される所の文であり、これを文法的に説明すれば次の如くなる。

(イ) 主語―述語―客語 武人執^レ戈。清正讀^ニ論語^ト。

漢文 初歩

(ロ) 主語―述語―補語 船泛^レ海。信賴怖墮^レ馬。
 「修^レ學習^レ業。」「賜^レ姓稱^レ源。」「乘^レ船歸^ニ鄉里^ト。」「啓^ニ發^ト知能^ヲ、成^ニ就德器^ト。」等の例はみな主語の省略せられた文であつて、適當な主語を補へばすべて右の形式に當てはまるべきものである。

【顛讀】

これを國文と比較すれば

(國文)	主語―客語―補語	主語―述語―客語
	武人ハ戈ヲ 執ル	武人 執 ^レ 戈
	船 海ニ 浮ブ	船 泛 ^レ 海
	清正 論語ヲ 讀ム	清正 讀 ^ニ 論語 ^ト

右に示す如く國文と漢文との最も著しい相違は客語・補語の位置の顛倒である。かゝる顛倒された構造の文を國文讀にするのであるから、此處に當然顛讀がなされねばならない譯である。即ち「客語補語を含む漢文」は、これを日本讀にする際に、必然の要求として顛讀されるのである。更にこれを平易に言へば、「ヲ」「ニ」「ト」「ヨリ」等の送假名のつく語を持つ漢文は顛讀するのである。

【注意】

以上客語・補語を含む漢文の構造と、その顛讀とについて、一應文法的説明を試みたのであるが、既に、句例一の「注意」に於て述べた如く、生徒に對する文法的解説は、ここに於ても亦すべて放棄せらるべきである。單に「ヲ・ニ・ト・ヨリ」等の送假名があれば顛讀する」といふ位の平易な説明を以て終始し、これを反復説明することによつて、顛讀の觀念を強く生徒の腦裡に印刻せしめるやうに工夫すべきである。

【返點法】

顛讀する漢文には送假名の他に、更に返點を左方に付けて顛倒の順序を示すのである。

返點には、「レ」(れ點)「一・二・三」上・中・下「甲・乙・丙」……「天・地・人」等多くの符號が用ひられるのであるが、本句例はその最も初歩の形式である「レ」及び「一・二」の

符號によつて顛讀する文を示したのである。返點に就いても亦文部省調査報告(明治四十五年三月)に整理されたものが、現今に於ても大體その規準を示すものであるから、これを次に掲げることとする。用法その他、詳細についてはこれを通覽せられたい。

返點法

- 第一 返點ハ顛讀ヲ容易ナラシムル爲ニ施スモノトス。其ノ符號左ノ如シ。
 - イ レ(れ點)(カリガネ點)
 - ロ 一・二・三等
 - ハ 上・下又ハ上・中・下。
 - ニ 甲乙丙丁等
 - ホ 天地又天地人。
- 第二 「レ」ノ符號ハ一字ツツ顛讀スル場合ニ用フ。玉不琢不器、人不學不知道。
- 第三 一・二・三等ノ符號ハ二字以上ヲ隔テテ顛讀スル場合ニ用フ。但連續セル熟語ヲ直讀スル場合ニモ用フ。
 - 一、廣ニ公益ニ開ニ世務。
 - 二、推恩足ニ以保ニ四海。
 - 三、蓋有以信ニ性ニ善、天下無ニ不レ可レ化之人。
 - 四、忠臣不レ事ニ二君。
 - 五、東里子產潤ニ飾之。
 - 六、欲レ取ニ捨之。

七、奴ニ僕視之。

八、宜ニ靜レ心以書之。

九、欲取ニ捨之。

十、未嘗不嘆息痛恨於桓靈也。

第四 上・下又上・中・下ノ符號ハ前二種ノ符號ヲ用ヒタル以外、更ニ顛讀スル場合ニ用フ。

一、此謂國不レ以レ利爲利、以義爲利也。

二、如負千鈞而行。

三、此爲損虛名、而收實利也。

第五 甲・乙・丙・丁等ノ符號ハ前三種ノ符號ヲ用ヒタル以外更ニ顛讀スル場合ニ用フ。但一・二・三等ノ符號ヲ用ヒタル外ニ、尚

上・中・下三箇ノ符號ニテ足ラザル場合ニハ此ノ符號ヲ用フルコトヲ得。

一、其非所レ以勸獎忠臣、慰答民心之義。

二、謂不レ以衆人待其身、而以聖人望於人。

三、謂宜有以奉其職、使四方後代、知朝廷有直言骨鯁之臣、天子有不僭賞、從諫如流之美。

第六 天・地又天・地・人ノ符號ハ前四種ノ符號ヲ用ヒタル以外更ニ顛讀スル場合ニ用フ。

使人籍誠不レ以善妻子、憂飢寒亂心、有錢財以濟醫藥、其言未甚。庶幾其復見天地日月。

【注意】

第一、左ノ場合ニハ返點ヲ施サズ。

一、所謂(いはゆる)

漢文 初歩

二、加之(しかのみならず)

三、就中(なかんづく)

四、云爾(しかいふ)

第二、使・教・遣等ヲ再讀スル場合ニハ初讀ノ符號ヲ施サズ。能使任者直。

【接續縦線】

前記規則第三條に明記せられた如く、一・二・三等の符號は連續せる熟語を顛讀する場合もある。此の場合には二・三等の符號を熟讀の中間に施し、且便宜上接續縦線(一)を附して、その熟語なることを示す。本句例の中、「啓」ニ發知能、成就德器はこれを示したものである。但しこの縦線は將來上級に進むに従つて漸次之を省略するものであつて、必ずしも常にこれを施さねば誤になるといふ性質のものではないのである。

【訓點】

「送假名」と「返點」とを併せて訓點といふ。

【句讀點・返點の附け方】

(イ) 句讀點添附上の注意 句讀點は句の終・讀みのために附けるものであることは前述の通りであるが、文中返點が施される際には、初學年生はこれを日本流に「武人執レ戈農夫把レ鋤」の如く誤ることが少なくなく、教授者の屢々實見する所である。英語の知識等とも聯絡

して、其の誤謬を訂正し、且反復練習によつて確實な添附法を會得せしむべきである。

(ロ) 返點添附上の注意 一・二・三等の符號を添附する場合初學年生はよく「歸郷里」讀「論語」の如き誤

釋 義

【修學習業】 ガクヲヲサメゲヲヲナラフ

「修」は漢音「シウ」修學・修身・修徳。吳音は「シユ」。修行修驗者。修羅場。

「習業」は學業・藝術・技術等を修め習ふこと。こゝは「修學」に對して技術的實業的方面を習ひ修める意。

これは頓讀せずに「シウガク」「シウゲフ」と熟語としてよく用ひられる。

【戈】 ホコ 音クワ (一)古の兵器。枝の旁出してゐる兩刃の劍を長い柄の先につけたもの。單枝なるを「戈」となし兩枝なるを「戟」と言ふ。(二)いくさ。兵戈。干戈。こは(一)で、單に「武器」位の意。

【鋤】 スキ 音シヨ 「ジヨ」は通音 (一)田を耕し草を去る農具。釋名「鋤助也。去穢助苗長也。」(二)たがやす。鋤く。(三)根を絶やす。除きほろぼす。こは(一)の意。

(イ) 稱ニ「」 何々とよぶ。何々といふ。

(ロ) 稱ニ「」 何々をほめる。何々をたゞへる。

【信賴】 ノブヨリ 藤原信賴。近衛大將を望んで得られなかつたのを不平とし、源義朝と謀つて平治元年、清盛が熊野參詣に出た不在に乗じて兵を起し、後白河上皇・二條天皇を幽し奉り、皇居に立て籠つた。急をきいて馳歸つた清盛・重盛は一戦してこれを破り、信賴は誅せられ、義朝は尾張に逃れて殺された。これを平治の亂と言ひ、此の戰中、公卿の信賴は待賢門を固めてゐたが、平家の軍の鬨の聲に怖れて慄へ上り、殊に肥りせめた男で、獨りでは馬に乗れず、武士どもに押上げられて乗過し、向ふ側に墜落して鼻血をだすといふ醜體を演じた。「信賴怖墮馬」はこれを言つたのである。

【怖】 オソレ 音フ 「オソル」と訓する文字の異義を略述する。

「恐」 音キョウ 未來をおそれるの意。

「怖」 音フ わけもなくおそれる。「オドス」とも訓する。

「懼」 音ク 恐怖する義。

「畏」 音キ おそるゝこと、甚しいこと。敬の字の義をも帯びてゐる。畏服・畏敬などの類。

「慄」 音リツ おそれてぞつとすること。「竦縮也」と註す。

を犯す。これは返點が頓讀の順序を示す符號であることとの觀念の不徹底なためである。平易な實例に就いて反復練習し、これが徹底を期するやうに工夫せらるべきである。

【執・把】 トル 「執」は物を堅くとる義。筆・武器等をとる、又心を堅く守るに用ひる。中庸「擇善而固執」之者也。「把」は「握也。」と註し、手にとり握る意。

尙「トル」と訓する重なる文字の異義を次に略述する。

「取」 音シユ 「捨」の反で、わがものとすること。

「乘」 音ヘイ 執に近い意で、とり守ること。乗燭。乘蘭。

「操」 音サウ 正しくとり守ること。孟子「操則存、捨則亡。」

「採」 音サイ ひろひとる義。「採草木。」

「捕」 音ホ 追ひかけてとらへる。「トラフ」とも訓する。

「捉」 音ソク とらへて來る義。「捉一箇誠將來。」

【泛】 ウカブ 音ハン・ホン 浮ぶに同じ。

【稱】 ショウス 「稱」を頓讀する場合に次の二つの讀があり、各々その意味を異にする。

【墮】 オツ 「オツ」と訓する文字の異義を略述する。

「落」 音ラク 何でも上から下におちること。

「墮」 音ダ おちくづれること。

「墜」 音ツキ くづれて落ちること。

「零」 音レイ こぼれおちること。

「隕」 音ケン 眞直にずんと落ちること。左傳「星隕如雨。」

【清正】 キヨマサ 加藤清正。幼名夜叉若、後虎之助と言ひ、秀吉に臣事した。母が秀吉の母と従姉妹であつたと言ふ。賤ヶ嶽七本槍の一人として勇名を馳せ(小學國語讀本卷十一第七課參照)天正十三年主計頭、ついで肥後半國二十五萬石を領した。文祿の役小西行長と共に先鋒として渡鮮、深く朝鮮の奥地に入つて二王子を捕へた。石田三成の讒によつて一度召還されたが、慶長二年再び渡鮮し、蔚山に籠城苦戦した。秀吉の薨後兵を班し、慶長五年石田三成の擧兵には徳川方に加擔し、役後肥後五十五萬石を食み、肥後守となり熊本城を築いた。十六年秀頼を奉じて家康と二條城に會見せしめ、歸國後間もなく熱病に罹つて歿した。享年七十。

【論語】 ロンゴ 孟子・中庸・大學と共に四書の一。作者については多くの説があるが、孔子の歿後其の門人等が、孔子の性行・論說等を編輯した書であるとする説が大體

に於いて肯定せられてゐる。古く古論語・齊論語・魯論語の三種が存在したが、後古論語・齊論語は佚亡し、現行はれてゐるものは魯論語である。全卷「學而」以下二十篇に分れ、孔子の理想的道德觀政教觀を窺ふに足ると共に、其の偉大な人格は燦として輝き、永く世道人心を導いてゐる。

【啓發】 ケイハツ 知能などをひらくこと。論語・述而「子

曰、不憤不啓、不悱不發。」

【知能】 チノウ 知識と才能。

【成就】 ジャウジュ なしとげる。完成する。

【徳器】 トクキ 徳行器量。行のなるを徳と言ひ、方のなるを器といふ。漢書・杜周傳贊「徳器自過爵位。」「啓發知能、成就徳器。」は教育勅語の一句を漢譯したものである。

指導上の注意

漢文に於ける語句の用法は國語に比して遙かに嚴正であり、同訓の文字もそれぞれその本義に従つてこれを使用し、他を以てこれに通用するが如きを許さない。例へば「戈」には「執」であり、「鋤」には「把」でなければならぬのである。これは初歩の學生にはかなり新奇な感を抱かしめ、殊に發問好きな此の時代の少年達の口からは、必ずやこれ等に對する質疑が發せられる。釋義篇に同訓異義などの説明を相當詳細に行つたのは、あらゆる場合に應じ得るための教授者側への参考の爲であつて、これが取捨案配の宜しきを得、生徒のかゝる好奇心を巧みに利用しつゝ、漢文に對する興味をそゝるやうにし、漢文口調に習熟せしめるやう指導する所に、漢文初歩教授の妙諦は存するのである。

練習題

- (一) 從_レ師_レ就_レ學。改_レ過_レ遷_レ善。學_レ畫_レ習_レ字。雲_レ從_レ龍。風_レ從_レ虎。兄_レ讀_レ書。弟_レ作_レ文。樵_レ父_レ登_レ山。漁_レ夫_レ浮_レ海。
- (二) 入_レ中_レ學。學_レ漢_レ文。遊_レ公_レ園。賞_レ櫻_レ花。時_レ宗_レ善_レ騎_レ射。春_レ愛_レ櫻_レ花。秋_レ賞_レ明_レ月。廣_レ公_レ益_レ。開_レ世_レ務。

- (三) 登_レ山_レ折_レ櫻_レ花。泛_レ海_レ釣_レ香_レ魚。賞_レ月_レ忘_レ歸_レ途。好_レ學_レ忘_レ寢_レ食。問_レ人_レ知_レ捷_レ徑。

- (四) 鍛_レ鍊_レ身_レ體。鼓_レ舞_レ勇_レ氣。遊_レ學_レ東_レ都。歷_レ訪_レ世_レ儒。

四 徳川光圀

中村栗園

要 旨

前句例の練習文として反復誦習し、送假名・返點等に習熟せしめ、併せて名君光圀の幼兒の立言の雄々しさを味はひ、以て生徒自らの人格修養の資たらしめる。

解 説

【作者】 中村栗園 ナカムラリツエン

名は和、字は子臧。栗園は號である。文化三年豊前中津に生れ、若くして帆足愚亭に學び、後龜井昭陽の門に入つた。間もなく師の説に合はずして、辭して上野に遊び、篠崎小竹・齋藤拙堂・野田笛浦等と交つて學愈々進み、小竹の推薦によつて近江水口藩の儒臣となつた。幕末多端の時に當つては、志士の間を東奔西走して國事に志し、明治維新の際には岩倉公に獻策して功多く、藩籍奉還後藩主が知事となるに及んで、大參事として治績の見るべ

きものが多かつた。明治十四年歿。享年七十六。

著書に日本智囊・孝經翼・栗園詩文集等がある。

【出典】 日本智囊。全六卷。

我が國の賢君名士の事蹟の中、知略に渉るものを網羅輯録し、明の馮夢龍の「智囊」に倣つて、これを上智・明智・察智・術智・膽智・捷智・語智・兵智・閫智・雜智の十目に分ち、更に其の各部に細目を設けて類記した書である。

釋 義

【徳川光圀】

トクガハミツクニ 幼名長丸、又は千代松丸、字は徳亮。又觀之とも言つた。日新齋・常山人。率然子。梅里等の號がある。私諡を義公といひ、世に水戸黃門、又は西山公と稱する。徳川頼房の第三子として生れ、兄頼重を越えて家を繼いだ。十七歳伯夷傳を讀んで感ずる所があり、修史に志し、明曆十三年二月、かの有名な大日本史編纂に着手した。寛文元年頼房薨じて水戸藩第二世の主となり、家臣頼房に殉死せんとする者あるを聞き、天理人道を説いてその弊風を去り、ついで兄頼重の子頼方を立てて世子とし、その歿後更に弟綱條をその後継に据ゑた。蓋し兄に越えて家を繼いだのに報じたのである。五年明の遺臣朱舜水(之瑜)を聘して師とし、自ら弟子の禮を以て怠らなかつた。元禄三年致仕し、間もなく權中納言に任ぜられた。水戸黃門の稱はこれより出たのである(黃門は中納言の唐名)翌年久慈郡太田郷西山に閑居して悠々自適した。夙に勤王の志に篤く、五年楠公碑を湊川に建てたことは世上周知する所である。十三年西山に歿した。享年七十三。天保三年勅を以て従二位大納言を贈られ、更に明治二年従一位を追贈された。著書には前記「大日本史」を首として、禮儀類典・扶桑拾葉集・參考源平盛衰記・參考保元物語・參考平治物語・常山文集・常山詠草・西山遊筆等數十種に上つてゐる。

「圀」の字は國の古字。唐の則天武后の作と傳へられる。

「国」は俗字である。

【頼房】 ヨリフサ 二代將軍秀忠の弟。義直(尾張侯)頼宣(紀伊侯)と共に、所謂御三家の一、水戸藩の祖となつた。

【嘗】 カツテ (一)以前に。まへかたから。(二)轉じてあるとき。ここは(二)の意。

同訓の字「曾」は「嘗」より稍々意味が重い。

【曰】 イハク・ノタマハク 「いふことには」と譯し、又は敘言の下に「……といふ。」と譯す。品詞から言へば副詞に屬し、従つて活用しない。

「ノタマハク」と讀む時は尊敬の意を示す。

【陣】 チンニノゾム 戦場に臨む。出陣する。

「陣」は古く「陳」につくり、(一)ならぶこと。(二)軍隊を排列すること。隊伍をつくること。又軍隊の隊伍。(三)そなへ。陣立て。(四)戦ふこと。戦陣。ここは(四)の意。

【創】 キズ 刀槍によるきず。

【能】 ヨク 「ヨク」と訓する字の異義を略述する。

「能」 音ノウ なし難きをし果す義。

「克」 音コク 「能也。」と註す。能より更に意が重い。

「善」 音ゼン 「良也。吉也。」と註す。十分至極の義。

「喜」 音キ 喜んでする義。「コノミテ」とも訓する。

【好】音カウ 思つて、みてよい義。

【扶持】フチ (一)助けて介抱する。孟子・滕文公「守望相助、疾病相扶持。」(二)國語では「フチ」と清んで讀み、米で給した士大夫の祿のこと。

【乎】カ 音コ・ウ 疑問・反語・感歎等を表す助辭。こは疑問。

尙疑問の辭には、他に邪・耶・歟等の字も用ひられる。

「禮後乎。」「其眞無馬耶。」爲仁之本歟。等はこの類。

【對】コタフ 「コタフ」と訓する字の異義を略述する。

「答」音タフ 「當也。報也。」と註す。先方の問に答へる。

「對」音タイ 「答」より稍々意が重い。一々ことわけて答へる。

答へる。

「應」音オウ 他の問に應じて答へる。

【兒】ジ わたくし。自稱人代名詞。「子供」の名詞より轉化したのである。

【耳】ノミ 「ノミ」と訓する助辭には、この他に、「爾」「已」「而已」「已矣」「而已矣」等があり、其の意味に輕重の差はあるが、大體すべて「……ただだ。」……に過ぎない。」など譯せばよい。

【時】トキニ 丁度その時に。

句例では「ニ」の送假名が附く漢文は顛讀すると學んだ生徒

徒の、當然疑問を發する所である。「ニ」の送假名のある時でも、それが副詞である場合、即ち主體の動作・状態等の意味を限定する語である場合には顛讀しないことを此處で納得せしめたい。既・夙・朝・夕・速など何れも副詞で、顛讀しない語である。例へば「朝曳杖出、夕登丘立。」「左顧海面、巨艦破浪東去。」等の類。

【甫】ハジメニ 「ハジメ」と訓する字の異義を略述する。

「甫」音ホ 「始也」と註す。大きくなることの始の義。

「初」音ショ 「終」に對する語。事のはじめをいふ。

「始」音シ 「終」の反語。事のはじまりをいふ。

「創」音サウ 新に事をなしはじめる義。

「首」音シュ 頭首の義。順序のはじめをいふ。

【七歲】七歲ナリキ 「キ」は時の過去を示す助動詞。用法に就いては前掲文部省調査報告書送假名法を参照せられたい。

【矣】音イ 句末に添へて終止・決定・推定などの意を表す。過去・現在・未來の時にかはらずみなこれを用ひ、而して誦讀する時は通例これを讀まない。「説文」に「矣、語已語也。从レ矣。呂聲。」とあり、段註に「已、止也。其意止、其言曰レ矣。」とある。

指導上の注意

「乎」「耳」「矣」等みな新教材として、一應これが説明の施さるべきことは勿論であるが、併しそれ等を穿鑿究明せんとする時は、却つて生徒の理解を困難ならしめ、それが教授を混亂に陥れる因をなすのであるし、殊に現在とはとにかく反復誦習して漢文口調に習熟せしめることが第一要件であるから、高壓的にならぬやうに注意しつゝ、それを漢文獨特の法則語法として素直に受け容れさせるやうに指導を進めるべきであらう。

練習題

(一) 明治天皇、至仁至聖、敬神愛民、勵精圖治。在位四十五年、國運之昌盛、前古無比。

(註) 至仁至聖(この上もなく慈しみ深く、この上もなく智徳のすぐれて居ること)。

勵精(セイヲハゲマシ 「レイセイ」と熟語に用ひ、心をはげましつとめること。「精勵」とも熟す)。

圖治(チヲハカル 政治上のはかりごとをたてる)。

昌盛(シヤウセイ さかんなこと)。

前古(音。いにしへ)。

(二) 林鵝峯、剛毅好學、博覽多識。嘗曰、武人執兵而戰、効死建功、學者立志讀書、斃而後已。固其本懷也。(先哲叢談)

(註) 先哲叢談(原善の著。全八卷。徳川時代の儒家の閥閥性行等を記した書)。

林鵝峯(林羅山の第三子。名は恕、鵝峯は號である。幕府の儒官となつた)。

漢文 初歩

剛毅（ガウキ 意志が確平として物事に屈せぬこと。）
 博覽多識（ハクランタシキ 博く書物を讀み、多く物事を知つて居ること。）
 執兵（兵器をとる。「兵」はこゝでは兵器の意。）
 効死（シライタス 死ぬこと。「効」は效の俗字。「效」はここでは「致」の意。）
 已（ヤム 止むに同じ。）

本懐（ホンクワイ 本望。本意。）

（三）新井白石、生而聰慧。三歲寫字、六歲讀書。其嬉戲、每寫天下、三字。人以爲英物。（近世叢語）

（註）近世叢語（角田簡の撰。全八卷。徳川時代の學者政治家の言行を記した書。）
 生而（而は「テ」の助詞に當り、これを讀まない。六・人の課參照。）
 聰慧（ソウケイ 才智がすぐれてわかりのよいこと。さとい。）
 嬉戲（キギ 遊びたはむれること。）
 每（ツネニ いつも。）

英物（すぐれた人物。）

（四）水足博泉幼時、能太書大字。客至、父屏山必命書之。一日客至。博泉方嬉戲。屏山數召之。乃徑前客前、張兩手、開股而立。客歎其機警。

（註）一日（イチジツ ある日。）

數（シバシバ いくども。）

乃（そこで。）

徑（タマチニ 「直」とほとんど同意。ずつと、まつすぐに。）

前（ス、ム 「進む」に同じ。）

歎（感心する。）

機警（キケイ 機智があつて賢いこと。）

（五）晉孫康、少清介、交游不雜。家貧、無油。嘗映雪讀書。後官至御史大夫。今人以書案爲雪案、由此也。

（日記故事）

（註）日記故事（明の張瑞圖校。著者不明。七卷。）

清介（心が潔白で節操の堅いこと。）

交游不雜（友を擇んで交り、誰とでも交るをしない。）

御史大夫（秦の始皇帝の始めて置いた官。官邪を正し、綱紀肅正することを掌る。）

書案（書机）

（六）晉車胤、幼恭勤博覽。家貧、無油。夏月、以練囊盛數十螢火、照書讀之、以夜繼日。後、官至尙書郎。今人以書窓爲螢窓、由此也。（日記故事）

（註）恭勤博覽（つとめつゝしんで博く書を讀む。）

練囊（ねり絹のふくろ。）

以夜繼日（夜晝つとめて休まないこと。）

尙書郎（詔勅を宣奉することを司る官。）

書窓（書齋の窓。學窓。）

五句例 (三)

要旨

前置詞を含む稍々複雑なる漢文について、これが構成組織に習熟せしめ、併せて前置詞の意味用法等を理解せしめる。

解説

【前置詞】

漢文に於ては、國文の助詞「ニ」「ヨリ」に相當する文字を補語の上に置くことがある。漢文法の上ではこれを前置詞と呼び、於・于・乎の三字を用ひる。

【前置詞の意味】

於・于・乎の三字は、詳細にこれを検討すれば、その間に、意味の輕重・係續の差等それぞれ多少の相違は存するのであるが、併しそれは穿鑿すべき程の重要性を持つものではなく、大體此の三字の間に嚴密な意味用法上の差別は存しないものと考へて差支へない。而して三字は何れも次の如き意味を以て用ひられてゐるのである。

(イ) 場所方向を示す。「ニ」に當る前置詞で、從つてその下に來る補語には「ニ」の送假名が施される。次の

句例はこれを示したものである。

頼朝開幕府於鎌倉。(場所)

楠正成戰死于湊川。(場所)

富嶽巍然聳于雲表。(場所)

(ロ) 比較の意を示す。「ヨリ」に相當する前置詞で、從つて、其の下の補語には「ヨリ」の送假名が施される。次の句例はこれを示したものである。

義重於泰山、死輕於鴻毛。

人之行莫大於守義。

一言之力重乎千鈞。

以上は本課の例であるが、尙此の他に次の如き場合もある。

(ハ) 動作の起點を示す。「ヨリ」の送假名が附く。

青出於藍、青於藍。

(ニ) 受身の意を示す。「ヨリ」の送假名が附く。

勞心者治人、勞力者治於人。

【客語・補語を同時に含む漢文】

前置詞の用ひられる一層複雑な漢文は、同一述語が、同時に客語と補語とを必要とする文である。即ち述語が他動詞であるが、單に客語のみではその意味が充足しない場合は、更に補語を以てこれを加へるのであつて、かかる場合には客語と補語との間に前置詞を置いて、兩者の關係を明かにするのを常とする。「頼朝開幕府於鎌倉」はこの基本形式を示した例であつて、これを文法的に説明すると次の如くである。

主語—述語—客語—前置詞—補語

頼朝 開 幕府 於 鎌倉

但し客語と補語との關係が明瞭な場合には、この前置詞を省略して次の如き形式を用ひる。「頼朝舉兵伊豆。」は此の例である。

釋義

【頼朝】 ヨリトモ 源頼朝。小字は鬼冠者。義朝の第三子。平治の亂の時年甫めて十三、捕へられて伊豆に流された

漢文 初歩

主語—述語—客語—補語

頼朝 舉 兵 伊豆

此の場合客語には「ヲ」補語には「ニ」の送假名が施されるものであるから、これを平易に言へば、「ヲ」と「ニ」との送假名を同時に持つ漢文は、その間に於・于・乎等の前置詞の置かれるのが普通であり、時に省略されて前置詞の除かれる場合もある。而してかかる漢文は、「ヲ」と讀んでも直ちに顛讀せず、「ニ」を讀み了つて而る後に初めて顛讀するのである。

【注意】

(一) 「老僧說我南朝」の如く、客語補語との顛倒した漢文に於ては、前置詞を置かないのが例である。前記の省略文と誤り易い形であるから注意されなければならない。

(二) 「頼朝逢文覺上人于奈古屋」の如く、一文中二つの補語の重なる場合に於ても、前置詞をとるのが例である。

が、治承四年以仁王の令旨を奉じて平氏追討の兵を擧げ、まづ富士川の一戰に大勝を博した。一方從弟義仲も亦北

國を略して京師に攻上り、爲に平氏は安德天皇を奉じて西奔した。勝ち誇つた義仲には暴慢な振舞が多く、遂に後白河法皇の御所を襲ふに至つた。ここに於て頼朝は弟範頼・義経を遣して義仲を追討せしめ、續いて一ノ谷・壇浦に平氏を滅ぼさしめた。此の間に、頼朝は居を鎌倉に定め、ついで幕府を開いて天下の覇を掌握し、征夷大將軍右近衛大將に任ぜられ、正治元年歿した。享年五十三。性猜疑の心が深く、範頼義経の肉親をはじめ、多く功臣を殺したために、その歿後權勢は全く北條氏に歸した。

【幕府】 バクフ (一)將軍の居所。陣營。もと將軍の到る所幕を張つてその居所としたので此の名がある。(二)近衛府の唐名。(三)近衛大將の異稱。(四)頼朝以後に於ける將軍の幕府。武家政治の政廳。こは(四)の意。

【鎌倉】 カマクラ 神奈川縣鎌倉郡鎌倉町。建元三年頼朝が幕府を開き、元弘三年新田義貞がここに北條高時を滅すまで幕府の所在地であつた。後關東管領の所在地であり、史蹟が極めて多く、今俣養地別荘地、海水浴場として繁榮して居る。

【楠正成】 クスノキマサシゲ 建武中興の大忠臣。橘諸兄の後裔。幼名を多聞といふ。世々河内の豪族で、元弘元年後醍醐天皇の詔を奉じて義兵を擧げ、金剛山千早城・赤坂城を築き、寡兵よく賊の大軍を破り、建武中興の大

功により攝・河・泉の守護となつた。足利尊氏の九州より京師に攻入るを防いで、延元元年五月湊川に戦死した。別格官幣社湊川神社に祀られ、明治天皇はこれに従二位を追贈し給うた。

【湊川】 ミナトガハ 六甲山に發源し、南流して神戸市湊川區に至り、築堤して神戸市水道の貯水池をなし、餘水は刈藻島の西に於て海に注ぐ、全長四軒。本流一帯の地は、正成が足利勢と力戦して最後を遂げた古戰場である。

【富岳】 フガク 富嶽とも書く。富士山のこと。「岳」は「嶽」の古字。

【巍然】 ギゼン (一)山の高くそばだつさま。(二)轉じて人物のすぐれ秀でたるさま。こは(一)の意。

【雲表】 ウンベウ 雲の上。

【義】 ギ (一)事物の理に叶つてゐること。制裁の宜しきを得たこと。(二)人の履踐すべき正しい道。道理。(三)己の利害を捨てて人道の爲に盡すこと。(四)意味。わけ。こころ。(五)骨肉でないものが骨肉の關係を結ぶこと。こは(二)の意。

【泰山】 タイザン (一)支那の名山。山東省泰安縣の北にあり、五嶽中の東嶽の稱。古來天子が諸侯を此處に會して、屢々封禪を行つた。(二)轉じて高く大いなる山。こは(二)の意。

【鴻毛】 コウモウ おほとりの羽毛。ものの極めて輕いのに譬へていふ。

【莫】 ナシ 音バク 打消の助動詞。

「莫」は顛讀する性質の文字である。故に「ヲ・ニ・ト・ヨリ」等の送假名がないが顛讀するのである。次に稍々詳しくかゝる性質を持つ文字を整理する。

【顛讀する性質の文字】

句例(二)に於てヲ・ニ・ト・ヨリの送假名を持つ漢文は顛讀すべきことを學んだのであるが、漢文には、その文字の本來の性質によつて必ず顛讀すべき性質を持つものがあり、かゝる文字はその送假名の如何にかゝはらず顛讀するのである。次にその主なるものを列擧する。

有(アリ)無(ナシ) 存在の有無を示す語

指導上の注意

(一) 便宜上文法的な解明法を以て前置詞を含む漢文の構成を解説したのであるが、此處に於ても亦かゝる文法的説明はすべて放棄されて、極めて平易に取扱はれねばならない。即ち「ヲ・ニ」の送假名を同時に含む漢文」位な語の使用によつて終始すべきであらう。

(二) 「釋義」の條で「顛讀すべき性質の文字」に就いて稍々詳しく説明したのであるが、これは將來漢文を讀む上にならり重要な意義を持つものであり、且此の時代の少年は特に旺盛な記憶力を持つてをるから、一應説明してその記憶に印

不(ズ) 非(アラズ) 莫(ナシ) 勿(ナカレ) 打消の助動詞

未(ズ) 將(ル) 且(カ) 當(ル) 應(ル) 須(ル) 猶(ル) 宜(カ) 再讀文字。(句例(四)に詳説)

使(ス) 令(ル) 遣(ス) 教(ス) (シム) 使役の助動詞

見(ル) 被(ラル) 受身の助動詞

爲(ス) ナリ・タリ・マネス・ナス・タメニ などすべての場合

多(ク) 少(ク) 難(シ) 易(シ) 等の形容詞

自(ラ) 從(テ) 由(リ) 「ヨリ」とよむ場合

可(ベシ) 能(アタフ) 所(コロ) 比(コト) 與(ト) など

「千鈞」 センケン 重量の甚だ重いこと。

「鈞」 は三十斤の重量。

練習題

- (一) 觀_ニ花_ヲ嵐_山、賞_ス月_ヲ琵琶_湖。
- (二) 校長、授_テ卒業_證書_ヲ於_テ生徒_ニ。朝_曳筈_ヲ於_テ林_間、夕_掬水_ヲ於_テ深_溪。尊_氏送_リ正_成首_ヲ於_テ河_内。竭_ス力_ヲ於_テ稼_穡。
- (三) 明治_神宮、在_リ於_テ東_京市_代々_木。義_貞陣_ニ于_テ和_田岬。好_シ學_ヲ近_ニ乎_知。
- (四) 爲_レ學_ヲ、莫_シ先_ニ於_テ立_テ志_ス。父_母之_恩、高_ク於_テ山_ニ、深_ク於_テ海_ニ。入_リ于_テ耳_ニ、而_{シテ}出_ル于_テ口_ニ。

六 人

中 村 栗 園

要 旨

句例も(三)を學ぶに至つて、漸く漢文に習熟し來つた時、句讀點・訓點の總復習の意味に於て、本課を特に此處に配列したのである。形式的には既得の知識を確實にし、内容的には、「人」たることの難きに思を致さしめて、益々人格の修養に勵ましめる。

解 說

【作者】 中村栗園 ナカムラリツエン
四・徳川光圀 参照

【出典】 日本智養
四・徳川光圀 参照

釋 義

【黒田孝高】 クロダヨシタカ 播磨國飾東郡の人。小字萬吉、初め祐隆と名乗り、後孝高、又は孝隆と改めた。號を如水と言ふ。代々赤松氏に屬して姫路に住したが、父職隆以來信長に従つた。天正五年信長の中國征伐に際し、孝高は羽柴秀吉に従つて功を建て、以來秀吉に信任せられて畫策する所が多く、その智囊を以て目された。天正

十五年秀吉の九州征伐に従つて功多く、豊前國を興へられて十二萬石を領し、中津城に居つたが、十七年家を長子長政に譲り、自らは出家して如水と號した。其の後も或は小田原征伐に加はり、或は朝鮮征伐に馳せ參するなどの戦功が多かつた。關ヶ原の役には子長政をして東軍に屬せしめ、自らは九州にあつて、加藤清正と共に西軍

の與黨を制壓した。役後賞勳を固辭して筑前國宗像郡津屋崎に卜居し、後博多に移り、慶長九年病歿した。享年五十九。人となり沈着深慮、文武兼備の名將として、秀吉・家康共に、寧ろこれを畏怖したと言はれてゐる。

【而】音ジ 接続の辭で、訓讀する時と訓讀しない場合とがある。

訓讀しない場合に順態と逆態とがあり、前者は其の上に来る語句の送假名の終に「テ」又は「デ」を附し、後者は「ドモ」又は「モ」をつける。即ち

(イ) 順態 ……而(テ又はデ) ……
(ロ) 逆態 ……ドモ又はモ ……

訓讀する時は、「シカシテ」「シカルニ」「シカモ」「シカレドモ」など讀む。

尙、一般に「而」の上に句讀點のない場合は讀まず、句讀點のある時はこれを讀むのが例である。

【有智】チアリ ヲ・ニ・ト・ヨリ等の送假名がなくて讀する。「有」の字が讀讀すべき性質の文字だからである。詳しくは前句例「讀讀する性質の文字」の條参照。

【豐太閤】ホウタイカフ 豐臣秀吉。天文五年尾張國愛知郡中村の一農家に生れた。遠江に浪々して今川氏の被官松下氏に仕へたが志を得ず、去つて織田信長に仕へ、木下藤吉郎と名乗つて賤役に従つた。爾來精勤して次第に

擧用され、遂に信長の謀將として重きをなし殊功を重ねた。天正五年中國征伐の主將となり、此の間に羽柴秀吉と改稱した。十年、本能寺の變に遭ふや直ちに毛利氏と和し、長驅して歸り、山崎の一戦に明智光秀を斃して主家の仇を報じ、翌年柴田勝家・織田信孝の黨を滅して、名實共に信長の後繼者となり、大阪城に據つて天下に號令した。以來北國を略し、紀伊を伐ち、四國を平定し、十三年、内大臣を経て關白となり、十四年太政大臣に昇り豐臣の姓を賜つた。十五年九州の島津氏を降し、十八年小田原に北條氏を滅し奥羽を平けて、ここに全く天下統一の霸業を完成した。翌年關白職を甥秀次に譲り太閤となつた。文祿元年以來二回に亘つて征韓の師を起したが、功半にして慶長三年八月大阪に薨じた。享年六十三。

【何物最多・何物最少】

疑問の助詞を用ひないで疑問の意を示した一形式で、疑問形式の最も簡單なものである。即ち疑問詞何・孰・誰等に送假名「カ」を添へて作る。此の場合終止の語は連體形を用ひる。例へば「何怖」「孰優」「誰知」等の類。

【人】ヒト 前の人、即ち最も多い人は、その價值を問はず、唯人の形を具へた人を指し、後の人、即ち最も少い

「人」は、眞に人たるの價值のある尊敬すべき人物を指す。

【天下】テンカ (一)あめのした。世界。(二)國內。(三)

徳川時代將軍を指して言つた稱。ここは(一)の意。

【嘉】ヨミセリ 好とした。ほめた。

指導上の注意

本課は直接前句例と關係を持たしたのではなく、寧ろ句例(一)よりの總復習的教材であるから、四・徳川光圀の教授後直ちに取扱つても一向差支ないもので、其の取扱の前後は教授者の意圖及び教授參考書所載の練習題の補充の多少等によつて決定せられるべきであらう。編纂者の意圖は、一應漢文に習熟したる後を以て、ここに既得知識を整理確認せしめんとするにあつたことを附言し、参考に供するものである。

「嘉」は好とす・ほめた・へる・愛でるなどの意。

「リ」は時の過去を表す助詞。前掲文部省調査報告送假名法参照。

七 孝

要 旨

直接には前句例の應用として、同時に句讀點・訓點の練習教材としてこれに習熟せしめ、併せて孝道の始終を明かにして、其の道の至近に始まり、終ることの遠きに思を致さしめ、發奮勉勵の契機たらしめる。

解 說

出典 孝經 一卷

作者に就いては多くの異説があるが、大體に於て、孔子と弟子曾參との孝道に關する問答を、曾子の弟子等が輯録した書であるとの説が肯定されてをる。十三經の一に數へられ、古文・今文の二種がある。古文は二十二章今文は十八章であるが、併し古文孝經の偽書たることは現

代疑ふものはない。唐玄宗皇帝の「御註孝經」を首として、古今諸家の註釋書が極めて多い。我が國への傳來は孝謙天皇の頃で、以來廣く世に流布して、我が國孝道の上に影響する所が少くなかつた。本課の文は第一章開宗明義中の一部である。

釋 義

【髮膚】 ハツプ 髪とはだへ。ここは「髮膚に至るまで」の意。

【不】 ズ・ザリ 打消の助動詞。顧讀する性質の文字。故

に動詞「毀傷」より顧讀する。

【敢】 アヘテ「進爲也。」と註す。憚らない意で、「おしきつて」「すすんで」「どうしても」「決して」など譯す。

「敢」が打消の助動詞と結びつく時、その位置によつて讀方及び意味共に異つて來る。

(イ) 不_レ敢…………… 敢て……………しない(平敘文)

(ロ) 敢不_レ…………… 敢て……………しなからうか(反語文)

【毀傷】 キシヤウ そこなきづづけること。「毀壞傷損」すること。

【立身】 ミヲタテ 出世して。熟して「リツシン」といふ。

【行道】 ミチヲオコナヒ 人として履踐すべき義理を實行

する。この「道」は人として履み行ふべき義理。人道。道徳。

【以】 モツテ 上文が因となり下文の結果を生ずる意味を示す接續詞。「さうすることによつて」「それによつて」「さうして」など譯す。

【顯父母】 フボヲアラハス 父母の名を天下に顯し示す。

「顯」はあきらかにする意。即ち名聲などを萬人の前にあらはし示すこと。

指導上の注意

各課を通じてこれを暗誦するまでに反復練習をつむべきであるが、本課の如きは、古來の名言でもあり、且はまた極めて單文であり、而も形式的によく整つて居る。故に、單に暗誦する程度に止らず、更に本文を離れてこれを筆録し得る域にまで至らしめたい。斯くてこれが筆録の間に於て、或は「受_レ之父母」、「揚_レ名於後世」等の前句例の應用はもとより、句讀・訓點の全般に互つて自得せしめ、且は孝道の始終を深く感銘せしめたい。

練習題

(一) 慎_レ言語_ヲ以_テ養_フ其德、節_レ飲食_ヲ以_テ養_フ其體。事之至近而所_レ繫至大者、莫_レ過_レ於言語・飲食。(程明道)

(註) 程明道(宋の大儒。名は顛)。

節(ほどよくする。よい程度にきめる)。

漢文 初步

至近(此の上もなく手近なこと。)

所繫(關係する所。影響する所。所は願讀する性質の文字。)

(二) 朝廷欲傳明治天皇鴻德偉業於萬世、相地于代木原、創建神宮、列官幣大社、特致崇敬。

(註) 鴻德偉業(廣大なる御聖徳と偉大なる御業績。)

相地(土地のよしあしを考へ定めること。熟して「サウチ」といふ。)

創建(はじめてたてる。創立。)

官幣大社(宮内省で捧げる幣帛を以て祭られる神社。大・中・小・別格官幣社の別がある。)

致崇敬(崇敬申し上げる。「崇敬」はあがめ敬ふこと。)

(三) 乃木大将、常戒子弟曰、無忠孝之心者、非日本人也。及旅順既陷、或訪大将、賀戰捷、且弔其子戰沒。

大将法然流涕曰、七月以來、我喪幾萬愛兒矣。如我二兒、守平生訓言耳。何足深悲。

(註) 乃木大将(本文二三・乃木大将・參照)

非(打消の助動詞 アラズ・アラザリ)

或(アルヒト。漢文には「或人」の形はない。「或」の文字を讀むに當つて「アルヒト」か「アルヒハ」かに注意すべきである。)

戰捷(戰爭の勝利。かちいくさ。「捷」はいくさに勝つ意。「賀戰捷」は戰爭の勝利の祝詞を述べること。)

弔(トブラフ・テウス くやみを述べる。人の死を悲しんでその家族などを慰めること。)

戰歿(戰死。)

法然(ゲンゼン 涙の流れでるさま。)

愛兒(いとしい兒。ここでは將軍がその部下を愛兒といつてをるのである。)

如吾二兒(「如」は願讀する性質の文字。故に「二兒」の「ノ」から願讀する。)

平生(ヘイゼイ ふだん。いつも。)

訓言(をしへの言葉。いましめの言葉。)

何足深悲(何ゾ……を以て反語を示した形。反語文の最も簡単な形式である。)

(四) 寛永九年、林羅山、創孔子廟于忍岡。元祿中、其孫鳳岡奉幕府旨、移之湯島臺。其經營規畫、更加宏麗。大将

軍綱吉、親書大成殿三字、揭之。(先哲叢談)

(註) 先哲叢談(前出。)

林羅山(名は道春。徳川幕府初期の儒官。)

創(ハジム 創建した。)

廟(ベウ) (一)おたまや・祖先の神靈をまつる殿堂。(二)やしろ。鬼神・聖賢の靈を祀る堂舎。(三)王宮の御殿。ここは(二)の意。)

の意。)

忍岡(シノブガツカ 今の上野公園の地。)

鳳岡(ホウカウ 名は信篤。幕府の儒官。)

旨(シ・ムネ 趣意。かんがへ。ころざし。)

湯島臺(今の東京市本郷區湯島の地。此の時建てられた孔子廟は、其の後屢々火災に遭ひ、家齊將軍の時明制に倣つて建てられたものが、長く保存せられたが、大正十二年の震災に焼失した。後これが再建せられて、現在も尙此の地に孔子廟が拜されるのである。)

經營(一)繩張をして建築すること。(二)工夫をこらして物事をいとむこと。ここは(一)の意で、建築上の工夫。)

規畫(キクワク はかり定めること。はかりごと。即ち建築上の計畫をいふ。)

宏麗(カウレイ 廣大で麗しいこと。)

漢文 初歩

三 八 六